都城市文化財調査報告書　第129集

Nakamachi　Site

中町遺跡（第５次調査）

－中心市街地中核施設整備支援事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１７年３月
宮崎県都城市教育委員会

序　文

本書は、中心市街地中核施設整備支援事業に伴い、都城市教育委員会が平成27年度に実施した中町遺跡第5次調査の発掘調査報告書であります。

本書に所収いたしました中町遺跡は都城盆地の南部、中心市街地である中町に所在しております。ここで、江戸時代から近現代にかけての遺構・遺物がみつかりました。今回発掘調査を実施した地点は、江戸時代初めの一国一城令に伴って現在の市役所付近に領主館が建設された際に、唐人町が形成されたとされる場所に当たります。そのことを裏付けるように、発掘調査ではこの頃使われていたと思われる陶磁器類が出土した井戸跡がみつかっています。

また、それ以降もこの場所に生活していた人々が残した生活の痕跡が、大量の陶磁器類やガラス瓶類などと共に、建物跡や井戸跡といった形で確認されています。江戸時代以降現在まで都城の商業の中心地として栄えたこの場所は、現在再開発が進められ、あらたな姿で市民の皆様に利用いただける場として生まれ変わろうとしています。今回の発掘調査からは、このような町の移り変わりの歴史がはっきりと見て取れます。

本書がこうした地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に御理解・御協力いただいた関係者の方々、市民の皆様に心から感謝の意を表します。

2017年3月

都城市教育委員会
教育長　黒木　哲徳

例　言

1．本書は、中心市街地中核施設整備支援事業に伴い都城市教育委員会が平成 27 年度に実施した中町遺跡（第 5 次調査）の発掘調査報告書である。
2．中町遺跡（第 5 次調査）の発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化財課主査山下大輔、同嘱託川俣唱子が担当した。現場での発掘作業にあたっては、同市文化財課嘱託早瀬　航の協力を得た。
3．本書で使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は真北である。
4．本書で使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の 5 万分の 1『都城』を基に作成した。
5．現場における遺構実測は、発掘調査作業員の協力を得て山下・川俣が行った。遺構図のトレースについては、株式会社 CUBIC のトレースくんと Adobe 社の Illustrator を用い山下・川俣が行った。
6．本書に掲載した遺物の実測は整理作業員および山下・文化財課嘱託外山亜紀子が行い、トレースは Adobe 社の Illustrator と Photoshop を用いて山下が行った。
7．現場での遺構写真撮影・出土遺物の写真撮影は山下が行った。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
8．石製品の観察・分類については、都城市文化財課副主幹栗山葉子の助言・協力を得た。
9．本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
10．土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)2001 年度前期版を参考にした。
11．プラント・オパール分析等の自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。
12．本書に掲載した遺構実測図の縮尺は基本的に、掘立柱建物跡・建物基礎跡を 1 /80、土坑・井戸跡・埋甕・ピットを 1/40、溝状遺構を 1/100 としたが、遺構の規模によりこれ以外の縮尺で掲載しているものがある。遺物実測図は基本的に 1/3 としているが、薩摩焼甕などの大型製品については 1/4、銭貨など小型の遺物は 1/2 とし、各図版に示している。
13．陶磁器実測図における -·-·-·- は釉際を、二本一対のケバ（｜｜）は釉剥ぎの範囲を示す。
14．本書の執筆は第 4 章の自然科学分析については株式会社古環境研究所に委託した。それ以外の執筆および編集は山下が行った。
15．発掘調査および発掘調査報告書の作成にあたっては、以下の方々のご指導・ご協力を賜った（順不同・敬称略）。渡辺芳郎（鹿児島大学）、秋成雅博（宮崎市教育委員会）、有川孝行（鹿児島市）、深野信之（姶良市教育委員会）、堀田孝博・谷口晴子（以上、宮崎県立西都原考古博物館）、下田代清海（(公財）鹿児島県文化振興財団　埋蔵文化財調査センター）、武田浩明・桒畑光博・栗山葉子・近沢恒典・加覧淳一・中園剛史・原　栄子（以上、都城市文化財課）、ヤママン呉服店有限会社
16．発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。
17．遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡・建物基礎跡　　SC：土坑　　SD：溝状遺構　　SE：井戸跡　　SH：特殊土坑
P：ピット　SR 埋甕　　SX：不明遺構
18．出土遺物の時期比定に関しては、以下の研究成果を参考とした。
貿易陶磁器
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No．2
山本信夫編 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財　第 49 集　太宰府市教育委員会
近世陶磁器
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念』
渡辺芳郎 2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室
ガラス瓶
桜井準也　2006『ガラス瓶の考古学』六一書房

本　文　目　次

第１章　序説……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　調査組織……1
第２章　遺跡の位置と環境……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……2
第３章　発掘調査の成果……4
　第１節　調査の方法と概要……4
　第２節　遺跡の層序……5
　第３節　中世の遺構と遺物……8
　　１　溝状遺構（SD）……8
　　２　不明遺構（SX）……8
　　３　包含層出土遺物……8
　第４節　近世～近現代の遺構と遺物……9
　　１　建物基礎跡・掘立柱建物跡（SB）……9
　　２　土坑（SC）……15
　　３　溝状遺構（SD）……96
　　４　井戸跡（SE）……99
　　５　特殊土坑（SH）……100
　　６　ピット（P）……101
　　７　埋甕（SR）……107
　　８　不明遺構（SX）……107
　　９　包含層出土遺物……111
第４章　自然科学分析……137
　第１節　中町遺跡における放射性炭素年代測定……137
　第２節　中町遺跡における植物珪酸体分析……139
　第３節　中町遺跡における寄生虫卵分析……144
第５章　調査のまとめ……148
　第１節　中世について……148
　第２節　近世について……148
　第３節　近現代について……150

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（S=1/25,000）……3
第２図　調査区位置図（S=1/5,000）……4
第３図　基本土層図（S=1/40）……5
第４図　遺構配置図（S=1/250）……7
第５図　SD2・SX3 実測図（S=1/40）……8
第６図　中世の遺物実測図（S=1/3）……8
第７図　SB1・2 実測図（S=1/80）……10
第８図　SB1 出土遺物実測図（S=1/30）……11
第９図　SB2・3 出土遺物実測図（S=1/3）……13
第 10 図　SB3 実測図（S=1/80）……13
第 11 図　SB4 実測図（S=1/80）……14
第 12 図　SB4 出土遺物実測図（S=1/3）……14
第 13 図　SB5 実測図（S=1/80）……15
第 14 図　SC1 ～ 5・P69 実測図（S=1/40）……16
第 15 図　SC1・2 出土遺物実測図（S=1/3）……17
第 16 図　SC3 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）……18
第 17 図　SC4 出土遺物実測図①（S=1/3）……19
第 18 図　SC4 出土遺物実測図②（S=1/3）……20
第 19 図　SC4 出土遺物実測図③（S=1/3）……21
第 20 図　SC4 出土遺物実測図④（S=1/3）……22
第 21 図　SC4 出土遺物実測図⑤（S=1/3）……23
第 22 図　SC5 出土遺物実測図①（S=1/3）……24
第 23 図　SC5 出土遺物実測図②（S=1/3）……25
第 24 図　SC5 出土遺物実測図③（S=1/3・1/4）……26
第 25 図　SC5 出土遺物実測図④（S=1/2・1/3・1/4）……27
第 26 図　SC6・11 ～ 14・P68 実測図（S=1/40）……28
第 27 図　SC6・11・12・14 出土遺物実測図（S=1/3）……29
第 28 図　SC7 ～ 9・19・21・49・50・58・75・101 実測図（S=1/50）……31
第 29 図　SC7 ～ 9 出土遺物実測図（S=1/3）……32
第 30 図　SC21 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……33
第 31 図　SC49・50・58 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）……34
第 32 図　SC10・22・24・SH1 実測図（S=1/40）……35
第 33 図　SC10・24 出土遺物実測図（S=1/3）……36
第 34 図　SC15 ～ 18・20・23 実測図（S=1/40）……37
第 35 図　SC15 出土遺物実測図①（S=1/3）……38
第 36 図　SC15 ②～ 18・20・23 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……40
第 37 図　SC25 ～ 29・31 ～ 34・P16 実測図（S=1/40）……41
第 38 図　SC25 ～ 29・33 ①出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……42
第 39 図　SC33 ②・34 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）……44
第 40 図　SC30・35・47・48・66・69・80・89・P12 実測図（S=1/40）……45
第 41 図　SC30 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……46
第 42 図　SC35 出土遺物実測図①（S=1/3）……47
第 43 図　SC35 ②・69・89 出土遺物実測図（S=1/3）……48
第 44 図　SC36・38 ～ 43・45・46・51 実測図（S=1/40）……49
第 45 図　SC38 ～ 42・51 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）……50
第 46 図　SC53 ～ 57・59 ～ 62 実測図（S=1/40）……52
第 47 図　SC53・55・56 出土遺物実測図（S=1/3）……53
第 48 図　SC59・60 出土遺物実測図（S=1/3）……54
第 49 図　SC63 ～ 65・67・68・74 実測図（S=1/40）……56
第 50 図　SC63 出土遺物実測図①（S=1/3）……57
第 51 図　SC63 ②・65・68・75・77 出土遺物実測図（S=1/2・1/3・1/4）……58
第 52 図　SC71 ～ 73・76 ～ 79・81・82・115 実測図（S=1/40）……59
第 53 図　SC78・81・115 ①出土遺物実測図（S=1/3）……61
第 54 図　SC115 出土遺物実測図②（S=1/3）……62

第 55 図　SC115 出土遺物実測図③（S=1/3）……63
第 56 図　SC115 出土遺物実測図④（S=1/3・1/4）……65
第 57 図　SC84 ～ 86・90・92・100・104 実測図（S=1/40）……66
第 58 図　SC84・85・90・92 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……67
第 59 図　SC100・104 出土遺物実測図（S=1/3）……68
第 60 図　SC93 ～ 99・102・103 実測図（S=1/40）……70
第 61 図　SC96・97・99 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……71
第 62 図　SC105･106･113･121 実測図（S=1/40）……72
第 63 図　SC105･106 出土遺物実測図（S=1/3）……73
第 64 図　SC107･108･110 ～ 112・114・SE2 実測図（S=1/40）……75
第 65 図　SC108・SC114 ①出土遺物実測図（S=1/3）……76
第 66 図　SC114 出土遺物実測図②（S=1/3・1/4）……77
第 67 図　SC114 出土遺物実測図③（S=1/4）……78
第 68 図　SC114 出土遺物実測図④（S=1/3・1/4）……79
第 69 図　SC114 出土遺物実測図⑤（S=1/4）……80
第 70 図　SC114 出土遺物実測図⑥（S=1/4）……81
第 71 図　SC116 ～ 120・122・124・125・127 ～ 131・P45 実測図（S=1/40）……82
第 72 図　SC120・124・131 ～ 133 ①出土遺物実測図（S=1/3・1/4）……83
第 73 図　SC132 ～ 139 実測図（S=1/3）……84
第 74 図　SC133 出土遺物実測図②（S=1/3）……86
第 75 図　SC133 出土遺物実測図③（S=1/3）……87
第 76 図　SC133 ④・134 出土遺物実測図（S=1/3）……88
第 77 図　SC140 ～ 145 実測図（S=1/40）……89
第 78 図　SC135・136・142 ～ 144 出土遺物実測図（S=1/3）……90
第 79 図　SC146 ～ 150・152 実測図（S=1/40）……92
第 80 図　SC147・149 ①出土遺物実測図（S=1/3）……93
第 81 図　SC149 ②・151・152 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）……95
第 82 図　SD1 実測図（S=1/40・1/100）……96
第 83 図　SD1 出土遺物実測図①（S=1/3）……97
第 84 図　SD1 出土遺物実測図②（S=1/3・1/4）……98
第 85 図　SE1 実測図（S=1/40）……99
第 86 図　SH1 出土遺物実測図①（S=1/2・1/3）……100
第 87 図　SH1 出土遺物実測図②（S=1/2・1/3）……101
第 88 図　ピット（P）実測図①（S=1/40）……102
第 89 図　ピット（P）実測図②（S=1/40）……103
第 90 図　P2・61 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）……104
第 91 図　SR1 出土遺物実測図（S=1/20）……107
第 92 図　SR1 出土遺物実測図（S=1/4）……107
第 93 図　SX1・2 実測図（S=1/40・1/80）……108
第 94 図　SX1・2 ①出土遺物実測図（S=1/3）……109
第 95 図　SX2 出土遺物実測図②（S=1/2・1/3・1/4）……110
第 96 図　包含層出土遺物実測図①（S=1/3）……112
第 97 図　包含層出土遺物実測図②（S=1/3）……113
第 98 図　包含層出土遺物実測図③（S=1/3）……114
第 99 図　包含層出土遺物実測図④（S=1/3）……115
第 100 図　包含層出土遺物実測図⑤（S=1/3）……117
第 101 図　包含層出土遺物実測図⑥（S=1/2・1/3）……118
第 102 図　包含層出土遺物実測図⑦（S=1/3）……119
第 103 図　暦年較正結果……138
第 104 図　E3 区における植物珪酸体分析結果……141
第 105 図　D3 区における植物珪酸体分析結果……142
第 106 図　中町遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果……145
第 107 図　中町遺跡第 5 次調査に関連する古絵図……149

表　目　次

遺物観察表①～⑱……120 ～ 136
第 1 表　中町遺跡における植物珪酸体分析結果……142
第 2 表　中町遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果……146

図　版　目　次

図版 1　中町遺跡の調査……152
図版 2　近世～近現代の調査①……153
図版 3　近世～近現代の調査②……154
図版 4　近世～近現代の調査③……155
図版 5　近世の調査①……156
図版 6　近世の調査②……157
図版 7　近世の調査③……158
図版 8　近世の調査④……159
図版 9　近世の調査⑤……160
図版 10　近現代の調査①……161
図版 11　近現代の調査②……162
図版 12　近現代の調査③……163
図版 13　近現代の調査④・現地説明会……164
図版 14　近世の遺物……165
図版 15　近代の遺物……166

第１章　序説

第１節　調査の経緯と経過

都城市は中心市街地の活性化を促進するため、大型商業施設跡地の有効活用を目指し、当該地における施設整備を計画した。これに伴い、平成 26 年 9 月 17 日付けで都城市商工政策課から当該地における文化財所在の有無についての照会がなされた。対象地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「中町遺跡」の範囲内に位置していたため､同年 9 月 25 日に都城市教育委員会文化財課（以下、市文化財課）が確認調査を実施した。この確認調査は、調査時には既存建物の解体前であったため、建物がなく尚且つトレンチの掘削が可能であった範囲での調査となった。そのため、設定できたトレンチの規模は対象面積 5,074㎡においてわずか 1.5㎡のみにとどまる。

この確認調査の結果、表土層には瓦や現代の陶磁器が包含されており、さらにその下位には焼土層を挟んで中世～近代の遺物を包含する層が確認された。これに加え、霧島御池軽石よりも上位の褐色土層上面にて溝状遺構およびピットと考えられる遺構が検出された。これにより、対象地においては少なくとも現況で建物のない範囲については遺跡が遺存している可能性が高いと判断された。その後、確認調査時に建物が残っており遺跡の有無の判断ができなかった範囲については、建物上屋の解体が終了し、地下の基礎部分の除去を行う際に土層の堆積状況を確認するための立ち会い調査を５回にわたり実施した。その結果、建物基礎によって部分的には破壊されているが、確認調査の際にみられた遺物包含層に相当する層はかろうじて残っていることが分かった。しかし、コンクリート製の建物基礎は現地表面下 1.5 m程まで及んでおり、これを重機を用いて撤去する際には、それ以上の深度で遺物包含層が破壊・攪乱されることが予想された。ただし、確認調査では地表下約 1.6 mの地点で溝状遺構やピット等の遺構も確認されていることから、建物基礎が及んでいない範囲については遺物包含層および遺構が遺存している可能性も残された。また、対象地北側に位置する旧市道部分については、水道管等のライフラインが埋設されており、その部分は既に破壊されている可能性が高いものと推測された。しかし、これも立ち会い調査の際には遺物包含層に相当する黒色土が部分的にではあるが遺存していることが判明し、やはり一部遺跡が遺存する可能性が高いと考えられた。

上述のような確認調査および工事立ち会いの結果を受け、市商工政策課と協議を行い、対象地において今後の施設整備によって遺跡が破壊される可能性の高い範囲約 920㎡については記録保存のための事前の発掘調査を実施することで合意した。この後、平成 27 年 4 月 9 日付けで都城市長から文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出された。これを受け、都城市教育委員会ではすみやかに調査組織を編成し、発掘調査を実施した。現場での発掘調査は平成 27 年 5 月 11 日から実施し、梅雨時期の長雨とそれに伴う調査区の水没によりほとんど作業が進まなかった 6・7 月の 2 ヶ月間を挟み、同年 12 月 2 日に全ての作業を終了した。この発掘調査と並行して出土遺物の洗浄・注記作業を市文化財課で行った。現場での調査終了後には、出土遺物の接合・復元・実測等の整理作業および遺構図の整理を行い、その後発掘調査報告書の執筆・編集を行った。

第２節　調査組織

平成 27 年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
調査責任者	教育長	黒木　哲徳
調査事務局	教育部長	児玉　貞雄
	文化財課長	新宮　髙弘
	文化財副課長	武田　浩明
	文化財課主幹	桒畑　光博
調査担当者	文化財課主査	山下　大輔
	文化財課嘱託	川俣　唱子
庶　　務	〃	畑中　夏奈
調査指導者	渡辺芳郎（鹿児島大学）	

・発掘調査従事者　今村まさ子、今村ミツ子、大盛祐子、奥　利治、上西政美、木上　保、竹中美代子、原田　貢、福重光夫、馬籠恵子、森山タツ子

・整理作業従事者　奥　登根子、児玉信子、新徳より子、園田孝子、福薗泰子、槇尾恵美子、矢上由香利、山下美香

平成 28 年度の組織（報告書刊行年度）

調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
調査責任者	教育長	黒木　哲徳
調査事務局	教育部長	児玉　貞雄
	文化財課長	山下　進一郎
	文化財副課長	武田　浩明
	文化財課主幹	桒畑　光博
	文化財課副主幹	栗山　葉子
報告書担当	文化財課主査	山下　大輔
整理作業担当	文化財課嘱託	茨木　浩一（平成 28 年 6・7 月）
	〃	外山　亜紀子

（平成 28 年 5 月～）
庶　　務　文化財課嘱託　　畑中　夏奈
調査指導者　渡辺芳郎（鹿児島大学）

・整理作業従事者　奥　登根子、児玉信子、新徳より子、水光弘子、福薗泰子、矢上由香利、山下美香

第 2 章　遺跡の位置と環境

第 1 節　地理的環境

今回発掘調査の対象となった中町遺跡は都城市南部、中町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央部を占める。平成 18 年 1 月 1 日に高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡 4 町との合併により新都城市が誕生した。この合併に伴い現在人口は約 16 万人となり、市域は約 650㎢に及ぶ。人口規模では南九州第 3 の都市となる。

都城市が位置する都城盆地は、南北約 25km、東西約 15km の楕円状を呈している。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。市内の中央部を一級河川大淀川が貫流し、多くの支流を集めながら南北に流れる。中町遺跡は市域南部、都城市街地の中心である中町に所在しており、大淀川とその支流である年見川により形成された開析扇状地の端部に位置する。遺跡の西側に隣接して国道 10 号線が市中央部を南北に縦断する。

第 2 節　歴史的環境

今回調査を実施した中町遺跡が所在する地点は、これまでにも区画整理事業に伴い複数年度にわたり発掘調査が実施されている地区である。本地区は、都城市内の中でも最も早くから市街化が進んでいた場所であったため、昭和 61 年に実施された遺跡詳細分布調査の際にも表面採集による遺跡の確認が困難であった。しかし、上述のように平成 7 年度から着手された中央東部土地区画整理事業に伴って発掘調査が実施され、そこで確認・調査された遺跡は、「中央東部地区遺跡群」と総称されている。以下では、この「中央東部地区遺跡群」の発掘調査成果を中心に、時代ごとに本遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。

縄文時代の遺跡としては、中町遺跡の第 2 次調査において、アカホヤ火山灰層よりも下位から集石遺構の一部と考えられる礫や外器面に貝殻条痕文が施された円筒形土器が出土している。さらに柳川原遺跡第 3 次調査では、縄文時代晩期の浅鉢が検出されている。この他にも、中央東部遺跡群とは大淀川を挟んで対岸に位置するニタ元遺跡では、縄文時代早期の集石遺構や押型文土器に加え、後～晩期の土器が出土している。また、ニタ元遺跡よりも大淀川上流沿いに位置する中世城郭都城跡においても縄文時代早期の石坂式土器が確認されている。

市街地における弥生時代の遺跡としては、1964 年（昭和 39 年）に宮崎県教育委員会により調査が実施された年見川遺跡がある。本遺跡は都城市内における発掘調査としては最も古いものの一つであり、学史上著名な遺跡でもある。調査地点は中央東部地区遺跡群より東へ 2.5km 程のところで、大淀川の支流である年見川の南北両側に位置する。ここでの調査の結果、北岸では竪穴住居跡 1 基と周溝状遺構 1 基が切りあった状態で検出されている。また、南岸でも竪穴住居跡 1 軒がみつかっている。中央東部地区遺跡群においても、柳川原遺跡の第 1 次調査では弥生時代後期後半～終末期頃の掘立柱建物跡が 4 棟、第 5 次調査でも終末期の遺物が出土している。中央東部地区遺跡群の南東に約 1.5km、大淀川の支流である姫城川の南岸に位置する上ノ園第 2 遺跡においても、弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。さらに、上ノ園第 2 遺跡の南西 500 m程に位置する高田遺跡では、中期中葉の竪穴住居跡 17 基をはじめ、溝状遺構 13 条、土坑 70 基あまりが検出されている。また、先述のニタ元遺跡でも弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代の遺構・遺物は、柳川原遺跡の第 2 次調査で確認されている。ここでは、方形プランの半分ないし一辺にベッド状遺構が付随する竪穴住居跡 1 基がみつかっている。出土遺物からは、古墳時代初頭から前期の所産と考えられる。また、上述の上ノ園第 2 遺跡においても古墳時代前期の竪穴住居跡が 2 基、時期比定が困難であるがおそらく古墳時代のものと思われる住居跡 2 基の合計 4 基が検出されている。ニタ元遺跡では古墳時代の竪穴住居跡 5 基、掘立柱建物跡 3 棟が検出されており、遺物では土師器や須恵器が出土している。

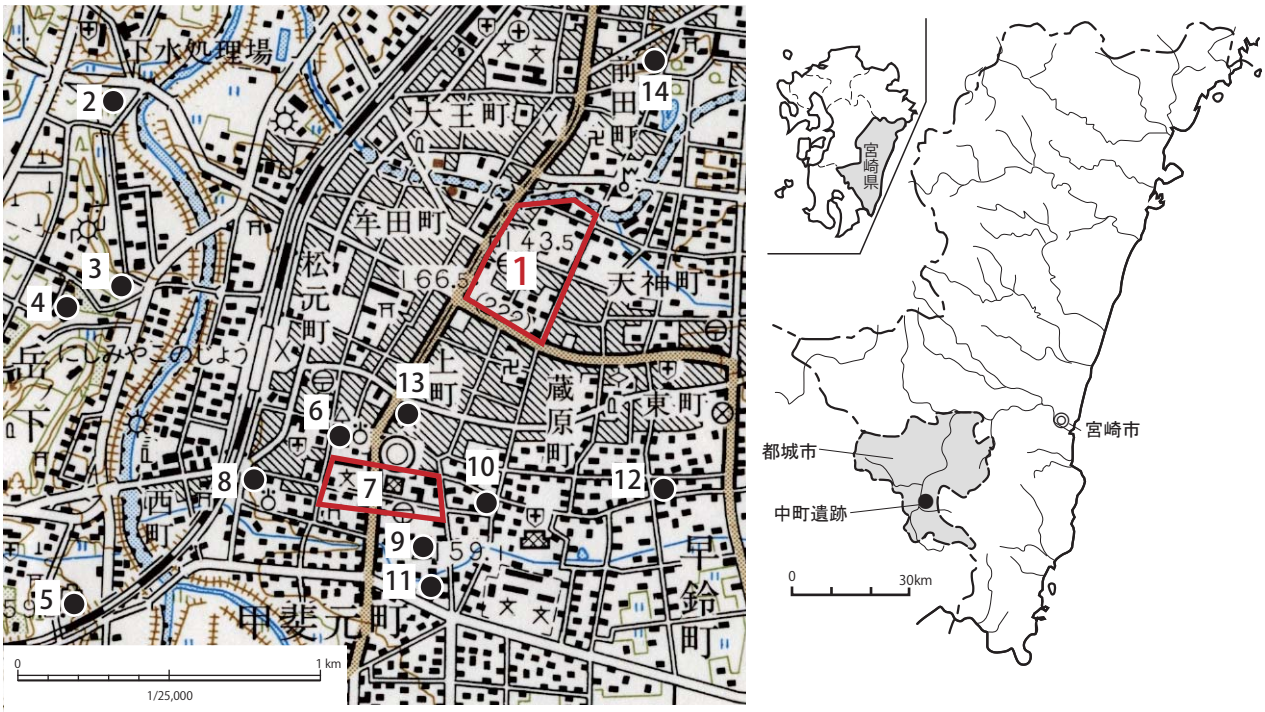
中央東部地区遺跡群では、中心になると考えられていた近世の前段、古代から中世にかけての遺構・遺物も多く確認されている。天神遺跡第 1 次調査では、中世の溝状遺構 1 条、土坑 2 基が検出されている。第 3 次調査においても、中世の溝状遺構 2 条が検出され、市内では初出となる木製食事具の匙が出土した。5 次調査では、中世の溝状遺構 2 条、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 1 基がみつかっており、この時期の遺物は白磁椀Ⅳ類等が出土している。柳川原遺跡でも、第 1 次調査において古代末から

中世初頭にかけての掘立柱建物跡３棟が検出され、白磁椀Ⅳ類が出土した。同遺跡第２次調査では、硬化面を伴う溝状遺構が検出されており、近世の町割小路と類似する軌跡を辿るという点で注目される。第３次調査でも、古代末から中世のものと考えられる掘立柱建物跡が３棟確認されている。また、第５次調査では、溝状遺構 11 条、掘立柱建物跡２棟、土坑５基が検出されている。さらに、中町遺跡第３次調査では、中世の溝状遺構が２条みつかっている。上述のニタ元遺跡では古代の掘立柱建物跡１棟、溝状遺構１条、柵列１、中世の溝状遺構４条、道路状遺構 11 条、土坑７基、石組遺構１基が検出されており、中でも中世の大溝は幅約 10 m、深さ約 10 mの市内最大級の大堀である。出土遺物も豊富で、越州窯系青磁や墨書土器、石製鋳具など貴重な遺物が出土している。

近世に入ると、元和元年（1615 年）の一国一城令後に、都城領主である都城島津氏によって現在の都城市役所周辺に領主館が造営されることになる。これに伴い、それまで現在の八幡町周辺に配置されていたとされる唐人町がこの領主館域内に入ったため、より北に位置する高岡筋往還（現在の国道 10 号線）沿い、現在の中町に移されることとなった。

このような歴史的経緯から、中町遺跡を含む「中央東部地区遺跡群」においてはこれまでに数多くの近世の所産である遺構・遺物が調査されてきた。このような近世の遺構として、まず、中町遺跡では第１次調査 A 地区において、埋土中に軽石や小礫が充填された SD01 が検出されている。この溝状遺構は、西側に隣接する第２次調査 B 地区のトレンチ内でも検出されている。時期を特定できる遺物は出土していないが、少なくとも近世以降に行われたとみられる削平工事以後の所産であると考えられる。同様の遺構は今回の調査でも確認されている。中町遺跡第３次調査においても近世の道路状遺構や溝状遺構、掘立柱建物跡等が検出されている。特に調査区西側で検出された SD02 からは、多量の鉄滓や陶磁器が出土しており、製鉄に利用された水路跡であった可能性が指摘されている。第４次調査でも近世～近代の溝状遺構３条、井戸跡１基、土坑 14 基が確認されている。SD01 は多量の陶磁器片、鉄滓、銭貨などが出土している。下層から 18 ～ 19 世紀前半の陶磁器が、上層からは明治時代までの遺物が出土している。

中町遺跡の東に隣接する天神遺跡の第１次調査でも当該時期の遺構・遺物が確認されている。近世の遺構としては、溝状遺構１条、土坑２基、掘立柱建物跡１棟、ピットが多数検出されている。溝状遺構である SD1 からは多量の遺物が出土しているが、その中には薩摩焼竪野系の獣足香炉や肥前系染付の中に上手のものもみられる。第



1：中央東部地区遺跡群（中町遺跡・天神遺跡・柳川原遺跡）　2：ニタ元遺跡　3：仁厳寺跡
4：都城古墳（4 号墳）　5：都城本丸跡　6：八幡遺跡　7：都城領主館跡　8：西口番所跡
9：姫木城跡　10: 東口番所跡　11: 南御屋敷跡　12: 秋永屋敷跡　13: 北口番所跡
14: 宮丸・小松原窯跡

第１図　遺跡位置図 (S=1/25,000)

2 次調査でも、溝状遺構 1 条、掘立柱建物跡 1 棟、ピット群、土坑 13 基、井戸跡 2 基が、第 3 次調査でも近世の掘立柱建物跡 1 棟が検出されている。第 4 次調査においても道路状遺構、溝状遺構 4 条、柱穴などが検出された。そのうち SD3 からは 18 世紀後半～ 19・20 世紀代と思われる多量の陶磁器が出土している。さらに、第 5 次調査では、溝状遺構 7 条、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 6 基が確認されている。

中町遺跡の東、天神遺跡の北に位置する柳川原遺跡においても近世の遺構・遺物が検出されている。第 1 次調査で確認された近世の遺構は柱穴のみであるが、包含層中からは陶磁器類をはじめとする多くの遺物が出土している。第 2 次調査においては、A 地区で溝状遺構 3 条、土坑 5 基、柱穴群、B 地区では中世～近世にかけて使用された SD01 が検出された。B 地区の SD01 からは多くの陶磁器類に加え、窯道具である三足ハマやトチンも出土している。第 3 次調査では、近世末～近代と考えられる SD01 や柱穴群が確認されている。この時期の遺物として、「明治屋」、「城崎酒店」、「銘酒都島」等が白土描きされた通い瓶と考えられる瓶がみられる。第 4 次調査 A 地区では、近世以降の溝状遺構 3 条、近世の掘立柱建物跡 1 棟を検出している。3 条の溝状遺構は切り合い関係にあるが、埋土からは 17 世紀前葉の唐津焼皿や 18 世紀代～ 19 世紀前半頃の肥前系染付が出土している。第 5 次調査においては、溝状遺構 7 条、掘立柱建物跡 3 棟、土坑 7 基を確認した。出土遺物は遺構内を中心に多量に出土しているが、注目される遺物として中国将棋の駒がある。溝状遺構である SD9 から出土している。出土例は沖縄県のみであり、本土では初出となる。当地が唐人町であったことを直接的に示す貴重な資料である。

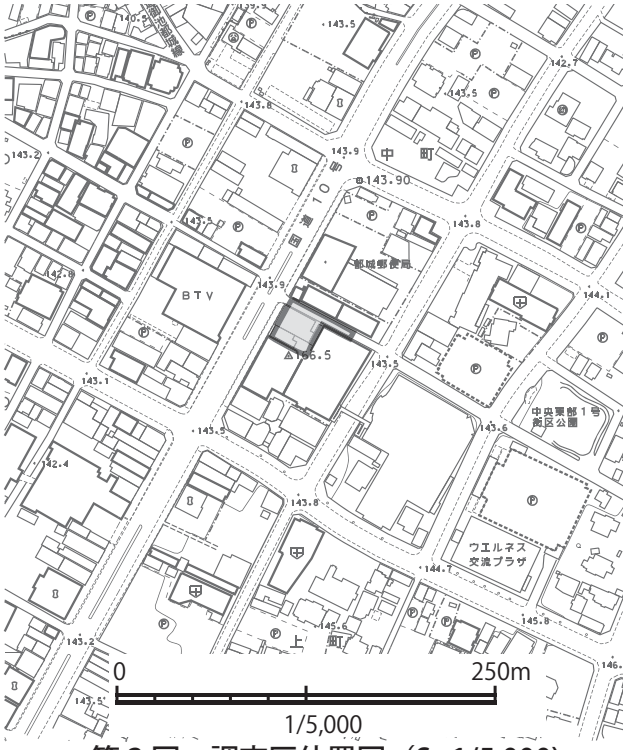
中町遺跡を含む中央東部地区遺跡群の特徴として、近現代の遺構・遺物が多く確認されている点があげられる。遺構では、第 2 次世界大戦中に使用されたと考えられる防空壕が天神遺跡第 2 次調査、第 3 次調査、第 5 次調査、柳川原遺跡第 5 次調査で確認されている。その他にも、柳川原遺跡第 5 次調査では溝状遺構 5 条や土坑 5 基が、天神遺跡第 3 次調査では近代以降の溝状遺構 1 条、土坑 15 基が検出されており、中町遺跡第 4 次調査では近代の礎石建物跡が 1 棟検出されている。また、天神遺跡第 5 次調査ではアジア・太平洋戦争時のアメリカ軍による爆撃で形成された焼土層が確認されている。遺物は当該時期の陶磁器やガラス瓶類などが出土している。遺構としての防空壕の調査は、市内においては「中央東部地区遺跡群」の例が唯一であり、戦争の痕跡を考古学的に調査した貴重な事例といえよう。

第 3 章　発掘調査の成果

第 1 節　調査の方法と概要

調査対象地は都城市中町 117 ほかに所在し、市内中心部を南北に走る国道 10 号線の東側に隣接する。対象地内には以前、鉄筋および木造 2 階建ての店舗があったが、それらと隣接する大型商業施設および廃止された市道を含めた約 5,000㎡の範囲で跡地再開発のための建物の解体・整地が終了しており、一帯は更地となっていた。計画では、この大型商業施設跡地と旧市道の有効活用とそれによる中心市街地の活性化を目的とし、行政施設および民間商業施設を新たに建設することになっていた。発掘調査の着手段階では具体的な計画および建物の配置等の詳細は確定したものではなかったものの、本開発により遺跡が遺存している範囲は大きく改変される可能性が高かった。そのため、確認調査の結果遺跡が遺存していると考えられた約 920㎡を対象に発掘調査を実施した。

調査区は南北に約 37 m、東西に約 55 m の L 字を横倒しにしたような形を呈する。調査区の西に隣接して国道 10 号線が南北に走行し、北約 300 m のところには大淀川の支流である年見川が東から西に向かい蛇行しながら流下する。本遺跡は標高約 143 m の開析扇状地に位置しており、調査区の地形は北西部が最も高くなり、南東部に向かい傾斜していく。なお、調査区の設定にあたっては、公共座標軸系の SN 座標線に一致した 10 × 10 m を 1 区画とし、東西方向を西から 1、2、3... の順に算用数字で、南北方向を北から A、B、C... の順にアルファベッ



第 2 図　調査区位置図（S=1/5,000）

トで表記した。この組み合わせで区名を付けた。

発掘調査はまず重機による表土剥ぎを行った。事前に実施した確認調査では、地表下 0.7 mまでは現代の造成土であることが判明していた。さらに、この確認調査後に対象地では既存建物の解体およびコンクリート基礎部分の撤去作業が行われており、これに伴う埋め立て土が調査区全体にわたって確認された。これら現代の造成土および建物解体に伴うごく最近の埋め立て土を除去し、攪乱されていない近世～現代の遺物包含層を露出させるよう努めた。ただし、部分的に狭い範囲で埋め立て土が深くまで及んでいる範囲については重機による剥ぎ取りが困難であったため、人力による除去作業を行った。これにより、遺構を検出したレベルは標高の高い調査区北西側（国道 10 号線側）では霧島御池軽石（基本土層Ⅶ層）中となり、それ以外の範囲は基本土層Ⅲ層中ないしはⅤ層上面が遺構検出面となった。基本的には造成土および埋め立て土を完全に除去した面が遺構検出面となっている。そのため、近世～現代までの遺構を同一面で検出しており、時期比定に関しては出土遺物と切り合い関係、遺構内に堆積する埋土等によって判断している。中には、近現代の遺構を掘りきったところでその底面から近世の土坑や柱穴を検出したものもある。

検出した遺構は軽石を敷き詰めた建物基礎および掘立柱建物跡を合計 5 棟、井戸跡を含む土坑（SC）を 150 基以上、溝状遺構（SD）を 2 条、検出時より井戸跡と判明していたもの（SE）を 2 基、埋甕（SR）を 1 基、不明遺構を 3 基検出している。このうち掘立柱建物跡は、発掘調査時には確定できていなかったが、整理段階においてその配列と埋土の堆積状況などから掘立柱建物跡として認識したものである。

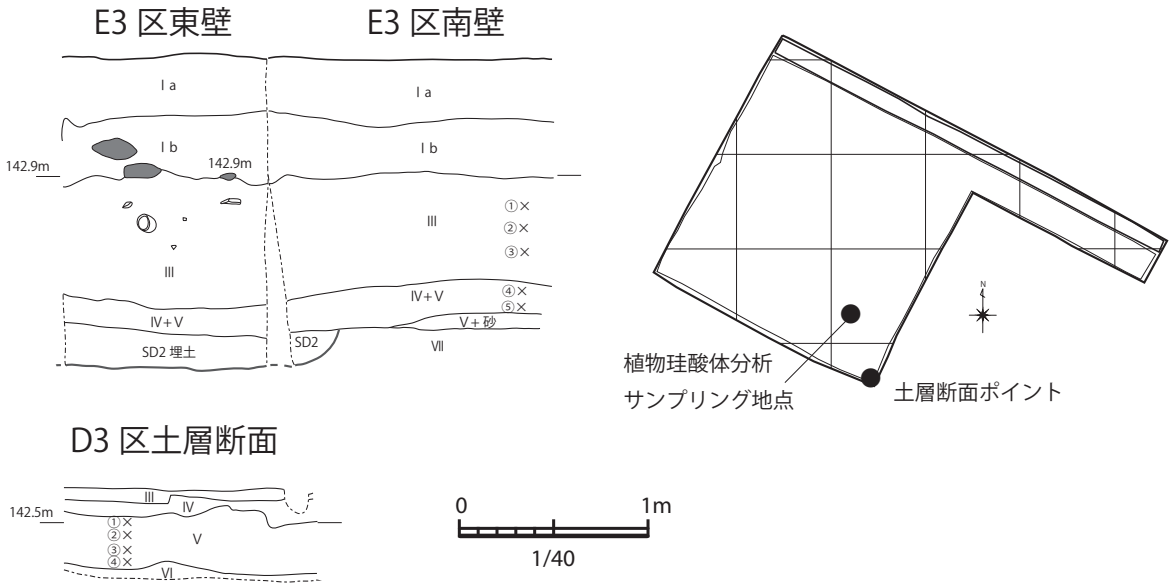
第 2 節　遺跡の層序

本遺跡は大淀川とその支流である年見川によって形成された開析扇状地に位置している。既往の調査成果からは、地形的にみると柳川原遺跡第 1 次調査区と同遺跡第 4 次調査 A 地区の間には 1.5 ～ 2 mの段差が確認されている。段差の北側は鬼界アカホヤ火山灰降下時まで離水していなかったと考えられ、南側については縄文時代早期には比較的安定した地形面になっていたものと思われる。この段差の南側に位置する本調査区においても、井戸跡等深い遺構の壁面でのみではあるが、鬼界アカホヤ火山灰およびそれより下位の縄文時代早期相当層が確認されている。ただしこの時期の遺構・遺物は確認されていない。

通常の発掘調査では、調査区の壁面において土層の堆積状況が確認でき、それに基づき基本土層の設定を行うことが多い。しかし、本調査区を取り囲むように地下階がある大型商業施設の跡地が位置しており、これの解体・基礎撤去に伴い既に土層は攪乱され、調査区壁面において自然堆積層は一部の範囲を除き確認できない状況であった。そのため、基本土層は調査区内において最も良好に土層の堆積状況が確認できた E3 区の壁面と井戸跡等の深度が大きい遺構の壁面および確認調査の結果を基に以下のように設定した。

Ⅰａ層：にぶい黄橙色小礫＝ 5㎝程の礫（建物解体・基礎撤去に伴う盛土・填圧土）

Ⅰｂ層：にぶい黄褐色砂質土（ルーズ　10㎝程の礫・焼土をまばらに含む　近世～現代の遺物を大量に含む）



第 3 図　基本土層図（S=1/40）

＝建物解体・基礎撤去に伴う攪乱土
Ⅱ層：赤褐色粘質土＝焼土層（面的に広がるものではなく、ゴミ穴等の一部でみられるもの）
Ⅲ層：灰褐色砂質土＝近世～近代の遺物包含層
Ⅳ層：灰白色軽石＝桜島文明軽石
Ⅴ層：黒褐色粘質シルト土（粘性強い）
Ⅵ層：黒褐色砂質シルト土（2㎜以下の黄橙色軽石を多く含む）＝霧島御池軽石漸移層
Ⅶ層：黄橙色軽石＝霧島御池軽石
Ⅷ層：黒色粘質シルト土（粘性強い）
Ⅸ層：橙色火山灰＝鬼界アカホヤ火山灰（最下部は火山豆石）
Ⅹ層：灰黄褐色粘質シルト土（上部には桜島 P11 火山灰を含むか）
ⅩⅠ層：砂礫層

Ⅰ層はⅠａ層とⅠｂ層に細分しているが、どちらも建物基礎解体・撤去時のごく最近の埋め立て土である。このうちⅠａ層は埋め立て後の整地層で、砕石を敷いて填圧している層である。遺物は含まれていない。

Ⅰｂ層は埋め立て土であり、基礎解体の際に残ったと考えられるコンクリートの砕片やガラス片が多く含まれる。また、本来は近世～近代の遺物包含層であるⅢ層を削平し、それを埋め戻しているため陶磁器等の大量の遺物を包含していた。これらの遺物についても、重機による表土掘削の際にできるだけ回収するように努めた。

Ⅱ層は確認調査時に設定された土層で、焼土層である。当初この層は火事あるいは第２次世界大戦時の空襲で形成された層である可能性が考えられたが、調査区全体に面的に広がるものではなく、近代のゴミ穴周辺でのみ確認される層である。

Ⅲ層は灰褐色を呈する砂質土で、近世～近代の遺物包含層である。本層も建物基礎の撤去時に広い範囲で削平されており、調査区の南東部でのみ良好に遺存していた。層厚は 80 ～ 90㎝程もあり、近世～近代の遺物が混在して出土する傾向にある。分層は困難で、遺物も下位から上位に向かい時期的に新しいものが出土するような出土状況はみられなかった。調査区の狭い範囲でのみ確認されているため断定はできないが、かなりの層厚があることや時間幅のある遺物が混在して出土することから、近世から近代にかけて随時盛土・造成が行われていた可能性が考えられる。

Ⅳ層は桜島文明軽石の一次堆積層に相当する。これも調査区全体で確認できるものではなく、南東部を中心に部分的に確認できる層である。良好に残存する範囲でも降灰後の復旧を示すような、下位層が持ち上げられブロック状に含まれるような範囲はほとんどみられなかった。調査区南端部では、下位のⅣ層と混ざり合って層としては確認できない範囲も存在した。このような場所では細砂粒を含んでおり、恒常的な水の影響があったものと推測される。

Ⅴ層は黒褐色粘質シルト土で粘性が強い。中世相当層と考えられるが、遺物はほとんど出土していない。

Ⅵ層は霧島御池軽石と考えられる黄橙色軽石を多く含む漸移層と考えられるが、通常みられる御池軽石の漸移層とは異なり、硬くしまることなくやや粘性も強い。遺物は出土していない。

Ⅶ層は霧島御池軽石層で、Ⅰ層除去後には調査区北西部では御池軽石が露出しており、この上面が遺構検出面となっている。厚いところでは 1.4 m程の堆積が認められる。

Ⅷ層は黒褐色粘質シルト土で粘性が極めて強い。縄文時代前・中期に相当する層である。井戸跡等の深い遺構の壁面でのみ確認できている。

Ⅸ層は鬼界アカホヤ火山灰層で、やはり井戸跡等の深度のある遺構の壁面でのみ確認された層である。湧水の影響で白く変色している状況もみられた。

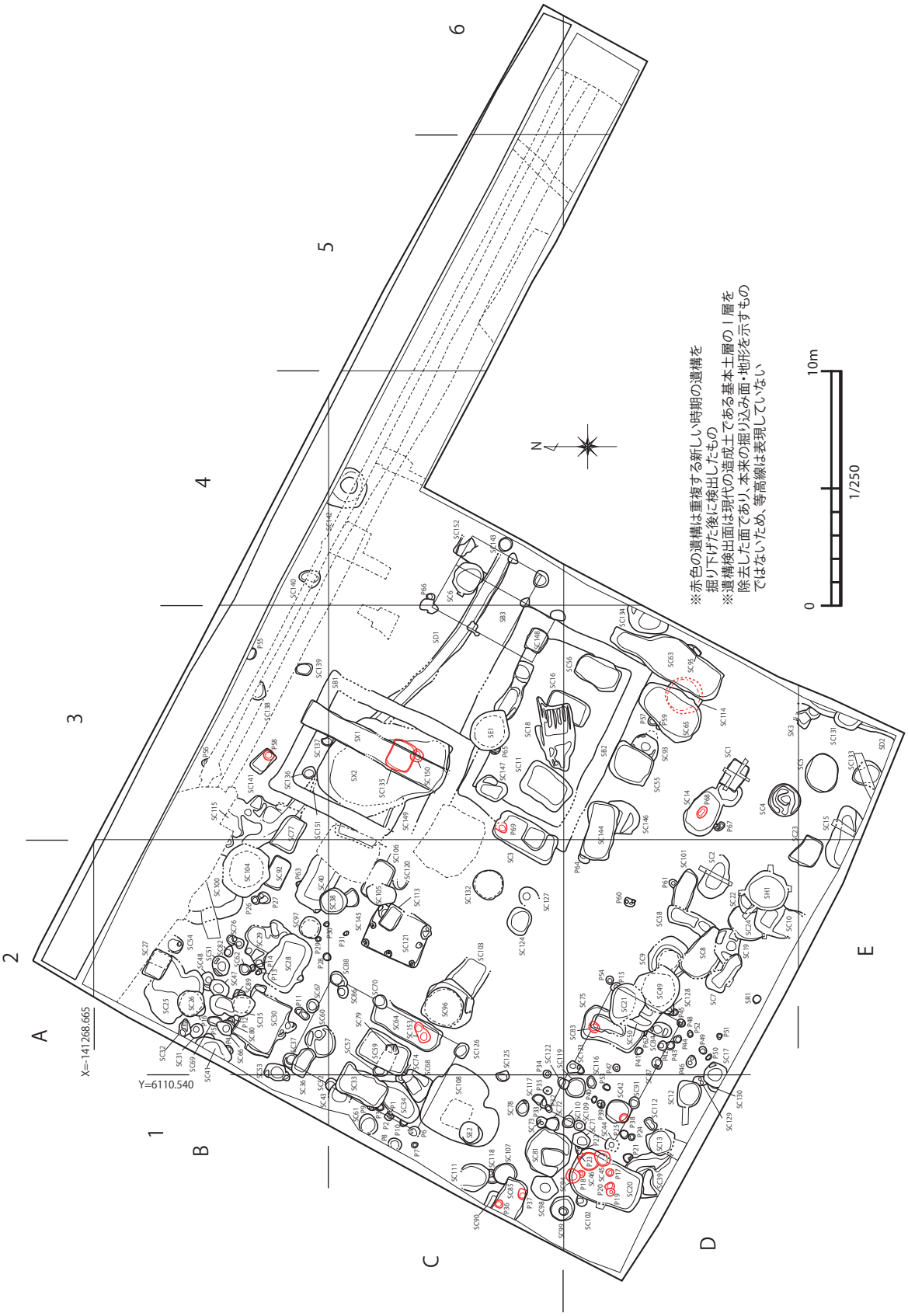
Ⅹ層は灰黄褐色粘質シルト土で、本来は縄文時代早期に相当する層である。これも井戸跡等でのみ確認できた層で、しかもこのレベルまで掘り下げると湧水の量が多く、充分な精査ができていない。上部には桜島 P11 火山灰を含むものと推測されるが、分層はできておらずアカホヤ下位の層として一括する。遺物は出土していない。

ⅩⅠ層は砂礫層である。これも深度のある遺構を掘り下げた際にのみ確認できた層で、Ⅹ層の下位は一様に砂礫層が堆積しているのか、あるいは別の層が存在するのかは確認できていない。

調査区の周辺地形は、現況では東から西へ向かって緩やかな傾斜をみせているが、今回の調査区の地形をみると北西部から南東部にかけて傾斜していく状況がみて取れた。すなわち、本調査区に限ってみると、高岡筋往還（現国道 10 号線）側の標高が高く、そこから東に向けて徐々に低くなっているといえる。次章以降に詳しく報告するが、近世に属すると考えられる遺構はこの標高の高い北西部に集中しており、幕末から近代以降の遺構のみが調査区全体で検出されている。豊富な地下水の存在とも併せ、地形や土層堆積状況によっても各時代の土地利用の様子が窺われる。

また、近世～近代という長い時間幅の遺物が同一層（基本土層Ⅲ層）から出土していることや、現在の地表面か

らこれらの時代の遺構検出面までにはかなりの深さがあるため、近世から現代まで断続的に地上げが行われていた可能性が考えられる。今回の調査で検出された遺構の多くが戦前までのものに限定されることから、特に第２次大戦以降に大規模な地上げが行われた可能性が高い。



第4図　遺構配置図（S=1/250）

第３節　中世の遺構と遺物

中町遺跡を含む「中央東部地区遺跡群」では、これまでも中世の所産と考えられる遺構・遺物が多数検出されている。しかし、今回の調査では当該時期の遺構・遺物共にその出土は限定的であり、本調査区における土地利用の本格的な開始は近世に入ってからであると推測される。ただし、文明軽石降下以前の堆積層である基本土層Ⅴ層に対して行った植物珪酸体分析によれば、同層からイネのプラント・オパールが検出されており、中世期から調査区周辺は水田として利用されていたことが分かる（第４章第２節参照）。

中世に遡ると考えられる遺構については、調査区南端において溝状遺構が１条、浅い土坑状の不明遺構が１基検出されているのみである。遺物についても出土量が少ない。以下、当該時期の遺構・遺物を報告するが、近世以降の遺構から出土している資料については、出土した遺構の項で報告する。

１　溝状遺構（SD）

SD2（第５図）

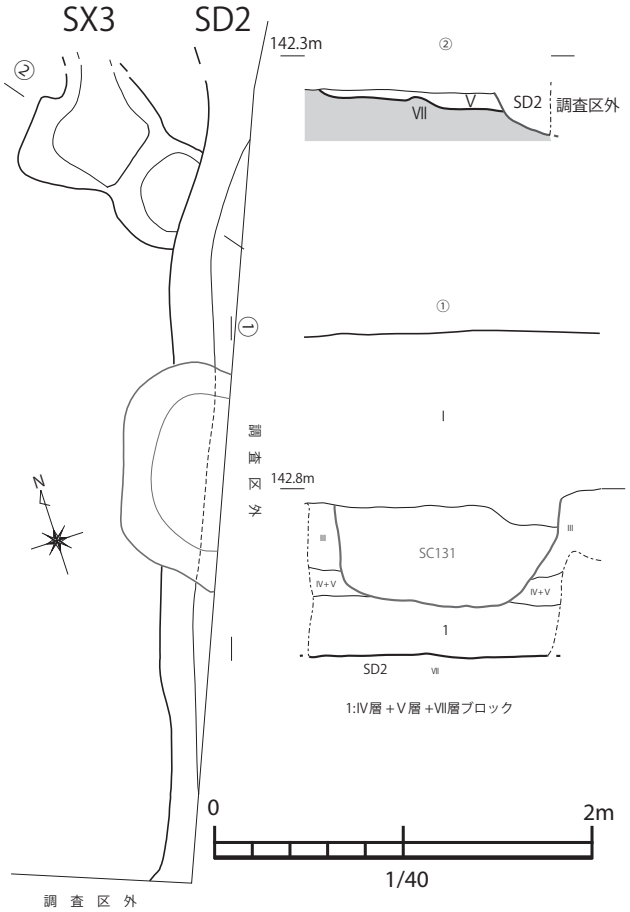
調査区の南端 E3 区で検出しているが、大部分が調査区外に延びるため全体像は判然としない。検出できたのは長さ 4.2 mの範囲のみで、さらに調査区壁に沿って北東―南西方向に延びるものと考えられる。遺構の上部が近代の土坑である SC131 に切られる。

埋土には基本土層のⅤ層をベースとし、そこにⅣ層（桜島文明軽石）とⅦ層（霧島御池軽石）ブロックが満遍なく混ざり込む土が堆積する。遺物は出土していない。

２　不明遺構（SX）

SX3（第５図）

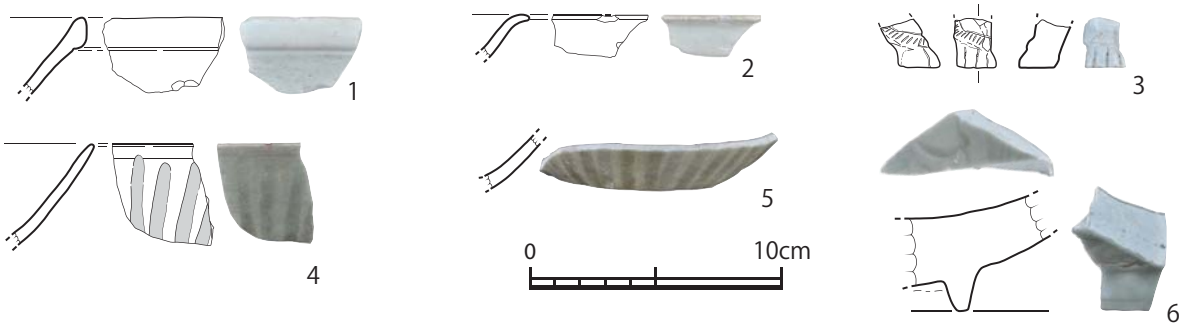
調査区南端の E3 区において検出されており、上述の SD2 に切られる。長軸 1.0 m以上、短軸 0.56 mを測る不整形の遺構で、深さは最深部でも 9cm と浅い。遺物は出土していない



第５図　SD2・SX3 実測図（S=1/40）

３　包含層出土遺物（第６図）

１は大宰府分類白磁椀Ⅳ類の口縁部である。大きな玉縁口縁を特徴とする。C 期（11 世紀後半～ 12 世紀前半）の所産である。２は口縁端部が外方に尖り、やや丸味をおびる体部の白磁椀Ⅴ類と考えられる。やはり C 期の所産と考えられる。３は白磁の獣足である。線刻で蹄が表現されている。さらに刻目のある帯状の装飾が足に絡みつく。Ⅴ層から出土しているため、中世の所産と考えられる。４・５は龍泉窯系青磁椀で、外面には簡略化された蓮弁文が施される。大宰府分類の龍泉窯系青磁Ⅳ類（G 期、14 世紀初頭～後半）以降の資料と考えられる。６も龍泉窯系青磁と考えられる資料で、器壁の厚さから盤と思われる。内外面共に片彫の花文がみられる。



第６図　中世の遺物実測図（S=1/3）

第４節　近世～近現代の遺構と遺物

先述のように、今回の調査で検出した遺構・遺物は中世期のものは極めて限定的で、その多くは近世以降のものである。この中でも明治以降、第２次世界大戦以前の近代に帰属すると考えられる時期が遺構・遺物共に最も多い。土坑を中心とする遺構群については、多くが切り合い関係にあり、中には近世と近代の遺物が入り混じって出土している遺構もある。中世以外の全ての時期の遺構が同一の面で検出されているため、帰属時期の推定は主に出土遺物に拠った。しかし、中には遺構が幾重にも重複しているため近世～近代までの遺物が入り混じって出土していたり、時期が特定できるような遺物が出土していないものも多い。そのため、ここでは近世～近現代にかけての遺構と遺物として報告し、時期が特定できるものについてはその都度言及することとしたい。尚、表土である造成土中からは現代に属すると考えられる遺物も出土しているが、少なくとも検出した遺構内からは第２次世界大戦以後の遺物はほとんど出土していない。

この時期の遺構としては、軽石を敷き詰めた建物基礎および掘立柱建物跡を合計５棟、素掘りの井戸跡と考えられるものを含む土坑（SC）を 150 基以上、溝状遺構（SD）を１条、検出時より井戸跡と判明していたもの（SE）を２基、厠跡と考えられる埋甕（SR）を１基、不明遺構を２基検出している。以下、それぞれの遺構とそこから出土した遺物について報告する。

１　建物基礎跡・掘立柱建物跡（SB）

今回の調査では、長方形に掘り巡らされた溝跡に軽石を充填したいわゆる布基礎工法と考えられる建物基礎跡を２基、同様の軽石を小穴内に充填あるいは地表面に礎石として配置している建物跡と考えられる遺構を１基、複数の小穴群から構成される３間×２間の掘立柱建物跡を２棟検出した。

SB1（第７・８図）

B・C3 区で検出した布掘り基礎の建物跡である。幅約 80㎝程の溝を巡らし、そこに人頭大あるいは拳大のシラス起源と考えられる軽石を充填する。溝の掘り形は地点によって若干異なるが、概ね断面 U 字ないし逆台形を呈す。この断面を観察すると、軽石が掘り形を飛び出し、地山層に沈み込んでいる様子が看取できる。おそらく上部の建物の自重によるものと推測される。中には地山のかなり深いところまで入り込んでいる軽石も見られた。また、建物の重さにより破砕され、粉状になっている範囲もみられた。この軽石基礎跡の平面規模は長軸 7.02 m、短軸 5.62 mの長方形を呈する。溝の深さは 20 ～ 42cm を測る。主軸は N-27°-E にとる。南西側の短編は他辺よりも深い場所に溝が掘られ、軽石自体もレベル的に低いところに位置する。これは後述する SB2 の北東側の長辺の布基礎溝および軽石を再利用しているためと推測される。つまり、重複する SB2 の一辺をそのまま新たな建物である SB1 に再利用しているものと考えられる。そのため、時期的には SB1 は SB2 に後出するといえる。

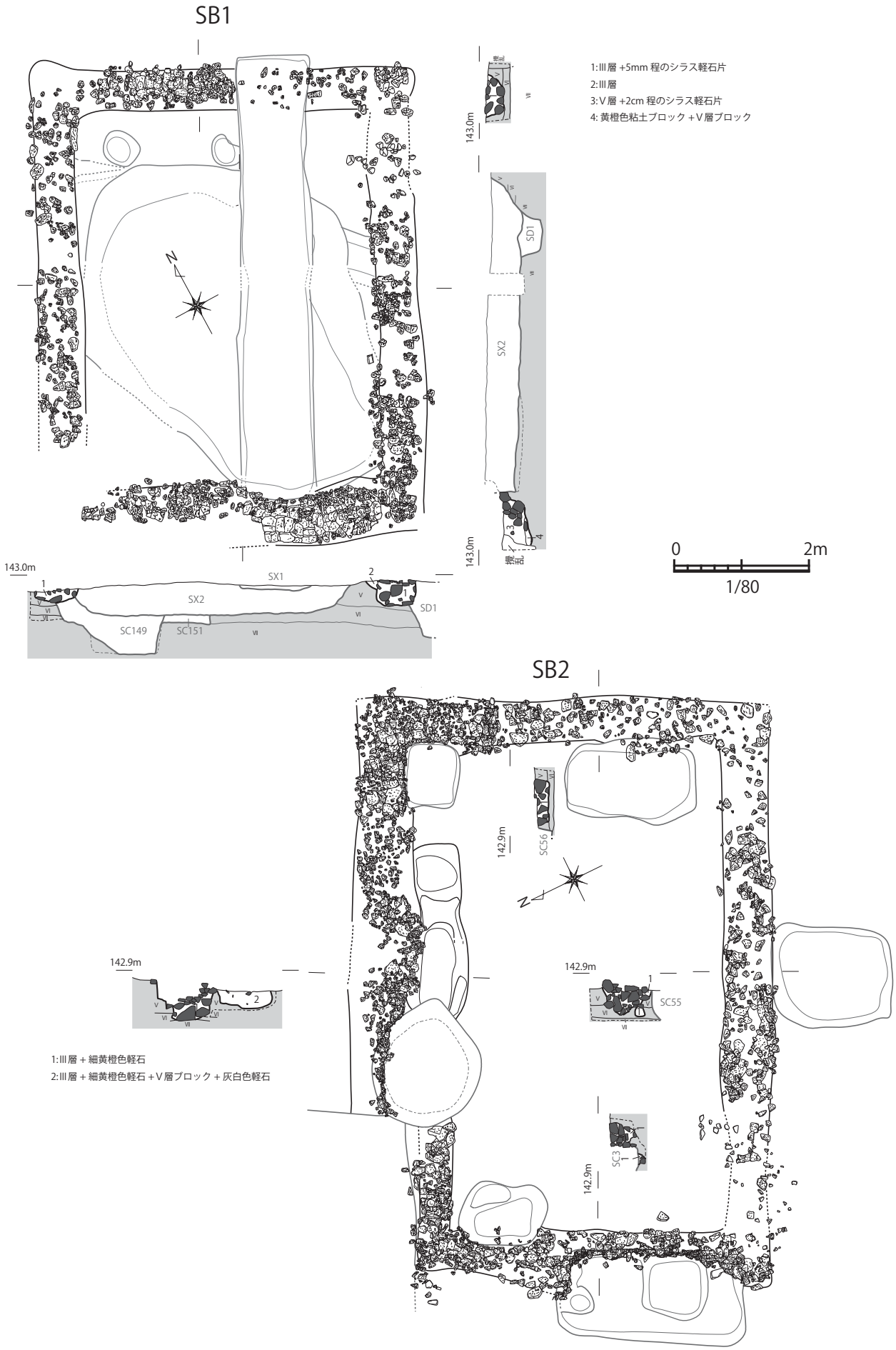
遺物は布基礎溝の埋土中あるいは検出面で軽石と軽石に挟まれる形で出土しているものである。7 は端反碗で鮮やかなコバルトで染付けし、内面は蛇ノ目釉剥ぎとアルミナの塗布がみられる。明治以降か。８は染付皿で波佐見産。18 世紀後半の所産と考えられる。９は色絵碗で薩摩磁器か。10 は色絵小杯で薩摩磁器か。11 は白磁猪口で薩摩磁器。19 世紀～幕末の所産。12 は白磁の糸巻形製品。13 は近代の蓋物蓋で、上絵がなされる。14 は染付皿で肥前産。19 世紀代の所産であろう。15 は青花皿で明末～清初頭の所産。16 ～ 20 は薩摩焼である。16 は餌摺鉢、17 は鉢で光沢のある釉が掛かる。明治以降の所産と考えられる。18 は龍門司系の小碗で、透明釉の後白土掛けされる。18 世紀後半。19 は壺の口縁部で口唇部は釉が拭き取られる。19 世紀以降の所産。20 は薩摩焼苗代川系の片口鉢で、底部外面には貝目がみられる。18 世紀前半の所産。

出土遺物については 18 世紀代から近代まで、幅広い時期の遺物が出土しているが、他遺構との重複関係などからは、遺構の構築時期は幕末から明治頃と推測される。近世の遺物については、本来は重複する SC149 や SD1 といった古い時期の遺構のもので、それが溝の掘削時に埋土に入り込んだ可能性が考えられる。

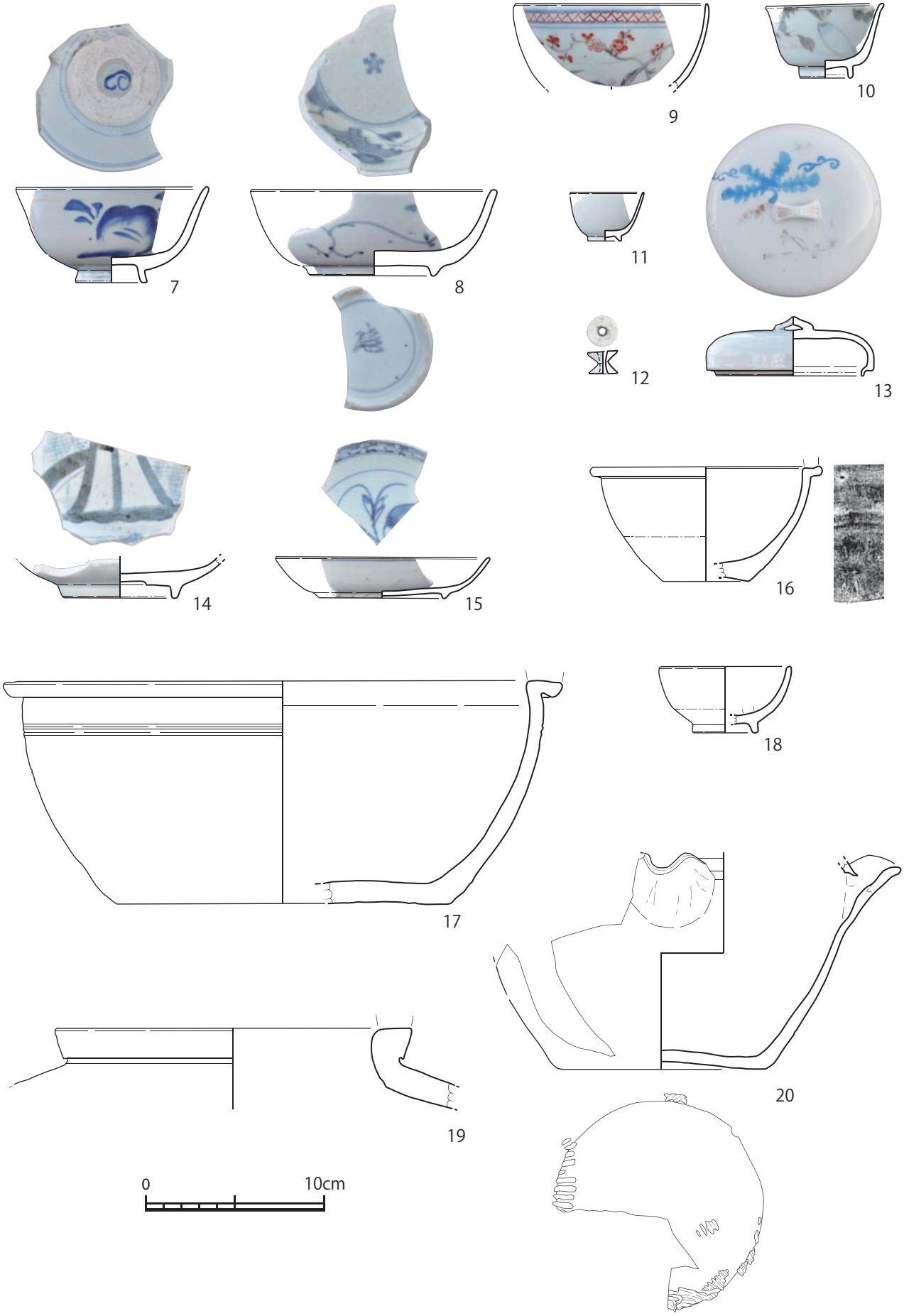
このような軽石や凝灰岩を用いた布基礎は鹿児島市郡山町の地頭仮屋跡などでも確認されており（有川孝行氏教示）、その構造から土蔵や石蔵であった可能性が指摘されている。本遺跡で確認された遺構も同様の性格をもった建物跡と推測される。

SB2（第７・９図）

SB1 の南に隣接して C・D3 区で検出されている。SB1 同様の布基礎の建物跡と考えられる遺構で、やはり断面 U 字や逆台形の布基礎溝に軽石が充填される。自重によって軽石が地山に沈みこむ様子が顕著にみられる。破砕され、粉状になった軽石も多い。北西隅が一部 SB1 の南東角と重複する。SB2 の溝掘り形をみると、北側の長辺が掘削され、途中まで軽石が充填されているが、西側半分は溝部分のみが残り、軽石はほとんど認められない。そのさらに外側に再度溝が掘られ、そこにも軽石が充填さ



第 7 図　SB1・2 実測図（S=1/80）



第 8 図　SB1 出土遺物実測図（S=1/3）

れる。このような状況から、北側長辺に関しては、何らかの理由で拡張がなされ、さらにその長辺の北西角の布基礎はSB1の構築の際にそのまま再利用されたもと考えられる。

規模としては、SB1より若干大きく、長軸8.76 m、短軸6.24 mの長方形を呈する。溝の深さは20～64㎝を測る。主軸はN-64°-Wにとる。

出土遺物は少なく、図化できたのは21のみである。

21は薩摩焼苗代川系の鉢で、19世紀以降の所産と考えられる。出土遺物が少なく、帰属時期の特定は困難であるが、概ねこの薩摩焼鉢の年代と大きな齟齬はないと考える。この建物基礎の周辺に位置するゴミ穴と考えられるSC55やSC65の年代が明治後半以降の近代であることや、これらの土坑が大きく切り合うことなく建物基礎に接するように位置していることから、明治後半頃にはSB2の建物自体は無くなっており、現在確認できるような軽石基礎のみになっていたものと推測される。やはりこのことから、建物自体は19世紀代前半頃の所産と考えられる。

SB3（第9・10図）

SB1やSB2に隣接してC3・4区で検出されている。検出時に人頭大・拳大の軽石が集中する範囲が一定間隔で礎石状に確認されたため、何らかの建物跡であると判断した。壺地業のように、確実な掘り込みをもつものもあるが、多くは掘り込みをもたず軽石が集積されただけのような状況で検出している。掘り込みをもたないものも、建物の自重によるものか、地山層に軽石が食い込んでいるものが多い。検出した範囲は桁行5.88 m、梁行4.2 mであるが、一部軽石を検出できていない箇所もある。主軸はN-28°-Eにとる。各軽石の集中範囲の心々間の距離は、桁行、梁行共に1.4～2 m程を測る。

22～24が出土した遺物である。22は筒形碗でP1から出土している。18世紀末～19世紀初頭の所産であろう。23は染付端反碗でP2から出土した。薩摩磁器で19世紀代の所産。24は掘り込み内からではなく、軽石の集中範囲から出土しているため、遺構に伴うものではない可能性がある。染付大皿で18世紀代の所産と考えられる。出土遺物からは、SB3も19世紀代の所産であると推測される。

SB4（第11・12図）

調査区西端、B・C1・２区で検出している掘立柱建物跡である。桁行３間（6.2 m）、梁行２間（4.0 m）で総面積は24.8㎡を測る。柱間距離は桁行平均2.06 m、梁行平均2.0 mとなる。主軸はN-28°-Eにとる。柱穴の掘り形は円形ないしは楕円形を呈し、大きいもので径80cm程、小さいもので40cm程を測る。柱穴の検出面からの深さは40～74㎝となる。南西梁行の柱穴1基はSC108に切られているため検出できていない。本建物跡は、現場の調査時には掘立柱建物跡として認識できていなかったが、整理作業段階で平面の柱穴配列と埋土の堆積状況などから建物跡として認識したものである。

出土遺物をみてみると、染付碗の25～27、染付皿である28～30、中国青花の31がある。25・26はSC70から出土している。いずれも肥前産で近世の所産といえる。27はSC88から出土した染付碗。28もSC88から出土している初期伊万里の皿で、17世紀前半の所産である。29・30はSC126から出土しており、29は初期伊万里皿で17世紀代の所産である。31はP6から出土した中国青花皿で、明末～清初頭の資料である。

以上、出土遺物からはSB4は17世紀代の所産である可能性が高いものと考えられる。

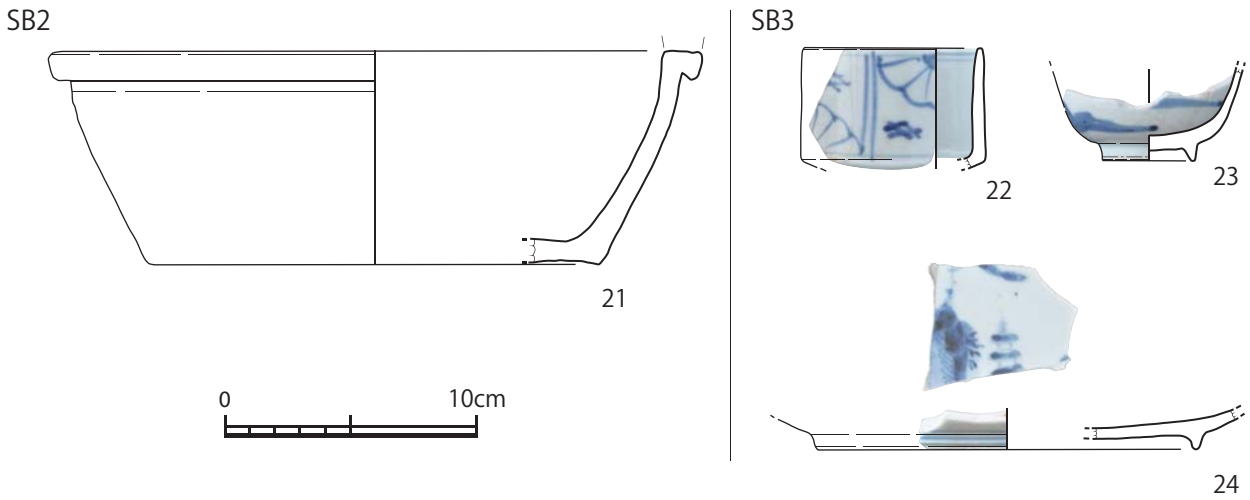
SB5（第13図）

調査区の南西端C・D1区、D2区にまたがって検出されている。桁行３間（6.0 m）、梁行２間（3.2 m）で総面積は19.2㎡を測る。主軸はN-63°-Wにとる。柱穴の平面形態は円形を呈するものが多く、規模は径40～50㎝を測る。検出面からの深さは44～76㎝となる。

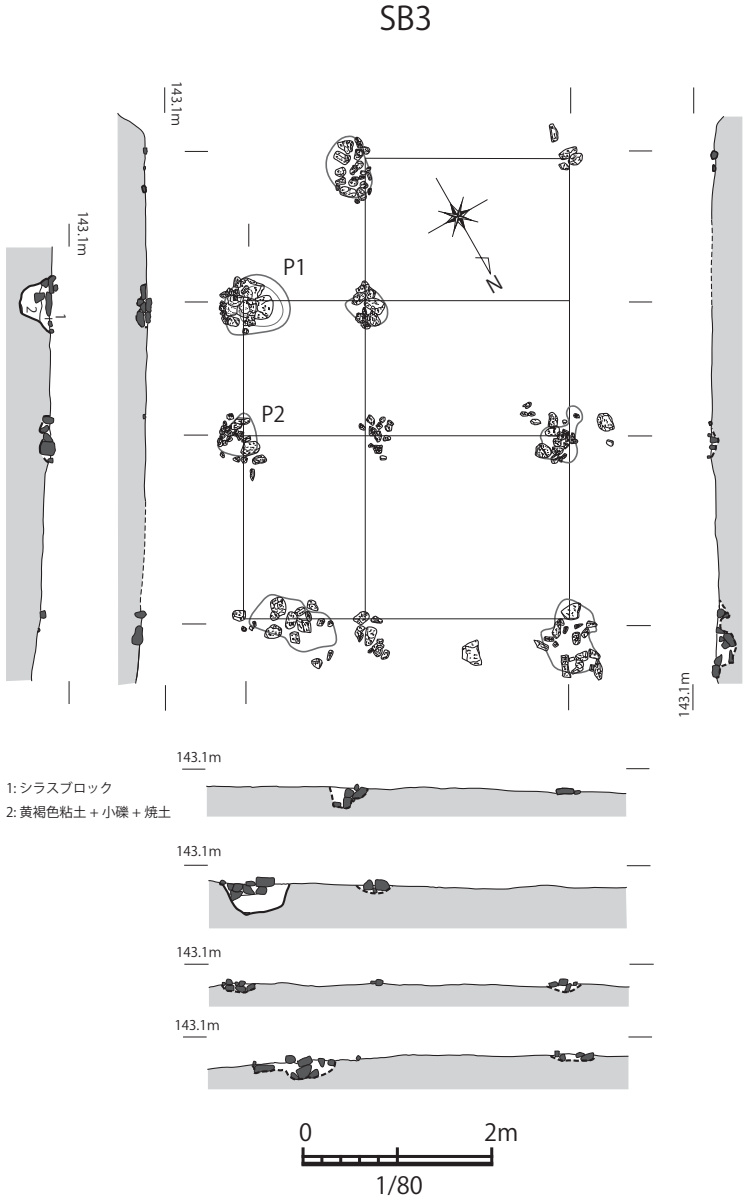
SB5についても、調査時には建物跡として認識できていなかったが、整理段階の精査から掘立柱建物跡として認識したものである。

いずれの柱穴からも遺物は出土していないため、帰属時期を判断するのは困難である。ただし、P32とSC87では柱根と考えられる木質を検出しており、この内P32から出土した柱根については放射性年代測定を実施している。その結果、710±30BP（2σ：Cal AD 1265～1295、1370～1380）という値が得られている。これによれば中世鎌倉から室町期の年代であるが、既に報告したように本遺跡では中世期の遺構・遺物の出土は限定的であり、本掘立柱建物跡が中世期のものである可能性は低い。さらに、柱穴内の埋土に近世～近代の堆積層である基本土層のⅢ層が堆積しているものが多いことや、建物の主軸が近世以降の町屋の地割を反映している可能性が高いことなどから、やはり本掘立柱建物跡は近世期のものと考えたい。

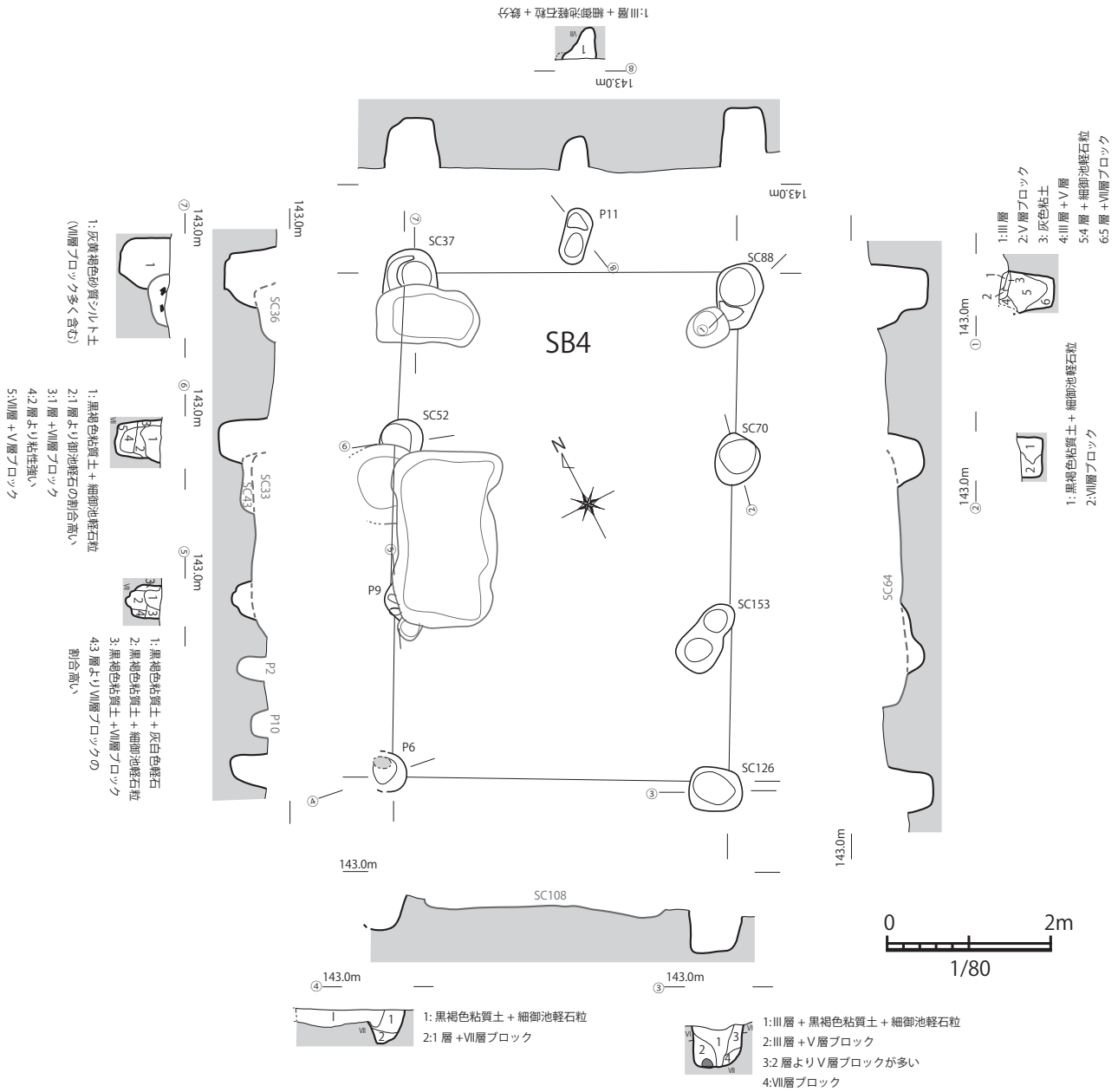
以上、建物跡と考えられる遺構について報告してきた。いずれの建物跡も近世以降の町屋地割を反映するような配置をみせている点は興味深い。また、近世の掘立柱建物跡であるSB4と近世期である可能性が高いSB5については、調査区の中でも地形の高い西側、すなわち高岡筋往還に接して配置されている点も重要であろう。



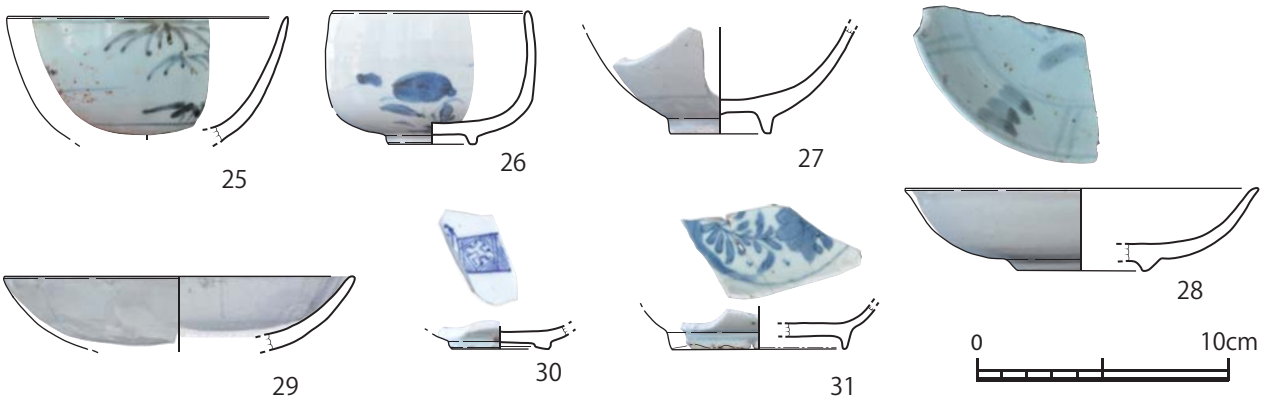
第 9 図　SB2・3 出土遺物実測図（S=1/3）



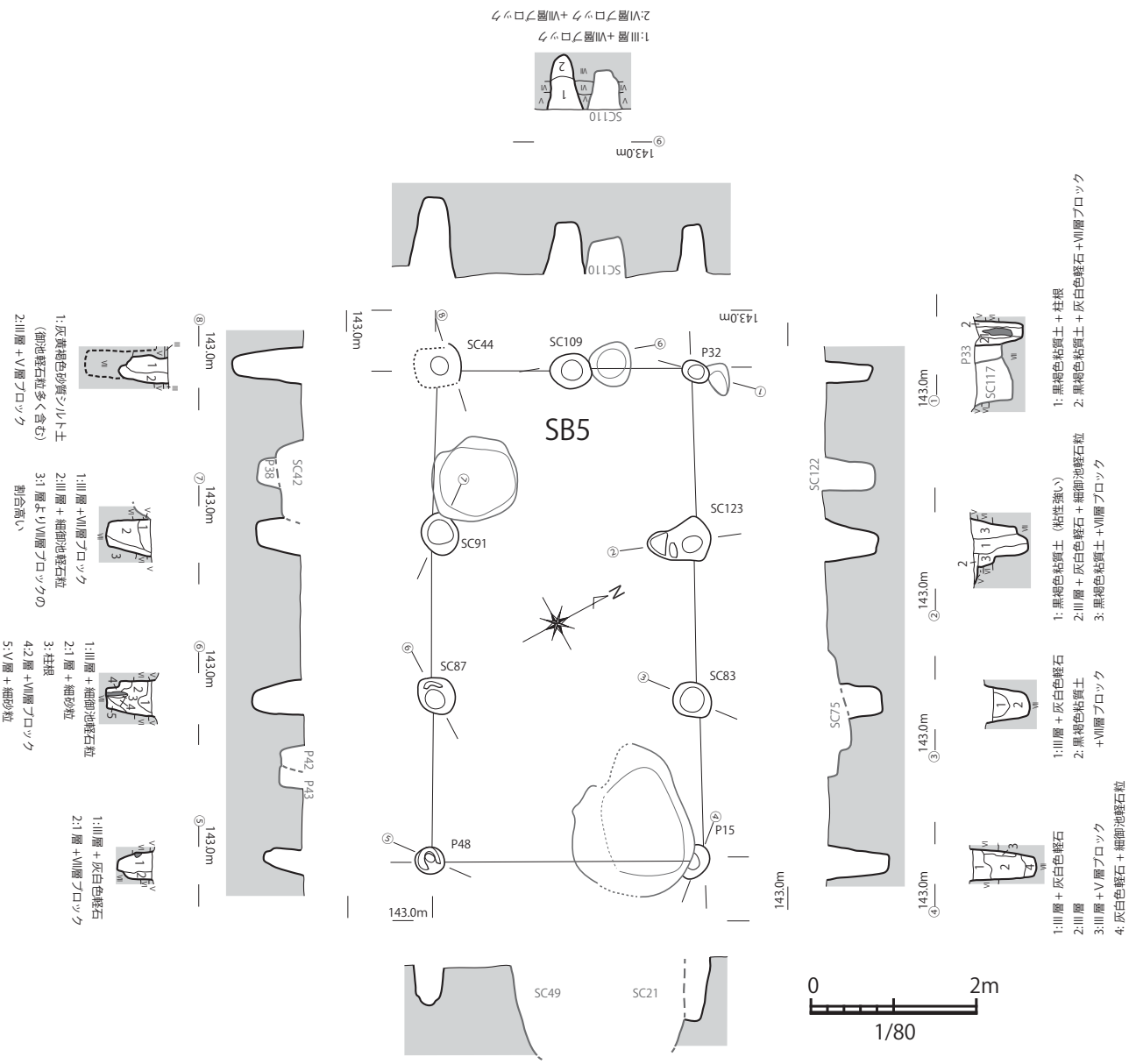
第 10 図　SB3 実測図（S=1/80）



第 11 図　SB4 実測図（S=1/80）



第 12 図　SB4 出土遺物実測図（S=1/3）



第 13 図　SB5 実測図（S=1/80）

2　土坑（SC）

今回の調査では、素掘りの井戸跡と考えられるものも含め 150 基程の土坑を検出している。その多くが切り合い関係にあるため、出土遺物の取り上げの際には細心の注意を払っていたものの、本来の帰属遺構を誤認して取り上げているものが存在する可能性は否定できない。

さらに、古い時代の遺構を破壊して次の遺構が構築されているため、その埋土には古い時代の遺物が混入していることが予測される。遺構の帰属時期については、検出面が同一であったことや、埋土の状態が非常に似通っていたため、主に出土遺物から判断している。しかし、上述のような理由から、本来の遺構の帰属時期を確定できていないものも存在する。以下では、近世に属するものと考えられる遺構も含め、近代までの土坑を一括して報告する。その際に、埋土からある程度時間幅のまとまった遺物が出土しており、より確実な帰属時期を提示できる土坑に関しては、その都度言及することとする。

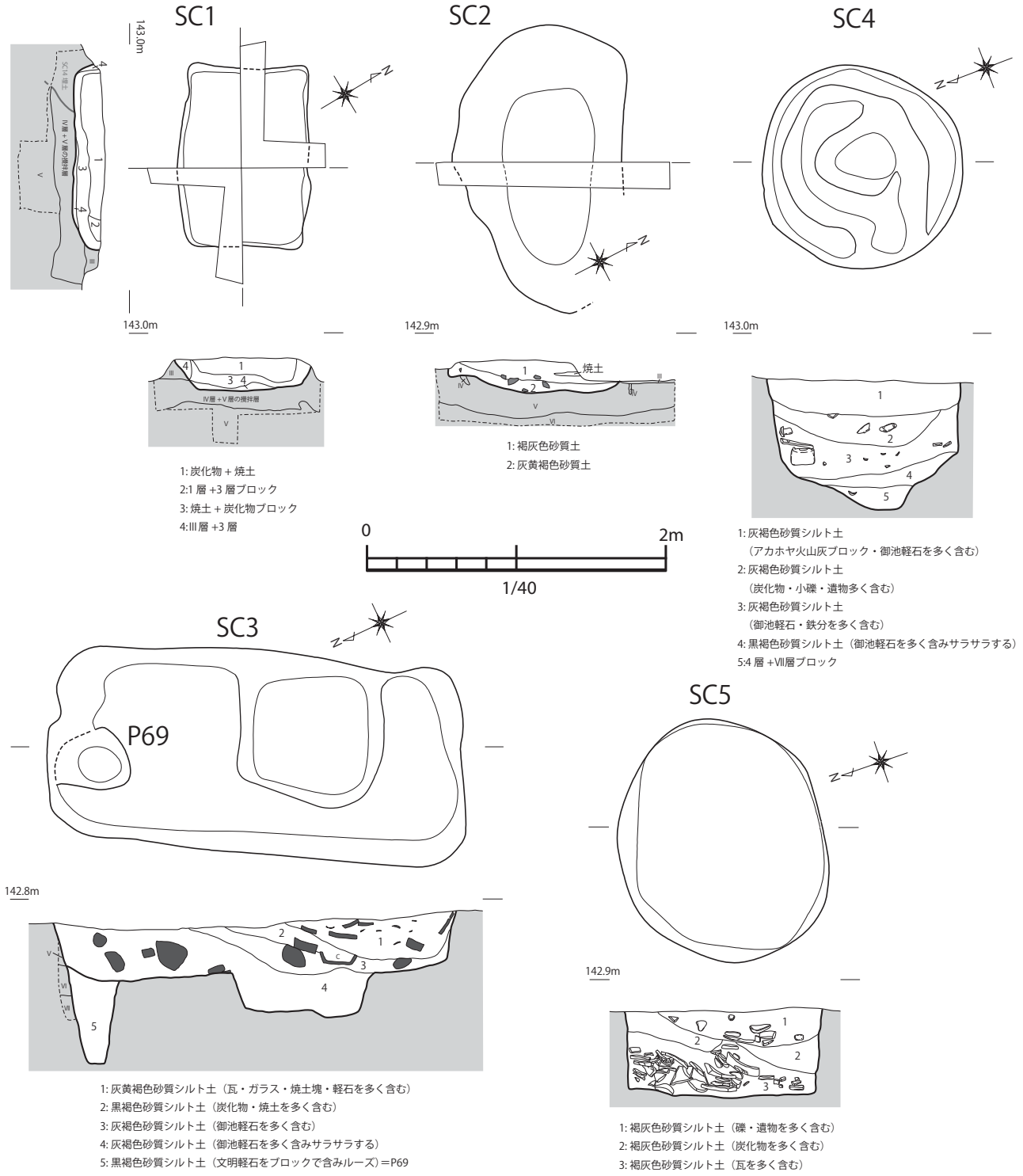
SC1（第 14・15 図）

調査区南端の D3 区で検出しており、長軸 1.18 m、短軸 0.87 m、深さ約 22㎝の方形を呈する。埋土の多くは炭化物と焼土からなる。なんらかの焼成・燃焼施設である可能性が高い。

埋土内からは 32 ～ 34 が出土している。32 は色絵皿である。33 は銅版転写の碗蓋、34 も同じく銅版転写の小杯である。これらの遺物はいずれも被熱した痕跡は認められないため、燃焼後に混入したものと考えられる。出土遺物からは近代の所産といえる。

SC2（第 14・15 図）

調査区南端、D2 区で検出している。長軸 1.92 m、短軸 1.13 m、深さ約 20㎝の楕円形を呈している。遺構の



第 14 図　SC1 ～ 5・P69 実測図（S=1/40）

東側は攪乱を受ける。埋土の一部には焼土が含まれる。

35 ～ 47 が SC2 出土遺物である。35 は型紙摺の碗で、明治期であろう。36 は染付の小杯で外器面全体に文字が描かれる。37 は銅版転写の小杯。38 も小杯で器面全体に鮮やかなコバルトを用いた瑠璃釉がかかる。39 は銅版転写の湯飲み碗。40 は染付小杯、41 は白磁猪口である。42 は型紙摺による染付皿。43 はクロム釉を掛ける瀬戸・美濃系の釉下彩磁器皿である。明治期の所産であろう。44 は白磁の紅皿で、外面には蛸唐草文をあしらう。19 世紀後半の所産であろうか。45・46 は同一個体と考えられる煙管である。雁首部分には羅宇が残る。雁首と吸口共に飾り細工がなされる。47 は長方形の赤間石製の硯である。硯背には窪みがあり、そこに幾重にも線刻が重ねられるが、文字等はみられない。

以上の出土遺物からは、本土坑は明治以降、近代の所産といえる。

第 15 図　SC1・２出土遺物実測図（S=1/3）

SC3（第 14・16 図）

C2・3 区にまたがって検出しており、長軸 2.75 m、短軸 1.37 mの長方形を呈し、検出面からは最深部で 66 ㎝を測る。SB2 を破壊して構築される。底面は一部二段掘りとなる。本遺構を掘り切った際に P69 を検出した。

埋土には大量の瓦やガラス片が含まれていた。48 ～ 59 が出土遺物である。48 ～ 50 は染付碗。48 はコバルトによる型紙摺で明治期。50 は格子文があしらわれる。肥前系で 19 世紀以降。51 は染付小杯でやはり 19 世紀以降の所産といえる。52 は湯飲み碗で近代。53・54 は輪花皿である。54 は型紙摺で明治期の所産。55・56 は対と考えられる陶器製の硫酸瓶である。56 の口縁部はネジになり、そこに蓋である 55 をはめ込む。肩部一箇所に横位環状の把手が付く。底部外面には砂が大量に付着する。57 は無色透明のガラス瓶。58 は滑石製の石墨である。59 は軒丸瓦で三巴文があしらわれる。これ以外にも大量の瓦片が出土しているが、遺存状況が良いもの以外については、現地で廃棄している。

以上の出土遺物からは、明治期以降、近代の所産であると考えられる。

SC4（第 14・17 ～ 21 図）

調査区の南端、D3 区で検出した。径 1.3m 程の円形を呈し、検出面からの深さは最深部で 86㎝を測る。底面は中央部が一段低くなる。

遺物は大量に出土している。その中でも完形に近い資料を主に報告する。また、同一の資料と考えられるもの

第 16 図　SC3 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

も複数掲載せず、一個で代表させている。

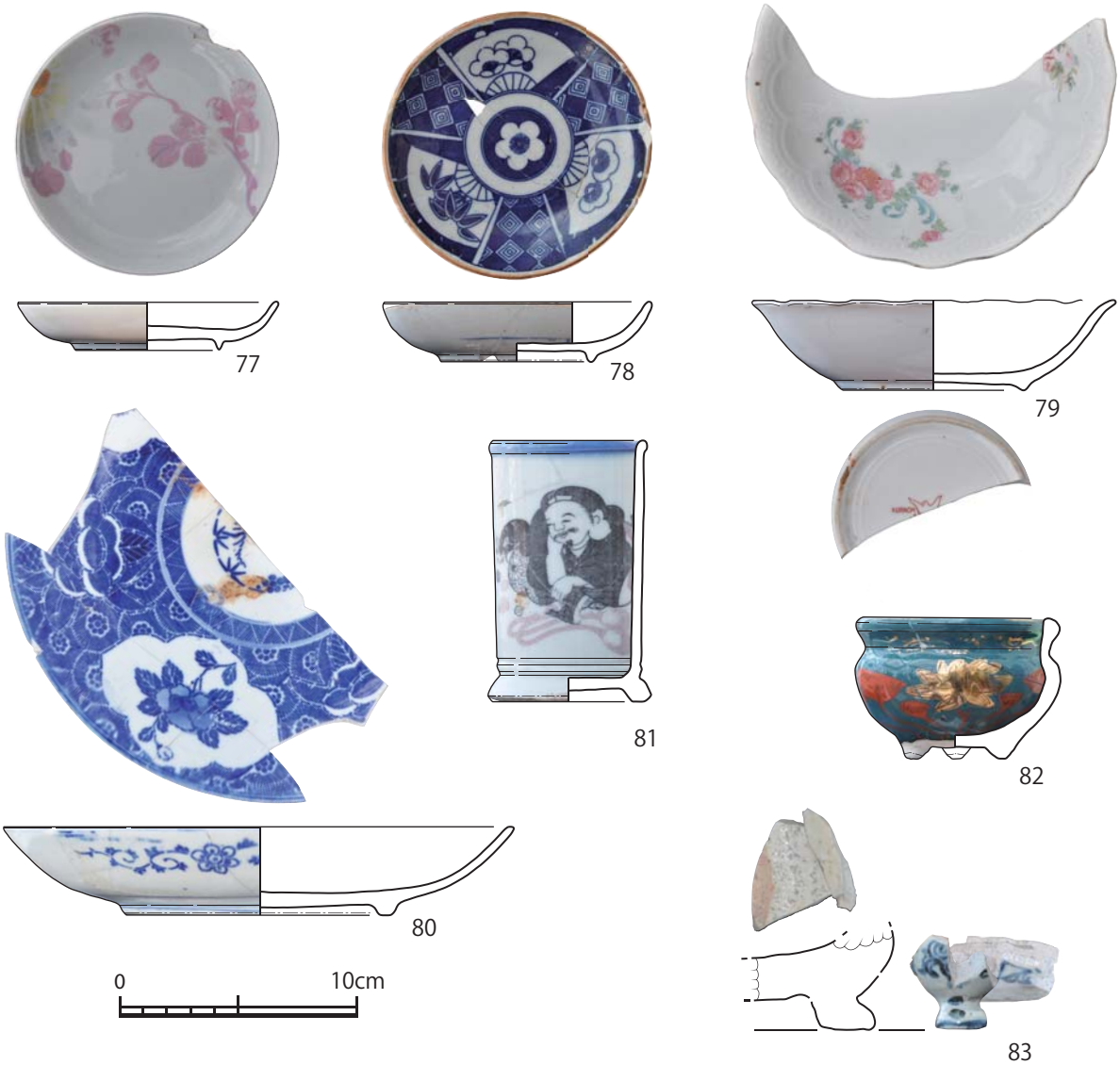
60 ～ 68 は碗である。60・61 は釉下彩磁器の碗で 60 は同様の資料が複数出土している。62 は口縁部が輪花状に 4 箇所くびれる。63･67 は型紙摺。68 は釉下彩磁器でスタンプ印判による花文様をあしらう。69 は同様のスタンプ印判による小碗。70 ～ 72 は小杯である。72 はコバルトによる鮮やかなねじ花文を施す。73 は型紙摺による碗蓋。74 は磁器皿で上絵付けを行う。75 は釉下彩磁器皿で紫や緑で花を描く。76 は染付皿で網目文をあしらう。77 は磁器皿で上絵付けを行い花文を描く。78 は銅版転写による染付皿。79 は型押しと上絵付けで高台内には「KURACHI」の銘が認められる。80 は型紙摺の大皿

第 17 図　SC4 出土遺物実測図①（S=1/3）

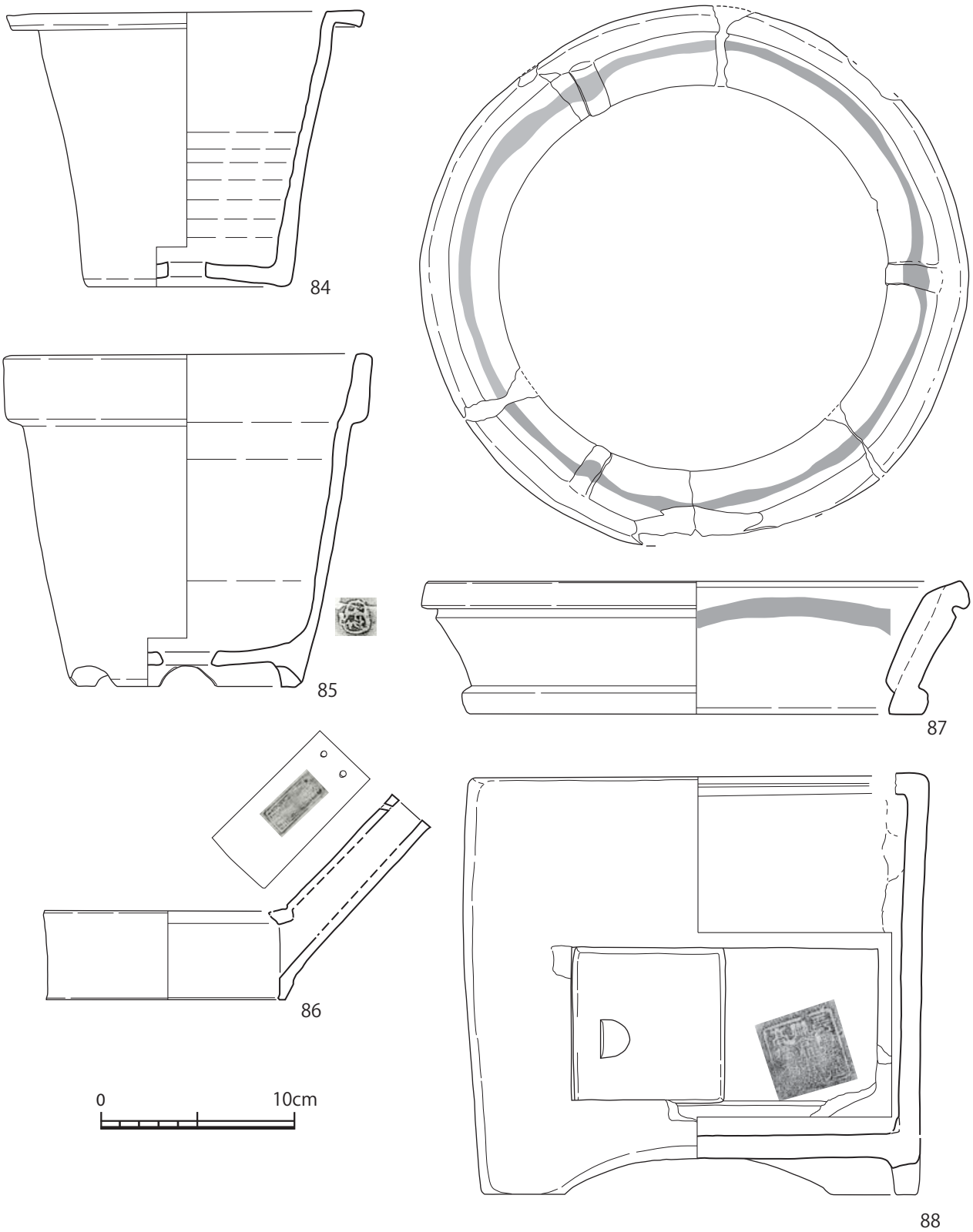
で明治期か。81 は釉下彩磁器で銅版転写により大黒様を描く。82 は香炉である。83 も香炉ないしは鉢と考えられる。呉須や釉調などからは中世期の中国青花か。

84・85 は陶器の植木鉢である。85 にはヤカンと「トミヤ」の刻印がみられる。86 は胡麻煎りに似るが、皿部の底は抜けている。把手部に「ハカタ千代町日野製」の刻印がある。87 は竈にかけて使用する五徳であろうか。内面には三箇所に突起があり、輪状に煤が付着している。88 は鍋物焜炉で、通風調整口の窓には「三河陶器特産連合組合員高橋…」刻印がみられる。接合はしなかったが、この内部に SC5 出土の 144 が組み込まれる二重構造になっていたものと考えられる。

89 ～ 117 はガラス瓶類である。89・90 は無色透明の牛乳瓶。89 には「都城牛乳株式会社　電話一四四番五〇九番」のエンボスがみられる。91 はわかもと薬品整腸剤「わかもと」で、口縁部には平仮名で「わかもと」、胴部にはローマ字で「Wakamoto」のエンボスがみられる。コルク栓で、昭和初期の製品である。92 も茶系半透明のガラス瓶で、口縁部には蓋が残る。薬瓶であろうか。93 はコバルト系半透明の薬瓶で、「愛生堂　黄金水」のエンボスがみられる。94・95 は無色透明で 30ml 入りの薬瓶。96・97 も薬瓶であろう。98 は 200ml 入りの医療用薬瓶で、「柏村小児成人内科」のエンボスがみられる。本医院は現在も遺跡が所在する中町の南に隣接する上町で開業している。99 も同様の医療用薬瓶で「小牧胃腸病療院」のエンボスがみられる。本医院も現在も中町から近い中原町で開業している。100・101 は 300ml の薬瓶である。102 ～ 108 は白色不透明の化粧瓶と考えられる資料である。104 ～ 106 は大正 7 年に発売開始された「メヌマポマード」の瓶である。110 は青色半透明で底部外面には「フエキ糊」のエンボスが認められる。111 はインク瓶、112 は飲料瓶の栓であろうか。113 は「ライジングサン石油株式会社精製品」のエンボスがみられる。ライジングサン石油株式会社は、1900 年（明治 33 年）



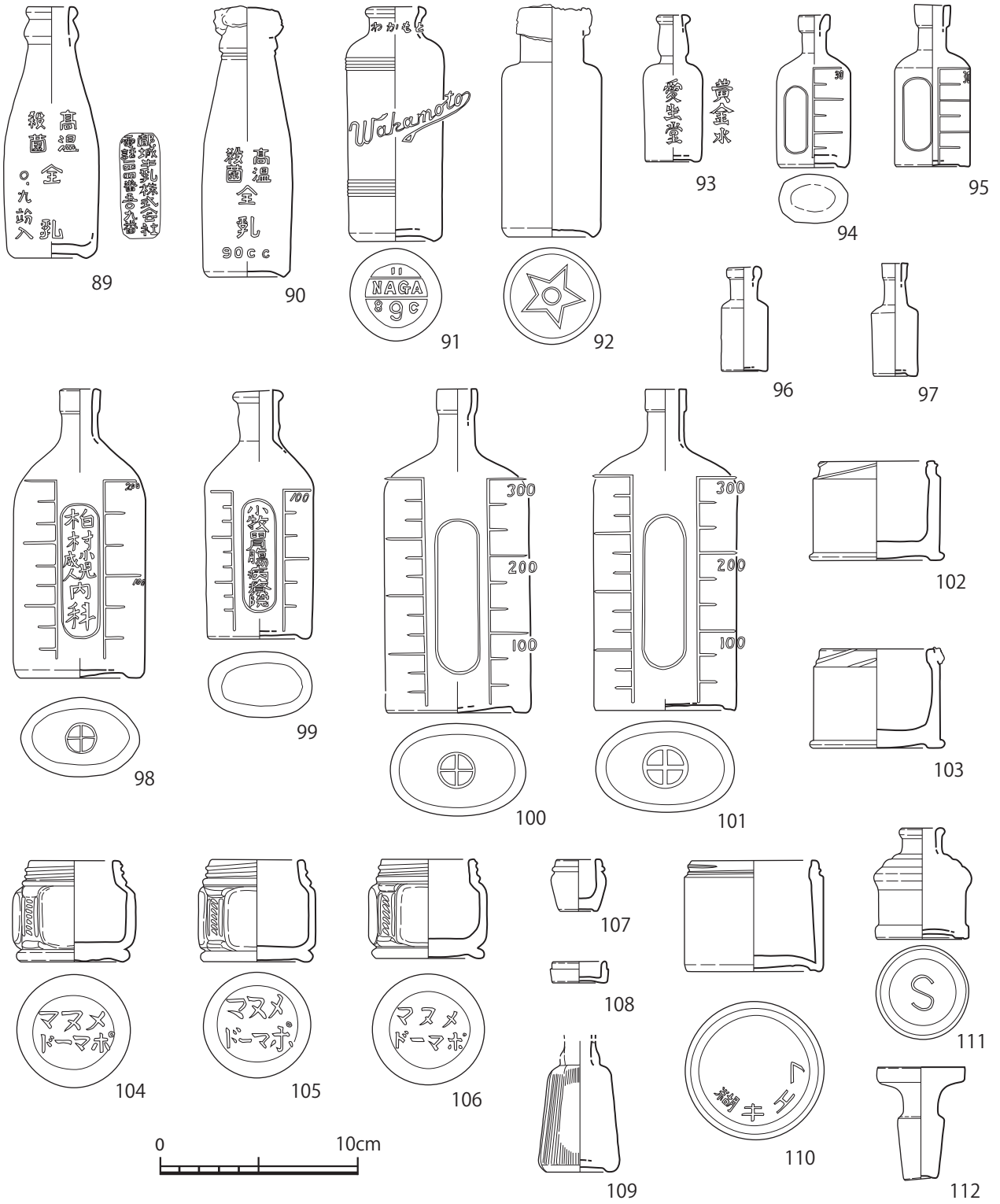
第 18 図　SC4 出土遺物実測図②（S=1/3）



第 19 図　SC4 出土遺物実測図③（S=1/3）

に設立された会社で、現在の昭和シェル石油株式会社の前身である。底部外面には貝殻モチーフのエンボスがみられる。114 は「専売特許ハイカチール」のエンボスがみられる。茶系半透明の薬品瓶であろうか。115 も青色半透明の薬品瓶と考えられる。116 は青色半透明で大下回春堂が販売する「フマキラー」の瓶である。殺虫剤である「強力フマキラー液」は 1920 年（大正 9 年）に開発され、1924 年（大正 13 年）には専売特許となる。117 は緑色半透明で、やはり薬品瓶であろうか。118 はセルロイド製の櫛。119 は頁岩製の石板である。

以上の出土遺物からは、一部明治期まで遡る可能性のある資料が存在するものの、多くが大正期から昭和初期



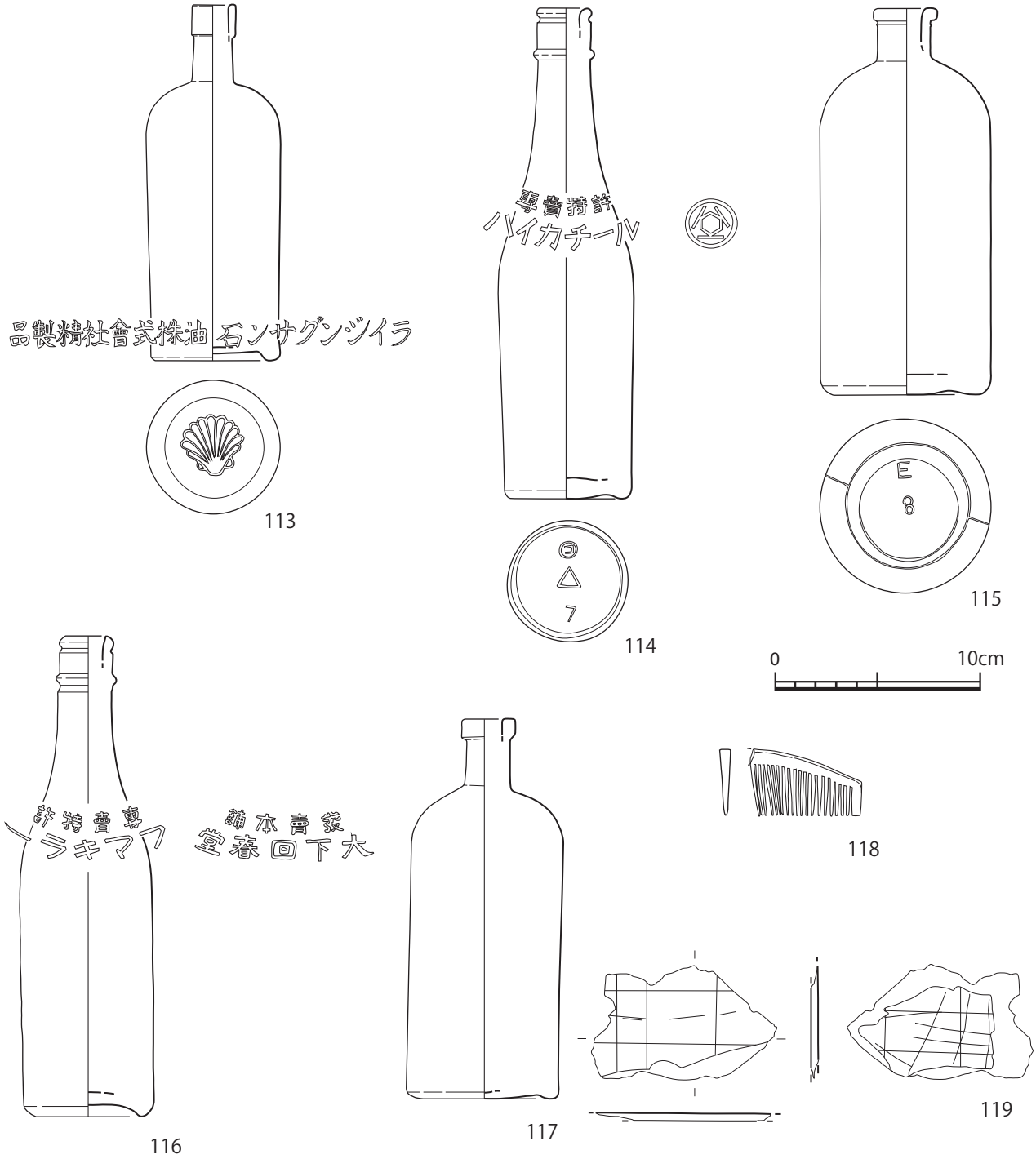
第 20 図　SC4 出土遺物実測図④（S=1/3）

にかけての資料といえる。遺物は完形品やそれに近い状態でしかも大量に出土している。そのため本土坑は、破損して使えなくなったもの、あるいは古くなったり中身を使用して必要なくなったものを廃棄するゴミ穴として使用された土坑であると考えられる。

SC5（第 14・22 ～ 25 図）

SC4 に近い E3 区で検出している。長軸 1.62 m、短軸 1.38 m、深さ 57cm 程の楕円形を呈する。埋土には礫や炭化物、瓦片が多く含まれていた。

遺物は SC4 同様に大量に出土している。120 ～ 143 は陶磁器類。120 ～ 122 は磁器碗である。121・122 は釉下彩磁器で、ピンクや茶色の彩色がなされる。123 ～ 126 は小碗。127 ～ 132 は磁器皿で、127・128 は銅版転写によるものである。129 は釉下彩磁器の菱形皿であ



第 21 図　SC4 出土遺物実測図⑤（S=1/3）

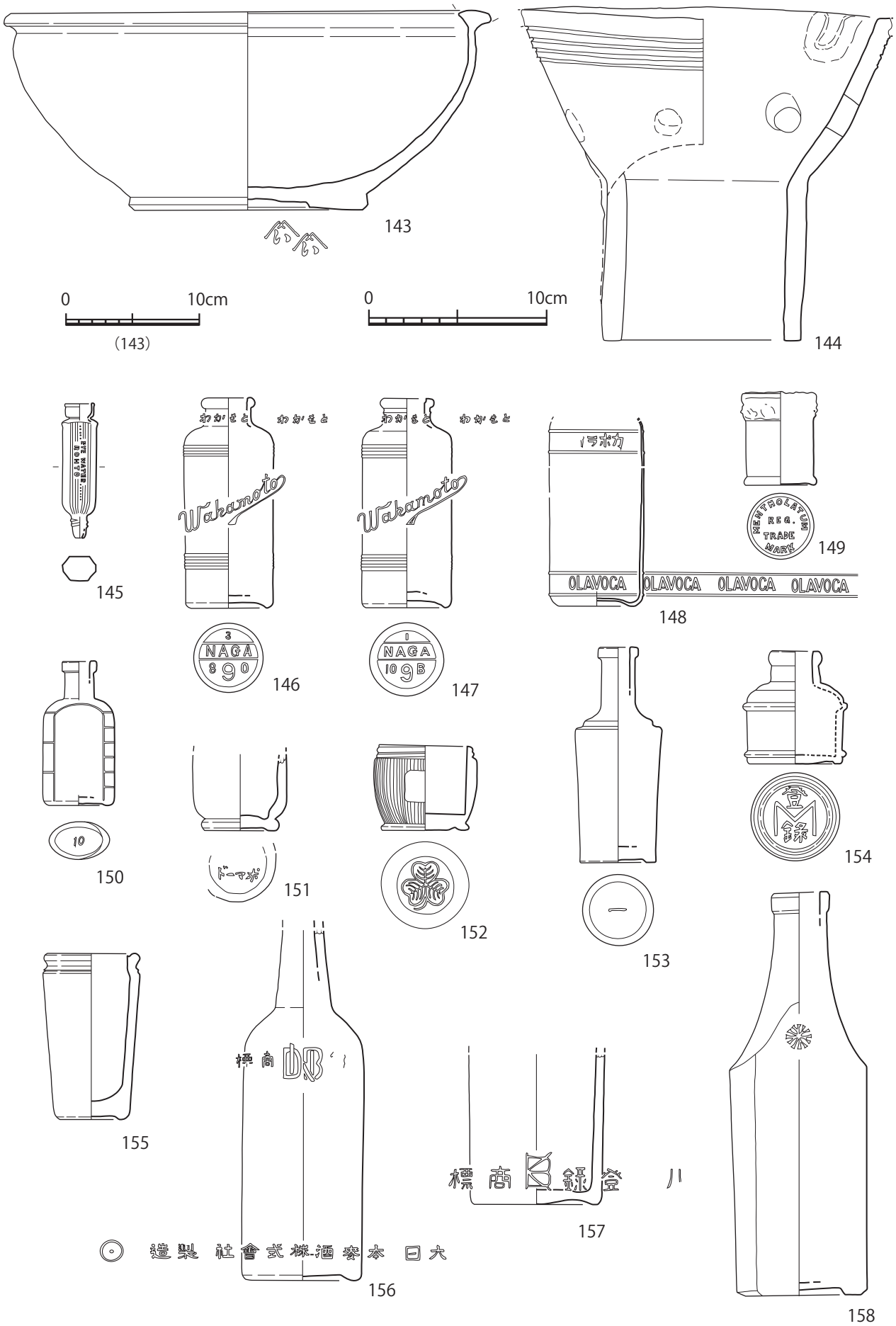
る。色鮮やかに彩色される。130 は SC4 から出土した資料（74）と同様である。131 はスタンプ印判で描かれる。132 は内面には蝶がプリントされ、底部外面には銘がみえる。133・134 は蓋物蓋。135 は鉢で内外面に枇杷があしらわれる。136 は通い徳利と考えられる資料で、コバルトで「…酒場」「…（二カ三カ）十五号」と書かれる。137 は白磁酒杯で、内面見込みには「祝都城飛行場竣工記念…」の文字と飛行機の絵がみえる。現在の都原町に都城西飛行場が竣工したのが 1934 年（昭和 9 年）であるため、この時の記念品であろう。138 は染付の徳利。139 は白磁のフックである。140 は釉下彩磁器の急須で「古松」の文字がみえる。141 は陶器の擂鉢、142 は薩摩焼龍門司三彩の瓶である。143 は陶器の大鉢で、蛇ノ目高台を呈する。そこに屋号と思われる刻印が認められる。144 は二重構造になる鍋物焜炉の内側部分である。SC4 出土の 88 とセットになるものと考えられるが接合しなかった。

145 ～ 160 はガラス瓶類。145 は目薬瓶で、「EYE WATER　ROHTO」のエンボスがみられる。146・147 は茶色半透明の整腸剤「わかもと」のガラス瓶である。

第 22 図　SC5 出土遺物実測図①（S=1/3）

第 23 図　SC5 出土遺物実測図②（S=1/3）

底部外面のエンボスの数字とアルファベットが異なる。148 は「オラボカ」「OLAVOCA」のエンボスがみえる薬瓶であろうか。瓶は茶色半透明を呈する。149 は白色不透明のメンソレータムの瓶で、蓋が残る。底部外面に商品名のエンボスがみえる。150 は目盛りのある薬瓶。151 は緑色半透明で底部外面に「ポマード」のエンボスが認められる。152 は化粧瓶、153 も化粧瓶であろうか。154 は無色透明のインク瓶。155 は青色半透明の瓶であ



第 24 図　SC5 出土遺物実測図③（S=1/3・1/4）

る。156 は大日本麦酒株式会社のサイダー瓶である。緑色半透明。157 は麒麟麦酒のビール瓶で、茶色半透明。158 は無色透明瓶である。159 は 1882 年（明治 15 年）に開業した蜂印香竄葡萄酒のワイン瓶である。160 は緑色半透明で、飲料瓶であろうか。

161 は骨製の歯ブラシである。「ライオン歯刷子　二號形」の線刻がみられる。

162・163 は煙管で、同一個体と考えられる。162 は雁首で、断面六角形を呈する。裏面に「髙野」の線刻有。163 も同様に断面六角形を呈し、木質の羅宇が残る。やはり裏面には「保険」の線刻がみえる。

164 は寛永通寶である。新寛永。

165 は軒丸瓦で中心飾りには三巴文がみえる。166 は軒平瓦で蓮華状の中心飾りがみられる。

SC5 も SC4 と同様に、完形に近い遺物が大量に出土している。やはり一部明治期に遡る可能性がある資料も存在するが、大部分は大正から昭和初期にかけての資料と考えられる。本土坑もゴミ穴として使用されたもので、時期的には SC4 と近接するものと推測される。

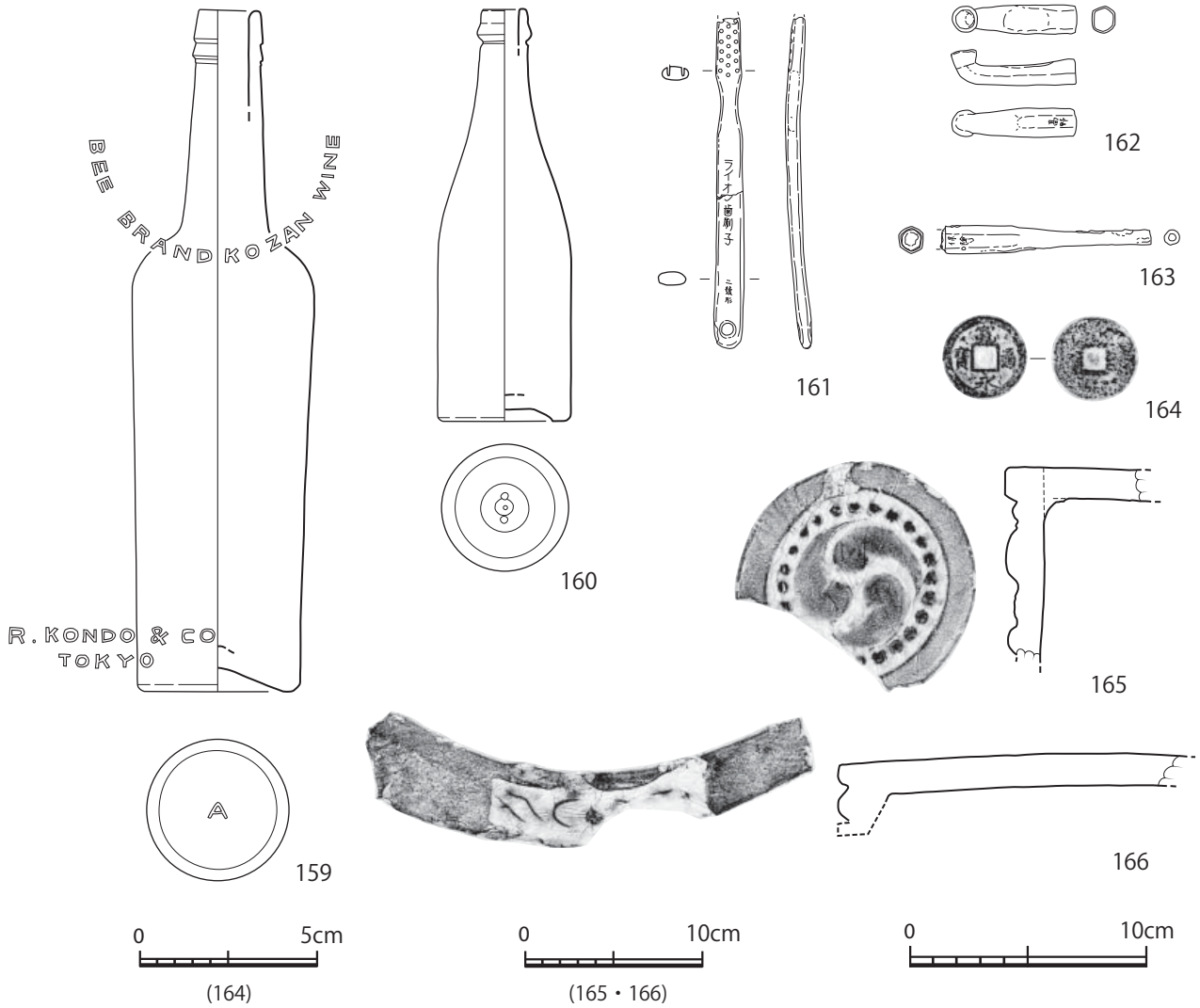
SC6（第 26・27 図）

C4 区で検出しており、長軸 1.38 m、短軸 1.15 mの不整円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 46㎝を測る。埋土には炭化物や焼土が多く含まれている。

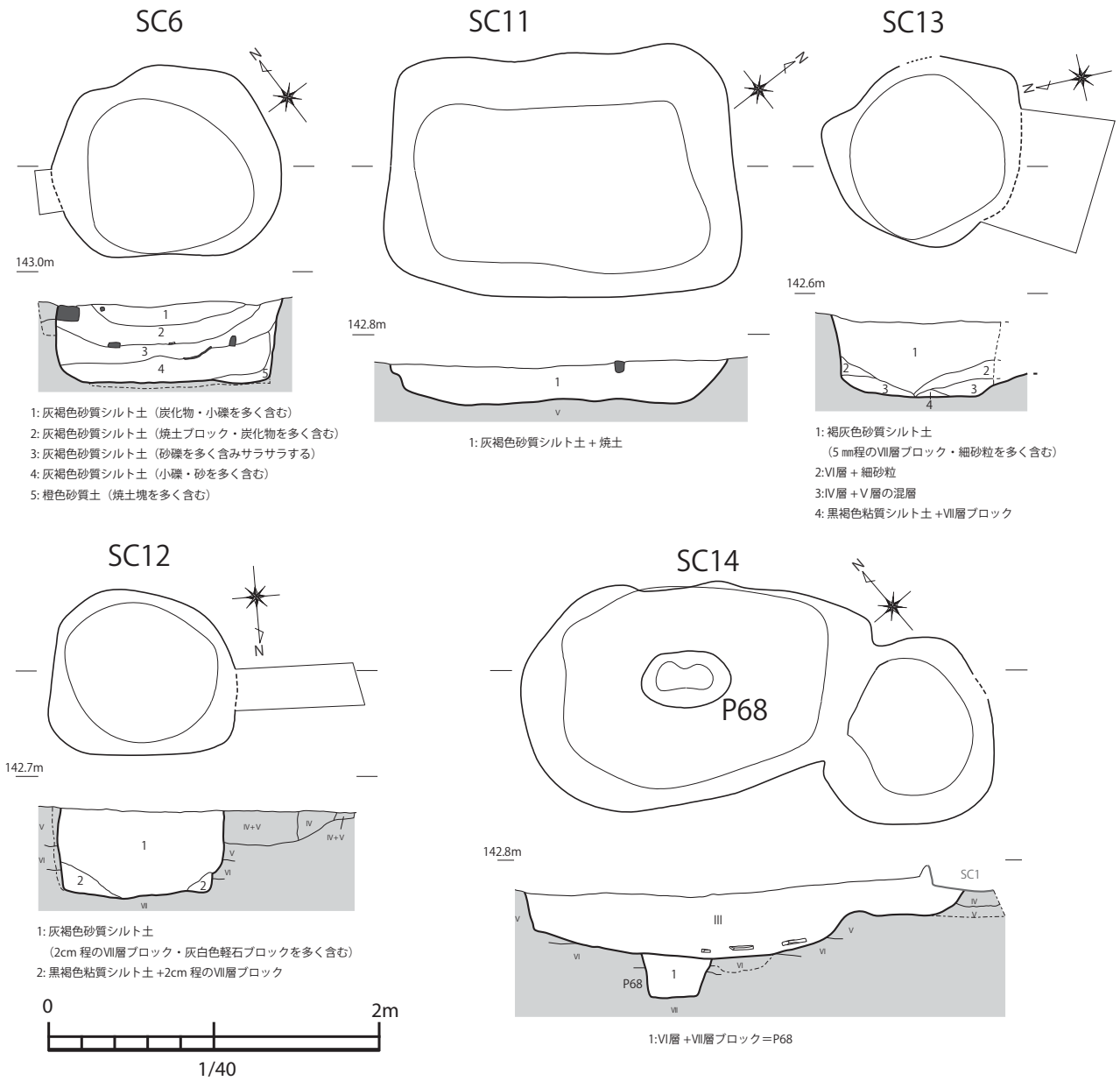
167 ～ 179 が SC6 出土遺物である。167 ～ 176 は磁器。167・168 は染付磁器碗。167 は型紙摺である。168 は内面が蛇ノ目釉剥ぎされアルミナを塗布される。169 は染付の湯飲み碗。170 は染付小杯で文字がみられる。171 は白磁の酒杯である。172 は鮮やかなコバルトで草花文が施される。173 は釉下彩磁器の蓋で、空気穴が開いていることから急須の蓋であろう。上絵で扇子が描かれる。175 は染付皿で、口錆が施される。176 は水注であると考えられる。

177・178 は滑石製の石墨。

179 は薩摩焼苗代川系の擂鉢である。近代の所産と考



第 25 図　SC5 出土遺物実測図④（S=1/2・1/3・1/4）



第 26 図 SC6・11 ～ 14・P68 実測図（S=1/40）

えられる。

以上の出土遺物からは、本土坑は明治以降、近代の所産といえる。やはりゴミ穴として使用されたものと推測される。

SC11（第 26・27 図）

C･D3 区、SB2 の内側で検出されている。長軸 2.07 m、短軸 1.42 mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは最深で 26㎝を測る。埋土は一層で、焼土を含む。

180・181 が SC11 出土遺物である。180 は緑色半透明のラムネ瓶である。内部にはビー玉が残る。181 は陶器の擂鉢で、SC5 出土の 141 に似る。いずれも近代の所産と考えられる。

SC12（第 26・27 図）

D1 区で検出している。長軸 1.1 m、短軸 1.0 mの不整円形を呈する。検出面からの深さは約 50㎝を測る。SC129 を切る。

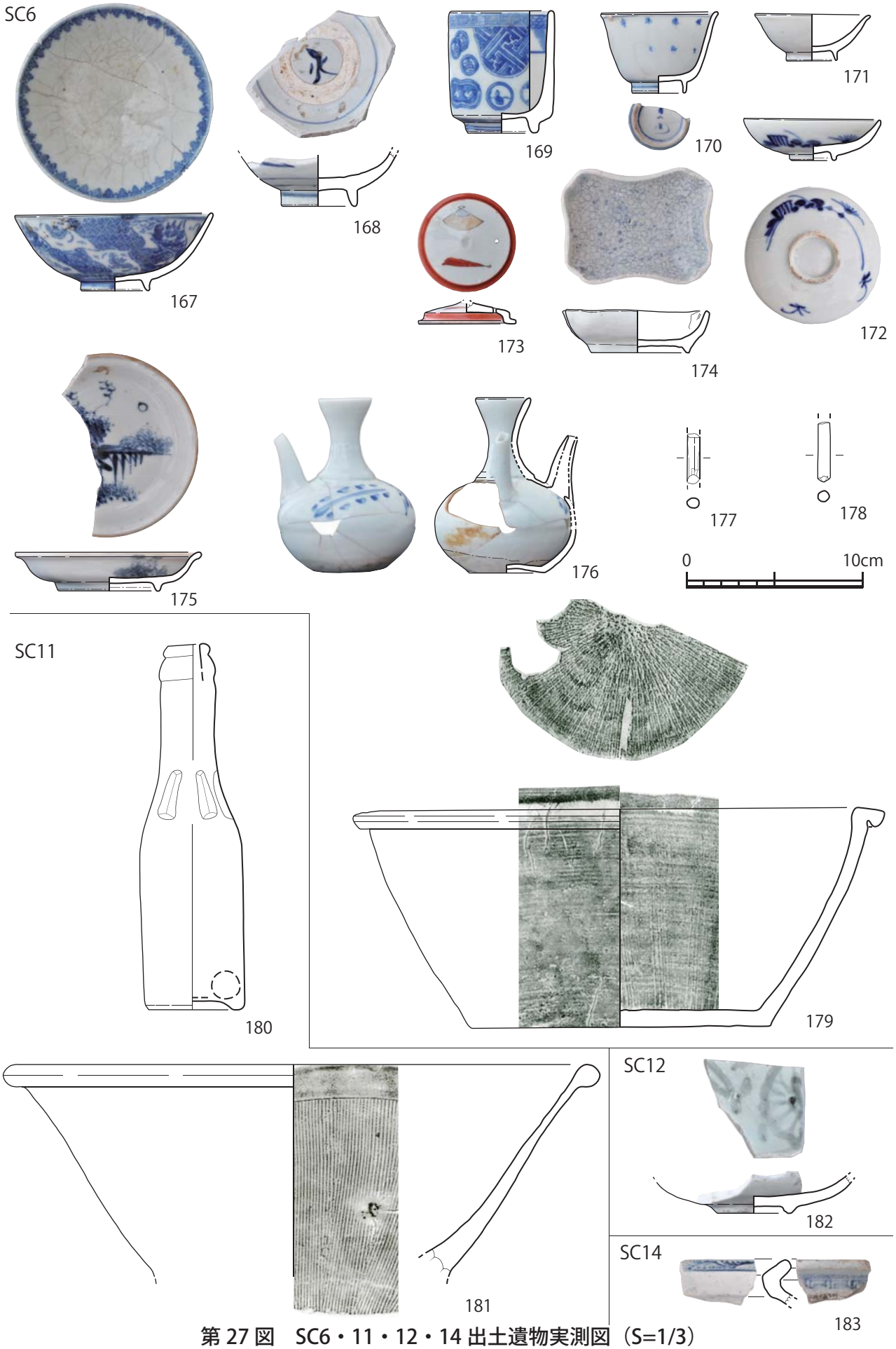
182 が出土遺物である。初期伊万里の染付皿で、17 世紀前半の所産といえる。しかし、遺構の埋土からは近代磁器の破片も出土していることから、182 は混ざり込みで遺構自体は近代の所産であると考えられる。

SC13（第 26 図）

D1 区で検出しており、SC39 を切る。長軸 1.26 m、短軸 1.03 m、深さは 44㎝を測る。遺物は出土していない。

SC14（第 26・27 図）

D3 区で検出している。平面形態は長軸 2.85 m、短軸 1.3 mの瓢箪状を呈する。深さは最深部で 40cm を測る。土坑が 2 基重なっているようにもみえるが、断面観察からは 1 基の土坑と判断した。本土坑を掘り上げた後に P68



第 27 図　SC6・11・12・14 出土遺物実測図（S=1/3）

を検出している。

埋土内からは183が出土している。香炉ないしは鉢と考えられる資料で、中世期の中国青花であろうか。混ざり込みと考えられる。

SC7（第28・29図）

D2区で検出しており、周辺は多くの土坑が切り合いながら重複している範囲に当たる。長軸1.9 m、短軸0.9 m、最深部で深さ78㎝を測る。SC19を切る。断面は逆台形状を呈し、埋土には灰色粘土や黒色土のブロックが多く混ざる。

184～186が出土した遺物である。184は染付の端反碗で、薩摩磁器である。幕末以降の所産と考えられる。

185・186はガラス瓶。185は無色透明で、外面に「CLUB」のインボスがみられる。化粧瓶であろうか。186は無色透明の牛乳瓶である。

以上の出土遺物からは、本土坑は幕末から近代にかけての所産と考えられる。

SC8（第28・29図）

D2区で検出している。SC19に切られ、SC9とSC58を切る。長軸2.3 m、短軸1.36 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは50㎝程で、最下層からは板材等の木製品が出土しているが、遺存状態が悪く図化できていない。

187～191が出土した遺物である。187は染付の端反碗で鮮やかなコバルトで花文が描かれる。188は瀬戸・美濃系の小杯でコバルトによって染色体様の双喜文を描く。幕末～明治期の所産と考えられる。189は酒杯で、内面には「森次…」の文字がみえる。190は端反碗蓋で、外面には花文、内面には雷文があしらわれる。近代の所産。191は濃い藍色のコバルトで染付けられた蓋物蓋である。やはり近代の所産といえる。

以上の出土遺物からは、本土坑は明治以降、近代の所産と考えられる。

SC9（第28・29図）

D2区で検出されており、SC8とSC49に切られる。径約1.8 mの不整円形を呈する。検出面から深さ1.8 m程まで掘り下げているが、完掘はできていない。湧水が認められる。平面形態および遺構の深度からは井戸跡である可能性が考えられる。

192～197が出土遺物である。192は漳州窯系の青花碗である。16世紀後半～17世紀前半の所産。193は白磁の端反碗で薩摩磁器。19世紀～幕末にかけての資料である。194は肥前系の陶胎染付の香炉である。18世紀前半の所産。195は肥前系の染付皿で、内面見込みに3箇所のハリ支え痕がある。18世紀末～19世紀の所産。

196・197は薩摩焼加治木・姶良系の碗である。両者共に内面を蛇ノ目釉剥ぎする。18世紀後半。

以上、出土遺物をみると、16世紀後半～19世紀とかなりの時間幅が認められる。遺構の廃絶時期は、最も新しい年代を当てはめれば、幕末を含め19世紀代頃であろうか。

SC19（第28図）

D2区で検出しており、SC7とSC24に切られ、SC8を切る。長軸1.5 m、短軸1.0 m程の不整形を呈する。検出面からの深さは最深部で80㎝を測る。染付碗が出土しているが、小片のため図化し得なかった。他遺構との切り合い関係からは、明治以降、近代の所産である可能性が高い。

SC21（第28・30図）

D2区で検出しており、SC49・50・75を切る。長軸1.85 m、短軸1.4 mの不整形を呈する。検出面からの深さは40cm程となる。埋土は単一層で基本土層のⅢ層に似る。

遺物は大量に出土している。198～217が出土した遺物である。198は型紙摺の端反碗で明治期か。199は瀬戸・美濃系の小杯で染色体様の双喜文を描く。幕末～明治期であろう。200・202は型紙摺の小杯。明治期か。201も小杯で文字がみえる。203は白磁の薄手酒杯で、上絵付けされる。近世の所産か。204は白磁の猪口。205～207は磁器皿。205は蛇ノ目釉剥ぎされアルミナが塗布される。SH1出土片と接合した。内面に鮮やかなコバルトで染付けされる。207は型押しの角皿である。208は型紙摺の端反碗蓋。209・210は釉下彩磁器の蓋。212は寛永通寶。213は天草陶石製の砥石で、側面に「酒・・・」の文字が線刻される。214・215は薩摩焼苗代川系の土瓶。215はいわゆる山茶家と呼ばれる形態を呈する。216・217は薩摩焼土瓶の蓋。

以上の出土遺物からは、明治以降、近代の様相が窺える。遺構自体もこの時期の所産と考えられる。

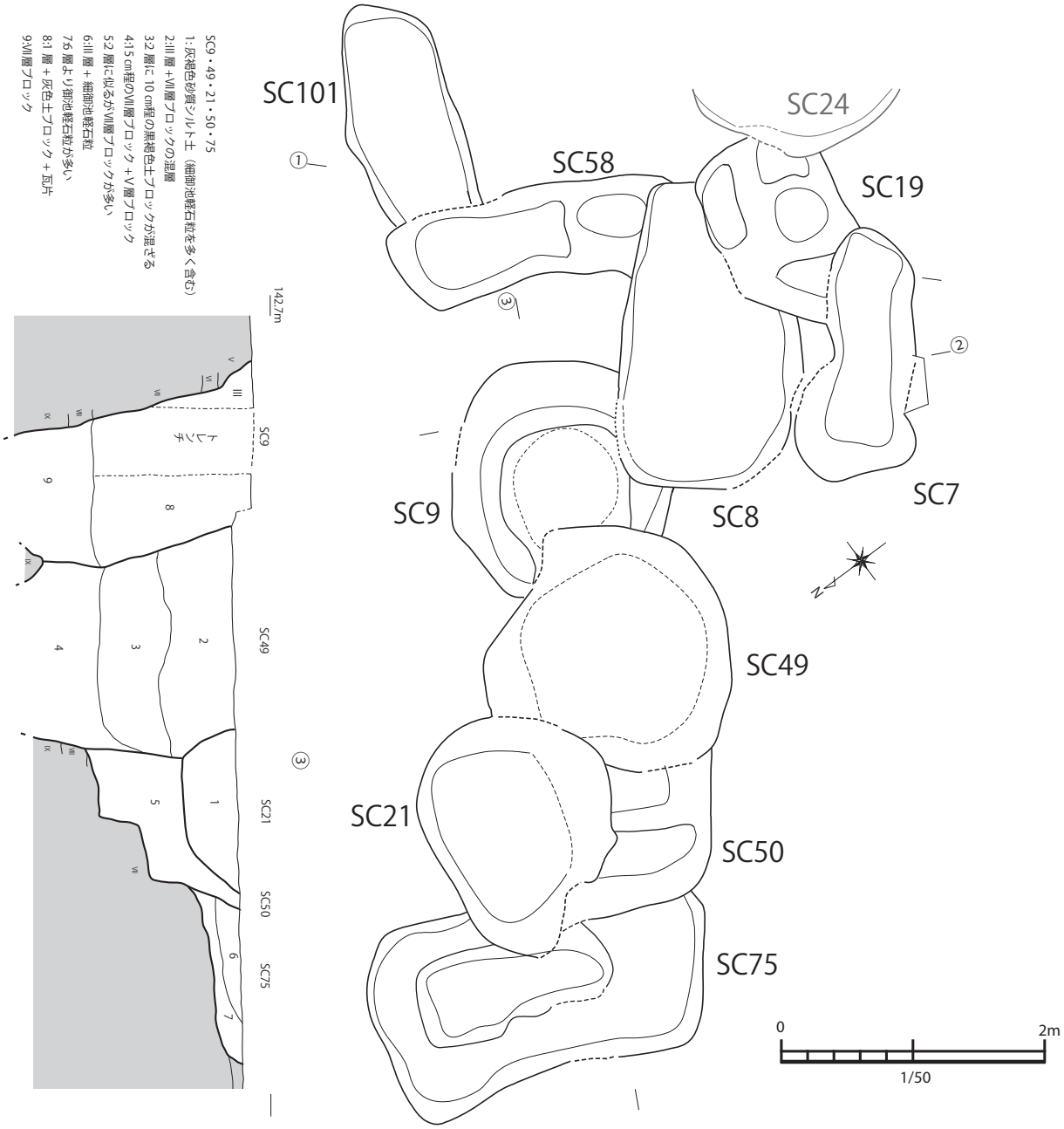
SC49（第28・31図）

D2区で検出されている。SC9とSC50を切り、SC21に切られる。平面プランは長軸2.05 m、短軸1.9 mの不整円形を測り、検出面から1.6 m程まで掘り下げたが底はみえず、湧水がある。平面プランと遺構の深さからは井戸跡の可能性がある。

埋土内からは218が出土した。染付の鉢で、薩摩磁器であろうか。18世紀末の所産と考えられる。

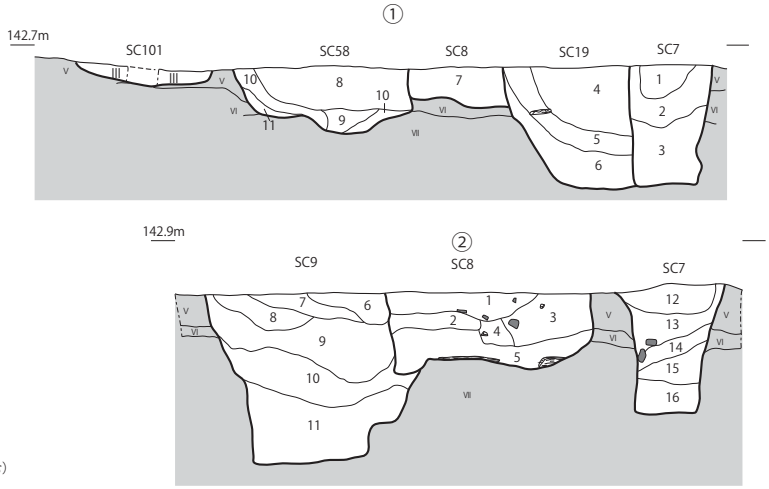
出土遺物が少なく帰属磁器の推定は難しいが、他遺構との切り合い関係からは、近代の所産である可能性が高い。

SC50（第28・31図）



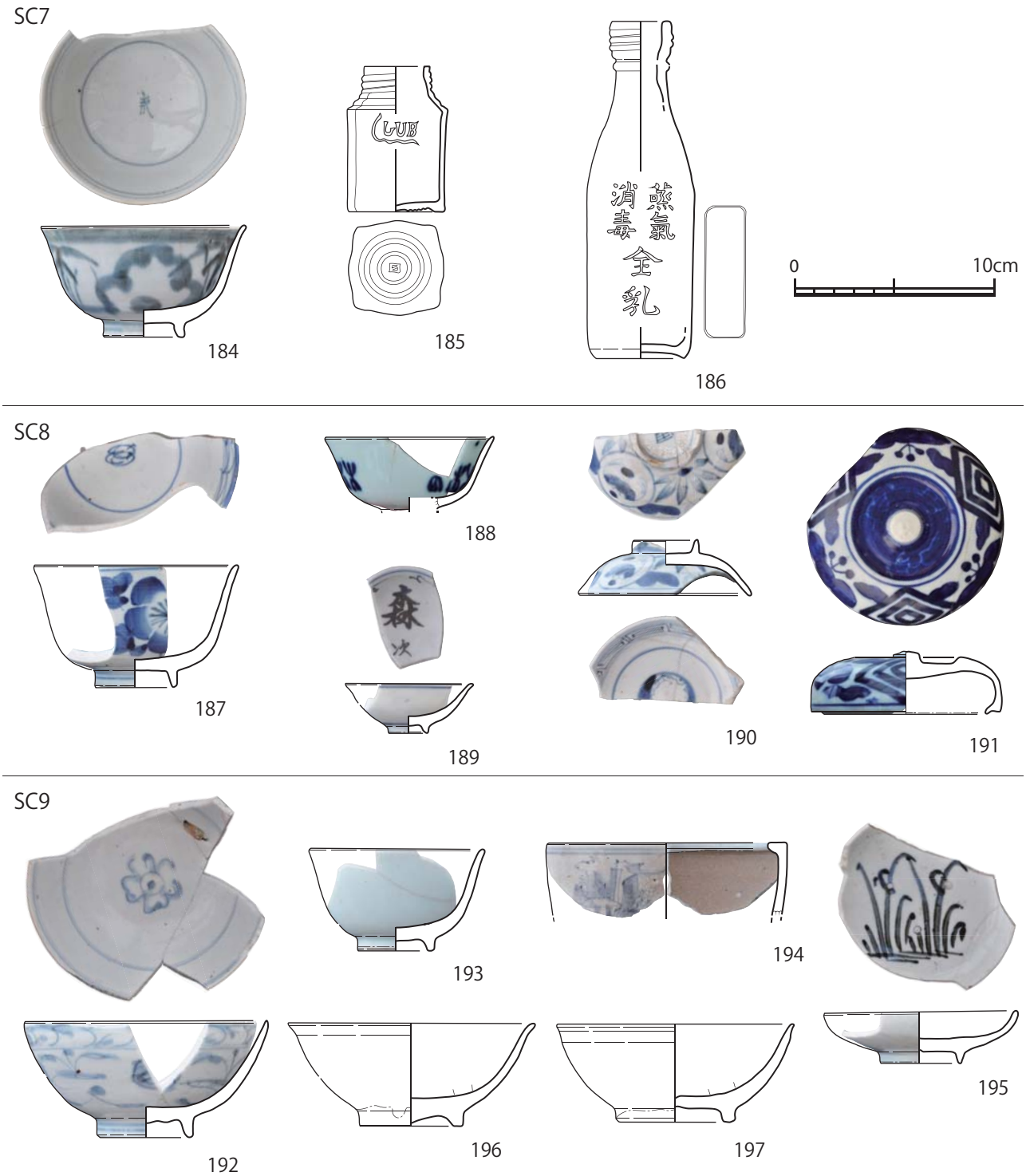
SC101・58・8・19・7
1: 灰黄褐色砂質シルト土 + 灰白色粘土ブロック
2: 灰黄褐色砂質シルト土
（黒色土ブロック・御池軽石を多く含む）
3:2 層 + 灰白色軽石粒
4: 灰黄褐色砂質シルト土（御池軽石を多く含む）
5: 黒褐色粘質シルト土
6: 黒褐色粘質シルト土（灰白色軽石を多く含む）
7: 灰黄褐色砂質シルト土（焼土ブロックまばらに含む）
8: 灰黄褐色砂質シルト土（炭化物をまばらに含む）
9: 灰黄褐色粘質シルト土（灰白色軽石を多く含む）
10: 灰黄褐色粘質シルト土（御池軽石を多く含む）
11: 黒褐色粘質シルト土（細御池軽石粒を多く含む）

SC9・8・7
1: 灰黄褐色砂質シルト土（灰白色軽石を多く含む）
2: 灰黄褐色砂質シルト土（鉄分を多く含む）
3: 灰黄褐色砂質シルト土（小礫を多く含む）
4: 灰黄褐色砂質シルト土（焼土ブロックをまばらに含む）
5: 黒褐色粘質シルト土（鉄分を多く含む）
6: 灰黄褐色砂質シルト土（灰白色軽石を多く含む）
7: 灰黄褐色砂質シルト土（灰白色軽石をまばらに含む）
8: 灰黄褐色砂質シルト土（灰白色軽石をまばらに含む）



9: 灰黄褐色砂質シルト土
10: 灰黄褐色砂質シルト土（鉄分をまばらに含む）
11: 黒褐色粘質シルト土（灰白色軽石ブロックを含む）
12: 灰黄褐色砂質シルト土 + 灰白色粘土ブロック
13: 灰黄褐色砂質シルト土（灰白色軽石を多く含む）
14:13 層 + 黒色土ブロック
15:14 層より黒色土ブロックが多い
16:14 層 + 灰白色軽石

第 28 図　SC7 ～ 9・19・21・49・50・58・75・101 実測図（S=1/50）



第 29 図　SC7 ～ 9 出土遺物実測図（S=1/3）

D2 区で検出されており、SC21・49 に切られ、SC75 を切る。遺構のほとんどは重複する遺構に破壊されているが、断面形態は階段状の段差を有す。

219・220 が埋土より出土している。219 はやや寸詰まりの広東碗。肥前系と考えられ、18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産といえる。220 はコバルトで瓢箪があしらわれる。明治以降の所産であろう。

遺構自体も出土遺物や切り合い関係から明治以降、近代の所産と考えられる。

SC58（第 28・31 図）

D2 区で検出されている。SC9 に切られ、SC101 を切る。長軸約 2.2 m、短軸 0.67 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは最深で 44㎝を測る。

遺物は破片が大量に出土している。221・222 は染付碗。221 は二重格子文があしらわれる薩摩磁器である。幕末の所産。222 は肥前系で、輪花を有す。223 は輪花

第 30 図　SC21 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

皿で、内面には楼閣山水文をあしらう。薩摩磁器であろうか。幕末の所産。224・225 は同一個体の可能性がある陶器の大甕である。外面はスイカ様の縞状に釉が掛かる。底部内面には砂が大量に付着する。外面底部付近には屋号と思われる文字が印刻される。この他にも同一個体ないしは同様の資料と思われる小破片が大量に出土している。

このような出土遺物の様相と切り合い関係から、本土坑は幕末から近代の所産であるものと考えられる。

SC75（第 28・51 図）

D2 区で検出しており、SC21 と SC50 に切られる。SC75 を掘り切った時点で SB5 の柱穴である SC83 を検出している。平面形態は長軸 2.65 m、短軸 1.33 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは最深で 30cm 程となる。底面は二段掘りとなる。

埋土からは 419 と 420 が出土している。419 は薩摩焼苗代川系の土瓶で 18 世紀後半以降の所産。420 は銅銭である。表面の錆と剥落が著しく、文字の判読は容易ではないが、文久永寶（1863 年初鋳）であると考えられる。背には波文がみられる。

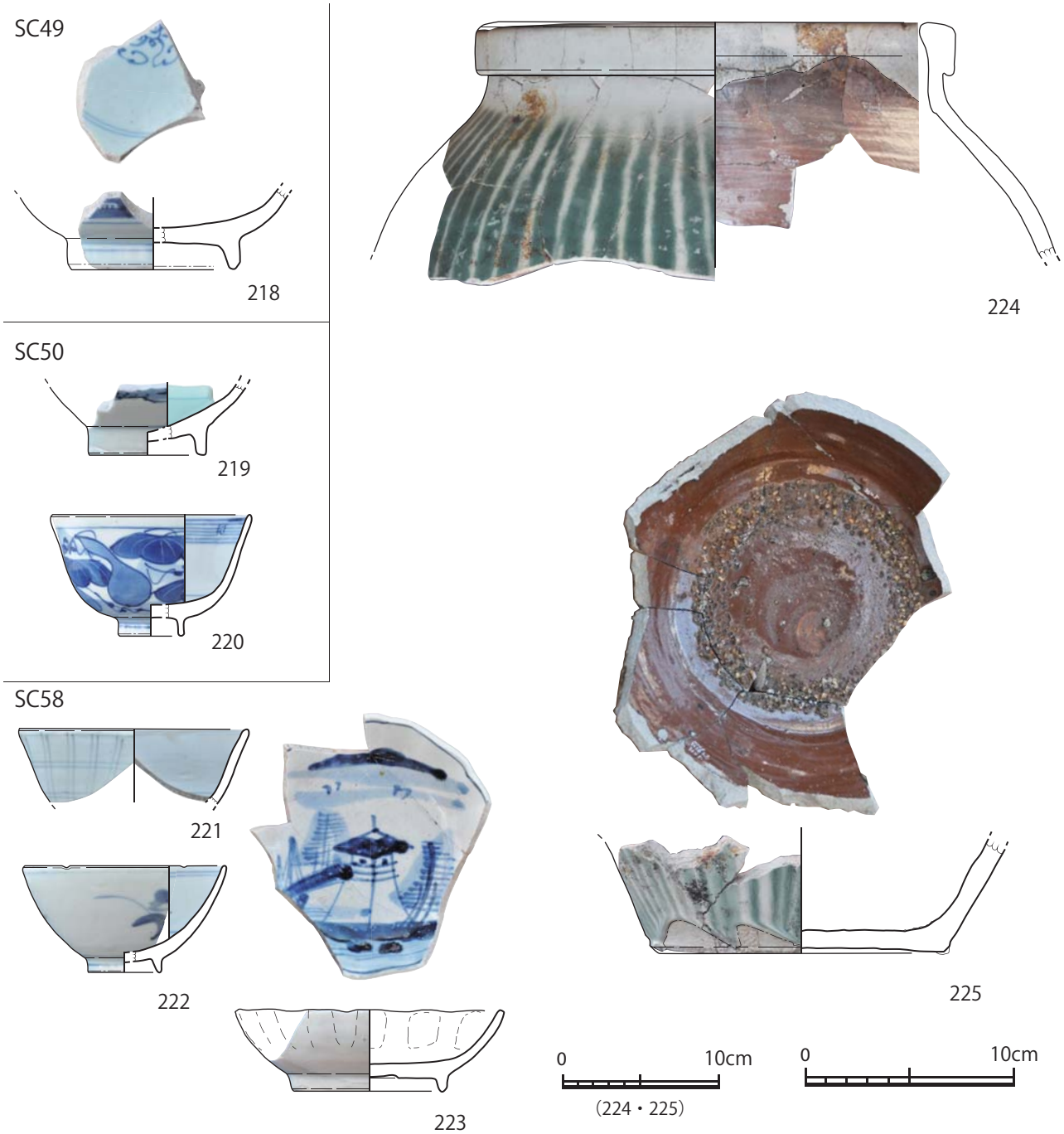
出土遺物は少ないが、遺物の年代観からは 19 世紀後半以降の所産といえる。

SC101（第 28 図）

D2 区で検出しており、SC58 に切られ、P61 を切る。平面形態は長軸 1.7 m以上、短軸 0.85 mの長方形を呈するものと推測される。検出面からの深さは浅く、10㎝を測るのみである。埋土には基本土層のⅢ層が堆積する。遺物は出土していない。

SC10（第 32・33 図）

D・E2 区で検出している。SC22・24 を切り、SH1 に切られる。長軸 1.8 m以上、短軸 1.3 mの不整長方形を呈する。遺構の南側は調査区外に延びていく。底面は南



第 31 図　SC49・50・58 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

側に一段高いテラスを有し、ここに銅版がしかれている。また、北側の一段低い範囲の埋土は全て鉄板を束にしてまとめたものが詰め込まれていた。この鉄束は幅 1㎝、長さ 20 ～ 25㎝程の薄い鉄板が束になってまとめられているものである。何に使用したものなのか不明であるが、これが遺構内に充填されていた。一段上の底面に敷かれていた銅板は避雷針であると考えられる。

226 ～ 241 が埋土内より出土した遺物である。226 は釉下彩磁器の碗で、内外面に菊花文があしらわれ、器面の約半分には黒褐色の釉が掛けられる。227・228 は型紙摺の染付碗で、明治期のものか。229 ～ 232 は小杯である。229・230 は型紙摺、231 は銅版転写である。232 はコバルトを用いた瑠璃釉を器面全体に掛ける。233 は型紙摺の染付輪花皿で、蛇ノ目凹形高台を呈する。234 はコバルトの型紙摺蓋物蓋。235 は小杯の蓋であろうか。クロム釉を掛ける。236 は白磁の糸巻形製品。237 は鮮やかなコバルトを用いた急須。

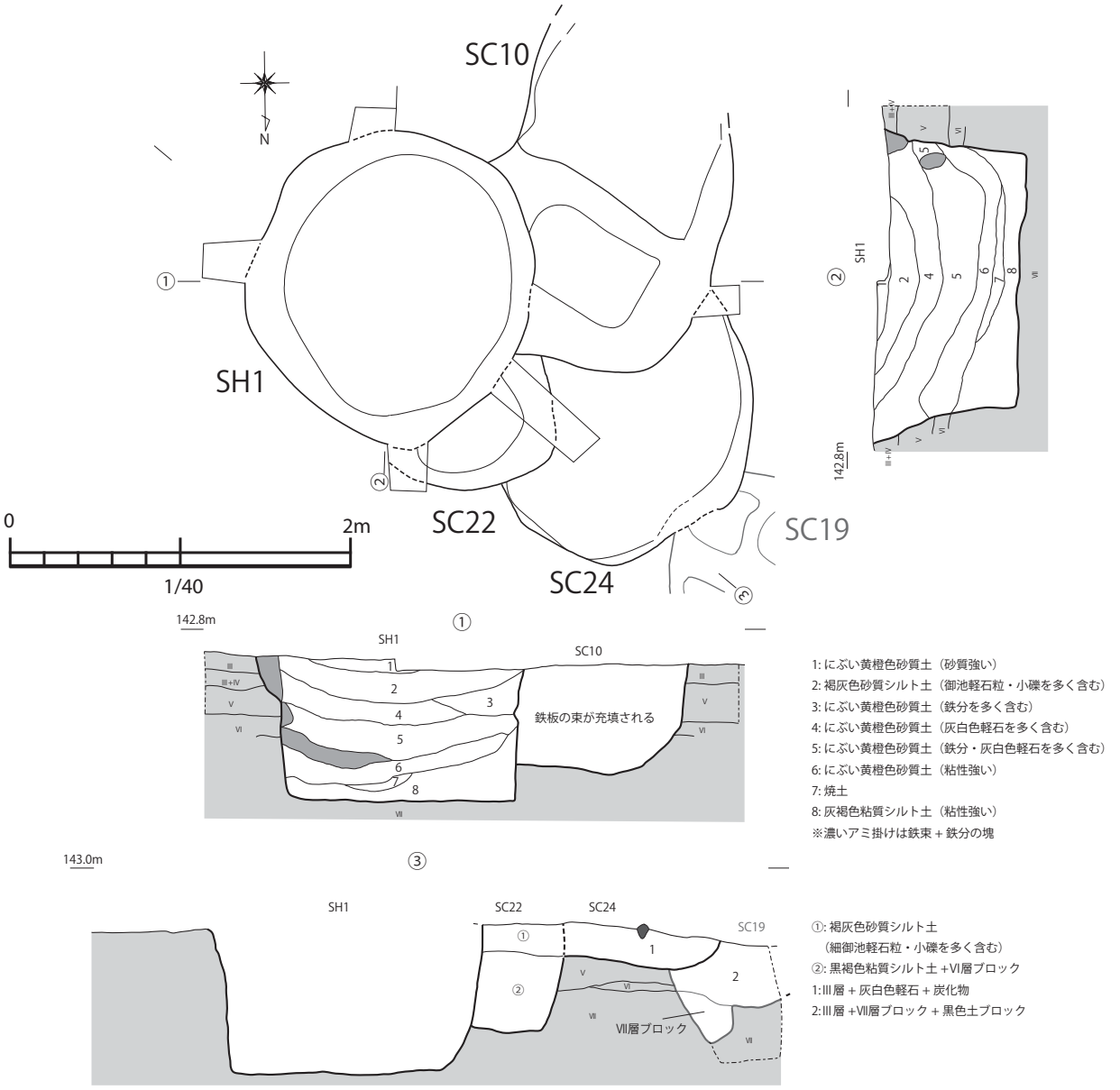
238 は把手部を欠くが、関西系の行平鍋である。近世の所産か。

239 ～ 241 赤間石製の硯である。いずれも墨をためる海部は欠損する。

以上のように、出土遺物の様相からは一部近世に遡る資料が存在するが、概ね明治以降、近代の資料が多いといえる。遺構の廃絶時期もこの頃と考えられる。

SC22（第 32 図）

D2 区で検出しており、SC10 と SH1 に切られ、SC24 を切る。大部分が両者に破壊されるため、全体像は判然としない。検出面からの深さは最深で 64㎝を測り、埋土上層は SC24 の埋土と良く似るため、立ち上がりは不明瞭となる。遺物は染付磁器片がわずかに出土している



第 32 図 SC10・22・24・SH1 実測図（S=1/40）

第 33 図　SC10・24 出土遺物実測図（S=1/3）

が、小破片のため図化し得なかった。

SC24（第 32・33 図）

D2 区で検出されており、SC10・22 に切られ、SC19 を切る。平面形態は切り合いにより破壊されているため判然としない。検出面からの深さは最深でも 20㎝程と浅い。

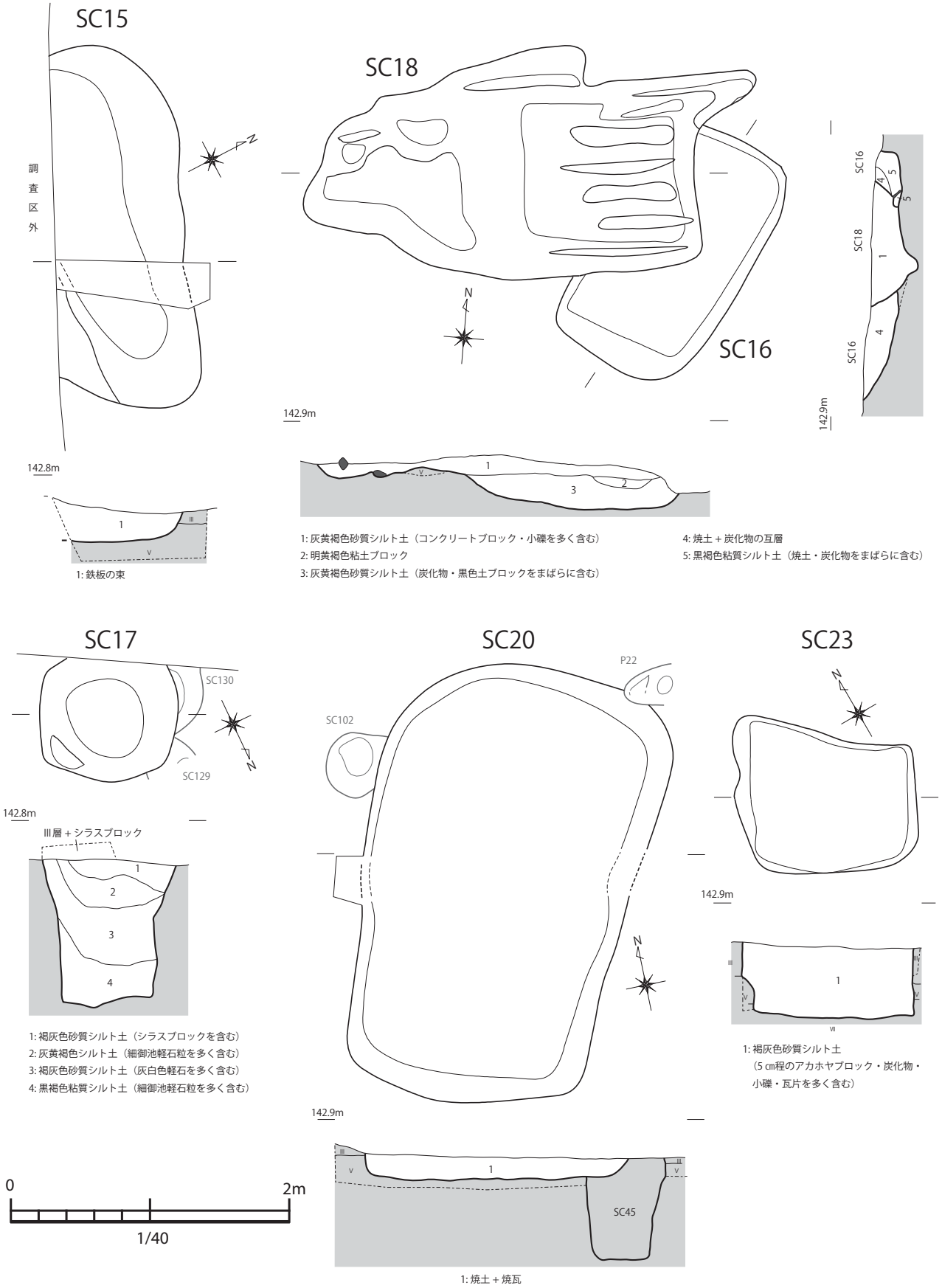
遺物は 242 の犬形土製品が出土している他、染付磁器片が出土しているが図化し得なかった。

SC15（第 34 ～ 36 図）

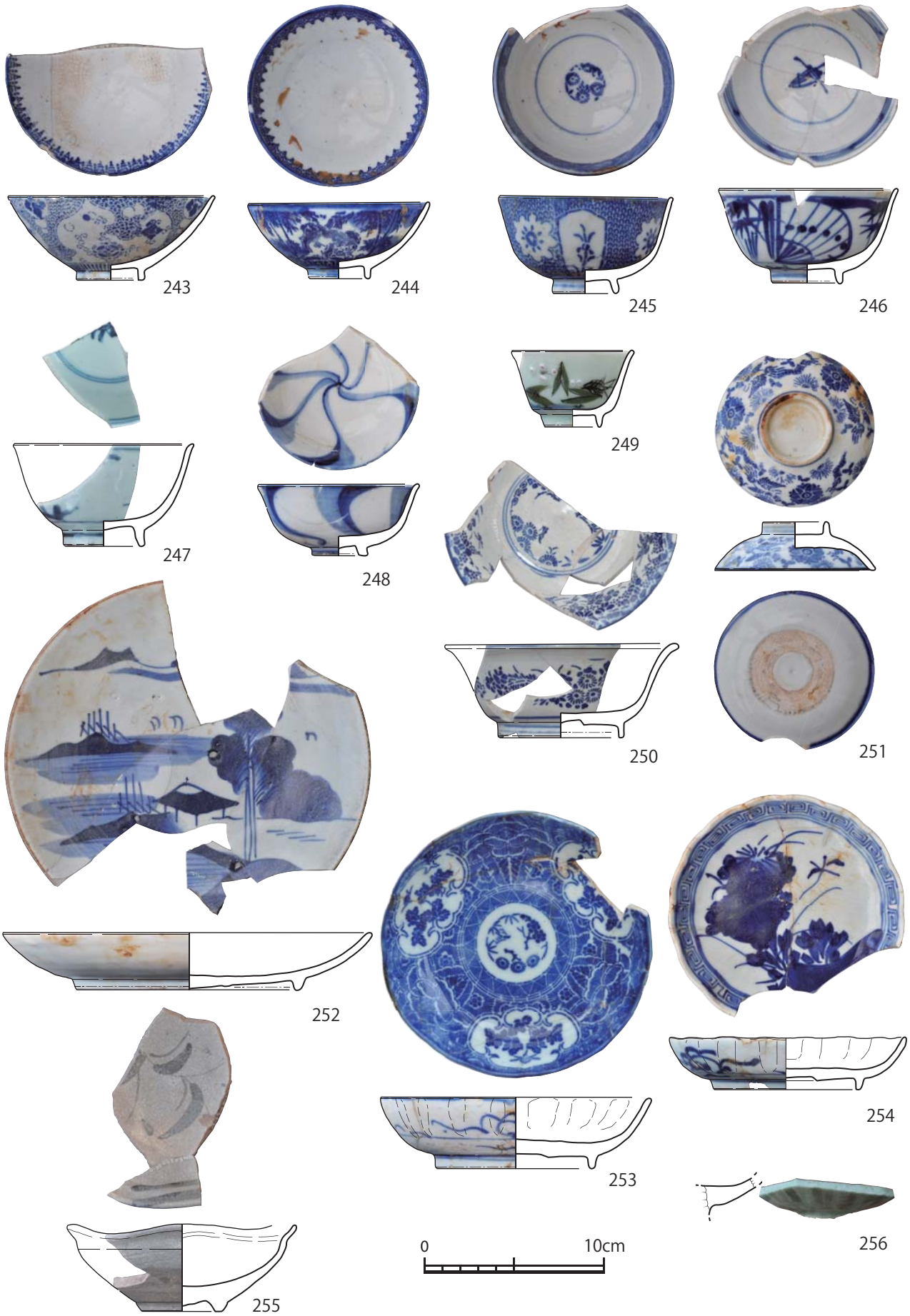
E2・3 区で検出しており、南側は調査区外に延びる。長軸は 2.66 mを測る。検出面からの深さは 30cm 程で、埋土には SC10 同様に鉄板の束が充填される。

遺物は鉄束に挟まれる状態で 243 ～ 259 が出土している。243 ～ 248 は染付碗である。243 ～ 245 は型紙摺によるもので、明治期と考えられる。246 は鮮やかなコバルトにより笹文と扇子があしらわれる。247 は磁器椀で

中国青花であろうか。248 はコバルトでねじ花文を描く。249 は瀬戸・美濃系でクロム釉を掛ける小杯。近代の所産。250 は型紙摺の鉢で、SH1 出土資料と接合している。251 も型紙摺の碗蓋で、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ



第 34 図　SC15 ～ 18・20・23 実測図（S=1/40）



第 35 図　SC15 出土遺物実測図①（S=1/3）

る。252 は肥前系の染付大皿で、内面には楼閣山水文が施される。明治期の所産。253 は型紙摺の輪花皿。蛇ノ目凹形高台を呈する。254 も同様の輪花皿。内面には花文と雷文があしらわれる。

255 は陶器皿。肥前系で内面は鉄絵が描かれ、胎土目の痕跡が残る。1590 ～ 1610 年代。

256 は中世の龍泉窯系青磁Ⅱ類碗である。外面に鎬蓮弁文がみられる。

257･258 は赤間石製の硯。いずれも海部を欠いている。259 は頁岩製の石版片である。

以上のように、出土遺物には中世や近世に遡る資料がわずかにみられるが、大部分は明治期の資料と考えられる。

SC16（第 34・36 図）

C・D3 区、SB2 の内部で検出されている。SC18 に切られる。長軸 1.86 m、短軸 1.06 m程の隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは 20㎝程と浅い。埋土には炭化物や焼土が多く含まれる。

260 が出土遺物である。吹き墨によって樹文が描かれる碗蓋である。近代の所産。

SC17（第 34・36 図）

D1・2 区で検出しており、SC129・130 を切る。遺構の南側は一部調査区外に延びる。平面形態は約 1 mの円形を呈するものと推測される。一部テラスを有す。検出面からの深さは 1.06 mを測り、最下部からは湧水が認められる。

261 ～ 267 が遺構内出土遺物である。261 は肥前系の染付碗で、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ別個体の高台の痕跡が残る。19 世紀頃の所産と考えられる。262 は瀬戸・美濃系の小杯で、外面には染色体様の双喜文があしらわれる。幕末～明治期の所産。263 は染付皿で、SC21 出土資料と接合関係にある。濃いコバルトを用いた明治期の所産であろう。264 はミニチュアの急須蓋。近世以降か。265 は端反碗蓋で、コバルトが滲む。近代の所産。

266 は薩摩焼加治木・姶良系の香炉である。18 世紀後半以降の所産。

267 は三足ハマである。磁器用のものであろうか。

このような出土資料からは、本土坑は幕末～近代の所産である可能性が高い。

SC18（第 34・36 図）

C･D3 区で検出されており､SC16 を切る。長軸約 2.8 m、短軸 1.36 mの不整形を呈する。埋土が締まっていたため、近代以前の遺構と考えたが、完掘すると重機の爪痕が確認されたため、ごく最近現代のものである可能性が高い。

遺物は 268・269 が出土している。268 は肥前系の染付皿と考えられ､19 世紀代～幕末頃の所産と推測される。269 は釉下彩磁器の碗蓋で、柿が描かれる。

SC20（第 34・36 図）

D1 区で検出しており、SC39・102 を切る。P22 に切られ､完掘後に底面において SC45 や 46 を検出している。長軸 3.18 m、短軸 1.95 mの隅丸方形を呈し、遺構の深さは最深部でも 17㎝を測るのみである。埋土には焼土と瓦片が大量に混ざっていた。

270 ～ 273 が埋土より出土した遺物である。270 は瀬戸・美濃系の小杯。幕末～明治期の所産。271 は端反碗で、近代の所産であろう。272 は肥前系の八角鉢である。19 世紀頃の所産であろうか。273 は染付の湯飲み碗。肥前系で 19 世紀中頃～幕末の所産であろう。被熱する。

上述のように、遺構の埋土に大量の瓦と焼土が混ざっていることや、磁器の中に被熱するものがあることから、火事後の処理に伴う廃棄土坑の可能性が考えられる。遺物の年代からは、幕末～明治期であると考えられる。

SC23（第 34・36 図）

E3 杭周辺で検出している。長軸 1.3 m、短軸 0.92 m を測る不整四角形で､検出面からの深さは 50㎝程となる。埋土には炭化物や小礫、瓦片が多く含まれる。遺構の底面には地震のためか亀裂が入り、段差が生じている。

274 は昭和 40 年製の五円玉である。

SC25（第 37・38 図）

B2 区で検出している。長軸最大 2.9 m、短軸約 2.5 m の不整形を呈する。検出面からの深さは最深部で 33cm を測る。遺構の西側は底面に向けて緩やかに傾斜する。一部に後世の石塀に使われたと考えられる凝灰岩片がはまり込む。SC26 と SC27 に切られる。

275 ～ 282 が埋土中から出土している。275 は肥前系の染付筒形碗である。18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産。276 も肥前系の丸碗で、近世の所産といえる。277 は青磁の香炉。278 は薩摩焼加治木・姶良系の秉燭である。279・280 は薩摩焼龍門司系の薩摩焼皿である。両者共に灰黄色釉の後に白土掛けされ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。高台内は無釉。18 世紀後半の所産。281・282 は寛永通寶。いずれも新寛永である。

以上のような出土遺物の年代観からは、本土坑は 18 世紀後半以降､19 世紀初頭頃の所産である可能性が高い。

SC26（第 37・38 図）

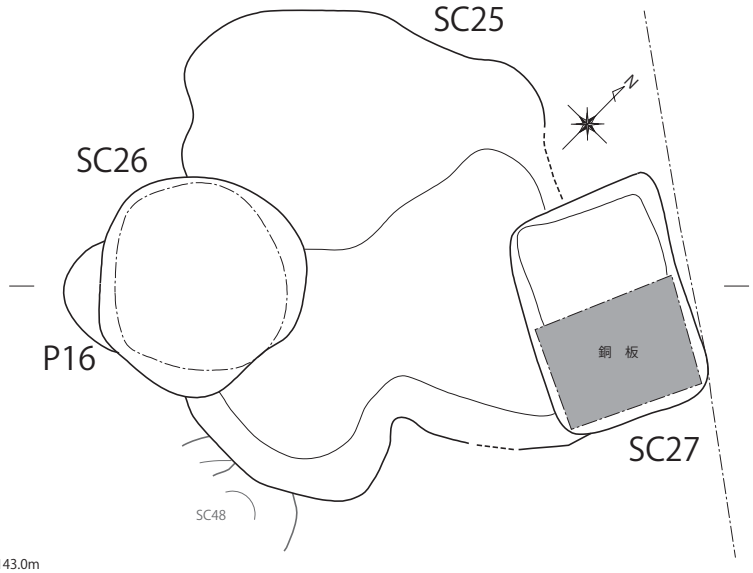
B2 区で検出されており、SC25 と P16 を切る。平面形態は径 1.1 m程の不整円形を呈する。検出面からの深さは最深で 1.86 mを測る。最深部は礫層となり、湧水のため掘り形がオーバーハングする。平面形態と遺構の深度からは井戸跡である可能性が考えられる。

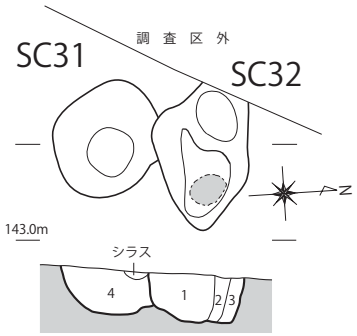
遺構内からは 283 の黄橙色を呈し、研磨された碁石と考えられる資料が出土している。これ以外に帰属時期が分かるような遺物は出土していない。

SC27（第 37・38 図）

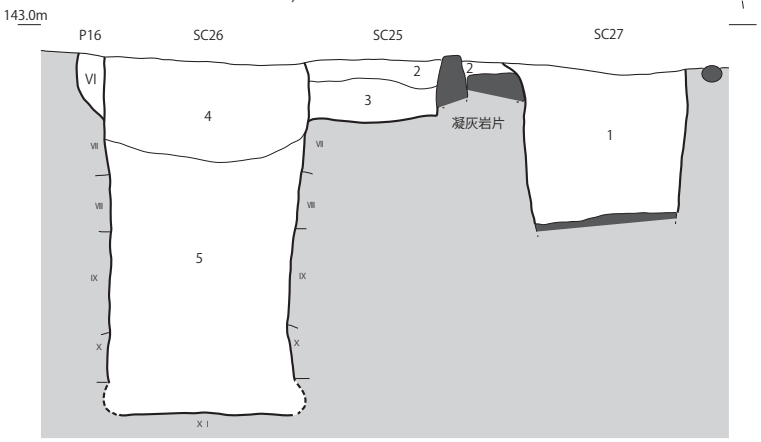
B2 区で検出しており、長軸 1.2 m、短軸 0.84 m、深さ 80cm 程を測る隅丸長方形の土坑である。SC25 を切る。

第 36 図　SC15②～ 18・20・23 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

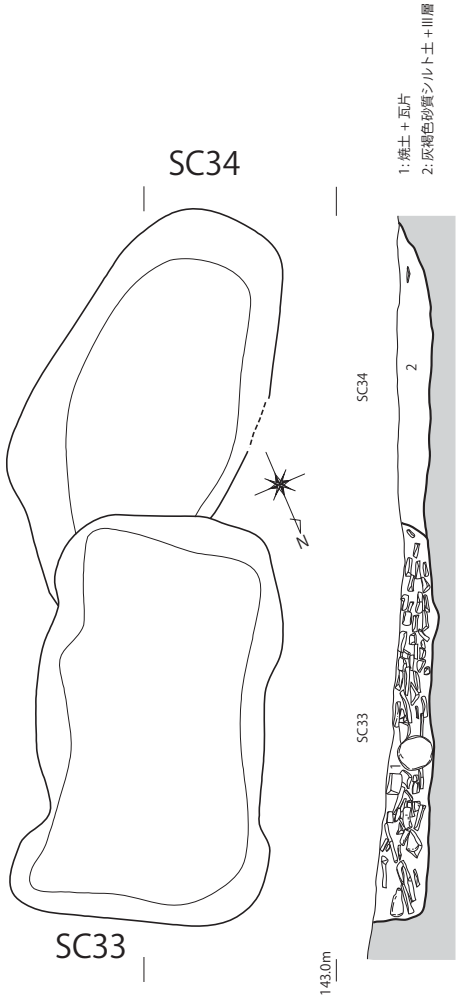




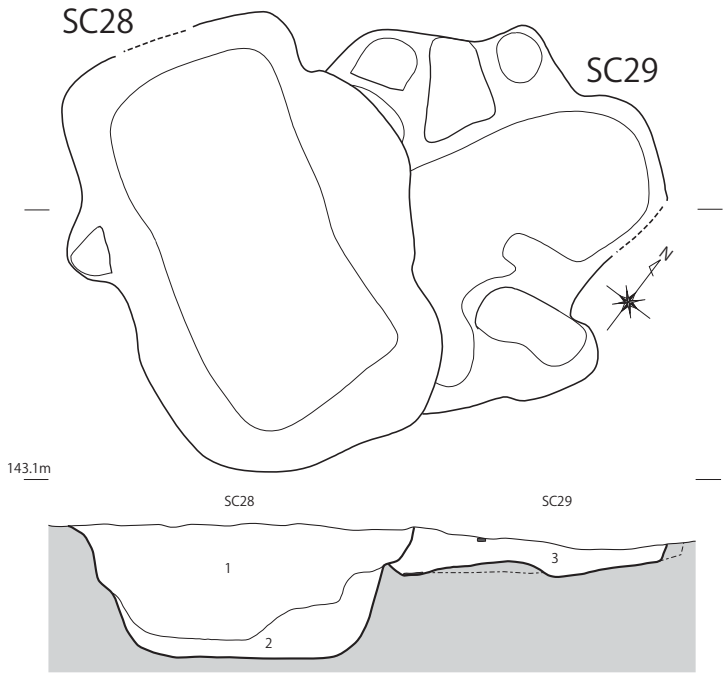
1: 褐灰色粘質シルト土（黄褐色粘土ブロック・御池軽石粒を多く含む）
2:Ⅶ層ブロック
3: 黒褐色粘質シルト土（Ⅶ層ブロックをまばらに含む）
4: 褐灰色砂質シルト土（灰白色軽石を含む）



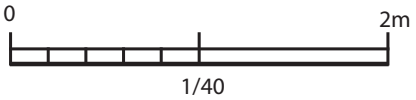
1: 褐灰色土ブロック +Ⅶ層ブロック + アカホヤブロック
2: 灰黄褐色粘土（焼土ブロックを含む）
3:2 層 + 橙色軽石
4: 灰黄褐色砂質シルト土（細御池軽石粒と瓦片を多く含む）
5:4 層 + 灰色粘土ブロック + アカホヤブロック



1: 焼土 + 瓦片
2: 灰褐色砂質シルト土 +Ⅲ層



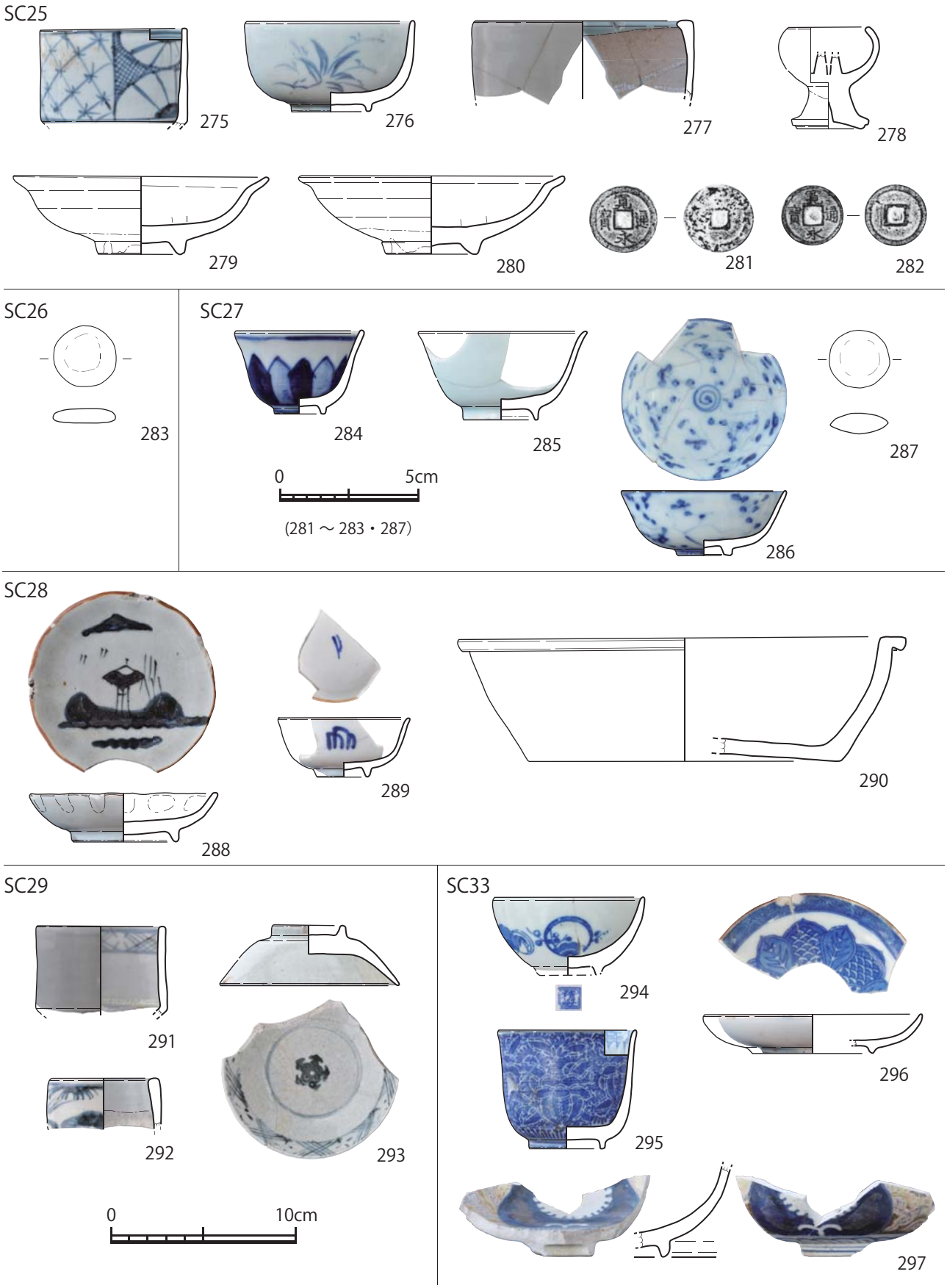
1: 黒褐色砂質シルト土（2cm 程の御池軽石粒を多く含む）
2: 褐灰色砂質シルト土
3: 褐灰色砂質シルト土（3cm 程の御池軽石ブロックをまばらに含む）



第 37 図　SC25 ～ 29・31 ～ 34・P16 実測図（S=1/40）

底面の約半分には薄い銅板が敷かれる。避雷針であるものと考えられる。

遺物は 284 ～ 287 が出土している。284 は濃いコバルトを用いた染付小杯である。近代の所産であろう。285



第 38 図　SC25 ～ 29・33①出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

は白磁の薩摩磁器碗である。幕末頃の所産。286 は染付碗。コバルトを用いていることから近代の所産と考えられる。287 は磁器の碁石。白色を呈する。

出土遺物からは、幕末以降、近代の所産であると考えられる。

SC28（第 37・38 図）

B2 区で検出しており、長軸 2.4 m、短軸 1.83 m、深さ約 70cm の隅丸長方形を呈する。SC29 を切る。遺構の断面形態は逆台形を呈する。南西側の長辺には径 30cm 程の窪みが取り付く。

288 ～ 290 が出土遺物である。288 は簡略化された楼閣山水文を配する輪花皿。口唇部は口錆を施す。近代の所産か。289 は瀬戸・美濃系の小杯で、SC100 出土資料と接合した。幕末～明治の所産と考えられる。290 は薩摩焼苗代川系と考えられる鉢で、SC135 出土資料と接合している。

以上の出土遺物からは、明治以降、近代の所産である可能性が高い。

SC29（第 37・38 図）

B2 区で検出しており、SC28 に切られる。大部分が SC28 によって破壊されているため、全体像は判然としない。底面もフラットでなく、テラス状の段差がいくつもみられる。検出面からの深さは最深で 24cm 程である。

291 ～ 293 が出土遺物である。291 は肥前系青磁染付の筒形碗で、18 世紀後半の所産と考えられる。292 も肥前系の染付香炉で、近世の所産。293 は青磁染付の碗蓋で、内面中央にはコンニャク印判による五弁花があしらわれる。やはり 18 世紀後半の所産。

本土坑は、用途等は不明であるが、出土遺物からは 18 世紀後半以降の近世の所産であるものと推測される。

SC31（第 37 図）

B2 区で検出されている。径約 0.6 m程の不整円形を呈し、検出面からの深さは最深で 24cm を測る。SC32 に切られる。

遺物は出土していない。

SC32（第 37 図）

B2 区で検出している。SC31 を切る。遺構の西側は調査区外に延びる。長軸 0.74 m以上、短軸 0.55 m程の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは 26cm 程である。遺構底面の東側テラスには柱のあたりと考えられる硬化面が認められる。本来は柱穴であった可能性が高い。

SC33（第 37 ～ 39 図）

C1・2 区で検出しており、SB4SC52 や P9、SC34・43・P3 など多くの遺構を切っている。長軸 2.15 m、短軸 1.2 mの不整長方形を呈し、検出面からの深さは最深で 25cm 程を測る。埋土には大量の瓦片と焼土が含まれていた。

294 ～ 301 が遺構内より出土した遺物である。294 は銅版転写の染付碗。近代の所産である。295 は型紙摺の湯飲み碗で、明治期か。296 は銅版転写の皿で近代の所産。297 は肥前系の色絵磁器皿である。SB4P6 出土資料と接合している。これも近代の所産であろう。

298 は薩摩焼苗代川系の甕で、SC34 と SC108 から出土した破片と接合関係にある。近代の所産。299 も薩摩焼苗代川系の甕で口縁部が肥厚し、刻目が付される。肩部には花文がみられる。やはり近代の所産。300・301 は薩摩焼苗代川系の植木鉢で、明治以降の所産である。

以上の出土遺物からは、本土坑は明治以降、近代の所産と考えられる。

SC34（第 37・39 図）

C1 区で検出しており、SC33 に切られ、P1・2・10 を切る。遺構の北東隅を SC33 に破壊されるため、全体像は不明である。しかし、長軸 2.2 m以上、短軸 1.15 m の楕円形を呈するものと推測される。深さは最深部でも 18cm 程と浅い。

遺構内からは 302 ～ 304 が出土した。302 は薩摩磁器の染付碗で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。19 世紀代の所産。303 は京・信楽系の陶器碗で、19 世紀代の所産。304 は薩摩磁器の筒形碗で、雪持笹文が配される。18 世紀末～ 19 世紀初頭の資料といえる。

これらの出土遺物からは、本土坑は 19 世紀代の所産であるものと推測される。

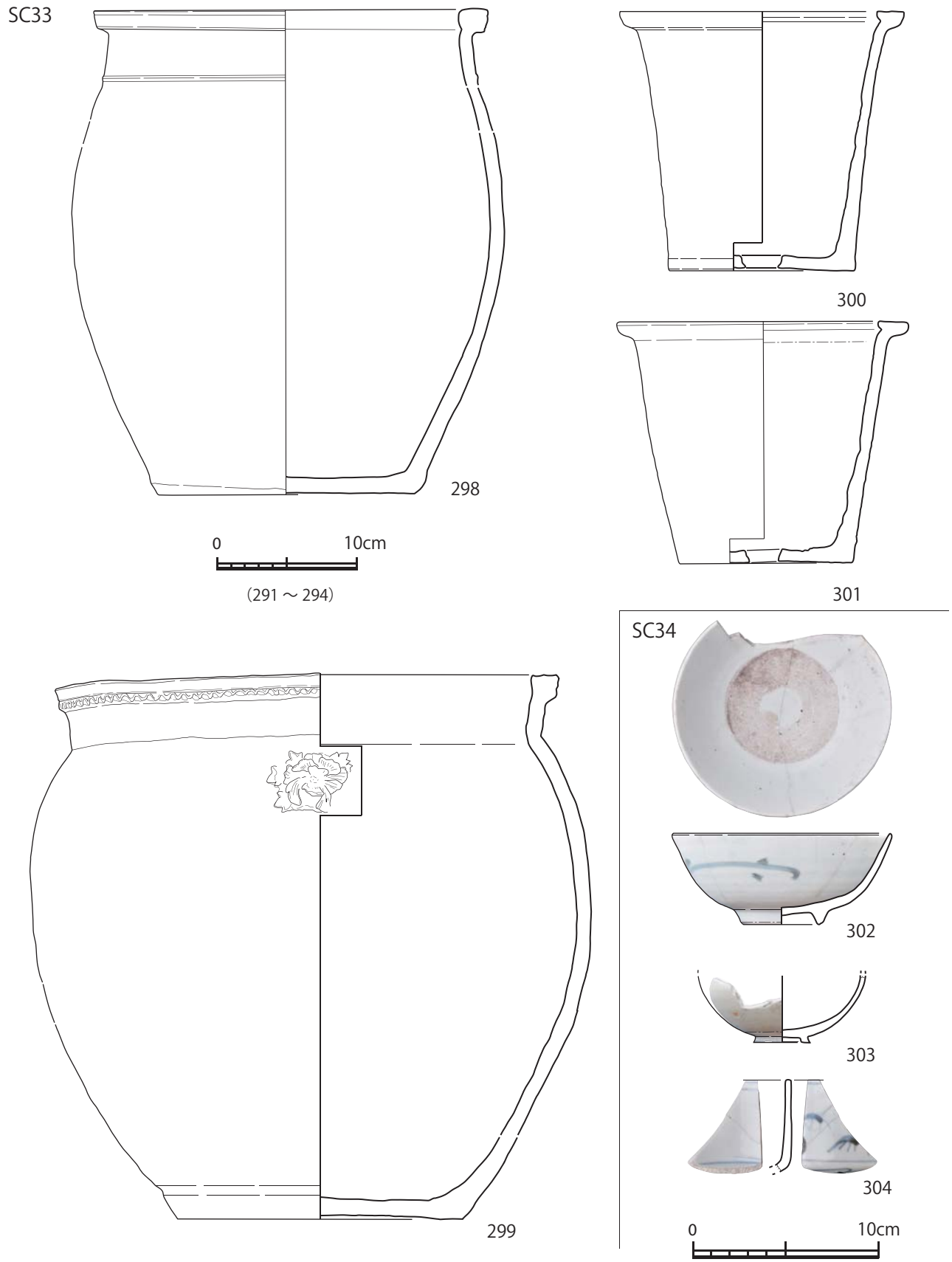
SC30（第 40・41 図）

B2 区で検出しており、SC35 に切られ、SC80 を切る。長軸 2.52 m、短軸 1.82 mの長方形を呈する。検出面からの深さは最深で 1.05 mを測る。北東側長辺を除く三辺に足場あるいは階段状の窪みが付随する。底面は中央がやや窪んで低くなる。遺構の断面形態は長方形で、掘り形壁はほぼ垂直となる。このように、遺構の壁面が垂直に近く、足をかけるような窪みや段差があることから、地下室として使用されていた遺構である可能性が考えられる。

出土遺物は 305 ～ 312 である。305 は染付碗で、近代の所産か。306 は白磁碗。307 は青磁染付碗で口縁部に輪花を有す。18 世紀後半の所産。308 は白磁碗である。

309 は薩摩焼竪野系のぐい飲みである。いわゆる白薩摩で、近代の所産であろうか。310 は寛永通寶。311 は薩摩焼苗代川系の鉢で、18 世紀代。312 も薩摩焼苗代川系の擂鉢で、やはり 18 世紀代の所産と考えられる。

このように、出土遺物の中には近代のものと考えられ

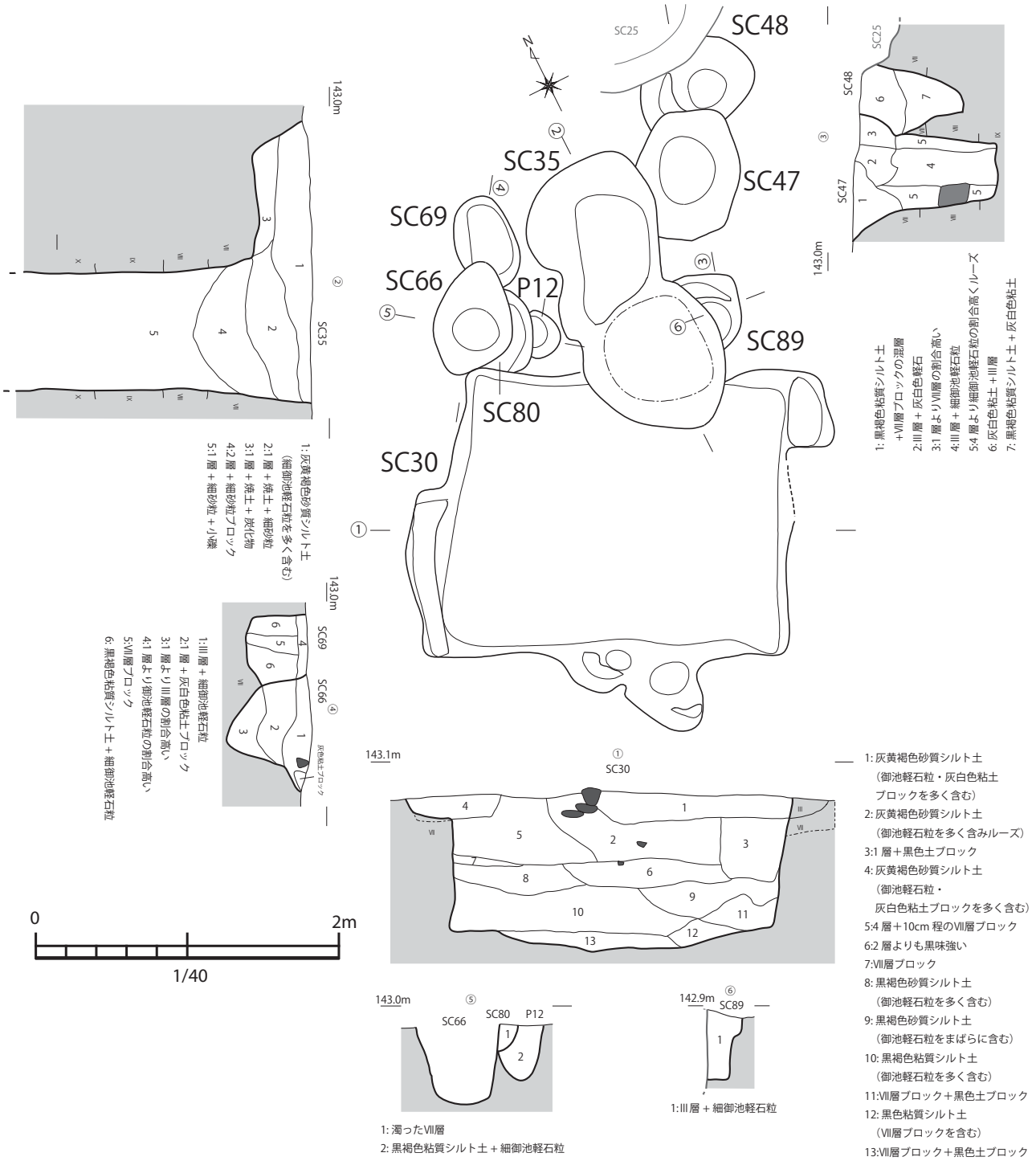


第 39 図　SC33②・34 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

る資料もあるが、遺構の形態等からは近世の地下室であった可能性が高いといえる。

SC35（第 40・42・43 図）

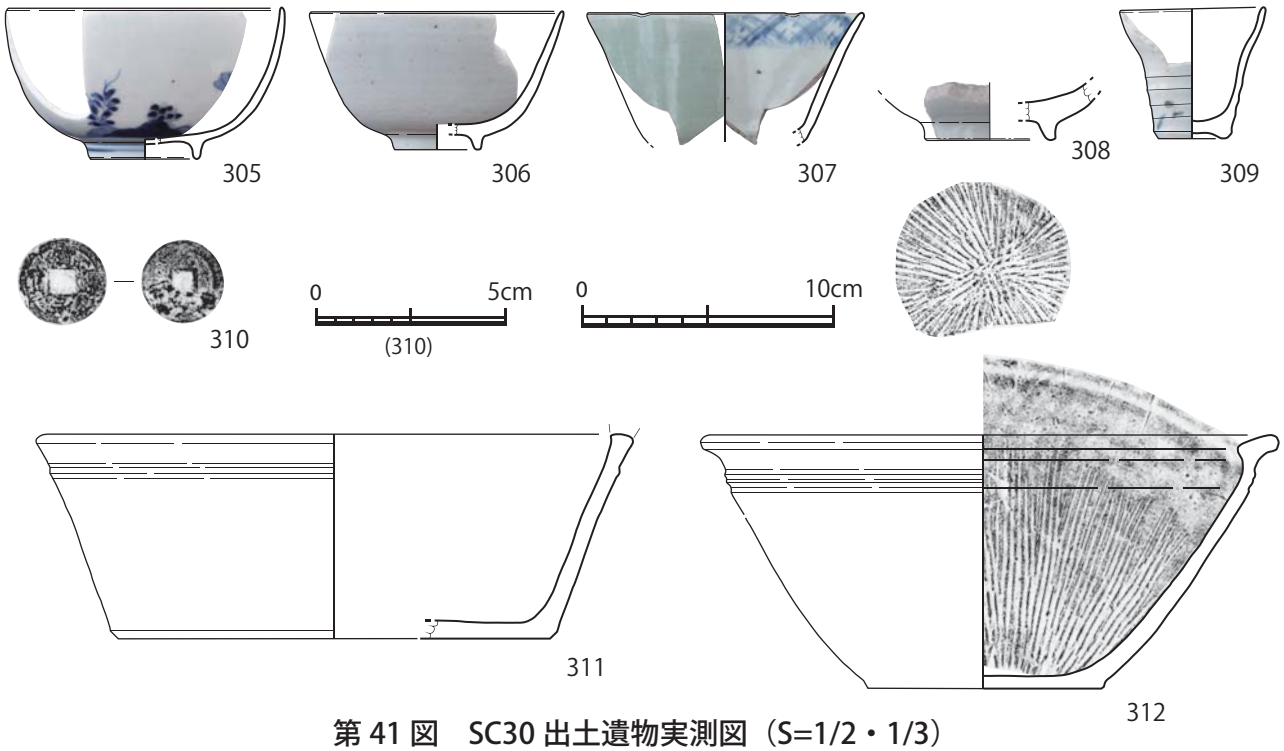
B2 区で検出しており、SC30・47・89 を切る。平面形態は長軸 1.92 m、短軸 0.92 mの瓢箪状を呈する。断面を観察すると、北側に低いテラスをもち、南側が井戸



第 40 図　SC30・35・47・48・66・69・80・89・P12 実測図（S=1/40）

状の深い遺構であることが分かる。北側のテラス部とは別遺構の切り合い関係であることも考えたが、断面の精査からは同一遺構であると判断した。南側の深い範囲は 2 m近く掘り下げたがまだ底は見えておらず、湧水が認められた。やはり井戸として使用された遺構である可能性が高い。

遺物は大量に出土している。313・314 は染付の端反碗で、313 は帆かけ舟が配される肥前系染付で、幕末頃の所産であろう。314 は葡萄文が描かれる資料で、薩摩磁器と考えられる。19 世紀中頃～幕末の所産。315 は肥前系染付碗で見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる。19 世紀代の所産。316 は近代と考えられる小碗。317 は瀬戸・美濃系の小杯で、幕末～明治期か。318 も近代の染付小杯。319 は酒杯で、上絵がなされる。「都大佛」の文字がみえる。320 は白磁そば猪口。321 ～ 323 は白磁の猪口である。324 は輪花皿で、蛇ノ目凹形高台を呈する。近代の所産。325 は白磁寿字文打込皿で瀬戸・美濃系。幕末～明治頃の所産であろう。326 は肥前系の染付皿。高台内



第 41 図　SC30 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

には「太明」銘がみえる。18 世紀後半の所産。327 も肥前系の大皿である。19 世紀の所産。328 は端反碗蓋で薩摩磁器。19 世紀中頃～幕末の所産。329 は染付徳利で、19 世紀頃。330 は染付壺で近世。331 は肥前系の染付香炉で 18 世紀後半～ 19 世紀代。332 は染付の蓮華である。近代であろうか。333 は白磁の仏花瓶。

334 ～ 341・344 は薩摩焼陶器である。334 は内面にゴマ目がある加治木・姶良系の皿である。18 世紀以降の資料。335 は龍門司系の皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、高台内にも透明釉が掛かる。18 世紀後半の所産。336 は薩摩焼苗代川系の土瓶蓋で、外面には重ね焼きの痕跡が残る。18 世紀後半か。337 は加治木・姶良系の灯明皿台。底部には糸切り痕がみえる。338 は加治木・姶良系の酒器である。近世後半期の所産である。339 は苗代川系の鉢で 19 世紀以降。340・341 はやはり苗代川系の片口鉢で、19 世紀以降の所産といえる。

342 は福岡小石原系の陶器鉢である。口縁部が耳状に内面に折り返される。343 は関西系陶器の灯火具、344 は薩摩焼龍門司系の瓶であろうか。底部に墨書がみえる。

このように、出土遺物は 18 世紀代のものから近代のものまで幅広く出土している。そのため、遺構が完全に埋没したのは近代の頃と推測される。

SC47（第 40 図）

B2 区で検出しており、長軸 0.9 m、短軸 0.67 mの楕円形を呈する。SC35 に切られる。検出面からの深さは最深で 95cm を測る。

遺物は出土していない。

SC48（第 40 図）

B2 区で検出しており、SC25・47 に切られる。そのため全体像は判然としないが、長軸 0.8 mの楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 70cm を測る。

図化できる遺物は出土していない。

SC66（第 40 図）

B2 区で検出しており、SC69・80 を切る。長軸 0.76 m、短軸 0.52 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 56cm を測る。

遺物は出土していない。

SC69（第 40・43 図）

B2 区で検出しており、SC66 に切られる。長軸 0.62 m、短軸 0.38 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 40cm 程である。

345 が出土遺物である。青磁の獣足である。釉調からは中国産と考えられ、中世期の所産と思われるが、これが遺構に伴う遺物かどうかは断定できない。

SC89（第 40・43 図）

B2 区で検出しており、SC35 に切られる。半分以上が SC35 によって破壊されるため、全体像は判然としない。検出面からの深さは最深で 45cm を測る。

346 は白磁紅皿で、19 世紀代の所産と考えられる。

SC36（第 44 図）

B1・2 区で検出しており、SB4SC37 と SC60 を切る。

第 42 図　SC35 出土遺物実測図①（S=1/3）

長軸 1.35 m、短軸 0.72 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 24cm を測る。

図化できる遺物は出土していない。

SC38（第 44・45 図）

B･C2 区で検出している。SC40･145 を切る。径約 1.1 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深で 34cm 程である。

347 ～ 349 が出土遺物である。347 は肥前系の染付蓋物蓋。348 は肥前系の染付碗で、高台内が露胎となる。17 世紀中頃の資料といえる。349 は薩摩焼苗代川系の土瓶。SC115 出土片と接合した。

SC39（第 44・45 図）

D1 区で検出している。遺構の南側は調査区外に延びる。SC13・20 に切られ、P21 を切る。全体像は判然としない。底面はフラットでなく、凹凸が著しい。

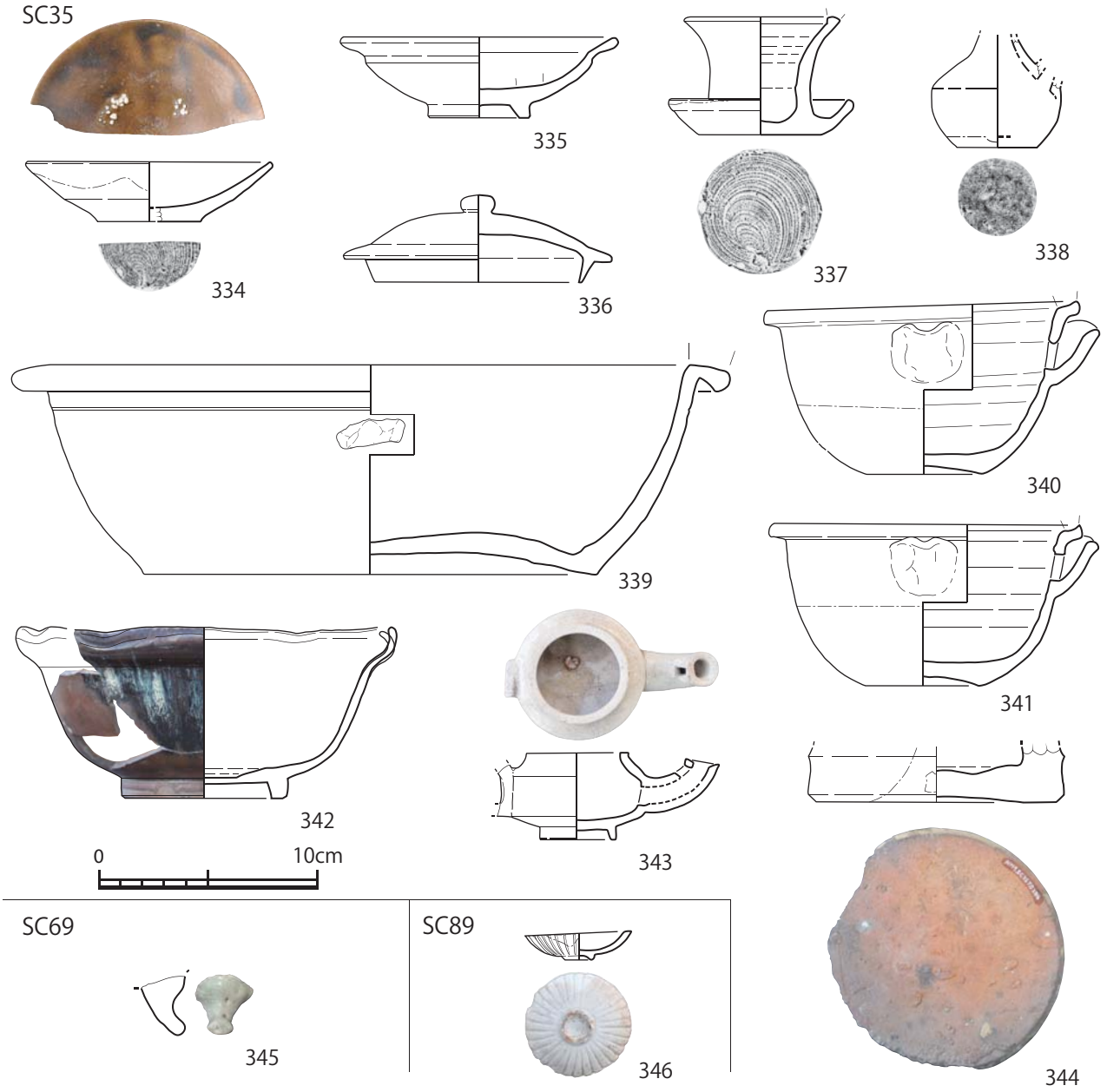
350 と 351 が出土した。350 は薩摩磁器の広東碗蓋で、18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産といえる。351 は紅皿で、内面と外面口縁部付近のみに釉が掛かる。19 世紀代であろうか。

出土遺物が少ないため、断定はできないが、切り合い関係にある SC20 の出土遺物の年代も勘案すると、19 世紀前半頃の所産としたい。

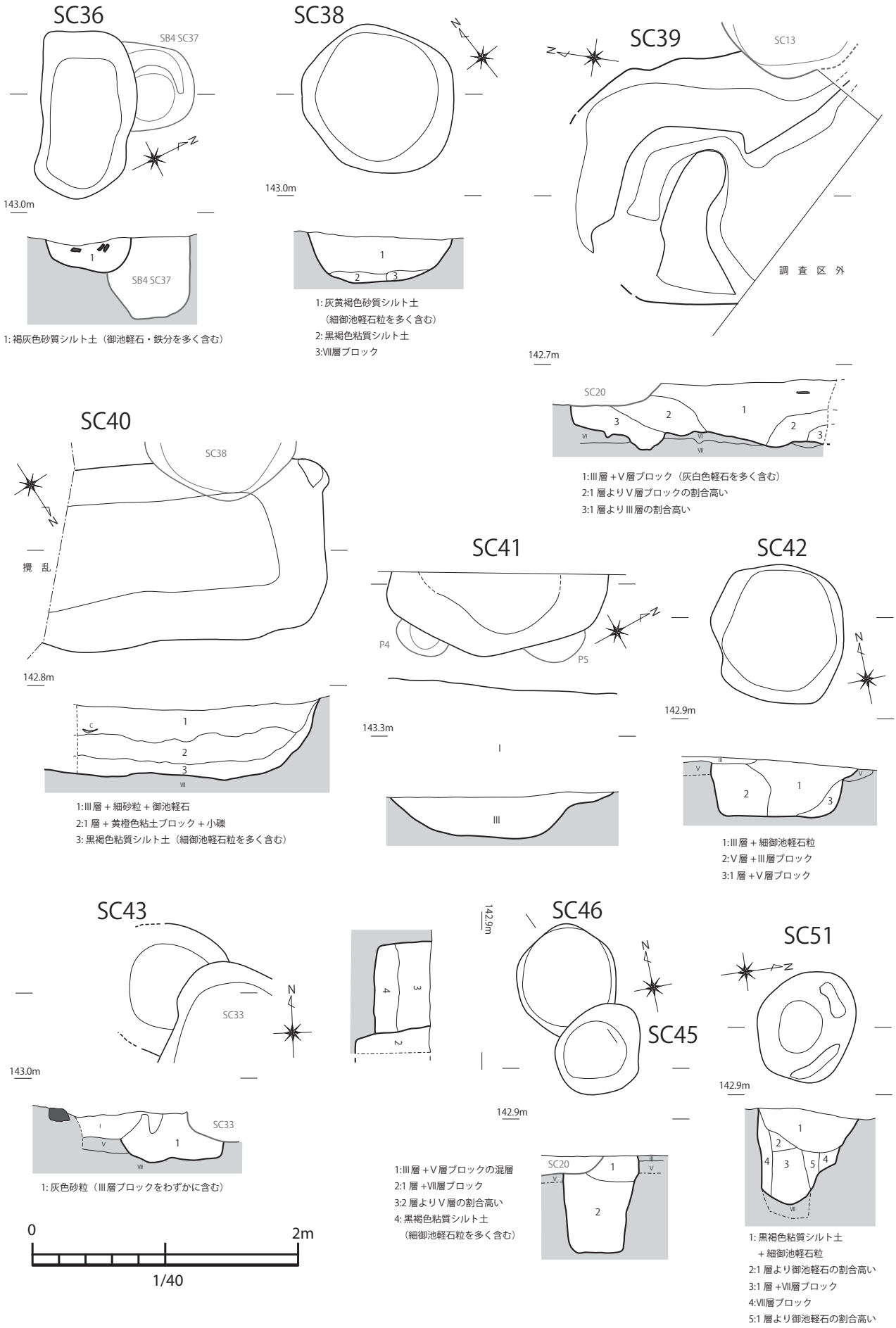
SC40（第 44・45 図）

B･C2 区で検出しており、SC38 と現代の攪乱に切られ、P63 を切る。そのため全体象は判然としないが、長軸 2 m以上、短軸 1.36 mの隅丸長方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 54cm 程である。

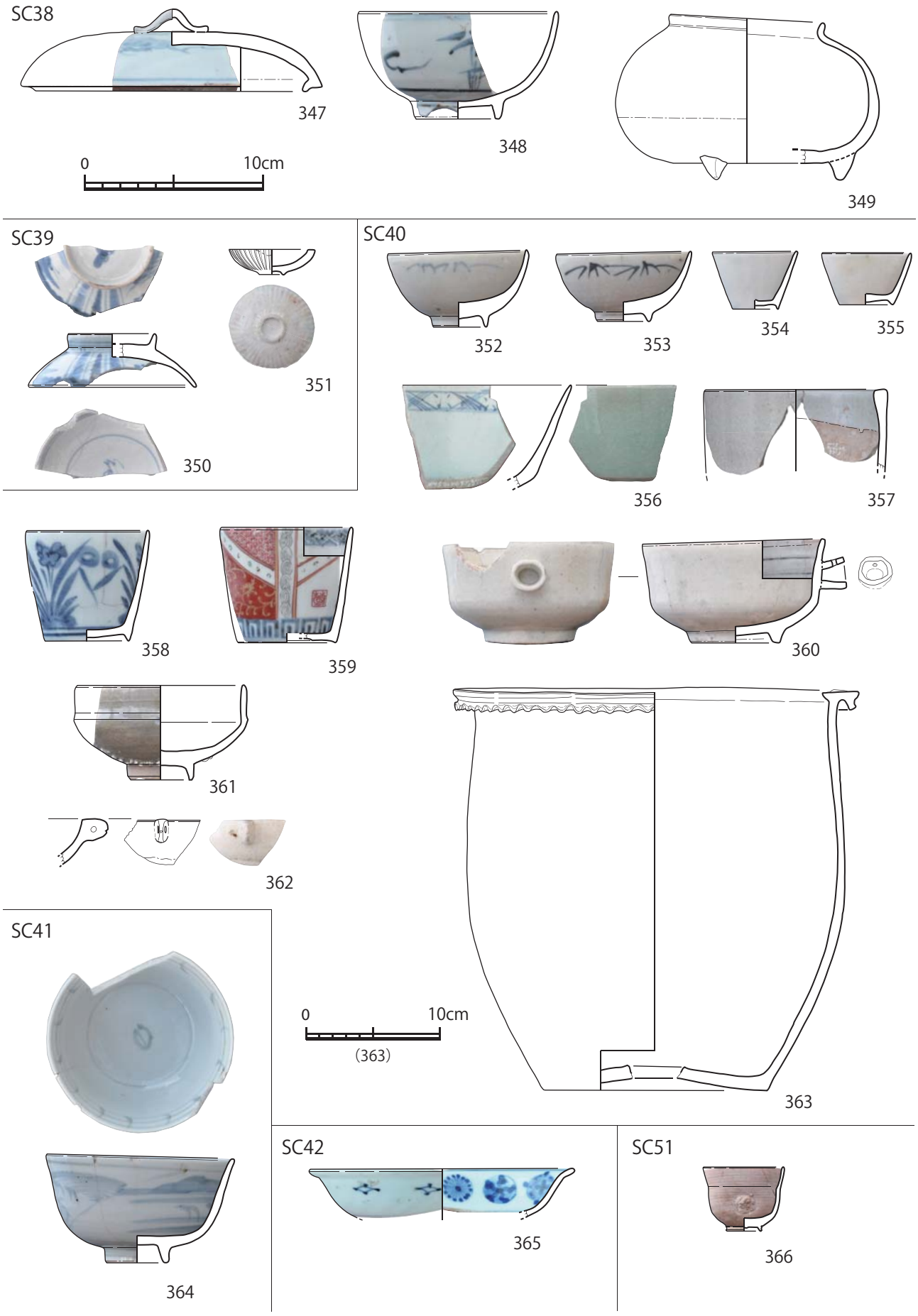
出土遺物は多い。352 ～ 363 が出土している。352・



第 43 図　SC35②･69・89 出土遺物実測図（S=1/3）



第 44 図 SC36・38 ～ 43・45・46・51 実測図（S=1/40）



第 45 図　SC38 ～ 42・51 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

353 は法量、器形共によく似る肥前系の染付碗である。どちらも笹文が配される。18 世紀後半～ 19 世紀の所産といえる。354・355 は白磁猪口であるが、354 は薩摩磁器、355 は肥前系であろうか。356 は肥前系の青磁染付碗で、18 世紀後半の所産。357 は白磁の香炉。358 は染付、359 は色絵のそば猪口である。両者共に 19 世紀代の所産であろう。

360 は白薩摩の蓋物である。口縁端部は無釉となる。注口状の突起部の上面には孔が穿たれる。ここに柄が装着されたものと推測される。361 は関西系陶器の腰折碗。銅部下半に砂が付着する。18 世紀前半～中頃の所産と考えられる。362 は陶器の鳥餌入れで、薩摩焼竪野系であろうか。近世後期の所産である。363 は薩摩焼苗代川系の植木鉢である。口縁部には胎土目跡が残る。SC92 から出土した破片と接合している。底部に穿たれた孔部は、当初は切れ込みが入れられているのみで、甕として作成されたものと思われる。その後、植木鉢として使用する際に水抜き孔を穿ったのであろう。18 世紀後半～ 19 世紀の所産である。

以上の出土遺物からは、本土坑は 19 世紀代の所産であるものと推測される。

SC41（第 44・45 図）

B2 区で検出しており、P4・5 を切る。遺構の大部分は調査区外へ延びるため、全体像は判然としない。埋土には基本土層のⅢ層が堆積する。検出面からの深さは 30cm 程を測る。

364 は肥前系の端反碗で、19 世紀中頃～幕末の所産である。

SC42（第 44・45 図）

D1 区で検出しており、SB5SC91 を切る。本土坑を掘り切ったところで P38 を検出している。平面形態は径約 1m の不整円形を呈する。検出面からの深さは最深で 42cm 程となる。埋土はブロック状の堆積が目立つ。

365 が埋土内より出土した近代の染付皿である。鮮やかなコバルトを使用している。

SC43（第 44 図）

C1 区で検出しており、SC33 に切られ、SB4SC52 を切る。他遺構に切られたり、現代の攪乱を受けたりするため、全体像は判然としない。検出面からの深さは最深部で 36cm を測る。

遺物は出土していない。

SC45（第 44 図）

D1 区で検出しており、SC46 を切る。長軸 0.72 m、短軸 0.62 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 73cm を測る。

遺物は出土していない。

SC46（第 44 図）

D1 区で検出しており、SC46 に切られ、P23 を切る。平面形態は径 0.7 m程の円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは 40cm 程である。

遺物は出土していない。

SC51（第 44・45 図）

B2 区で検出している。長軸 0.86 m、短軸 0.75 mの楕円形を呈し、深さは 70cm 程となる。

366 が出土遺物である。備前焼の小杯で、外面には型押しがなされる。

SC53（第 46・47 図）

B1・2 区で検出しており、長軸 1.12 m、短軸 0.7 m を測る。検出面からの深さは最深部で 70cm 程を測る。遺構の南北がテラス状となり、段差が付く。

367 が出土した薩摩磁器の白磁碗である。朝顔形を呈する。18 世紀末～幕末頃の所産といえる。

SC54（第 46 図）

B2 区で検出しており、一部は現代の攪乱に破壊される。埋土の上部にはⅢ層が堆積する。径約 0.7 mの円形を呈するものと考えられる。底面には小穴が穿たれており、そこから木材が出土していることから、柱穴であったものと思われる。

遺物は出土していない。

SC55（第 46・47 図）

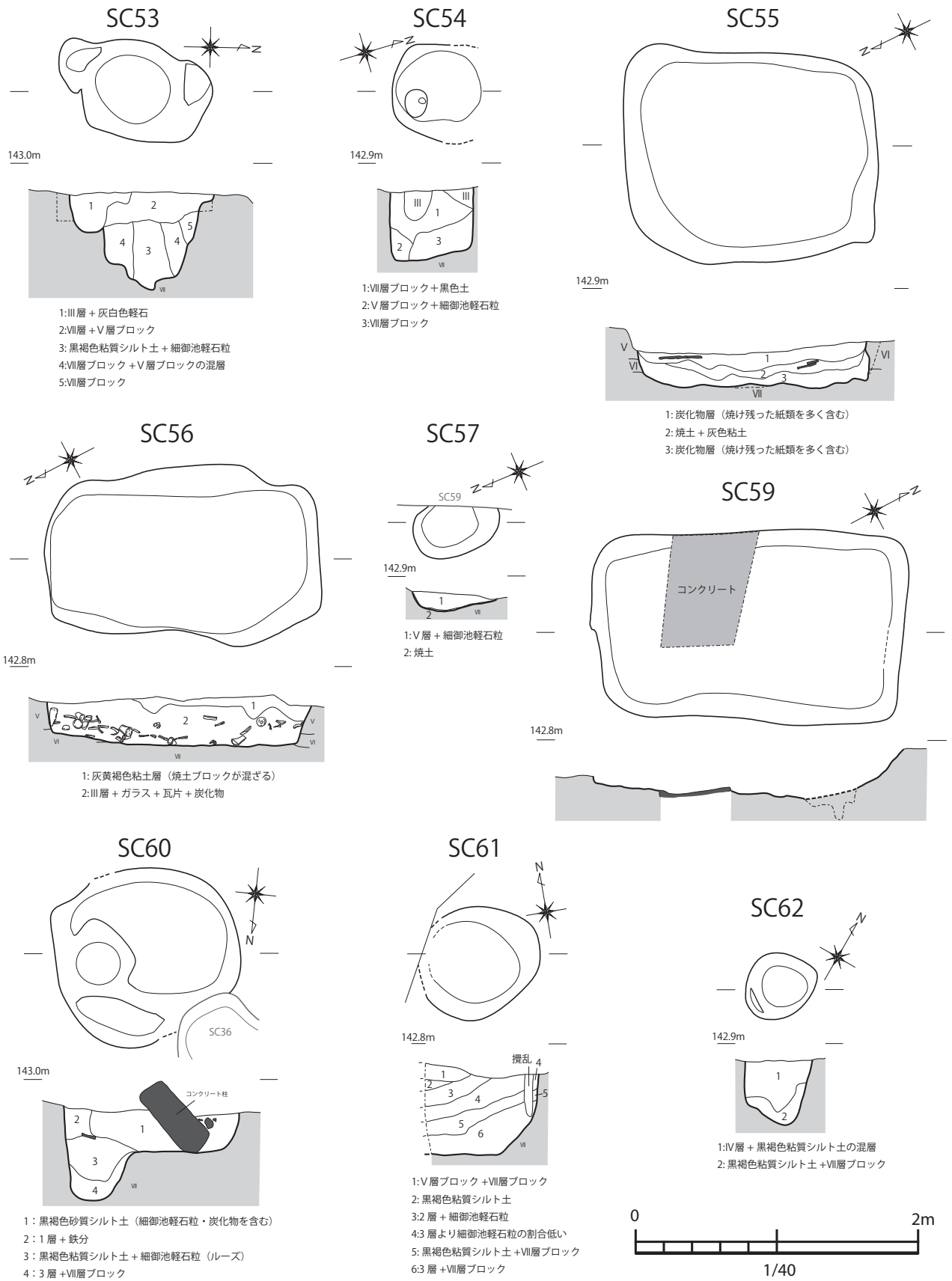
D3 区、SB2 の軽石基礎に接するように検出されているが、SB2 との切り合い関係はない。長軸 1.78 m、短軸 1.48 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約 30cm 程である。埋土からは焼け残った文書・紙類が大量に出土している。その中には、「明治 41 年」の日付が入る新聞の焼け残りみつかっている。

368 は埋土より出土した型紙摺の染付碗で、明治期の所産と考えられる。陶磁器の年代と文章類の日付とが合致していることから、本土坑は明治後半期のゴミ穴であったものと推測される。

SC56（第 46・47 図）

D3 区で検出されており、わずかに SB2 の掘り形隅を切っているが、ほぼ隣接するような形で構築されている。平面プランは長軸 1.92 m、短軸 1.15 mの隅丸長方形を呈しており、検出面からの深さは最大で 33cm 程である。埋土には焼土ブロックやガラス片、瓦片が大量に包含されていた。このことから SC55 同様のゴミ穴と考えられるが、燃え残った文章類は出土していない。

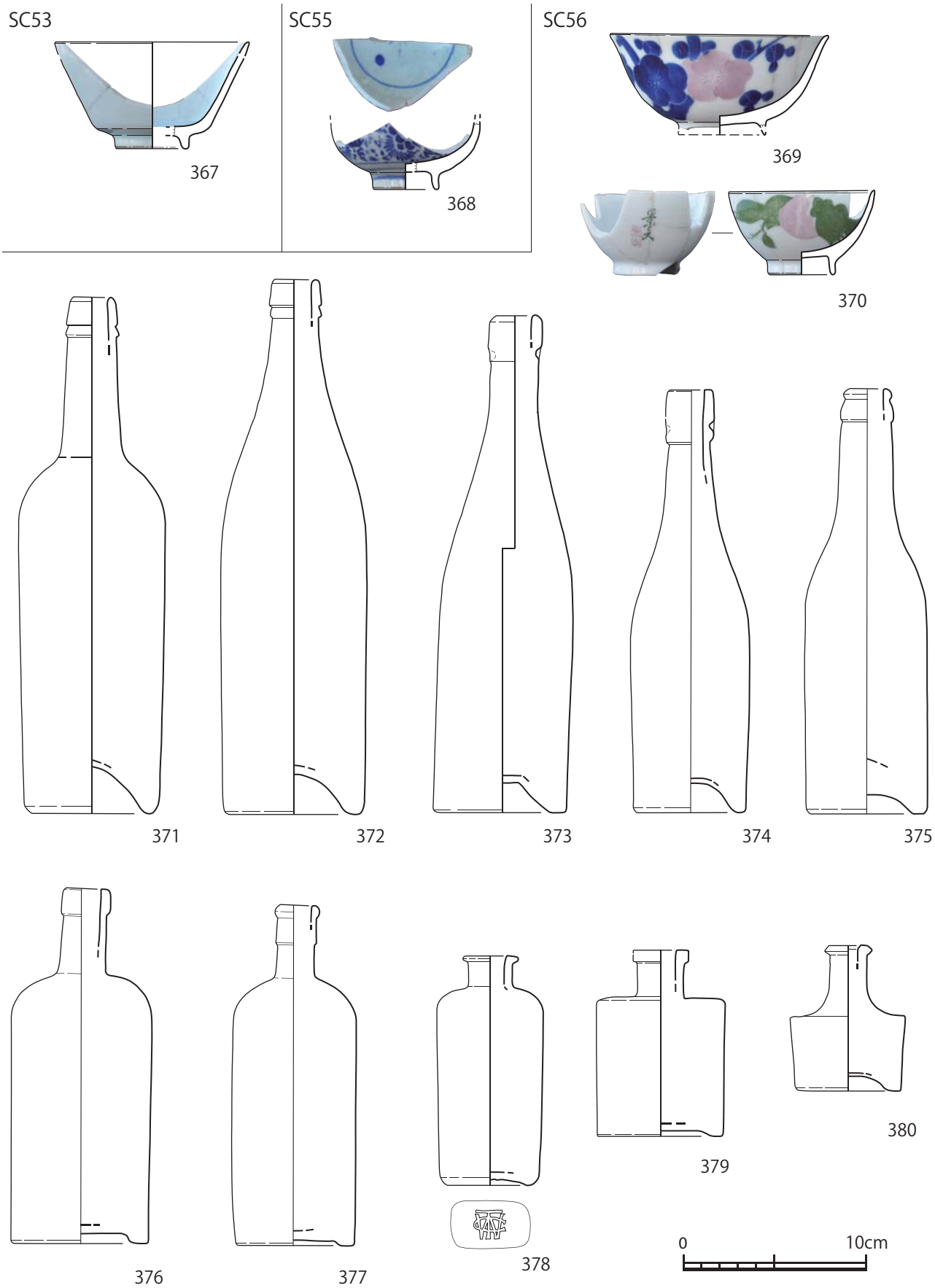
369 ～ 380 が出土遺物である。369・370 はいずれも釉下彩磁器の碗類で、370 には「景文」の銘がみえ、銅



第 46 図　SC53 ～ 57・59 ～ 62 実測図（S=1/40）

版転写である。近代の所産。

371 ～ 380 はガラス瓶類である。371・372 は底部にキックのあるワイン瓶で、茶色半透明。373・374 は機械栓で青色半透明の清酒瓶であろうか。375 は緑色半透明で飲料瓶か。376・377 は青色半透明の薬品瓶であろうか。378 も同様の薬品瓶と考えられ、底部外面には「TWC」



第 47 図　SC53・55・56 出土遺物実測図（S=1/3）

を重ねたインボスが認められる。379 は無色透明の薬瓶であろうか。

以上の出土遺物からは、本土坑は近代のゴミ穴と推測される。

SC57（第 46 図）

C1･2 区で検出しており、SC59 に切られる。長軸 0.62 m、短軸 0.4 m程の楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは最深部でも 12cm 程と浅い。遺構の底面には薄く焼土が堆積する。

遺物は出土していない。

SC59（第 46・48 図）

C2 区で検出しており、SC57・74 を切る。平面形態は長軸 2.2 m、短軸 1.37 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約 30cm となる。遺構の一部に重複してコンクリートが打設されており、破壊される。

381 ～ 385 が出土遺物である。381 は薩摩磁器碗で、19 世紀中頃～幕末の所産。382 は白磁碗であるが、薩摩磁器であろうか。383 は肥前系の染付鉢で、18 世紀後半の所産である。

384 は無色透明のガラス瓶で、表面に鳥？のエンボスがみられる。385 は栓であろう。いずれも近代の所産。

以上の出土遺物からは、近世～近代までの時間幅がみられる。遺構の一部がコンクリートによって破壊されていることを考慮すると、遺物が即座に遺構の帰属時期を示すものではない可能性が高いといえる。

SC60（第 46・48 図）

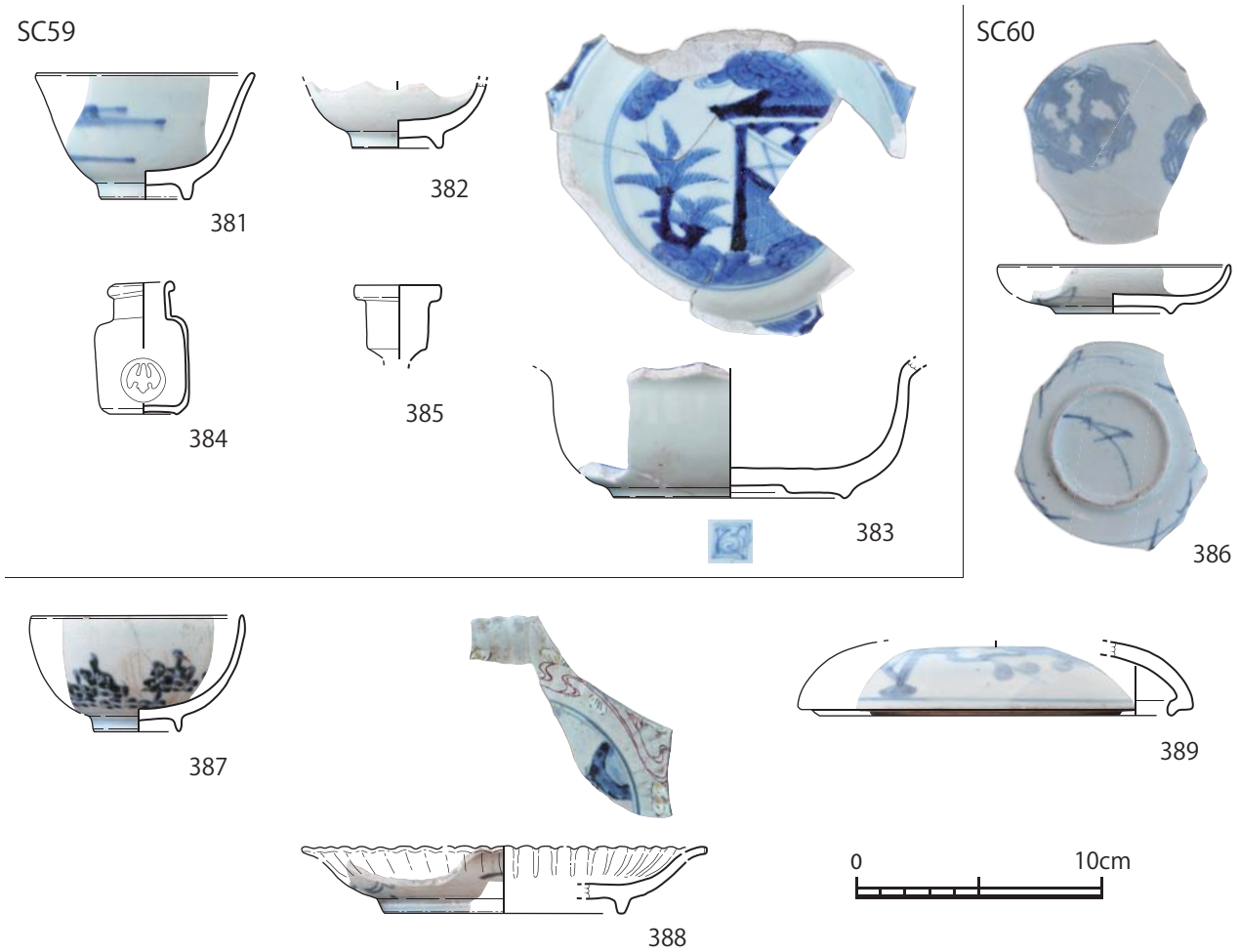
B・C2 区で検出されており、SC36 に切られる。長軸 1.32 m、短軸 1.26 mの不整円形を呈する。遺構の底面は東側が深くなっており、段差が付く。最深部では検出面から 64cm 程である。さらに、遺構の西側はコンクリート基礎柱によって打ち抜かれる。

386 ～ 389 が本土坑出土遺物である。386 は肥前系の染付皿で、内面はコンニャク印判で装飾される。17 世紀末～ 18 世紀前半の所産。387 も肥前系の染付丸碗で、18 世紀前半の所産といえる。388 は肥前系の色絵磁器で、輪花皿である。18 世紀の所産。389 は肥前系の染付蓋物蓋である。

以上の出土遺物からは、本土坑は 18 世紀頃の所産とも考えられるが、遺構の一部がコンクリート杭によって攪乱されていることから、これらが遺構に伴う遺物かは判断が難しい。

SC61（第 46 図）

C1 区で検出しており、一部は調査区外に延びる。径約 0.85 mの円形を呈するものと思われる。遺構の深さ



第 48 図　SC59・60 出土遺物実測図（S=1/3）

は最深部で 64cm を測る。

遺物は出土していない。

SC62（第 46 図）

B2 区で検出しており、P14 を切る。長軸 0.56 m、短軸 0.46 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 45cm 程である。

遺物は出土していない。

SC63（第 49 ～ 51 図）

D3 区で検出しており、長軸 5.03 m、短軸 1.56 m の不整長方形を呈する。検出面からの深さは最深で 36cm 程である。SC95 と SC114 の最上部を切っている。SC114 の大部分は本土坑と SC65 を掘り切ったところで検出している。埋土には大量の炭化物や瓦片、黄橙色粘土が互層状に堆積しており、SC55 同様に燃え残った文書類が多数出土している。明治 30 年代の日付が入った領収書と思われるものも出土している。やはり、ゴミ穴として使用されていた土坑と考えられる。

遺物もガラス瓶類を中心に大量に出土している。390 ～ 413 が出土遺物である。390 ～ 395 は磁器類。390 は湯飲み碗で、上絵されるがほとんどが取れてしまっている。391 は白磁の蓋物蓋。392 は白磁の歯磨き粉入れの蓋である。「鹿印煉歯磨」と書かれる。明治後半期のものであろう。393 ～ 395 は白磁の薄手酒杯。393 と 394 には文字や絵が描かれるが、読み取れない。

396 ～ 412 はガラス瓶類である。396 ～ 402 は薬瓶と考えられるものである。398 は「大學目薬」、399 は資生堂の「神薬」で口縁部にはコルクが残る。いずれも明治～大正期の製品である。403・404 は不明ガラス瓶である。405 は「カブトビール」、406 は「キリンビール」の瓶である。407 は緑色半透明の飲料瓶であろうか。408 は底部にキックがあり、コルク栓のワイン瓶である。409 も飲料瓶であろうか。410 ～ 412 はインク瓶である。

413 は頁岩製の硯で、背部に「フミ」と線刻される。名前であろうか。

以上のように、本土坑はゴミ穴と考えられ、多種多様な遺物が出土している。時期の判断できる遺物からは、概ね明治～大正という年代観が得られる。

SC64（第 49 図）

C2 区で検出しており、本遺構を完掘した後に SB4SC70・153 を検出している。長軸 3.2 m、短軸 1.1 mの長方形を呈する。検出面からの深さは 23cm 程である。埋土については大量のガラス瓶片を含んでいたが、残存状況が悪く、安全面も考慮して早い段階で除去した。

SC65（第 49・51 図）

D3 区で検出しており、P57・59 と SC114 の上部を切っている。SC63 と隣接するが切り合い関係はない。長軸 2.8 m、短軸 1.9 mの不整長方形を呈する。検出面からの深さは最深部で 38cm 程である。埋土には SC55 や SC63 のように大量の瓦片や焼土、黄褐色粘土と共に焼け残った文書類が出土している。この文書類の中には、明治期の教科書やノート類が含まれていた。やはり明治以降、近代のゴミ穴と考えられる。

遺物は大量の瓦片や燃え残った文章類に比して少ない。414 ～ 417 が出土遺物である。414 は型紙摺の染付鉢で明治期であろう。415 は白磁の薄手酒杯で、内面には「傘履物類其外諸…」の文字がみえる。

416 は木製の印鑑と考えられる資料で、「局行」と彫られる。ゴミ穴内で燃やされたため完全に炭化している。

417 は薬瓶で、口縁部にはコルク栓が残る。病院名等のエンボスはない。

これらの出土遺物からも、本土坑は明治以降、近代のゴミ穴であると考えられる。

SC67（第 49 図）

B2 区で検出している。径約 0.55 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深で 58cm 程である。

遺物は出土していない。

SC68（第 49・51 図）

C1・2 区で検出している。SC74 を切る。SC34・59・108 とは隣接するが切り合い関係はない。長軸約 1.3 m、短軸約 1.1 mの台形を呈し、遺構の東側にテラスを有す。遺構の底面には SC18 と同様の重機の爪痕と考えられる筋が検出されたが、埋土が比較的締まっていたため、近代以前の遺構と考えた。

遺物は 418 の鉄砲の弾と考えられる資料が出土している。現在では錆が付着するが、中空になるものと考えられる。

SC71（第 52 図）

D1 区で検出しており、P22 を切る。長軸 0.74 m、短軸 0.6 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 68cm を測る。土層を観察すると、中央部に柱痕跡が確認でき、さらに最下部には柱根も遺存していた。本来は建物の柱穴であったと思われるが、建物跡の配列は抽出できなかった。

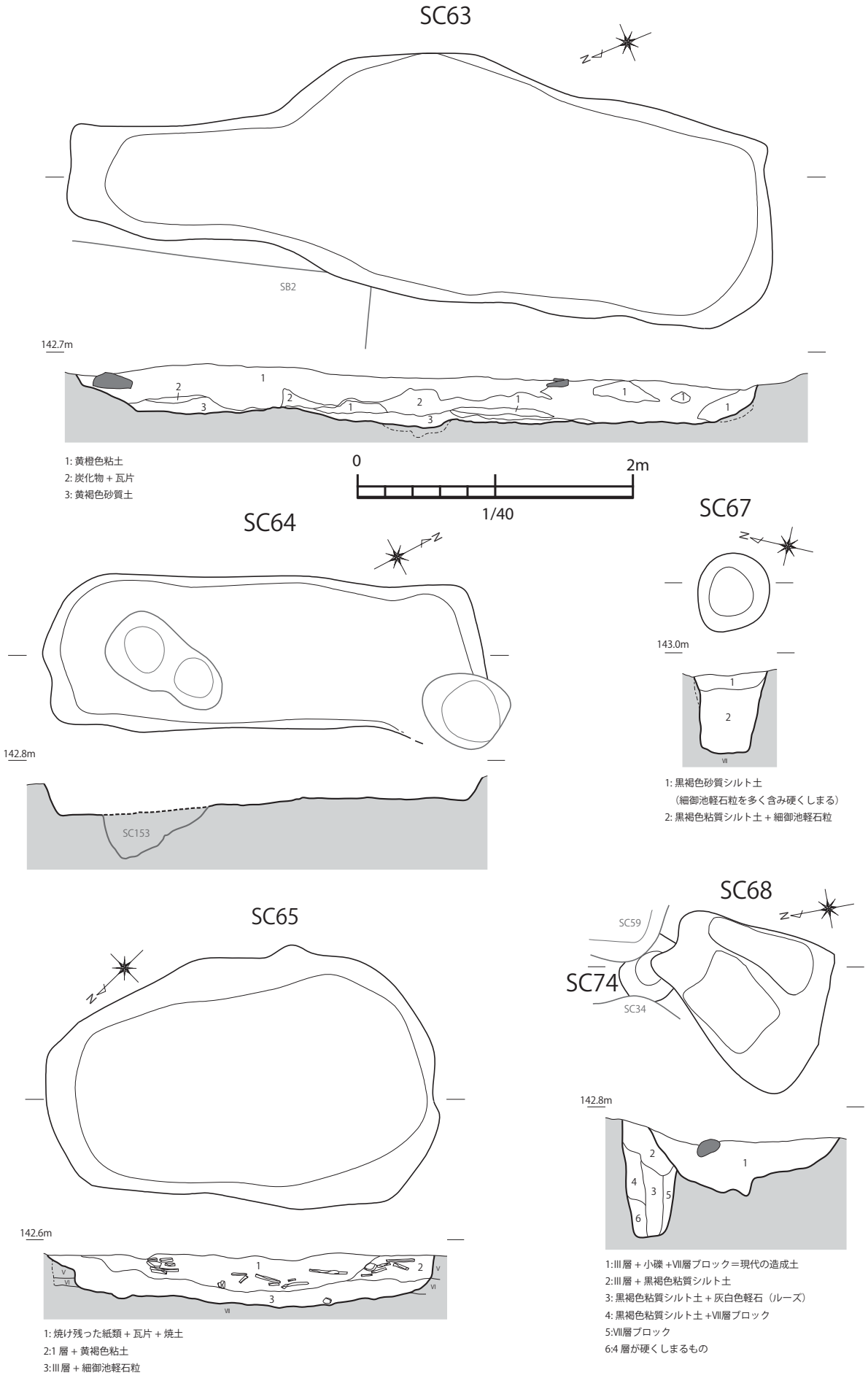
遺物は出土していない。

SC72（第 52 図）

C1 区で検出しており、SC73 に切られ、SC81 を切る。径約 0.6 mの不整円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 50cm 程を測る。

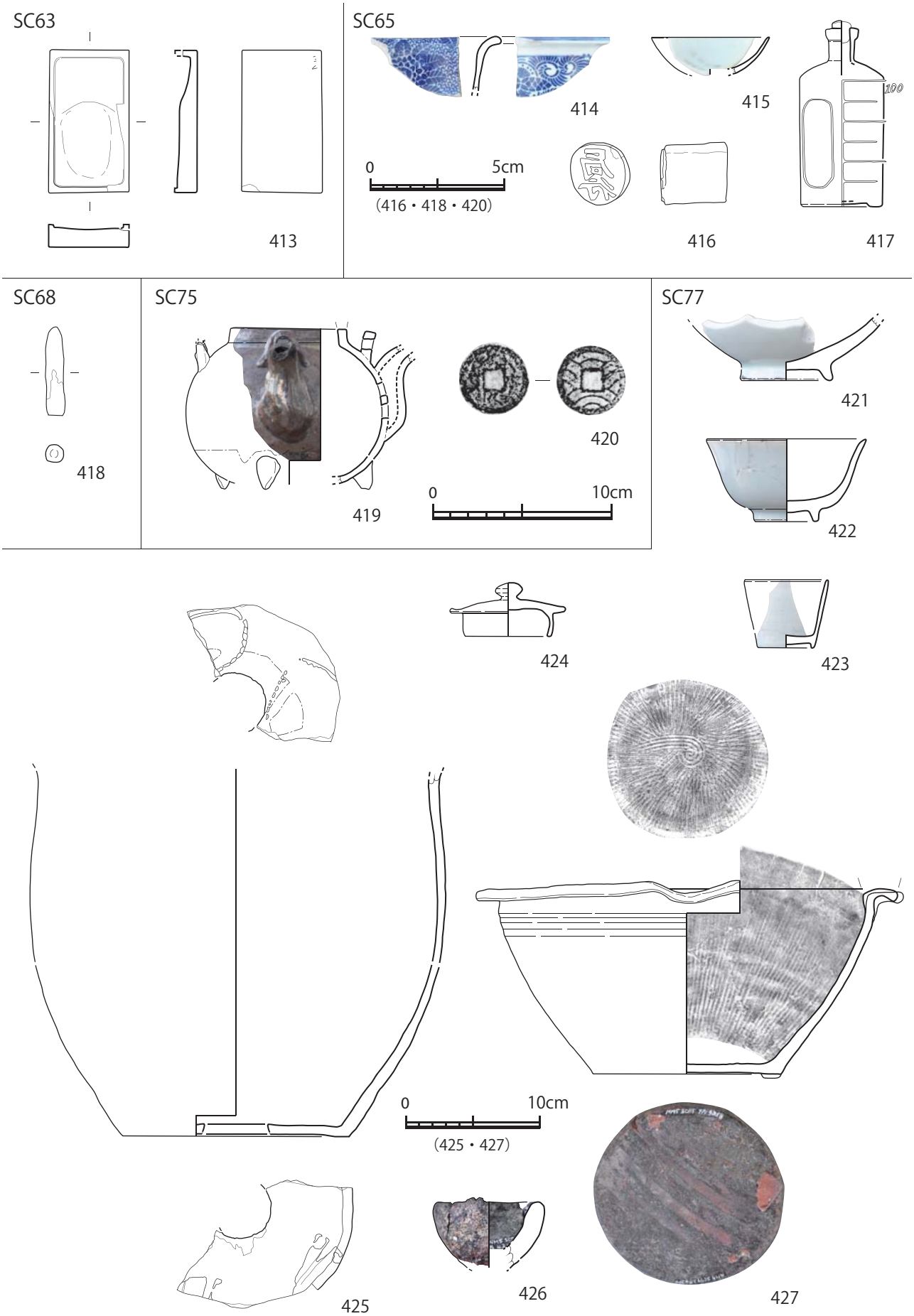
遺物は出土していない。

SC73（第 52 図）



第 49 図　SC63 ～ 65・67・68・74 実測図（S=1/40）

第 50 図　SC63 出土遺物実測図①（S=1/3）



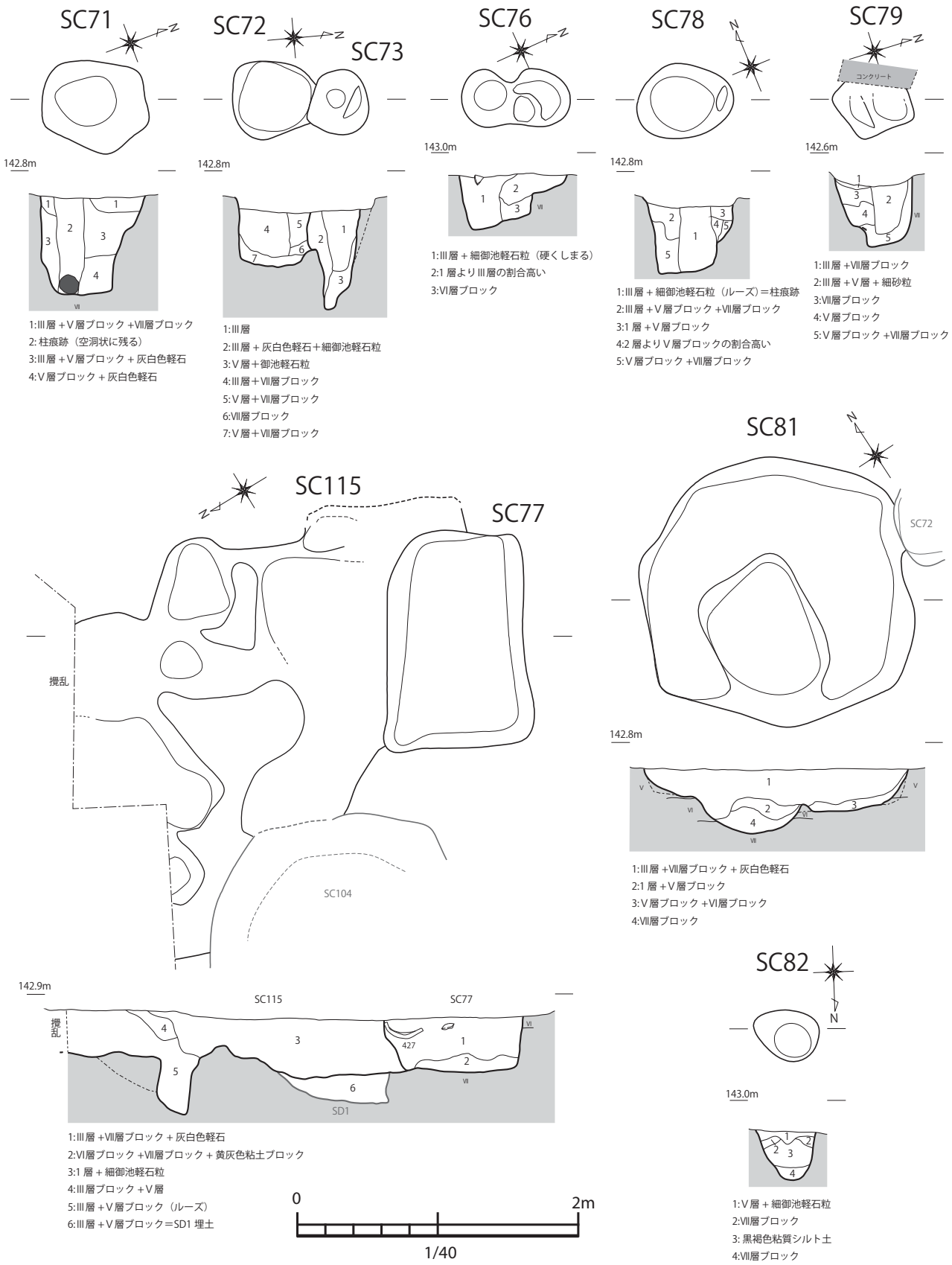
第 51 図　SC63②・65・68・75・77 出土遺物実測図（S=1/2・1/3・1/4）

C1 区で検出しており、径約 0.45 mの円形を呈する。SC72 を切る。検出面からの深さは最深で 70cm 程で、遺構の北側にテラス状の段差がある。

遺物は出土していない。

SC76（第 52 図）

B2 区で検出しており、長軸 0.77 m、短軸 0.4 m程で



第 52 図　SC71 ～ 73・76 ～ 79・81・82・115 実測図（S=1/40）

平面形態は瓢箪状を呈する。遺構の北側から南側に向かいテラス状の段差が認められる。検出面からの深さは最深で 36cm を測る。

遺物は出土していない。

SC77（第 51・52 図）

B2･3 区で検出しており､SC115 を切る。長軸 1.55 m、短軸 1.04 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 40cm 程を測る。

421 ～ 427 が出土遺物である。421 は白磁碗。422 も白磁の端反碗で、薩摩磁器であろうか。19 世紀中頃～幕末の所産。423 は白磁の猪口。

424 ～ 425・427 は薩摩焼。424 は苗代川系の土瓶蓋で 18 世紀後半以降の所産である。425 は苗代川系の植木鉢で、底部内外面に貝目が残る。切り合う SC115 から出土した資料と接合する。18 世紀後半～ 19 世紀の所産。426 は坩堝。内外面にスラグが付着する。427 は苗代川系の擂鉢で、底部内面には貝目、外面にはコマ目が残る。18 世紀代の所産である。

このように出土遺物からは 18 世紀～幕末頃の時間幅が認められる。最も新しい資料の年代観を採用すれば、幕末頃が遺構の廃絶時期と想像される。

SC78（第 52・53 図）

C1 区で検出しており、長軸 0.68 m、短軸 0.53 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 54cm を測る。断面観察からは、土坑の中央に柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりがみえる。堆積する土はかなりルーズである。やはり建物の柱穴と考えられるが、建物跡と考えられる配列は確認できなかった。

428 が埋土から出土した肥前系の染付皿である。破片資料で帰属時期は判然としない。

SC79（第 52・53 図）

C2 区で SC59 を完掘した後に底面にて検出している。一部コンクリートにより破壊される。一辺 0.5 m程の四角形を呈するものと思われる。検出面からの深さは 48cm 程を測る。遺構の南側には段差が付き、深い方には柱痕跡の可能性がある垂直方向に立ち上がる土層が確認できる。

図化できるような遺物は出土していない。

SC81（第 52・53 図）

C・D1 区で検出しており、SC72 に切られる。一辺 1.9 m程の隅丸方形を呈する。遺構の南西部が一段低くなり、それ以外がテラス状の段差となる。

429・430 が出土した磁器である。429 は天目形の染付碗で、外面には「福」の文字がみえる。外面は縞状に削りが入れられる。17 世紀前半の所産。430 は白磁の酒杯。

SC82（第 52 図）

B2 区で検出しており、長軸 0.45 m、短軸 0.33 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 34cm 程である。

遺物は出土していない。

SC115（第 52 ～ 56 図）

B2・3 区で検出しており、SC77・100・104 に切られ、SD1 を切るものと考えられる。遺構の北側は旧市道部分となり、水道管等のライフラインの施設により大きく改変を受けている。そのため平面プラン等の全体像は不明瞭で、遺構底面も一定でなくピット状に深くなる範囲があるなどイレギュラーな要素が目立つ。土層断面の観察からは、このようなアメーバ状の不定形な土坑であるものと判断した。

遺物は大量に出土しており、本遺跡の遺構の中でも最も遺物が多く出土した遺構であるといえる。

431 ～ 470 が本土坑から出土した磁器である。431 は波佐見の染付碗で、雪輪草花文があしらわれる。18 世紀後半の所産である。432･433 は肥前系染付の筒形碗で、432 は 18 世紀末～ 19 世紀初頭、433 は 18 世紀後半の所産といえる。434 も肥前系の染付碗で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなる。18 世紀後半。435 も染付碗、436 は染付の小碗である。437 は朝顔形の青磁染付碗で、見込みにはコンニャク印判による五弁花がみられる。18 世紀後半の所産。438 は朝顔形碗の蓋で、白磁である。薩摩磁器と考えられ、18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産といえる。

439 は白磁の輪花皿。近代の所産か。440 ～ 446 は染付皿。440 は見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる肥前系の皿で、18 世紀後半の所産。441 は初期伊万里の皿で、17 世紀前半と考えられる。442 は輪花皿で近世のものであろう。443 ～ 445 は見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、唐草文とコンニャク印判によって五弁花をあしらう皿である。法量的にも近似しており、組物と考えられる。18 世紀後半の所産である。446 は蛇ノ目凹形高台の深皿である。口縁は輪花をなす。肥前系で 18 世紀後半の所産。447 は肥前系染付のうがい碗。

448・449 は肥前系染付のそば猪口で、いずれも 18 世紀後半の所産であろう。450 ～ 452 は肥前系白磁そば猪口。18 世紀後半～ 19 世紀の所産。453 ～ 455 も肥前系の白磁猪口。やはり 18 世紀後半～ 19 世紀の所産といえる。

456 ～ 460 は肥前系の染付鉢である。456 は腰部で一度くびれるタイプで、高台内には渦福の銘がみえる。18

第 53 図　SC78・81・115①出土遺物実測図（S=1/3）

世紀後半～ 19 世紀の所産。457 は見込みに波文と花文、外面に唐草文があしらわれる鉢で 18 世紀末～ 19 世紀前半の所産。458 はやや呉須がにじむ。18 世紀代の資料である。459 は輪花口縁を有す鉢。460 も見込みには波文がみえる。18 世紀末～ 19 世紀前半の所産である。461 は肥前系染付の蓋物蓋である。

462 は肥前系色絵磁器の小杯。上手である。463 も肥前系色絵磁器で、蓋物蓋。やはり上手の資料といえる。

464 は白磁の香炉。465 は肥前系白磁の仏飯器である。466 は筒形の器で近代の所産か。467・468 は白磁瓶。

469・470 は肥前系染付の水滴である。469 には瓢箪があしらわれ、470 には花文がみえる。469 は 19 世紀

第 54 図　SC115 出土遺物実測図②（S=1/3）

第 55 図　SC115 出土遺物実測図③（S=1/3）

代の資料であろう。

471 ～ 501 は陶器である。471 ～ 481 は薩摩焼の碗。471 ～ 473 は龍門司系碗で、透明釉の後に白土掛けされる。いずれも高台内は無釉である。473 には輪花がみられる。18 世紀後半の所産といえる。474 ～ 481 は加治木・姶良系の碗である。いずれも黒褐釉が掛けられ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。高台内は無釉となる。18 世紀後半の所産といえる。482 は皿に高台が付く仏飯器である。483 も仏飯器で見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる。両者共に加治木・姶良系で、482 は碗と同様に 18 世紀後半の所産と考えられる。484 は灯明皿台で、底部は糸切り跡がみえる。18 世紀代の所産であろう。485 は龍門司系の小碗で透明釉後に白土掛けがなされる。18 世紀後半。486 は竪野系のいわゆる白薩摩で呉須による千鳥印がみられる。三角形の台座状の底部のみが遺存しており、ここに筒状の上部が接合していたものと推測される。文房具であろうか。487 は元立院系の灯火具で 18 世紀以降の資料である。488 は龍門司系の腰折碗で、白土掛けがなされる。18 世紀後半。489 は苗代川系の皿で、見込みにはコマ目が認められる。490 は苗代川系の土瓶。山茶家と呼ばれるタイプである。491 は水滴で龍門司系であろうか。近世後期の所産。492 は備前焼の猪口。493 は瀬戸・美濃系の鬢盥で、型紙摺による花文がみえる。494 は苗代川系の植木鉢である。底部は焼成後に打ち欠いて植木鉢としている。18 世紀後半～ 19 世紀の所産。495 も苗代川系の植木鉢だが、底部を欠く。口唇部には胎土目がみえる。496 は苗代川系の鉢。底部内面には貝目が残る。18 世紀後半～ 19 世紀の所産。497 は肥前系陶器の大鉢。498 は苗代川系の台付鉢であろうか。499 は苗代川系の擂鉢で、口唇部には胎土目が残る。18 世紀後半の所産か。500 は苗代川系の甕。19 世紀の所産。501 は沖縄産陶器の三耳壺か。

502 は土師質の焙烙の皿部である。

503・504 は煙管の雁首で、504 には羅宇が残る。

以上の出土遺物からは、概ね 18 世紀後半から 19 世紀にかけての資料が大部分を占めることが分かる。しかも、器形・法量的にも近似するような組物と考えられる資料も複数出土している。遺構自体その用途が不明確なものであるため、より踏み込んだ位置づけは難しいが、出土遺物については、地震や火災後の整理によって廃棄された資料群である可能性が考えられる。ただし、被熱するような資料がみられないことから火災ではないものと推測される。

SC84（第 57・58 図）

D2 区で検出しており、SC50 に切られる。長軸 0.9 m 以上、短軸 0.6 mの楕円形を呈するものと思われる。遺構の南北にはテラス状の段差が付く。検出面からの深さは最深部で 65cm を測る。

505 が埋土から出土している。肥前系の染付蓋物蓋で、19 世紀頃の所産であろうか。

SC85（第 57・58 図）

C1 区で検出しており、遺構の西側は調査区外に延びていく。SC90 の上部を切る。平面形態は長軸 1.6 m以上、短軸 1.2 m程の長方形を呈すものと思われる。検出面からの深さは浅く、わずか 7cm を測るのみである。埋土は単一層で、大量の瓦片が出土している。

瓦片に混ざって比較的多くの磁器が出土している。506 は端反碗で、鮮やかなコバルトが用いられる。507 ～ 509 は端反碗蓋で、いずれも鮮やかなコバルトにより菊花文や内面に雷文があしらわれる。明治以降、近代の所産であろう。510 もコバルトを用いた小杯。511 は 510 とセットになる小杯蓋であろう。512 は薩摩磁器の可能性がある輪花皿である。蛇ノ目凹形高台で、口唇部は口錆が施される。19 世紀以降の所産。513 は瀬戸・美濃系の木型打込皿で、見込みには獅子文をスタンプする。19 世紀後半の所産。514 も鮮やかなコバルトを用いた鉢。明治以降の所産。515 は染付長皿で、肥前系であろうか。19 世紀中頃～幕末の所産である。

このような出土遺物からは、当土坑の廃絶時期は明治以降、近代であると思われる。瓦片が大量に廃棄されていることから、火災や地震後の整理の際の廃棄土坑である可能性が高い。

SC90（第 57・58 図）

C1 区で検出しており、上部を SC85 に切られる。遺構の大部分が調査区外に延びていく。隅丸方形ないしは長方形を呈する土坑である。検出面からの深さは最深で 26cm 程を測る。

埋土からは 516・517 が出土している。516 は薩摩磁器の染付広東碗である。18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産といえる。517 は寛永通寶である。新寛永。

SC86（第 57 図）

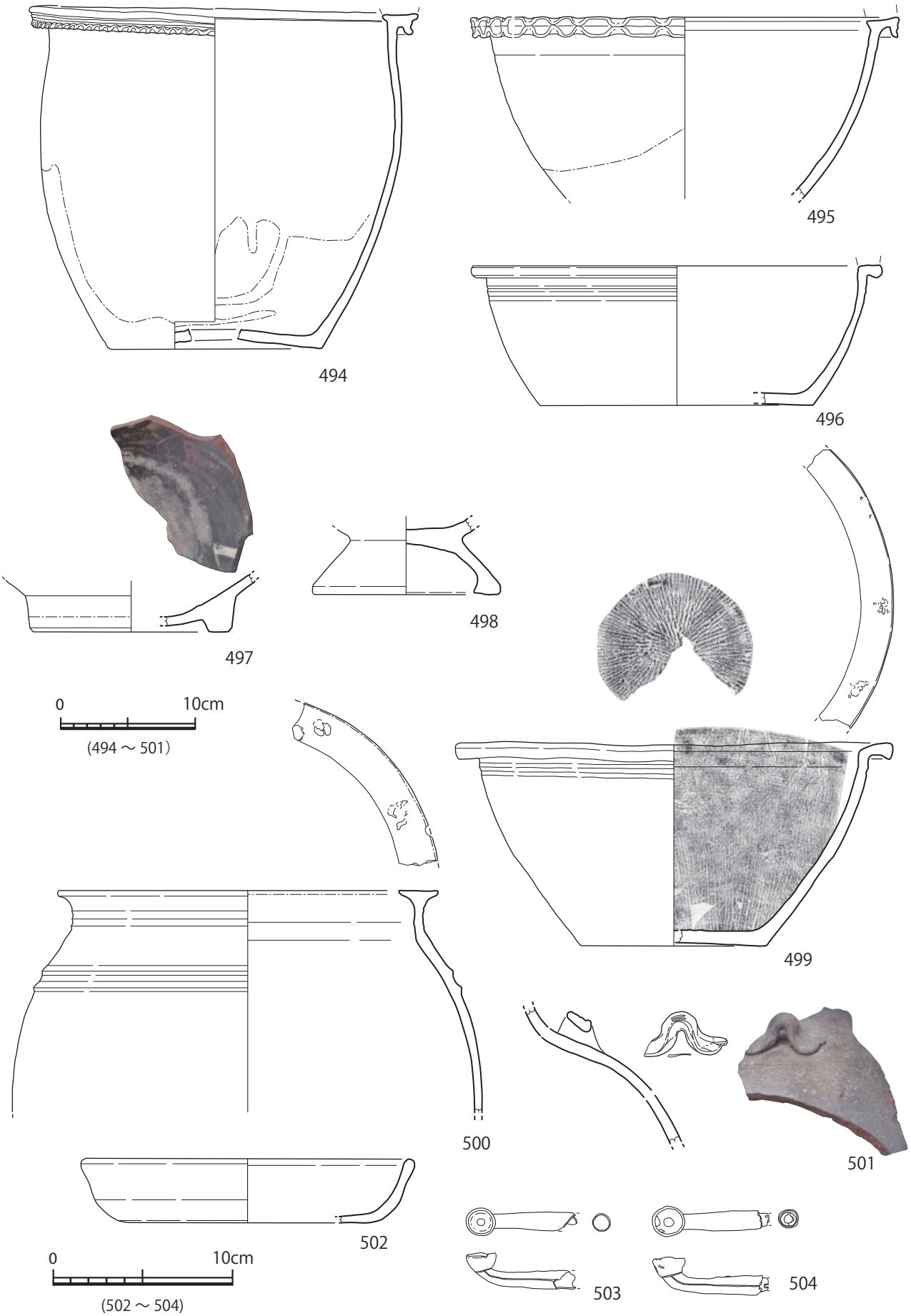
C2 区で検出しており、SB4SC88 に切られる。長軸 0.53 m、短軸 0.44 の楕円形を呈する。検出面からの深さは、最深で 82cm を測る。

遺物は出土していない。

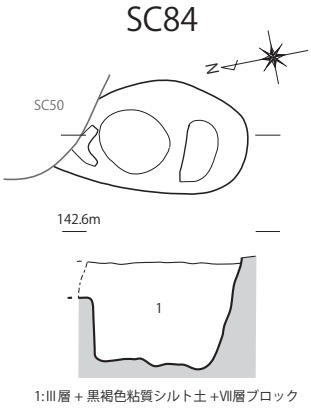
SC92（第 57・58 図）

B2 区で検出しており、SC104 に切られる。長軸 1.34 m、短軸 0.83 mのきれいな隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 22cm 程となる。

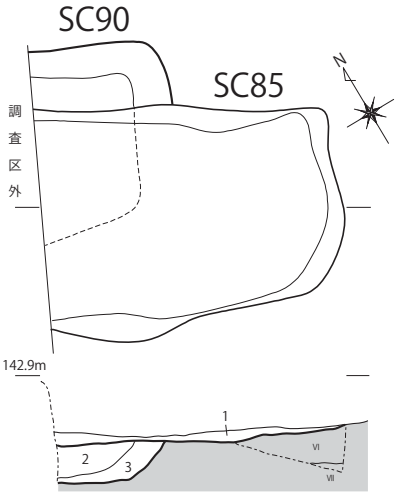
518 ～ 521 が出土遺物である。518 は波佐見産の染付



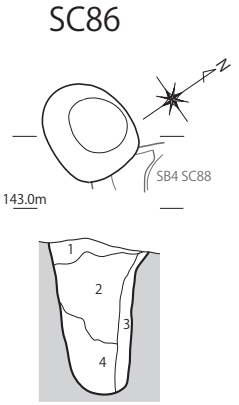
第 56 図　SC115 出土遺物実測図④（S=1/3・1/4）



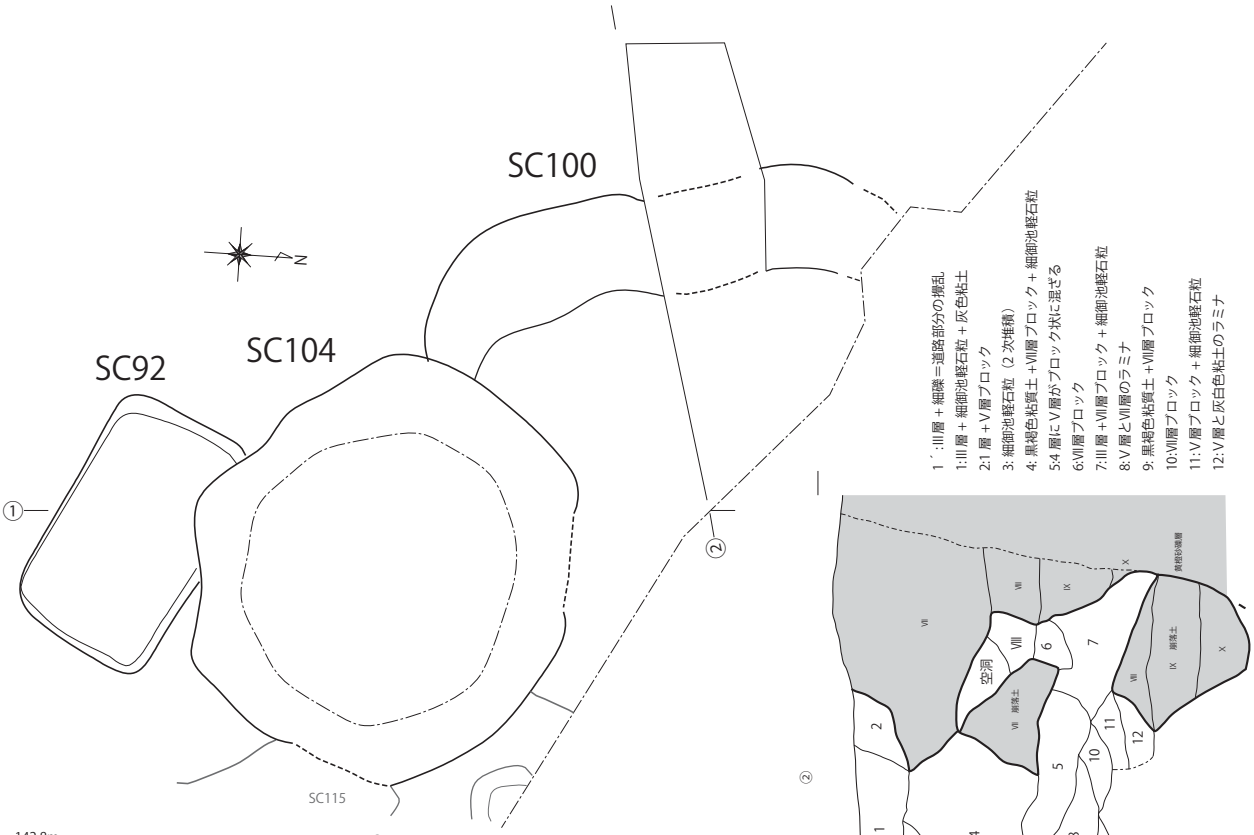
1:Ⅲ層＋黒褐色粘質シルト土＋Ⅶ層ブロック

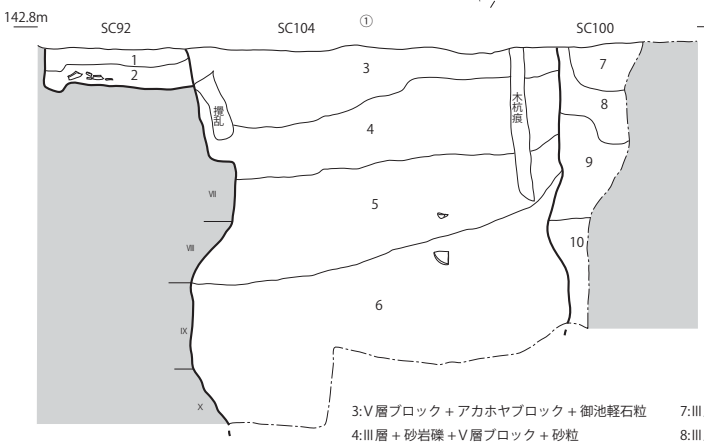


1:Ⅲ層＋大量の瓦片
2: 黄灰色粘土
3:Ⅲ層＋Ⅴ層ブロック



1:Ⅲ層＋細御池軽石粒（硬くしまる）
2: 黒褐色粘質シルト土＋細御池軽石粒
3:2 層＋Ⅶ層ブロック
4:Ⅲ層＋細御池軽石粒



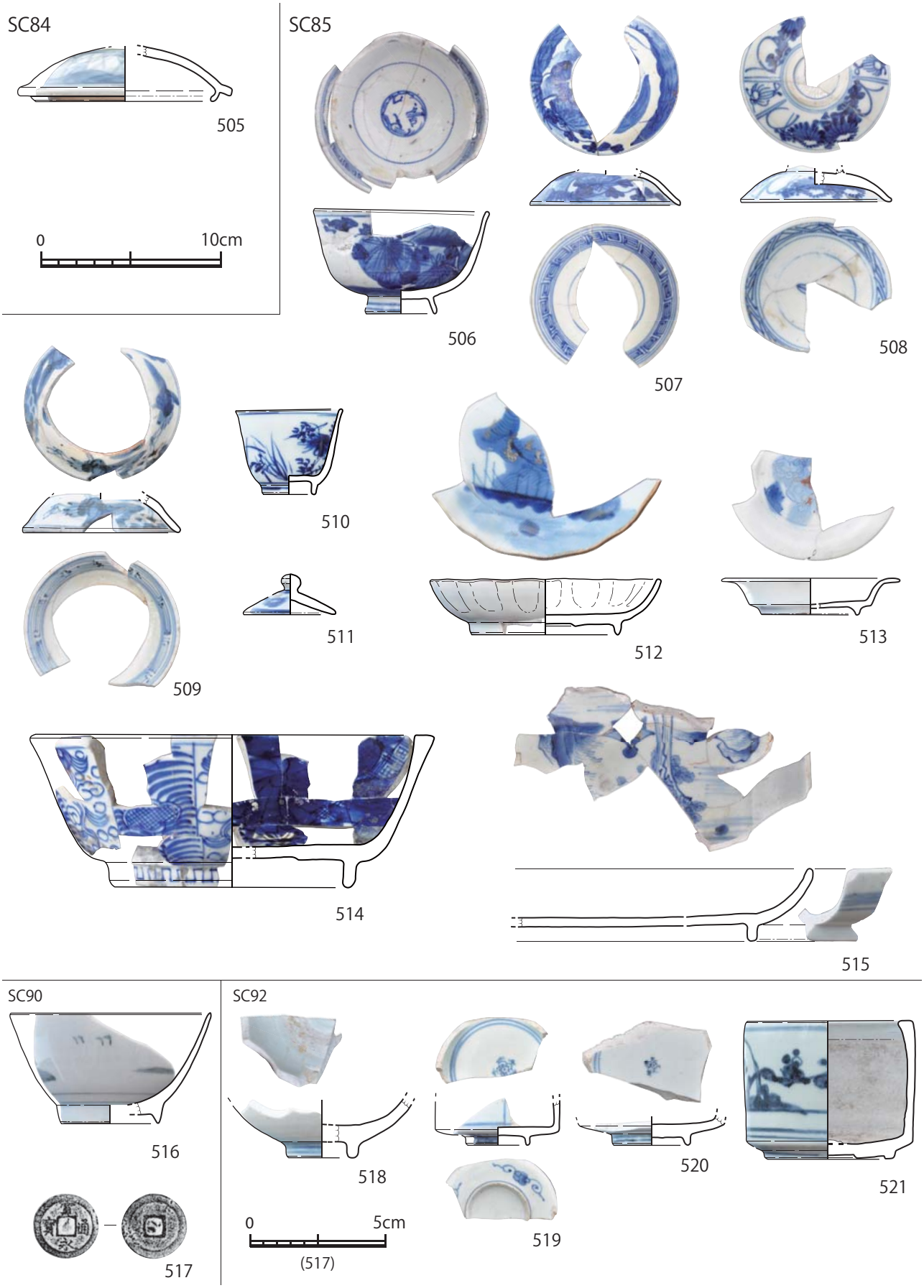


1:Ⅲ層＋細御池軽石粒＋Ⅴ層ブロック
2: 黒褐色粘質土＋細御池軽石粒
3:Ⅴ層ブロック＋アカホヤブロック＋御池軽石粒
4:Ⅲ層＋砂岩礫＋Ⅴ層ブロック＋砂粒
5:4 層よりⅢ層と礫の割合高い
6: 黒褐色粘質土＋砂岩礫＋細御池軽石粒
7:Ⅲ層＋瓦片
8:Ⅲ層＋灰白色軽石＋Ⅶ層ブロック
9:8 層よりⅦ層ブロックの割合高い
10:Ⅴ層ブロック＋Ⅶ層ブロック

0　2m
1/40

第 57 図　SC84 ～ 86・90・92・100・104 実測図（S=1/40）

碗で、見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる。18 世紀後半の所産。519・520 は肥前系の筒形碗である。いずれも見込みには手描きの五弁花が配される。18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産。521 は肥前系の染付香炉である。蛇ノ目凹形高



第 58 図　SC84・85・90・92 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

台を呈する。

以上の出土遺物からは、遺構の廃絶時期は 18 世紀末～ 19 世紀初頭頃であると推測される。

SC100（第 57・59 図）

B2 区で検出しており、遺構の北側は水道管などの施設により大きく破壊されている。SC104 に切られ、SC115 を切るものと考えられる。このように、攪乱や切り合いによって遺構の全体象は判然としない。しかし、土層断面の観察からは、深い竪穴の壁面からさらに横穴が掘られていることが分かる。横穴部分は空洞になっていたためか、上部の土層が崩落している状況が看取できる。このような状況から、当初は横穴式の防空壕と考えて調査をしていた。現場調査時に実施した現地説明会でもその旨の説明を行った。しかし、後にみるように出土遺物には第 2 次世界大戦以後の現代の遺物が全く出土しておらず、近世の遺物が主体となることや、後述する近代の遺構と考えられる SC104 に切られることから、本土坑は近世の所産と判断する。ここに訂正したい。

第 59 図　SC100・104 出土遺物実測図（S=1/3）

522 ～ 529 が出土遺物である。522 は肥前系染付碗で、18 世紀の所産と考えられる。523 は青磁染付の筒形碗で口縁部内面に四方襷文がみえる。18 世紀後半の所産。524 は肥前系の色絵磁器で蓋物である。525 は口縁部が輪花を呈する白磁猪口であるが、色絵素地の可能性がある上手の資料である。526 は薩摩磁器の白磁であろうか。朝顔形碗の蓋である。18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産。527 は輪花口縁を呈し、笹文が配される染付そば猪口である。薩摩磁器であろうか。528 は朝顔形の青磁染付碗で、見込みにはコンニャク印判による五弁花が認められる。18 世紀後半の所産。529 は肥前系白磁の仏花瓶である。

以上のように、出土遺物からは 18 世紀後半以降、近世の所産であると考えられる。安全面を考慮して完掘していないため、断定はできないが、近世の地下式坑の可能性が考えられる。

SC104（第 57・59 図）

B2 区で検出しており、SC92・100・115 を切る。径約 2.1 mの円形を呈し、検出面から約 2 mのところまで掘り下げているが底面は検出できていない。埋土はブロック状の堆積をみせる範囲が多く、土質もルーズで崩れやすい。平面形態と遺構の深さからは井戸跡の可能性が考えられるが、地表下約 2 mのところでは湧水は認められない。

530 ～ 541 が出土した遺物である。530 ～ 533 は碗である。530 と 532 は染付碗で、532 は波佐見産で 18 世紀～ 19 世紀の資料である。531・533 は釉下彩磁器で、銅版転写により菊文や桃を描く。どちらも近代の所産である。534 は肥前系の染付小杯。535 は輪花皿で、見込みには楼閣山水文があしらわれる。口錆である。536 は瀬戸・美濃系の皿で、見込みには鶴がスタンプされる。やはり口錆を施される。明治期。537 は白磁酒杯で、外面には「…祝賀…」の文字がみえ、内面には吹き墨で「H」が浮かび上がる。近代の所産。538 は白磁の碍子であろう。

539 は肥前内野山の陶器碗。SC115 出土資料と接合する。17 世紀後半以降の所産である。540 は薩摩焼加治木・姶良系の仏飯器で、見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる。18 世紀以降。541 は肥前系染付の瓶である。

以上、出土遺物を通観すると、近世期の資料も存在するが多くが幕末～明治以降、近代の所産といえる。よって本遺構の廃絶時期は近代以降と推測される。

SC93（第 60 図）

D3 区で検出しており、近代のゴミ穴である SC55 に切られる。径約 1.2 m以上の円形を呈するものと思われる。底面はフラットではなく、中央部が窪み深くなる。検出面からの深さは最深部で 90cm 程を測る。遺構の壁が一部オーバーハングする。

遺物は出土していない。

SC94（第 60 図）

D1 区で検出しており、P18 を切る。径約 0.6 mの円形と呈し、検出面からの深さは最深で 70cm 程を測る。

遺物は出土していない。

SC95（第 60 図）

D3 区で検出しており、近代のゴミ穴である SC63 に切られる。大部分が SC63 によって破壊されるため、規模等の詳細は判然としない。底面もフラットでなく、中央がピット状に深くなり、周りもテラス状の段差が付く。検出面からの深さは最深で 72cm を測る。

遺物は出土していない。

SC96（第 60・61 図）

C2 区で検出している。SC103 を切る。径約 2m の円形を呈し、深さ約 1.8 mのところまで掘り下げているが完掘はできておらず、湧水が認められる。遺構の南東側には一段高いテラスが付く。埋土はブロック状の堆積が目立つ。遺構の平面形態や深さ、湧水の状況からは井戸跡である可能性が考えられる。

542 ～ 545 が出土遺物である。542 は初期伊万里皿で、17 世紀前半の所産。543 は肥前系の白磁碗蓋である。544 は薩摩焼苗代川系の鉢で、SC124 出土片と接合関係にある。19 世紀代の所産と考えられる。545 は鉄砲の弾と考えられる資料である。これ以外にも大量に出土している。

このような出土遺物からは 17 世紀～ 19 世紀代までの大きな時間幅が認められる。最も新しい時期の遺物からは、遺構の廃絶時期は 19 世紀代頃と推測される。

SC97（第 60・61）

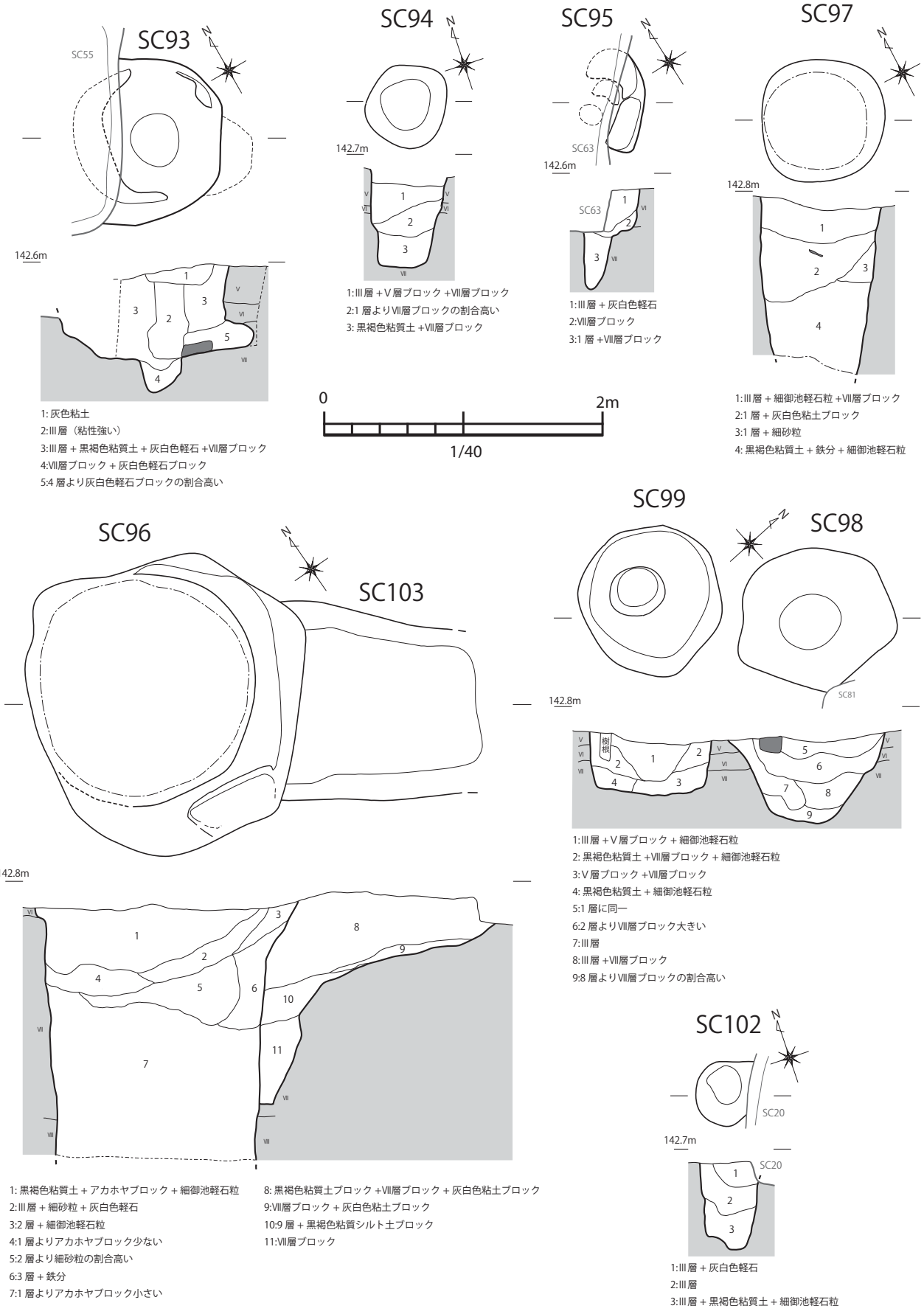
B2 区で検出しており、径約 0.9 mの円形を呈する。検出面から 1.3 mまで掘り下げているが底面はみえていない。この時点では湧水は認められない。他の井戸跡と考えられる土坑に比して規模が小さいが、形態や深さからはその可能性が考えられる。

埋土内からは 546・547 が出土している。546 は染付皿であるが、外面の釉がやや黄色味を帯びるため、青磁染付皿である可能性もある。547 は薩摩焼龍門司系碗で、白土掛けがなされる。高台は無釉で見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。18 世紀後半の所産。

SC98（第 60 図）

C1 区で検出しており、わずかに SC81 に切られる。径約 1 mの不整円形を呈する。検出面からの深さは最深で 60cm 程となる。

遺物は出土していない。



第 60 図　SC93 ～ 99・102・103 実測図（S=1/40）

SC99（第 60・61）

C・D1 区で検出しており、径約 1.1 mの円形を呈する。底面中央が窪んで一段低くなる。検出面からの深さは最深部で 38cm 程である。

548 ～ 551 が出土遺物である。548・549 は薩摩磁器の染付碗で、いずれも 19 世紀中頃～幕末の所産である。550 は近代の香炉である。551 は明治以前の端反碗蓋である。

SC102（第 60 図）

D1 区で検出しており、SC20 に切られる。径約 0.45 m程の円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 63cm 程である。

遺物は出土していない。

SC105（第 62・63 図）

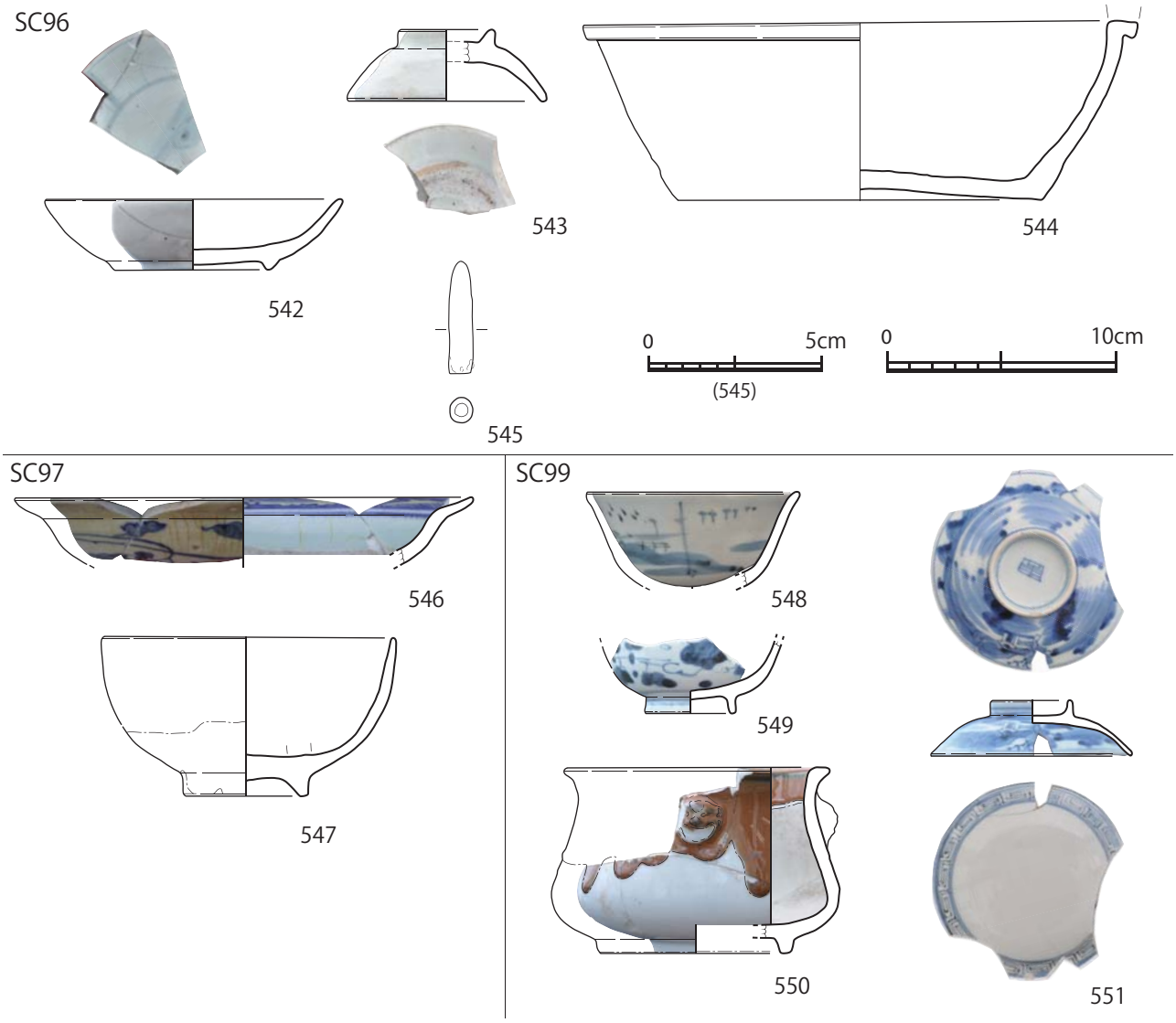
C2 区で検出しており、SC106・121 を切る。検出時に若干掘り下げ過ぎたため、遺構の北東部が無くなってしまっている。平面形態は長軸 1.3 m、短軸 0.95 mの楕円形を呈している。遺構の底面は擂鉢状に中央部に向かい緩やかに傾斜する。検出面からの深さは最深部でも 10cm 程を測るのみである。

遺構はかなり浅いものの、遺物は多く出土している。552 ～ 557 が出土遺物である。552・553 はコバルトを用いた端反碗で、552 は型紙摺である。いずれも明治以降、近代の所産。554 は薩摩磁器の染付輪花皿である。SC106 から出土した破片と接合している。見込みには楼閣山水文があしらわれる。19 世紀中頃～幕末の所産。555 は肥前系青磁の香炉。556 は瀬戸・美濃系陶器の香炉である。557 は SC106・113 と SX2 出土破片と接合した薩摩焼苗代川系の鉢である。18 世紀後半～ 19 世紀代の所産。

SC106（第 62・63 図）

C2 区で検出しており、SC105 と現代の攪乱に切られる。長軸 1.72 m、短軸約 1 mの隅丸長方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 30cm 程となる。

558 ～ 561 が出土遺物である。558 はねじ花文をあしらった肥前系染付碗である。19 世紀の所産と考えられる。559 は薩摩磁器の染付蓋物で、口縁部内面が無釉となる。



第 61 図　SC96・97・99 出土遺物実測図（S=1/2・1/3）

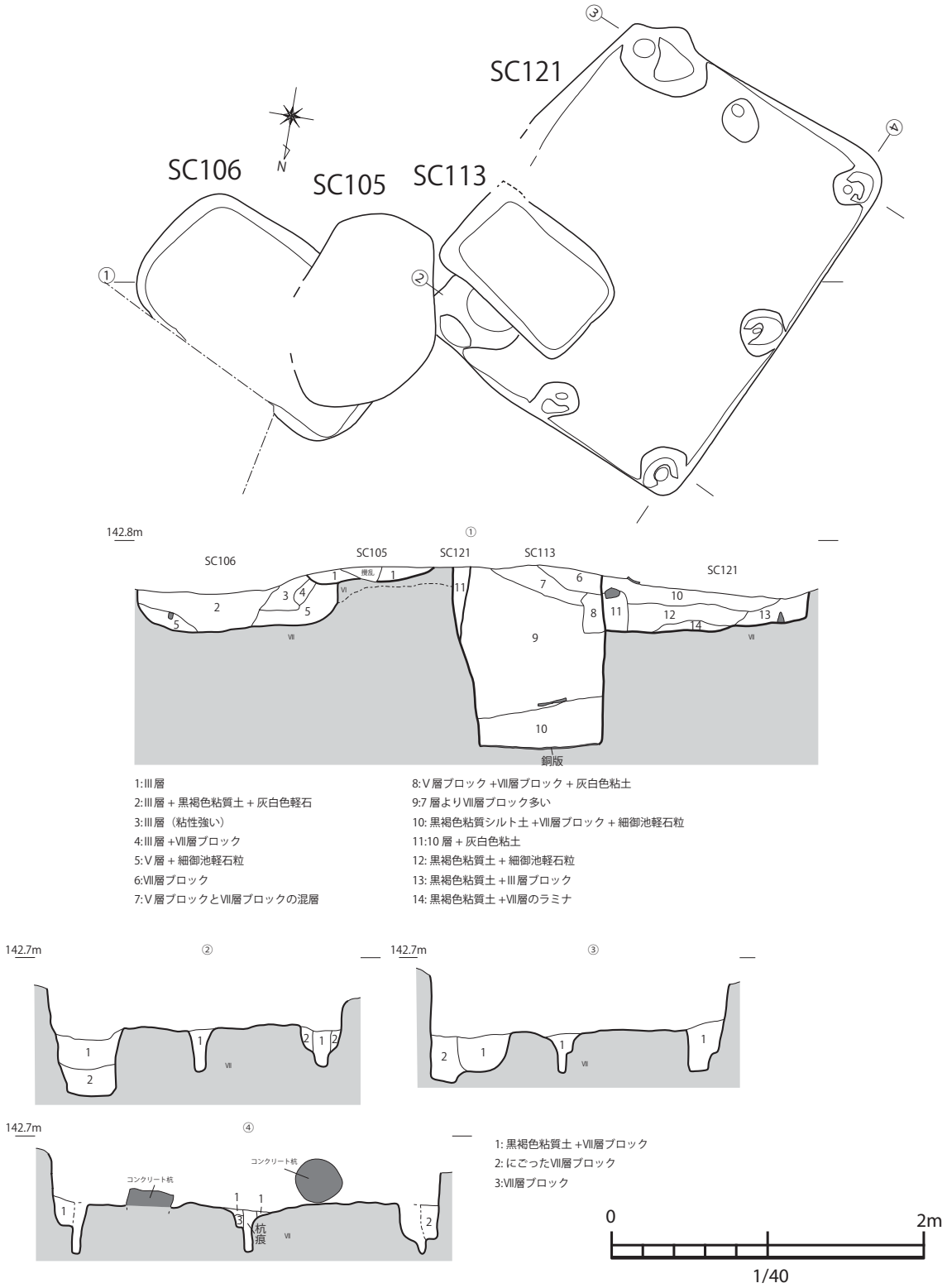
560 も薩摩磁器と考えられる輪花皿である。内面には楼閣山水文が配される。19 世紀中頃～幕末の所産。561 は薩摩焼龍門司系の碗である。透明釉の後に白土掛けされる。高台内は無釉。18 世紀後半の所産である。

SC113（第 62 図）

C2 区で検出しており、SC121 を切る。長軸 1.04 m、短軸 0.7 mの長方形を呈する。検出面からの深さは最深部で 1.16 mを測る。遺構の掘り形壁はほぼ垂直になる。遺構の底面には銅版が敷かれることから、本土坑は避雷針を埋設したものと考えられる。

遺物は出土していない。

SC121（第 62 図）



第 62 図　SC105・106・113・121 実測図（S=1/40）

C2 区で検出しており、SC105・113 に切られる。平面形態は長軸 2.5 m、短軸 2.1 mの長方形を呈しており、検出面からの深さは最深で 35cm 程である。掘り形壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構の底面には掘り形壁際に沿って合計 7 基の小ピットが穿たれる。この小ピットの土層断面を観察すると、杭痕と考えられる立ち上がりが認められる。この杭と考えられるものは、径 10cm 程と建物の柱としてはかなり貧弱な印象がある。しかし、遺構の南西側長辺沿いのピットはやや径が大きめであることから、やはり何らかの上屋構造を有す建物跡であった可能性が高い。この南西側長辺では中央のピットが検出できていないことから、ここが入口であった可能性が考えられる。遺物が出土していないため、帰属時期は不明と言わざるを得ない。

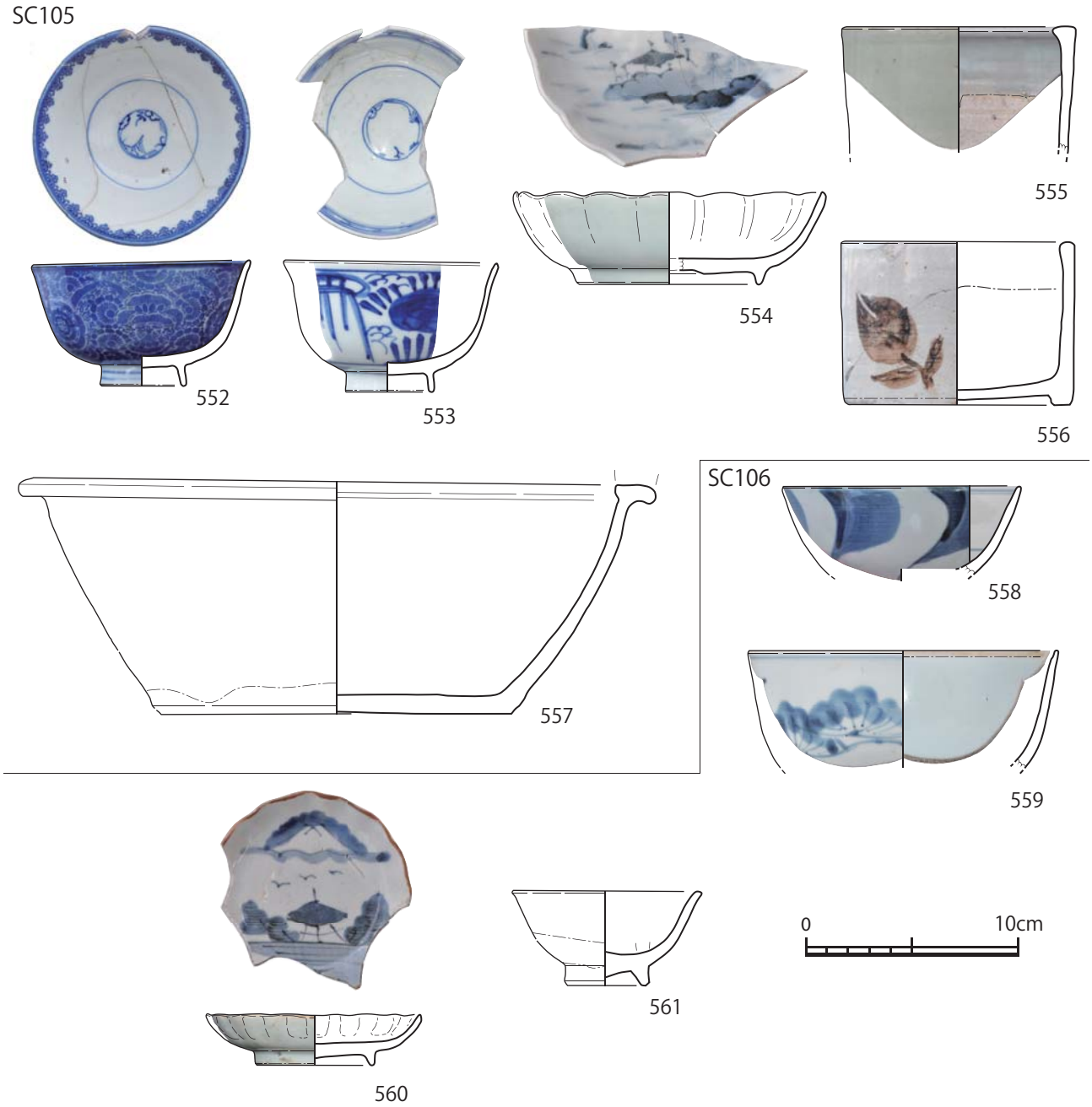
SC107（第 64 図）

C1 区で検出しており、SC85 に切られ、SC118 を切る。長軸 0.98 m、短軸 0.85 mの楕円形を呈し、検出面からの深さは最深部で 55cm を測る。埋土はブロック状の堆積が目立つ。

遺物は出土していない。

SC108（第 64 図）

C1・2 区で検出しており、長軸 3.3 m、短軸 3.0 mの不整形を呈する。深さは最深部で 1.86 m程を測る。一応底面まで掘り下げているが、大量の湧水があるため、



第 63 図　SC105・106 出土遺物実測図（S=1/3）

精査できていない。本土坑内部には加治木石と呼ばれる凝灰岩を枠に使用した井戸跡が検出されている。また、土坑の壁面には重機の爪痕と考えられる筋がみられるため、本土坑は現代の建物解体に伴う土坑である可能性が高い。使用されなくなった井戸を撤去する目的で掘られた穴であると推測される。

土坑内からは遺物も出土している。562 は型紙摺の湯飲み碗である。明治期。563 はコバルトを用いた端反碗蓋である。近代の所産。564 は無色透明の薬瓶で、蓋が残る。近代。これらの遺物は重機による土坑掘削時に混ざり込んだ遺物と推測される。

SC110（第 64 図）

C・D1 区で検出しており、SB5SC109 と隣接するが切り合い関係はない。径 0.5 m程の円形を呈する。検出面からの深さは最深で 48cm 程となる。

遺物は出土していない。

SC111（第 64 図）

C1 区で検出しており、遺構の北側は現代の攪乱により破壊される。長軸 1.2 m以上、短軸 1.2 mの楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは最深部で 20cm 程である。

遺物は出土していない。

SC112（第 64 図）

D1 区で検出しており、長軸 0.57 m、短軸 0.38 m の不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 43cm 程である。

遺物は出土していない。

SC114（第 64 ～ 70 図）

D3 区で検出している。一部他の遺構群と同じ面で掘り形を検出している範囲もあるが、大部分は上部を切られる SC63 と SC65 を完掘した後、その底面で掘り形を検出している。平面形態は径 1.5 m程のきれいな円形を呈する。検出面から 2.2 m以上まで掘り下げているが底面はみえておらず、大量の湧水が認められたこともあり、安全面を考慮して完掘はしていない。掘り形の壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁も掘削時の工具痕もなくかなり平滑で丁寧に仕上げられている。

埋土最上部には基本土層のⅢ層が堆積する。それ以下は概ね各層が擂鉢状の堆積をみせる。ブロック状の堆積もみられないため、比較的時間をかけて徐々に埋没していった可能性が高い。遺構の下部ではグライ化したと思われる青灰色粘土層がみられ、ヘドロのような臭気を放っていた。

遺物は大量に出土している。特に遺構の下部では豊富な湧水のためか木製品が良好な状態で遺存していた。

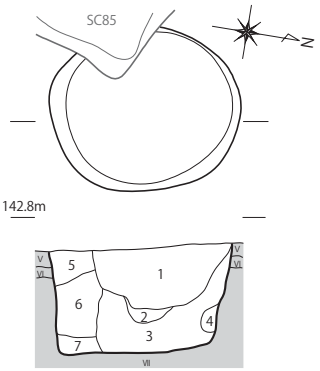
565 ～ 579 は染付磁器である。565 は肥前系染付碗で淡い発色の呉須により菊花文があしらわれる。17 世紀前半の所産。566 は青磁碗で肥前系であろうか。567 は染付碗で、見込みに草花文が描かれる。568 は肥前系の幾何文を描く染付碗。569 は外面青磁、内面白磁の掛け分け碗である。高台は無釉で 17 世紀中頃の資料と考えられる。570 は漳州窯系の青花碗であろうか。571 は外面鉄釉、内面白磁の掛け分け碗である。肥前系で 17 世紀中頃の所産。572 は肥前系染付鉢であろうか。573 は明末～清初頭の漳州窯系青花で鉢か。574 は中国青花皿。575 も中国青花皿で、16 世紀後半～ 17 世紀前半の所産。576 は初期伊万里皿で 17 世紀前半。577 は中国青花碗か。578 は肥前系の小杯で、縞状の浅い溝が巡る。高台は無釉。17 世紀中頃の所産。579 は肥前系染付の瓶である。17 世紀前半。

580 ～ 586 は陶器である。580・581 は白土、緑釉、鉄釉の三色がみられる三彩唐津皿である。581 の見込みには砂目がみられる。17 世紀前半の所産。582 は肥前系陶器皿で、内面には鉄絵がみられる。歪みが大きい。16 世紀末～ 17 世紀初頭。583 は肥前系陶器の擂鉢で 17 世紀代。584 ～ 586 は薩摩焼苗代川系の甕である。口縁部が残る 584 と 585 は両者共に口縁端部を外に折り返し、断面が三角形を呈する。口唇部には貝目が残る。肩部には刻みのある突帯が巡る。内面はタタキ整形されると思われるが、585 以外は不明瞭である。器壁は最も薄い箇所で 4mm 程とかなり薄く仕上がる。585 は肩部の突帯の下位に、586 は上位に一条の刻みがない突帯が巡る。585 と 586 についてはかなり大型の製品である。17 世紀第 2 四半期の所産であろう。

587 は土師質の鉢である。胎土は練土のようなマーブル状を呈する。588 は煙管の吸い口である。589 は丸瓦で、内面には布目が付く。外面は丁寧にナデられ平滑となる。

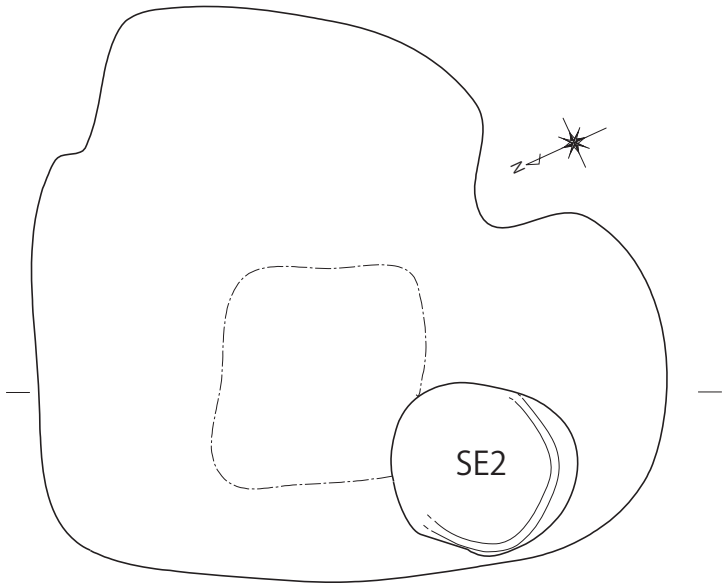
590 ～ 604 は木製品である。590・591 は連歯下駄で、一木から削り出される。どちらも長さは 21 ～ 22cm 前後を測る。592・593 は同一個体の可能性が高い折敷で、隅角が切られる。板材同士を結合するための小穴が穿たれており、そこには紐状の樹皮が遺存している。594 ～ 596 は丸板で、桶底であろうか。いずれも縁に沿って面取りがなされる。597 は加工木材で、組物の部品であろうか。598 は肥厚する頭部をもち、先端が尖るため杭であろうか。頭部の片側は欠損する。599 は一木から削り出された桶である。内外面には漆の可能性が高い光沢をもった黒色の付着物が認められる。口縁部下に一箇所小さな穴が穿たれている。600 は薄い板材で、人形であろうか。墨書等はみられない。変形により反っている。

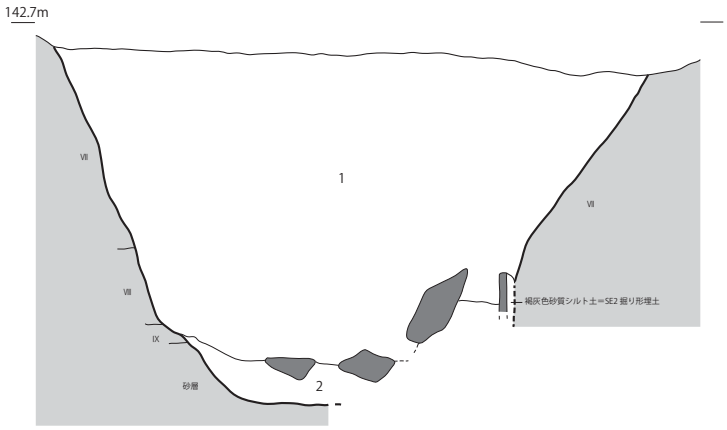
SC107



1: 黒褐色粘質土＋細御池軽石粒
2: V 層ブロック
3: III 層＋黒褐色粘質土ブロック ＋VII層ブロック
4: VII層ブロック
5: 3 層より黒褐色粘質土ブロックの割合高い
6: VII層ブロック
7: 黒褐色粘質土ブロック ＋VII層ブロック

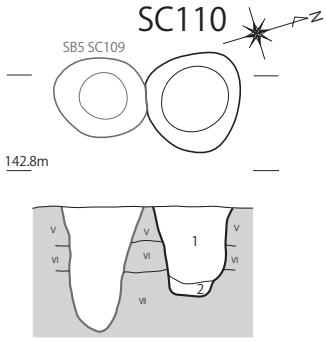
SC108





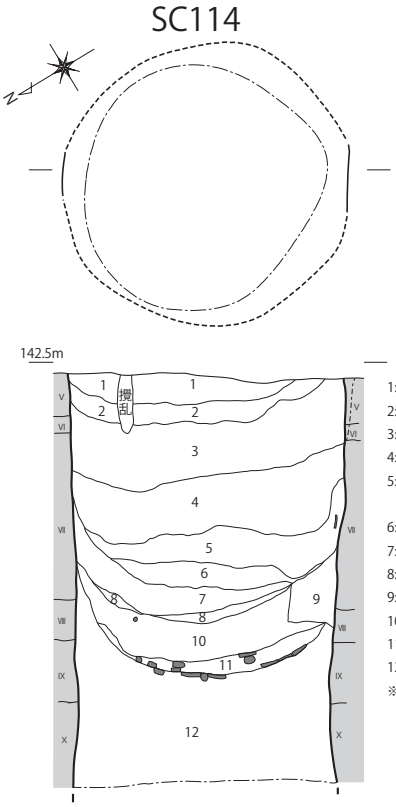
1: III 層＋黒褐色粘質シルト土 ＋VII層＋アカホヤブロックの混層
2: 灰白色砂質シルト土ブロック

SC110



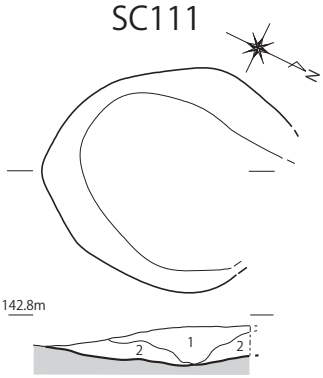
1: III 層 ＋VII層ブロック
2: 1 層＋黒褐色土ブロック

SC114



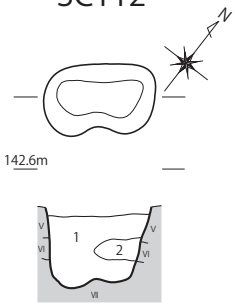
1: III 層＋灰色軽石
2: 1 層＋黄灰色粘土
3: 1 層＋鉄分
4: 1 層＋鉄分＋黄橙色粘土
5: III 層＋黒褐色粘質土
　＋茶色砂粒のラミナ
6: 青灰色粘土
7: 褐灰色粘質土
8: 青灰色粘土
9: 褐灰色砂質土＋細砂粒
10: 黒褐色粘質土
11: 10 層＋細御池軽石粒
12: 11 層より御池軽石粒多い
※断面のアミ掛けは木製品

SC111

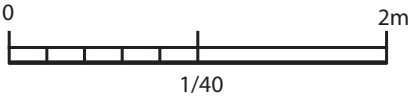


1: III 層＋細御池軽石粒＋鉄分
2: 灰白色砂質土

SC112

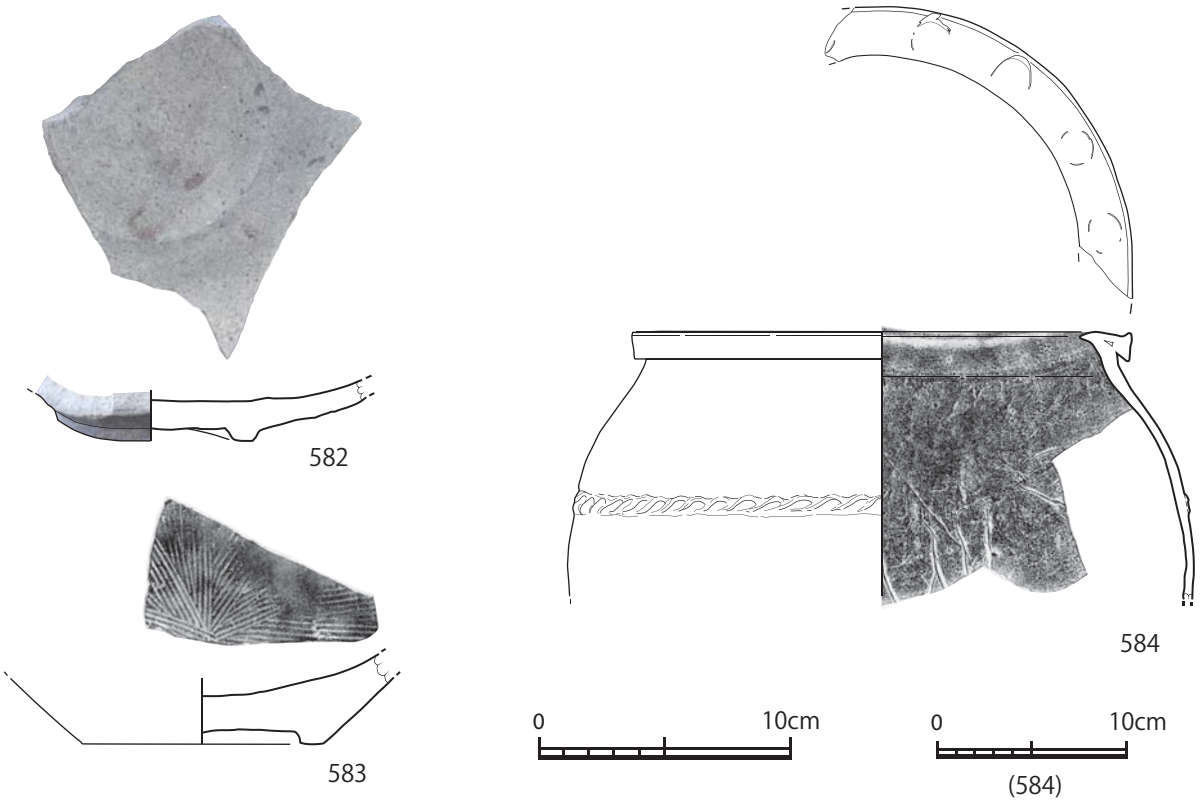


1: 黒褐色粘質土＋細御池軽石粒
　＋灰白色軽石
2: 1 層 ＋VII層ブロック



第 64 図　SC107・108・110 ～ 112・114・SE2 実測図（S=1/40)

第 65 図　SC108・114①出土遺物実測図（S=1/3）



第 66 図　SC114 出土遺物実測図②（S=1/3・1/4）

601 は加工木材で円形と長方形の臍穴がある。組物の連結部であろうか。602・603 は箸で、いずれも長さ 30cm 弱、多角形に面取りされている。この他にも同様の箸と考えられる木製品は 15 膳分程出土している。604 は箆であろうか。両面共に面取りされ平滑となる。

以上、SC114 の出土遺物をみてきたが、時期が分かる陶磁器類を基準とすれば、多くが 17 世紀代、特に前半期の資料が多いことが分かる。少なくとも明らかに 18 世紀代に下がるような資料は見当たらない。しかも、磁器の碗・皿類に加え、陶器の甕や擂鉢など生活用品がセットで出土していることは重要であろう。これに加え、下駄や折敷、箸などの木製品が出土していることも日常生活道具が同一遺構から出土した貴重な事例といえる。

このような点から、本井戸跡は元和元年（1615 年）の新地移りからさほど離れていない時期に構築され、しかもそこに居住する人々の生活の様子を示す遺物群が出土した重要な遺構と位置づけられる。

SC116（第 71 図）

D1 区で検出しており、長軸 0.53 m、短軸 0.38 mの不整楕円形を呈している。遺構の深さは最深部で 40cm 程を測る。埋土はブロック状の堆積が目立つ。

遺物は出土していない。

SC117（第 71 図）

C1 区で検出しており、P33 に切られる。長軸 0.53 m 以上、短軸 0.44 mの不整楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは 44cm 程となる。やはり埋土はブロック状の堆積が目立つ。

遺物は出土していない。

SC118（第 71 図）

C1 区で検出しており、SC107 と SC111 に挟まれるように切られる。そのため平面形態や規模は判然としないが、検出面からの深さは最深で 34cm を測る。遺構の西側にはテラスが付く。

遺物は出土していない。

SC119（第 71 図）

D1 区で検出しており、SC122 に切られる。径 0.83 m の円形を呈し、遺構の深さは 60cm 程となる。

染付磁器片が出土しているが、小片のため図化し得なかった。

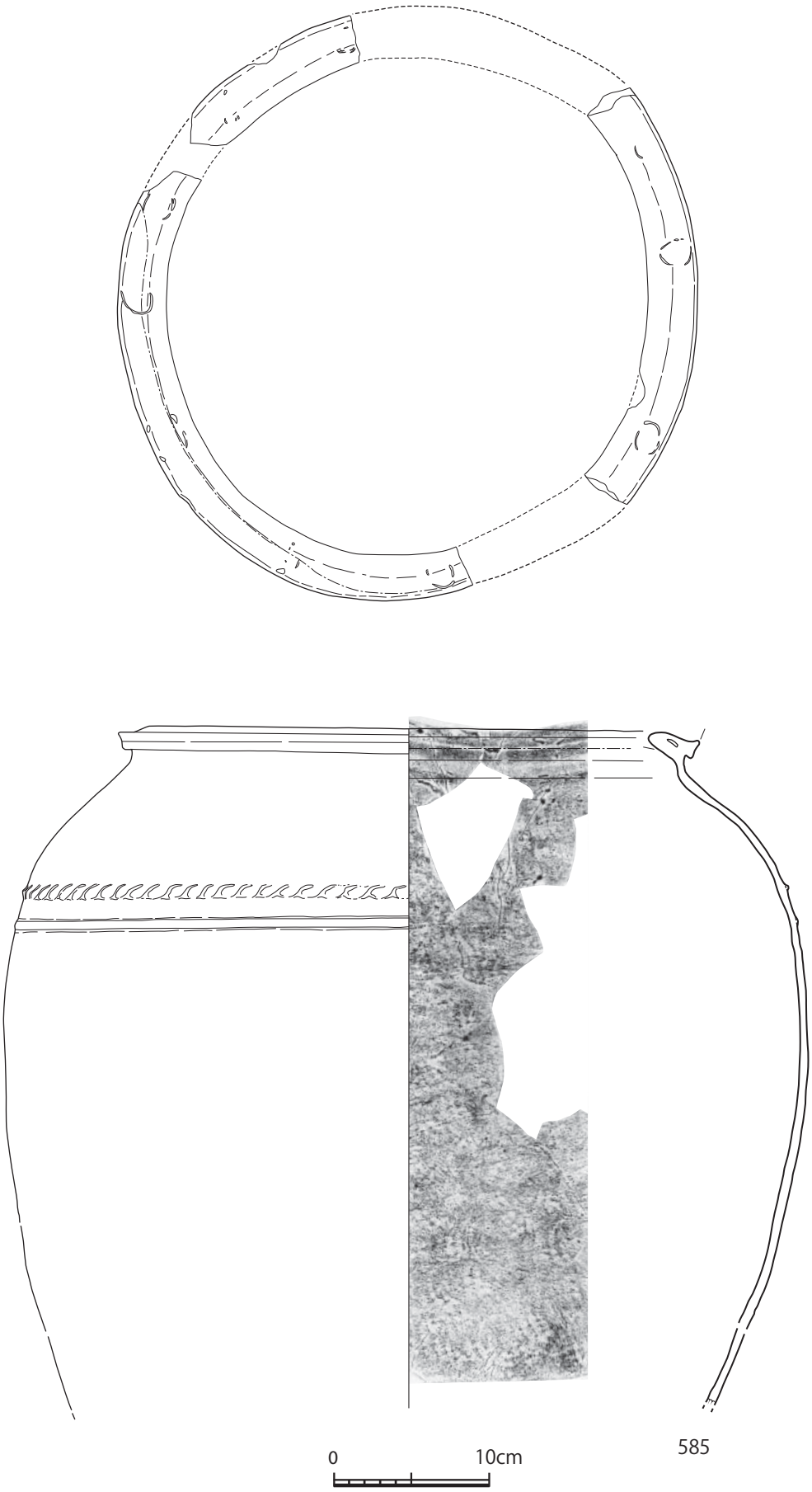
SC120（第 71・72 図）

C2 区で検出しており、遺構の東側は現代の攪乱により既に消失している。そのため、平面形態や規模は判然としない。検出面からの深さは最深部でも 13cm 程とかなり浅い。埋土の下層には鉄分が沈着する。

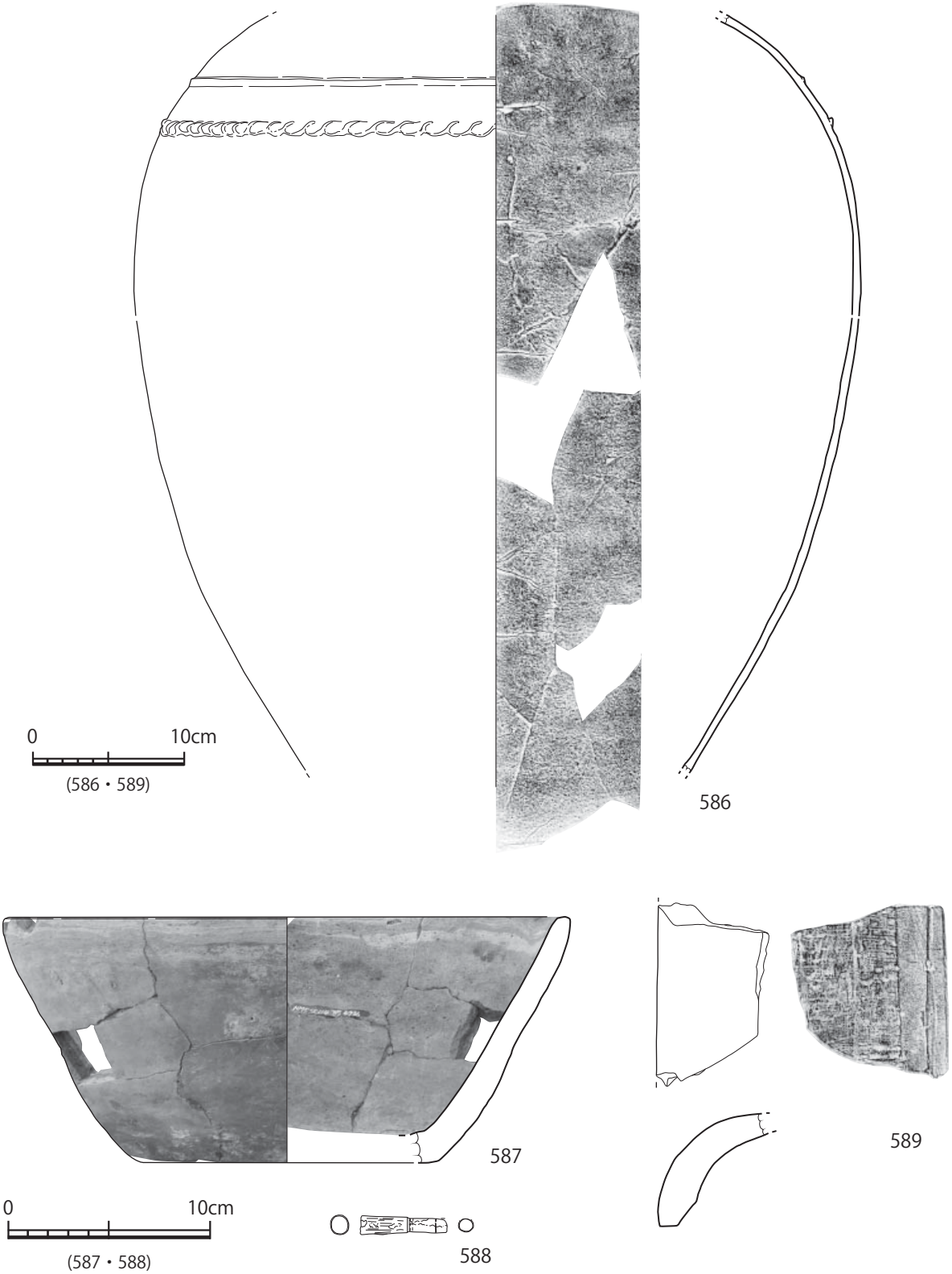
605 が出土遺物である。土師質の土製品で、型作りにより中央に天神様が、その両脇に狛犬が配されている。

SC122（第 71 図）

C・D1 区で検出しており、SC119 を切る。長軸 0.52 m、



第 67 図　SC114 出土遺物実測図③（S=1/4）



第 68 図　SC114 出土遺物実測図④（S=1/3・1/4）

短軸 0.42 mの不整楕円形を呈している。検出面からの深さは最深で 80cm 程を測る。

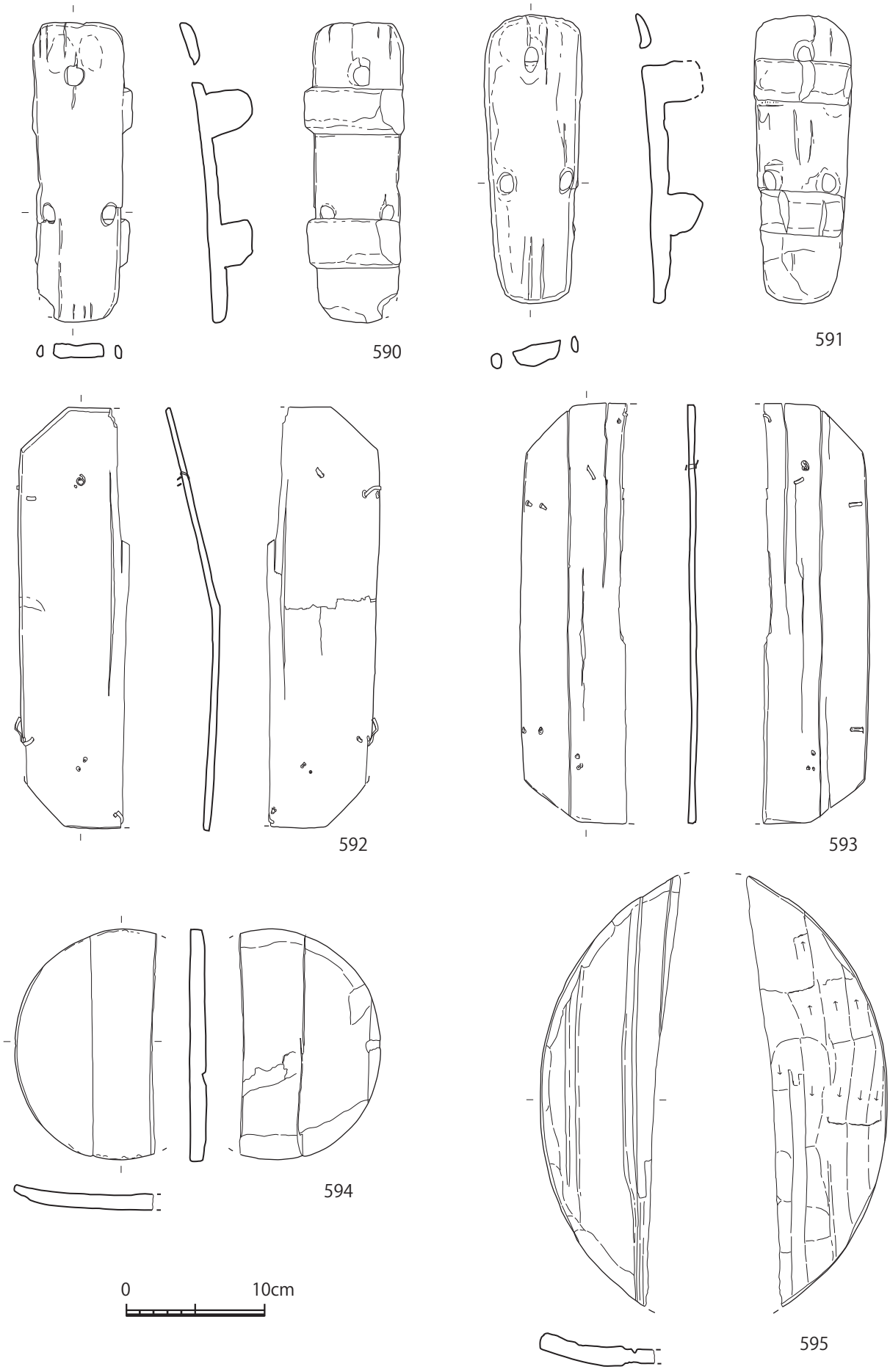
遺物は出土していない。

SC124（第 71・72 図）

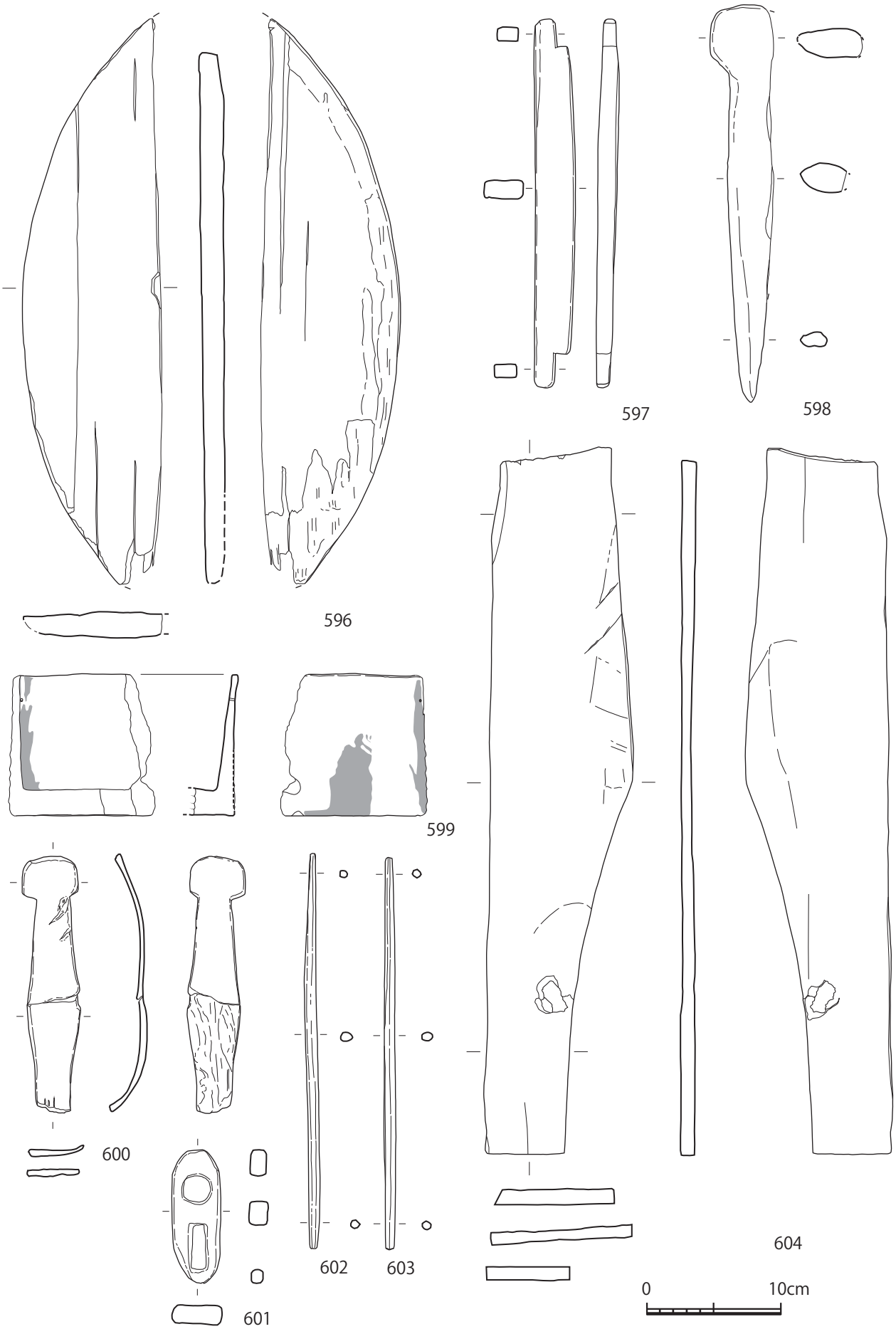
C2 区で検出しており、長軸 1.15 m、短軸 0.95 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは最深で 50cm 程を測る。埋土の上層からは大量の瓦片が出土していることから、本土坑も瓦をまとめて廃棄したゴミ穴であると考えられる。

606 は埋土の下層より出土した染付の小杯である。コバルトにより文字が書かれる。近代の所産であろう。

SC125（第 71 図）



第 69 図　SC114 出土遺物実測図⑤（S=1/4）



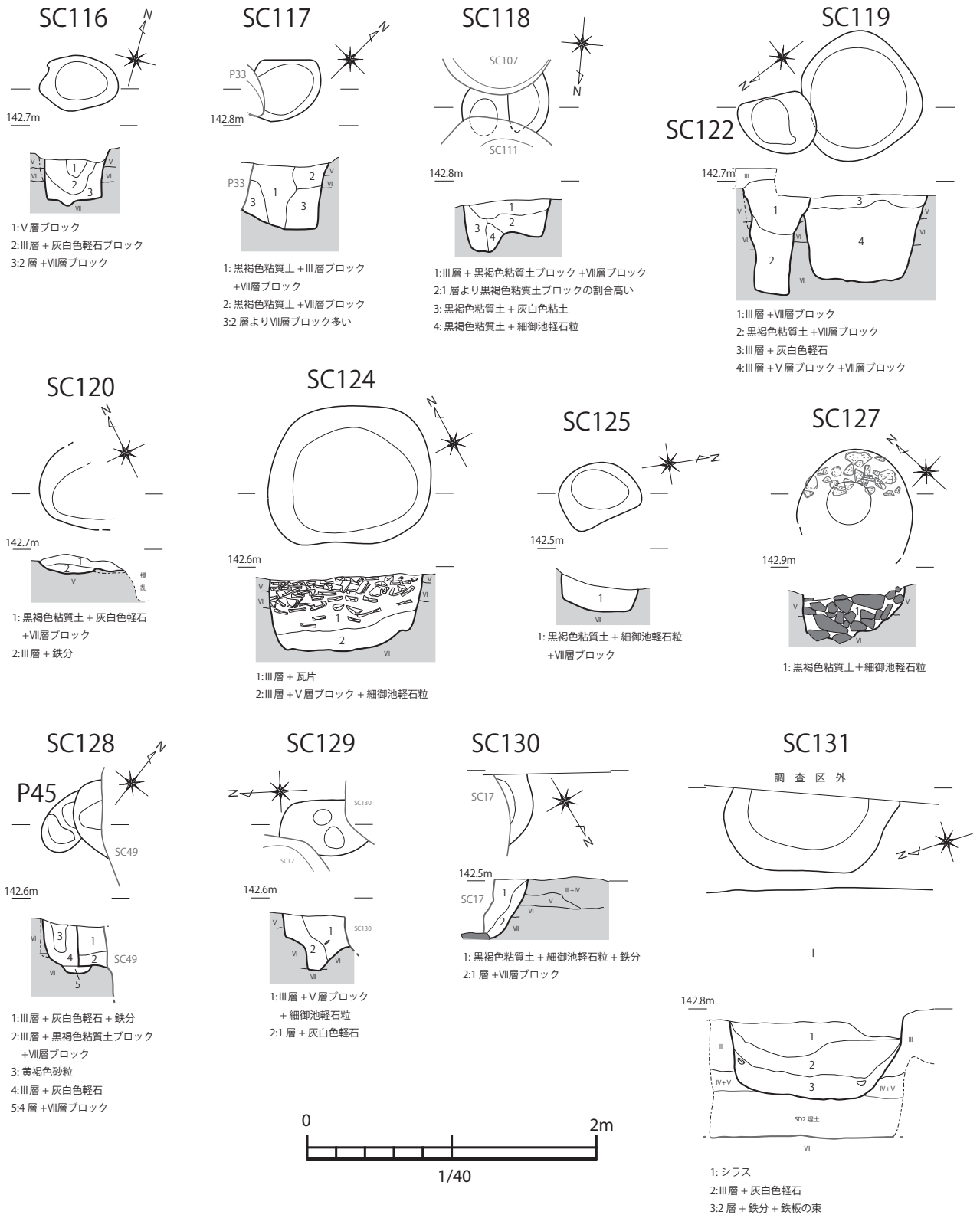
第 70 図　SC114 出土遺物実測図⑥（S=1/4）

C1・2 区で検出しており、長軸 0.67 m、短軸 0.4 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 25cm を測る。

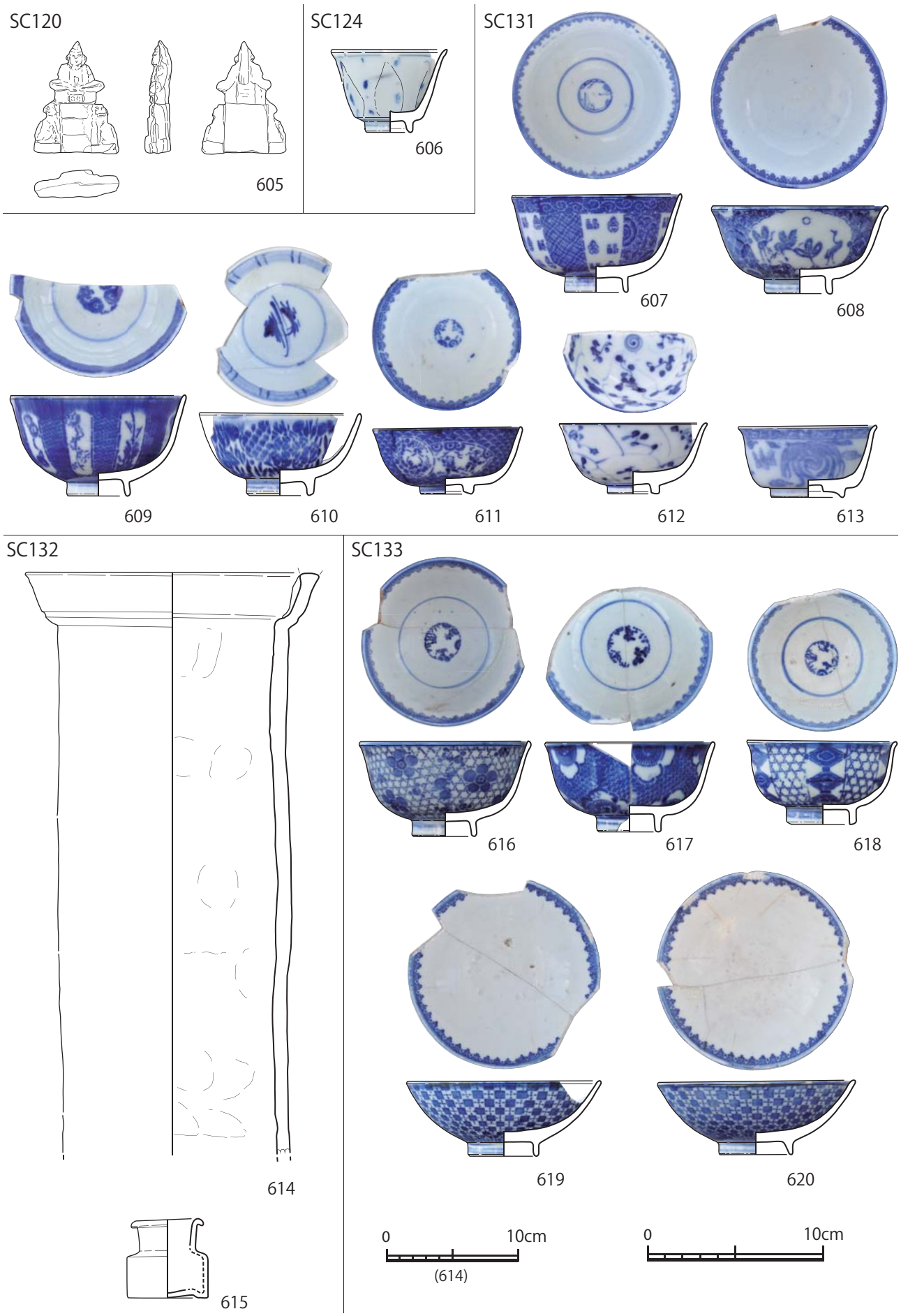
遺物は出土していない。

SC127（第 71 図）

C2 区で検出しており、現代の攪乱により遺構の南西側は削平されている。径 0.8 m程の円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは 46cm 程を測り、埋土には多数の軽石が充填されていた。SB3 と同様の壺地業のような遺構と考えられるが、その他の建物を構成するような土坑の配列は見いだせなかった。やはり建物の自重のためか、充填された軽石の最下部は地山層に落ち込



第 71 図　SC116 ～ 120・122・124・125・127 ～ 131・P45 実測図（S=1/40）



第 72 図　SC120・124・131 ～ 133①出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

んでいた。遺物が出土していないため、帰属時期は判然としない。

SC128（第 71 図）

D2 区で検出されており、SC49 に切られ、P45 を切る。遺構の平面形態及び規模は判然としないが、検出面からの深さは最深で 28cm を測る。

遺物は出土していない。

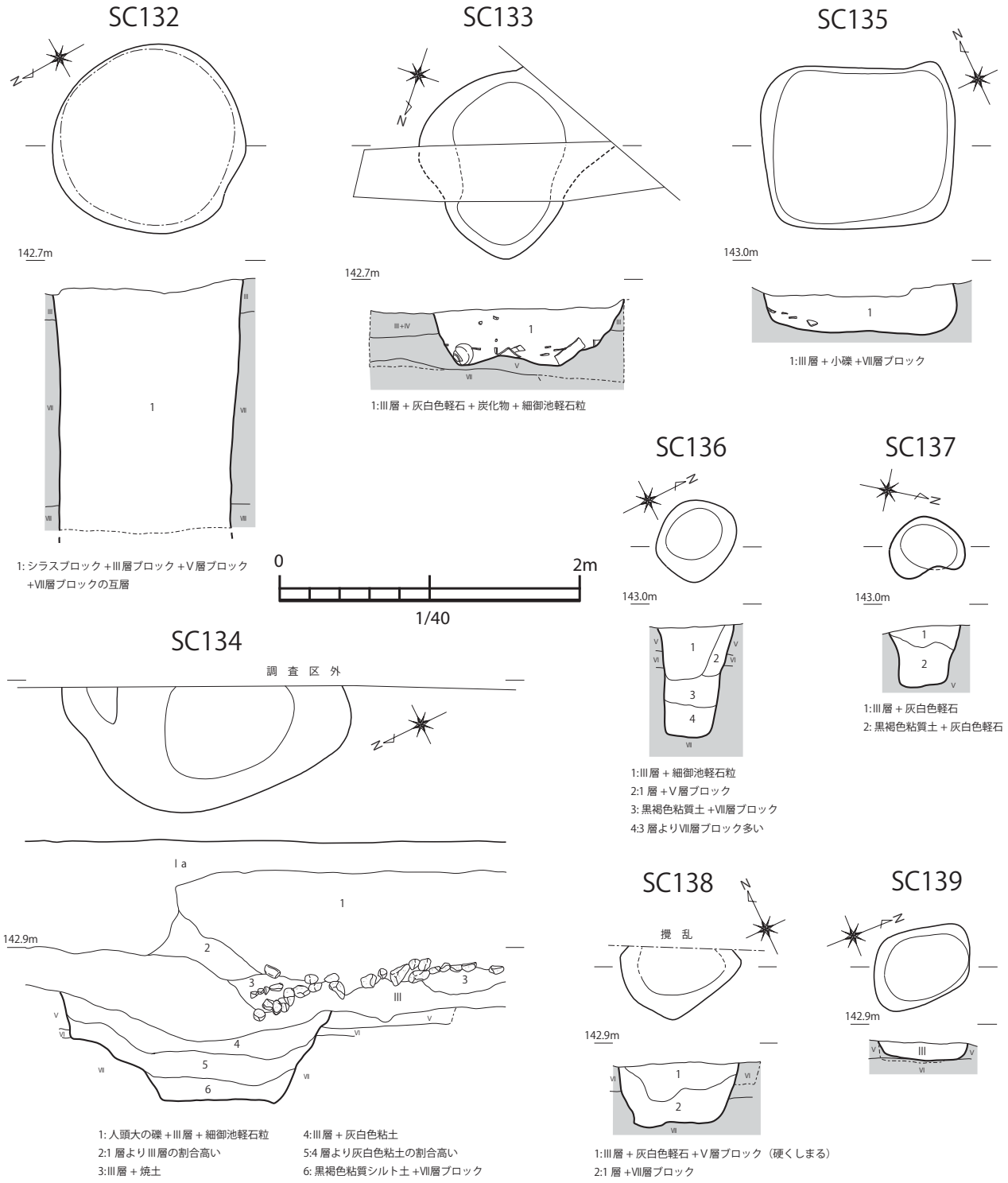
SC129（第 71 図）

D1 区で検出しており、SC12・17 に切られる。長軸 0.45m 以上、短軸 0.38 mの楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 37cm を測る。

遺物は出土していない。

SC130（第 71 図）

D1 区で検出されており、遺構の大部分は SC17 に切られるため、形態・規模共に判然としない。検出面からの深さは 40cm 程を測る。



第 73 図　SC132 ～ 139 実測図（S=1/40）

遺物は出土していない。

SC131（第 71・72 図）

E3 区で検出しており、SD2 の上部を切る。遺構の東側は調査区外に延びる。長軸 1.17 m程の楕円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは最深部で 54cm を測る。

遺物は 607 ～ 613 が出土している。607 ～ 610 は染付碗で、いずれも型紙摺による資料である。609・610 はコバルトが滲んでいる。611 ～ 613 は小杯で 611 は型紙摺、613 は銅版転写によるものである。いずれも明治以降、近代の所産と考えられる。遺構自体はこの時期のゴミ穴であろう。

SC132（第 72・73 図）

C2 区で検出されており、径約 1.25 mの円形を呈する。検出面から 1.6 m以上下位まで掘り下げたが、底面は確認できていない。埋土はシラスや御池軽石ブロックが互層状に堆積する。短期間の埋め戻し土と考えられる。

遺構の中央からやや東にずれたところに 614 の土管が埋め込まれていた。口縁部内面にはモルタル状の接着剤考えられる付着物が認められる。土管自体は苗代川系の薩摩焼の可能性が考えられる。この土管は手押しポンプ式の井戸の配管として埋設されたものと考えられる。この他に 615 のガラス瓶も出土している。

このように、本土坑は手押しポンプ式の井戸跡であったものと考えられ、大正期以降の所産と推測される。

SC133（第 72 ～ 76 図）

E3 区で検出しており、遺構の南側は調査区外に延びる。平面形態は長軸 1.1 m以上、短軸 1.07 mの不整楕円形を呈するものと考えられる。埋土は一層で、炭化物と共に多くの遺物が出土している。

616 ～ 658 が出土遺物である。616 ～ 624 は磁器碗である。616 ～ 621 はコバルトを用いた型紙摺である。622 は銅版転写で外面に波文、見込みに鶴文を配す。623 ～ 625 はやや小型の碗。623 は釉下彩磁器碗で、銅版転写により竜文と唐草文があしらわれる。624 はスタンプ印判により花文が描かれる。625 ～ 629 は小碗である。625・628 は同様の資料で、スタンプ印判による「寿福」の文字がみえる。629 には「都城市大王町　津曲商店　電話七三八番」の文字がみえる。都城市が誕生した 1924 年（大正 13 年）以降の資料といえる。630 は湯飲み碗で、既に消えかかってはいるが「特別大演習　中町青年団」の金文字がみえる。これは陸軍特別大演習を指すと考えられ、演習が実施された 1935 年（昭和 10 年）の資料と思われる。631 ～ 636 は小杯である。631 は鮮やかなコバルトを用いてねじ花文をあしらう。632 ～ 636 もコバルトを用いた銅版転写による資料である。637 は吹き墨による釉下彩磁器猪口である。638 は型押しの菊花皿。639・640 は型紙摺による碗蓋。641 ～ 648 は皿で、641 は型紙摺による梅・笹文があしらわれる。642 には網目文が描かれ、見込みには「大化年製」の銘がみえる。643 は瀬戸・美濃系でクロム釉が掛けられる。明治期。644 は型紙摺による皿で、見込みにはハリ支え痕が残る。高台内には「大△乙」の線刻がみられる。645 ～ 647 は輪花皿で、645・646 はコバルトを用いた型紙摺である。いずれも蛇ノ目凹形高台を呈する。648 は型押しの白磁菊花皿である。649 は吹き墨による水注。650 は網目文があしらわれた急須である。651・652 は鉢である。651 は内面に果物の上絵があしらわれ、高台内に「MIKA80　CHINA」の銘があることから、中国製であろうか。

653 ～ 656 は陶器である。653 は薩摩焼苗代川系の擂鉢で、18 世紀後半～ 19 世紀の所産。654 も薩摩焼苗代川系の鉢で同様の年代が付与できる。655 は鬢盥である。656 はやはり薩摩焼苗代川系の土瓶で、注口下に重ね焼きの痕が残る。18 世紀後半～ 19 世紀代の資料である。

657 は無色透明の目薬瓶で、「目薬　上池液」のインボスがみえる。658 も無色透明の薬瓶であろう。

以上のような出土遺物からは、18 世紀後半～昭和初期までの時間幅が認められる。おそらく明治～昭和初期にかけてのゴミ穴であると推測される。

SC134（第 73・76 図）

D3 区で検出しており、遺構の南東側は調査区外に延びていく。長軸 1.9 m程の楕円形を呈するものと考えられる。遺構の北東側にはテラスが付く。埋土の上層には基本土層のⅢ層が堆積する。

659 ～ 666 が出土遺物である。659 は薩摩磁器の染付碗で、19 世紀中頃～幕末の所産。660 は肥前系の染付鉢である。661 は薩摩磁器の染付香炉。19 世紀の所産。662 は青磁の小杯。663 は染付皿である。664 は瀬戸・美濃系の皿で、見込みには海老文がみえる。明治期。

665 は薩摩焼加治木・姶良系の小皿。666 は龍門司系の土瓶蓋で、18 世紀後半以降の所産であろう。

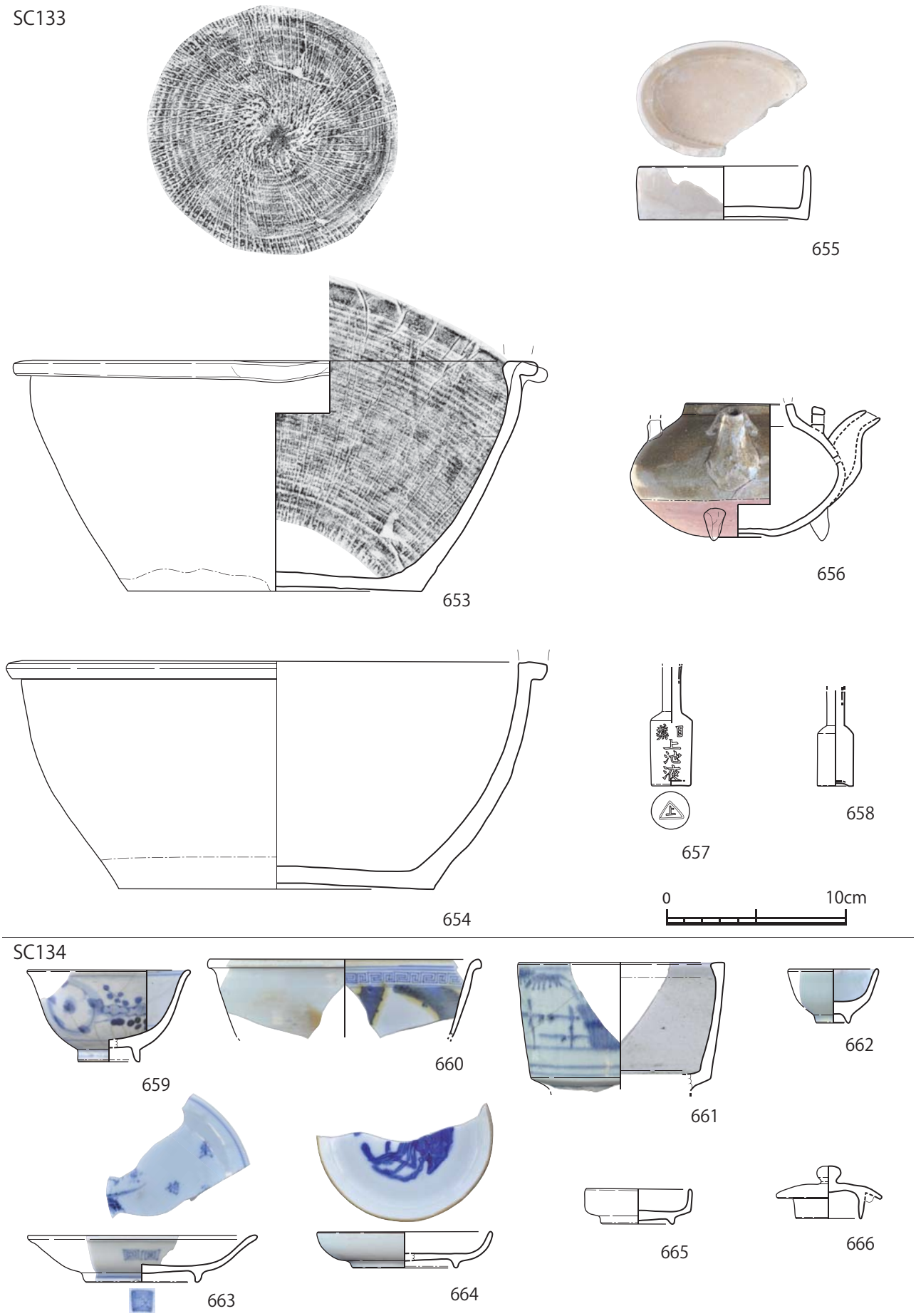
SC135（第 73・78 図）

C2 区で SX1 を完掘した後に検出している。長軸 1.27 m、短軸 1.08 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは最深部で 32cm を測る。

667 ～ 677 が出土遺物である。667 は型紙摺の碗で明治期。668 は薩摩磁器の染付碗で、19 世紀中頃～幕末の所産。669 は肥前系の小碗で笹文が配される。18 世紀後半～ 19 世紀の所産。670 ～ 674 は小杯である。671 に

第 74 図　SC133 出土遺物実測図②（S=1/3）

第 75 図　SC133 出土遺物実測図③（S=1/3）



第 76 図　SC133④・134 出土遺物実測図（S=1/3）

は楼閣山水文があしらわれる。672 は鮮やかなコバルトによる瑠璃釉が全面に施される。674 は笹文があしらわれる薩摩磁器である。19 世紀代の所産。675 は瀬戸・美濃系の皿で、牡丹文がスタンプされる。幕末～明治期の所産であろう。676 は白磁の脚付小杯。677 は薩摩焼龍門司系の急須である。

以上のような出土遺物からは、本遺構は幕末～明治期の所産である可能性が高い。

SC136（第 73・78 図）

B3 区で検出しており、SD1 の上部を切る。径約 0.5 mの円形を呈し、検出面からの深さは 75cm を測る。埋土にはブロック状の堆積が目立つ。

埋土上層からは 678 が出土している。薩摩焼加治木・姶良系の香炉で、18 世紀後半以降の所産と考えられる。

SC137（第 73 図）

B・C3 区で検出しており、径約 0.5 mの不整円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 40cm 程となる。

遺物は出土していない。

SC138（第 73 図）

B3 区で検出しており、遺構の北側は水道管によって破壊される。長軸 0.68 mの楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは 42cm を測る。

遺物は出土していない。

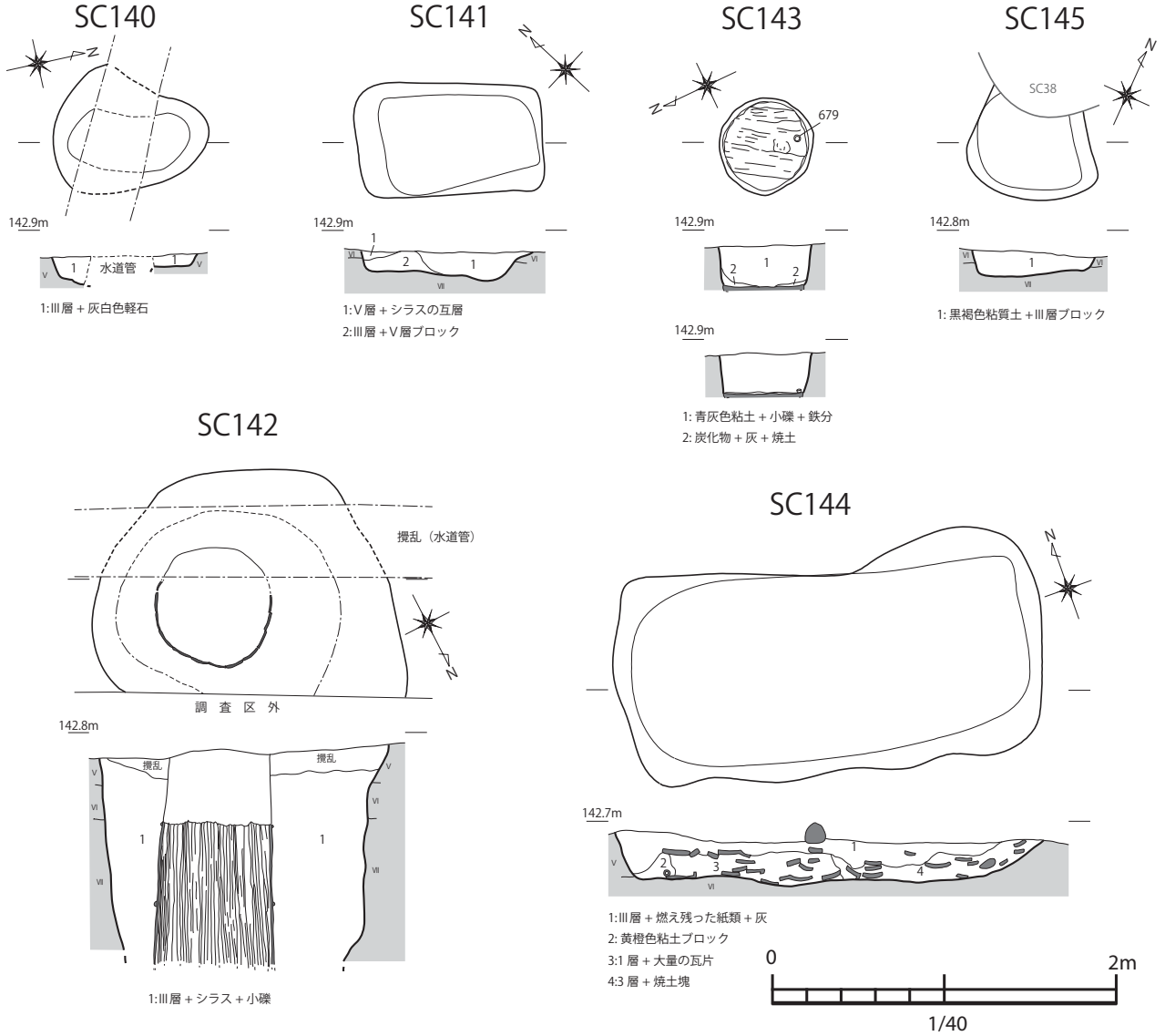
SC139（第 73 図）

B3 区で検出しており、長軸 0.65 m、短軸 0.58 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深でも 12cm と浅い。埋土には基本土層のⅢ層が堆積する。

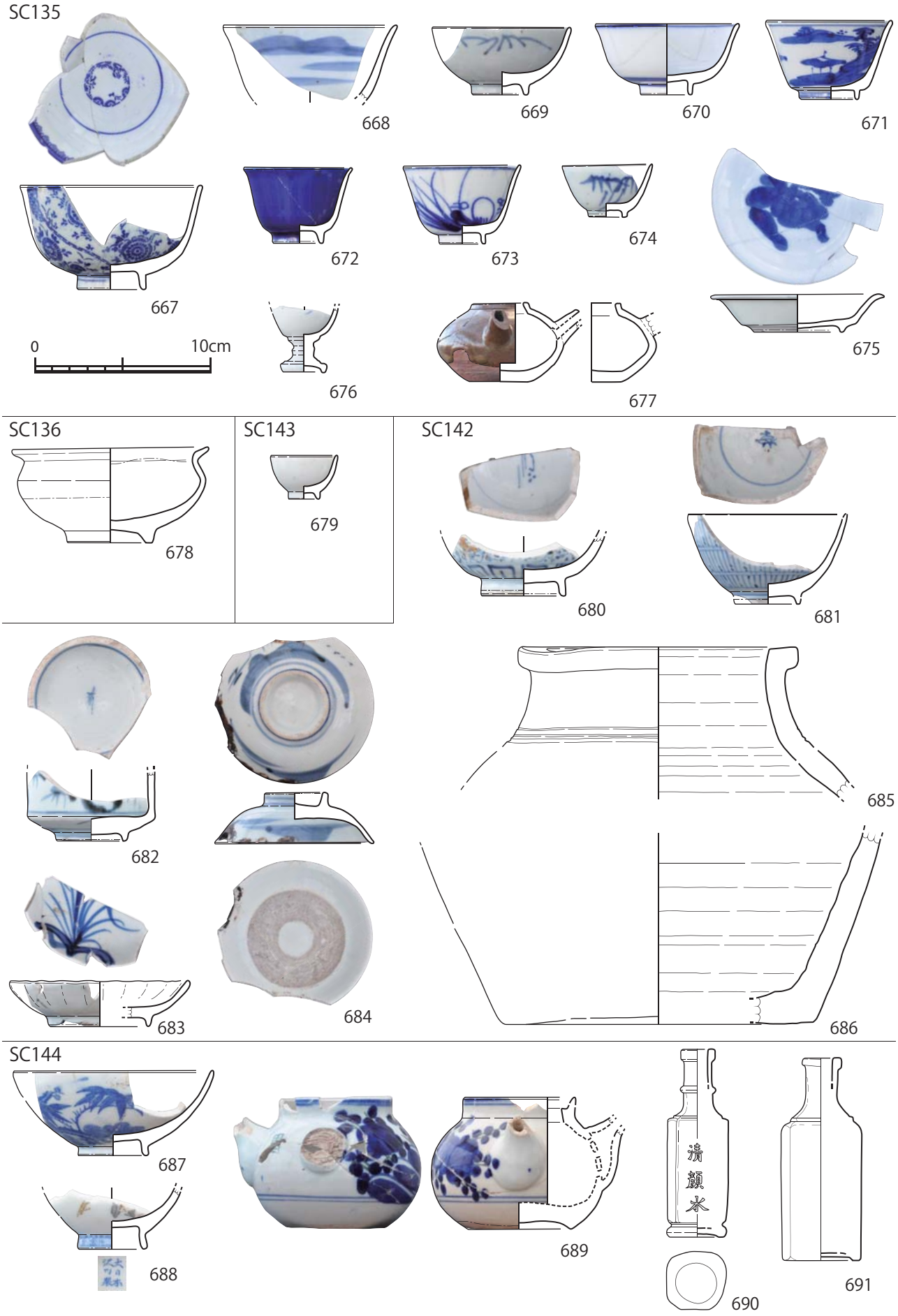
遺物は出土していない。

SC140（第 77 図）

B4 区で検出しており、遺構の中央部を水道管が破壊する。長軸 0.9 m、短軸 0.7 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深でも 16cm を測るのみである。



第 77 図　SC140 ～ 145 実測図（S=1/40）



第 78 図　SC135・136・142 ～ 144 出土遺物実測図（S=1/3）

出土遺物は小片のため図化し得なかった。

SC141（第 77 図）

B3 区で検出しており、P58 を切る。長軸 1.1 m、短軸 0.64 mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 16cm 程となる。埋土にはシラスが混ざる。

出土遺物は小片のため図化し得なかった。

SC142（第 77・78 図）

B・C4 区で検出しており、遺構の南側は水道管により攪乱を受け、北側は調査区外に延びる。そのため、全体像は不明であるが、おそらく径 1.7 m程の円形を呈するものと考えられる。深さ 1.2 mの地点まで掘り下げているが、底面はみえていない。土坑の中央に木製の井戸枠が確認できたが、その内側は水道管施設の際と考えられる攪乱を受け、シラス混じりの土が充填される。井戸枠自体は腐食し、取り上げられる状態ではなかった。裏込め土として基本土層のⅢ層やシラス、小礫が充填される。

680 ～ 686 が出土遺物である。いずれも裏込め土より出土している。680 は染付碗で、薩摩磁器であろうか。681 は薩摩磁器の染付碗で、外面には暦文、見込みには虫文と圏線があしらわれる。18 世紀末の所産。682 も薩摩磁器で、染付筒形碗である。雪持笹文が施される。18 世紀末～ 19 世紀初頭の所産である。683 は染付の輪花皿で、明治以降の所産であろう。684 は薩摩磁器の端反碗蓋で、内面は蛇ノ目釉剥ぎされる。19 世紀中頃～幕末の所産。

685･686 は沖縄産の陶器壺である。頸部に沈線が入る。

以上のような出土遺物からは、概ね 19 世紀代の所産である可能性が高いといえる。

SC143（第 77・78 図）

C4 区で検出しており、SD1 と SC152 を切るものと推測される。いわゆる埋桶で、径 0.56 mの円形の掘り形に木桶が埋設される。木桶自体は腐食が進み、取り上げることはできなかった。断ち割って確認したが、掘り形はほぼ桶の大きさと同じに掘られているようである。底面において 679 の白磁猪口が出土している。

寄生虫卵分析を実施しているわけではないため確定はできないが、おそらく厠跡であるものと推測される。

SC144（第 77・78 図）

D2･3 区で検出しており､SC146 を切る。長軸 2.48 m、短軸 1.30 mの不整長方形を呈する。検出面からの深さは最深部で 28cm を測る。埋土には燃え残った文章類や灰が多数確認され、大量の瓦片も混入していた。

687 ～ 691 が出土遺物である。687 はコバルトによる染付碗で近代の所産。688 は銅版転写で高台内には「大日本沢田製」の銘がみえる。689 は鮮やかなコバルトを用いた急須である。

690・691 はガラス瓶。どちらも無色透明の化粧瓶と考えられ、690 には「清顔水」のエンボスがみられる。

燃え残った文章には年代が書かれたものはなかったが、染付磁器の年代からはやはり明治以降、近代の所産であるものと考えられる。大量の文章や瓦が廃棄されていることから、ゴミ穴として構築された土坑と考えられる。

SC145（第 77 図）

C2 区で検出しており、SC38 に切られる。そのためその形態・規模共に判然としない。検出面からの深さは 15cm 程と浅い。

遺物は出土していない。

SC146（第 79 図）

D3 区で検出しており、SC144 に切られる。径約 1.5 mの不整円形を呈するものと考えられる。遺構の南側にテラス状の段差が付く。検出面からの深さは最深部で 75cm を測る。底面から若干浮いた状態で多くの砂岩礫が出土しているが、加工痕や墨書等は認められなかった。

遺物は出土していない。

SC147（第 79・80 図）

C3 区で検出しており、SB2 の軽石基礎を切っている。長軸 1.3 m、短軸 0.94 mの不整形を呈している。遺構の東側にテラス状の段差が付く。検出面からの深さは 33cm 程となる。埋土には小礫や瓦片が含まれていた。

692･693 が出土遺物である。692 は白磁の薄手酒杯で、見込みに山の絵と文字が描かれる。693 は無色透明の薬瓶。

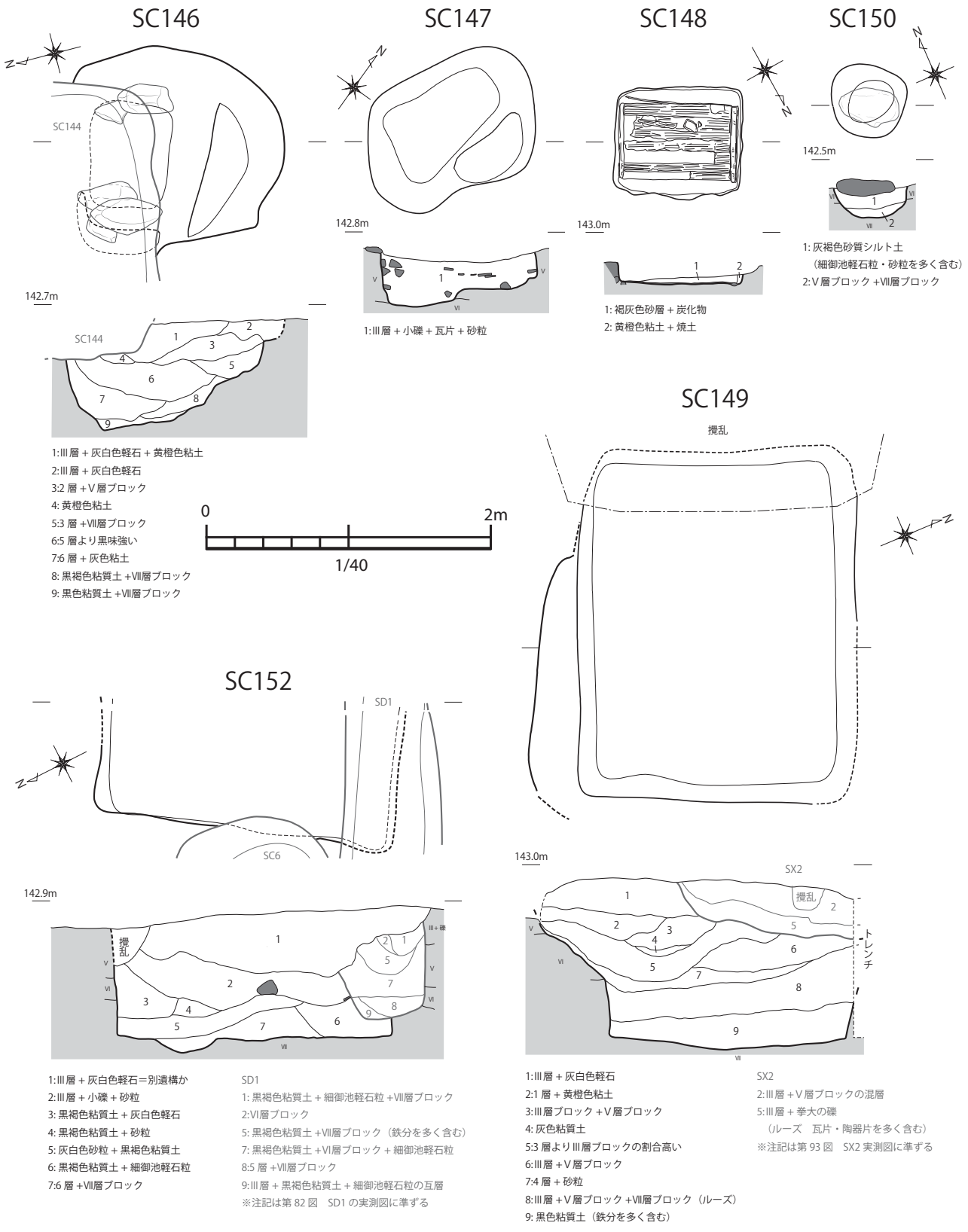
SC148（第 79 図）

C3 区で検出しており、SB2 の軽石基礎を切っている。長軸 0.9 m、短軸 0.8 mの長方形を呈しており、検出面からの深さは約 15cm 程と浅い。底面では両端に金属が付く木箱の底板と考えられる木質が検出されている。その中には 10cm 程の銅製と考えられる蓋付きの箱が検出された。この銅製の箱の中には炭化した木材片が入っていた。外側の木製箱もその中に残っていた銅製の蓋付き箱も遺存状態が悪く、木製箱については取り上げることができなかった。遺構自体の用途も不明である。

これ以外に遺物は出土していない。

SC149（第 79 ～ 81）

C2・3 区で検出しており、SB1、SX2 に切られる。上部については大部分を両遺構によって破壊されるため、平面形態は判然としない。さらに、遺構の西側は現代の攪乱によって広く破壊される。しかし、底面や断面の形態から、一部南側の掘り形上面が広がるが、概ね掘り形



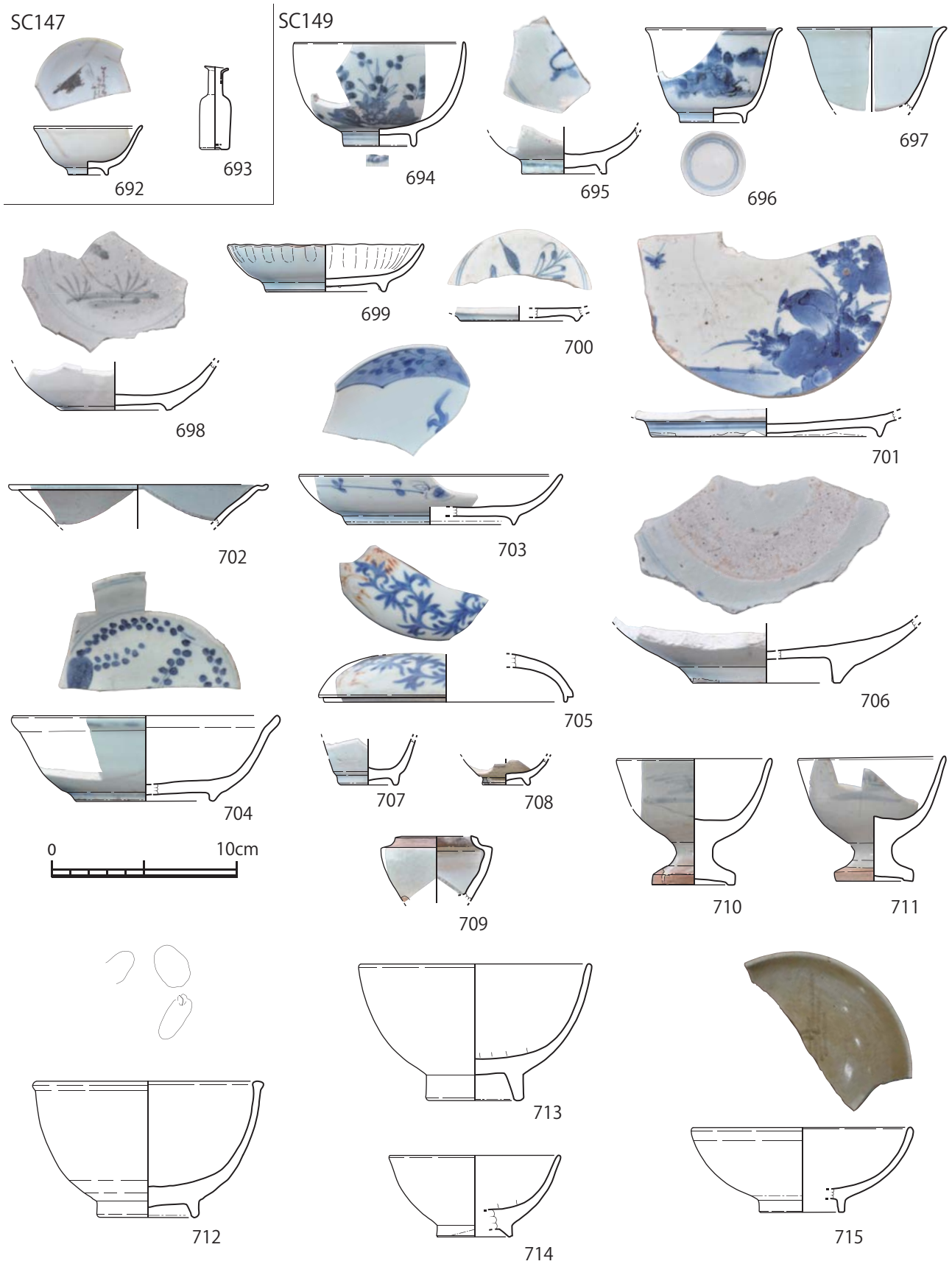
第 79 図　SC146 ～ 150・152 実測図（S=1/40）

の壁は垂直に近い角度で立ち上がるものと推測される。遺構の深さは少なくとも 1.2 m以上はあったものと考えられる。

断面を観察すると、遺構が埋没した状態で何らかの理由により一度掘り返されたものと推測される。ただし、この時にも南側の遺構上面の広がりに沿って掘り形を破壊することなく掘られているため、別遺構の切り合いではなく同一遺構として理解した。このように、一部遺構の中位から南側にかけて壁の角度が変わり、鈍角に広がっていく範囲も認められるが、その他はきれいなほぼ

垂直の立ち上がりをみせるため、地下室として構築された遺構であると推測する。ただし掘り形上部のほとんどが切り合い等により破壊されていたこともあり、階段や足場と思われる窪み等は検出されていない。

遺物は埋土より大量に出土している。694 ～ 719 が出土遺物である。694 は肥前系染付碗で、外面にはコンニャ



第 80 図　SC147・149①出土遺物実測図（S=1/3）

ク印判がみられる。17 世紀末～ 18 世紀代の所産。695 は中国青花碗であろうか。同様の資料が SC114 からも出土している（577）。696 は肥前系の染付小杯。697 は白磁小杯である。698 は初期伊万里皿で、17 世紀前半の所産。699 は白磁輪花皿で、肥前系であろうか。700 は中国青花皿である。701 は肥前系の染付大皿で、高台内にはハリ支え痕がみられる。17 世紀後半の所産。702 は肥前系の溝縁皿で、1610 ～ 1630 年代の所産である。703 は肥前系染付皿で、17 世紀末～ 18 世紀前半の所産。上手である。704 は中国青花皿。705 は肥前系の色絵磁器で、蓋物蓋である。706 は染付大皿であろうか。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、圏線が認められる。707 は白磁小杯、708 は青磁小杯である。709 は白磁の蓋付き容器であろうか。710・711 は肥前系の染付仏飯器。

712 ～ 714・716 ～ 718 は薩摩焼、715 は肥前系の陶器である。712 は加治木山元窯の資料と考えられる碗である。見込みおよび高台畳付に砂目がみえる。高台内にも施釉される。17 世紀第 3 四半期の所産である。713・714 は加治木・姶良系碗。見込みが蛇ノ目釉剥ぎされる。18 世紀後半の所産。715 は肥前系の京焼風陶器碗である。17 世紀後半～ 18 世紀前半の所産。716 は苗代川系の甕、717 も苗代川系で壺である。いずれも口唇部に貝目を残す。17 世紀後半～ 18 世紀前半。718 は竪野系の獣足香炉で、18 世紀代の所産か。719 は鉄滓。

以上の出土遺物からは、概ね 17 世紀前半～ 18 世紀後半までの時間幅が認められる。そのため、遺構の帰属磁器を絞り込むことは難しいが、少なくとも 18 世紀代には遺構は廃絶され、埋没していた可能性が高い。よって本土坑は近世の地下室であったものと推測される。

SC150（第 79 図）

C3 区で SX2 を完掘した時点でその底面において検出している。径約 0.5 mの円形を呈し、検出面からの深さは 20cm 程を測る。遺構の上部には 40cm 程の砂岩礫がはまり込む。

遺物は出土していない。

SC151（第 7・81 図）

SB1 の断面図作成のために断ち割ったトレンチの断面でのみ確認されている土坑である。C3 区において SB1 や SC149、SX2 などと切り合う。断面で確認された切り合い関係からは SC149 や SX2 に切られるものと推測される。しかし、この切り合い関係により後出する遺構にほとんどが破壊されているため、平面プランや深さなども判然としない。

本遺構の埋土から出土した遺物として、720 がある。肥前系の白磁碗であるが、先述のように本来の形も分からないほどの切り合い関係にあるため、他の遺構に伴う遺物である可能性も否定できない。

SC152（第 79・81 図）

C4 区で検出しており、SC6 や SC143、SD1 に切られる。遺構の南東側は現代の攪乱ないしは別遺構の可能性がある落ち込みに切られており、判然としない。検出した範囲では一辺 2.08 mを測り、検出面からの深さは最深で 92cm を測る。掘り形壁は SC30 や SC149 と同様にほぼ垂直に立ち上がる。

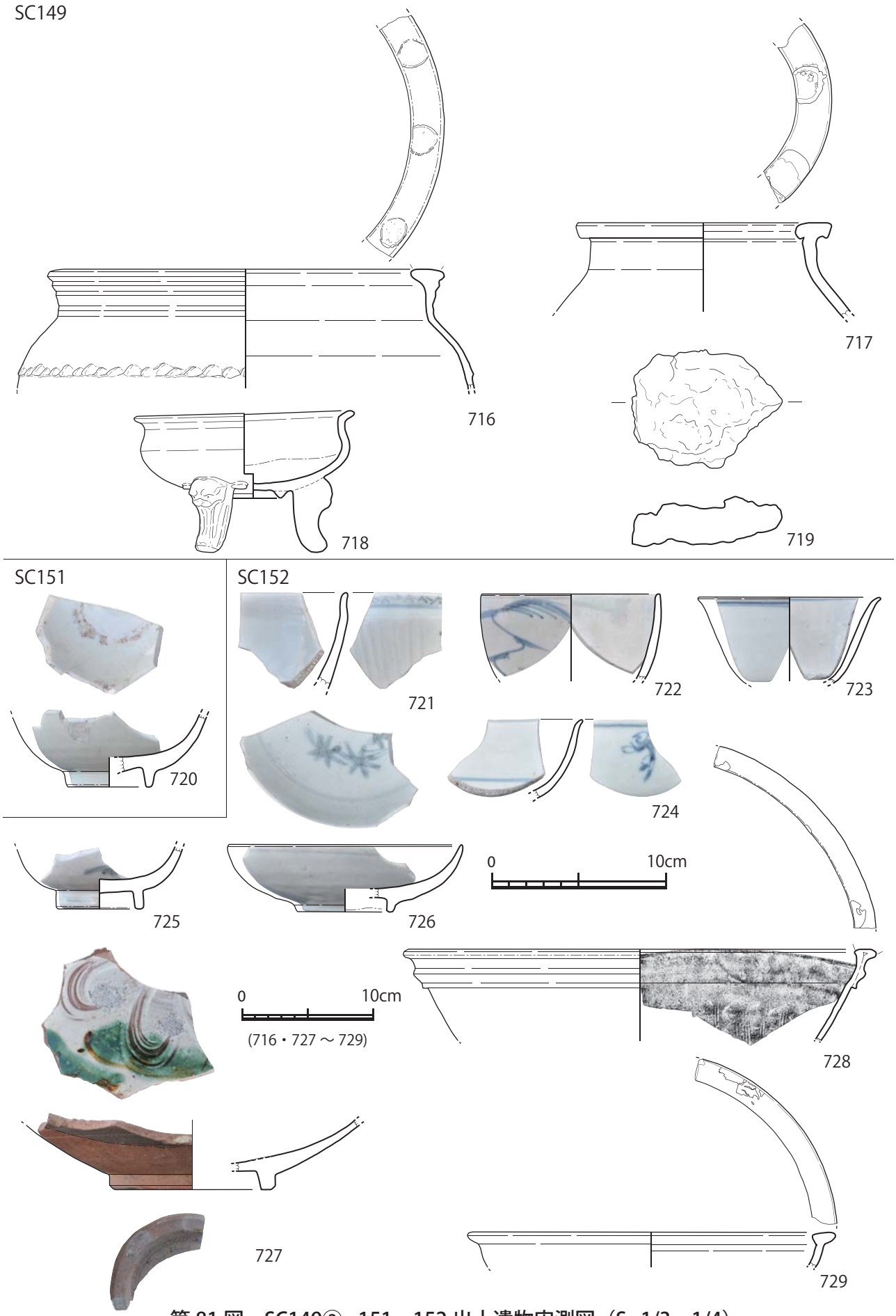
721 ～ 729 が出土遺物である。721 は天目形の肥前系染付碗で、縞状の浅い溝が巡る。17 世紀前半の所産である。722 ～ 724 は肥前系の染付碗。725 は波佐見産の染付碗で、18 世紀代の所産。726 は初期伊万里皿で、17 世紀前半の所産。

727 は白土、緑釉、鉄釉の三色を用いた三彩唐津の大鉢である。SC114 においても同様の資料が出土している（580・581）。17 世紀前半の所産と考えられる。728 は薩摩焼苗代川系の擂鉢で、口唇部には貝目がみえる。17 世紀中頃の所産。729 は備前焼の擂鉢であろうか。口唇部に目跡が残る。

上述の出土遺物をみてみると、概ね 17 世紀前半代の資料が大部分を占めるが、18 世紀代の資料も下層より出土しており、遺構の廃絶時期は 18 世紀代まで下げて考えなければならない。しかし、少なくとも近世の遺構である可能性は高く、遺構の形態などからはやはり地下室として使用された土坑である可能性を指摘できる。ただし、SC149 同様に、遺構掘り形の全てを検出しているわけではないため、階段や足場と考えられる付属施設は検出できていない。

以上、井戸跡や厠跡と考えられるものも含め、土坑として調査した遺構について報告した。遺物が出土していないものもあり、遺構の帰属時期を特定できていない土坑も少なくない。しかし、遺構の構造や出土遺物から、井戸跡である SC114、地下室の可能性がある SC30・149・152、廃棄土坑と考えられる SC115、地下式坑の可能性がある SC100 などは近世の遺構として間違いないと考える。また、ある程度まとまった量の遺物が出土しており、その帰属時期から SC29・92・97 なども近世の遺構である可能性がある。これらの遺構以外には、掘立柱建物跡である SB4・5 と SD1 のみがこの時期の遺構と判断できる。全体的な遺構の数からみれば、本調査区で近世の遺構は極めて限定的といえる。

上述の近世の所産と考えられる遺構の分布については、既に述べたように、調査区の中でも標高の高い北西側に位置することが指摘できる。



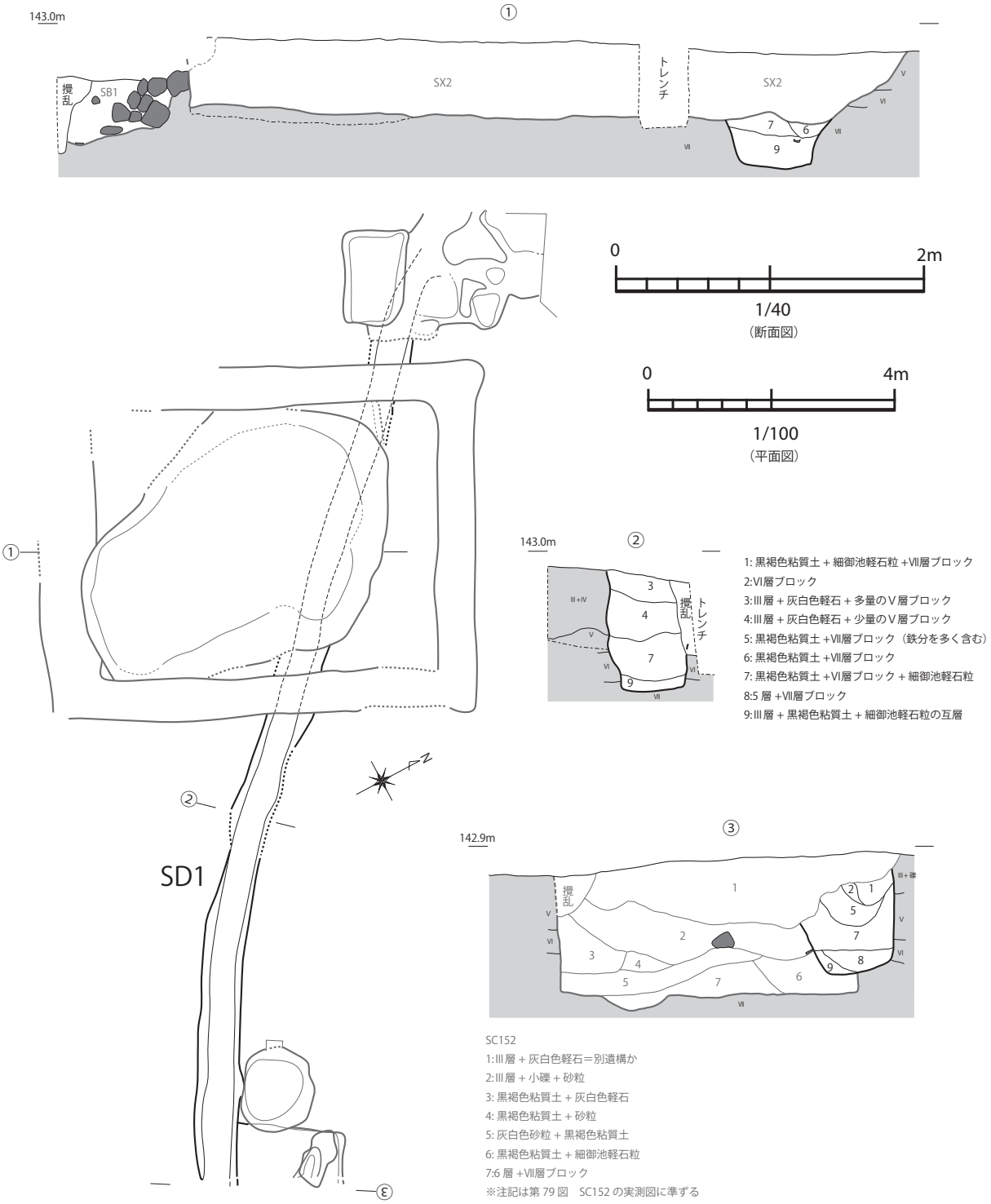
第 81 図　SC149②・151・152 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

3　溝状遺構（SD）

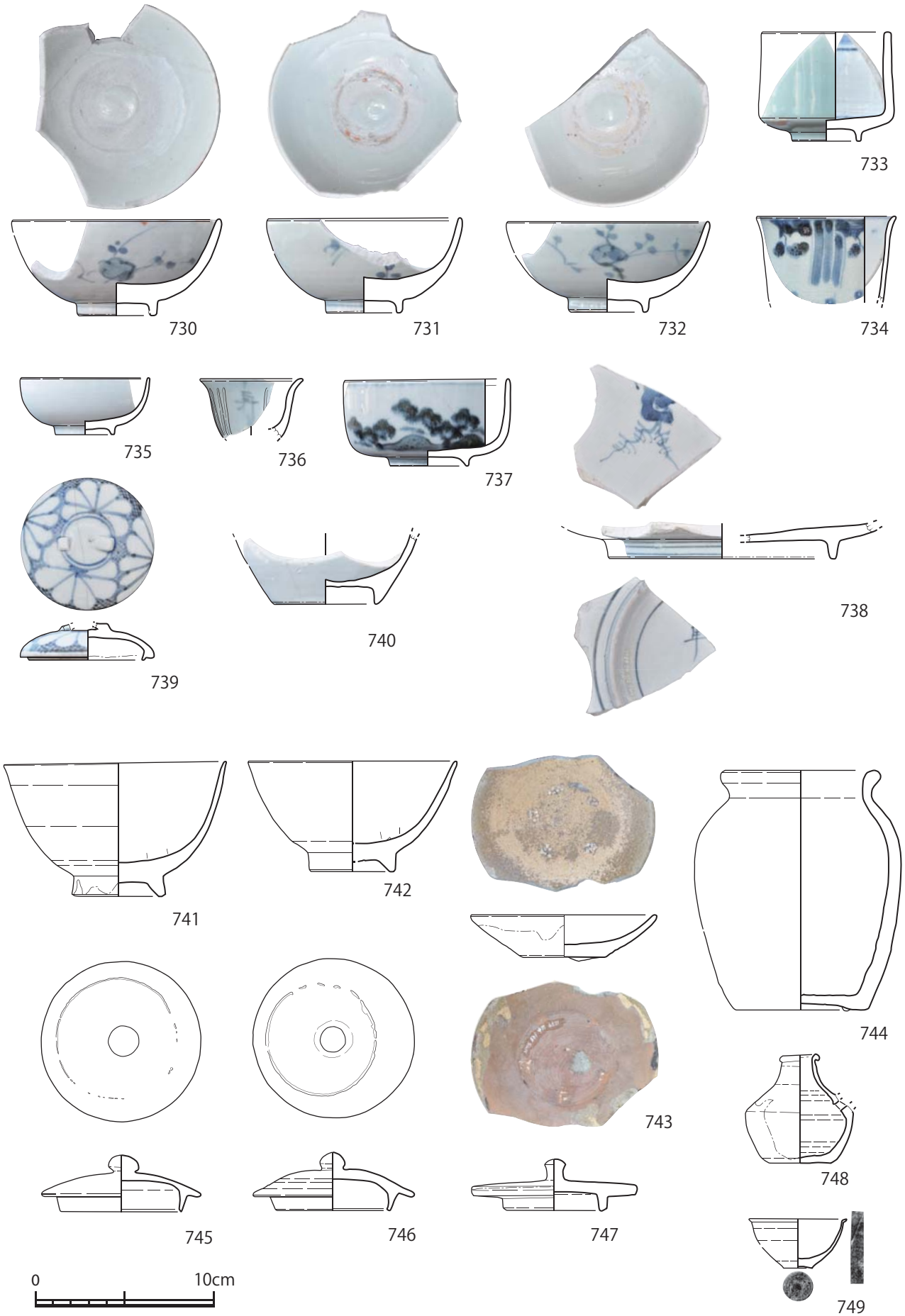
本調査区において検出した溝状遺構は、既に報告した中世期と考えられる SD2 と以下に報告する SD1 のみである。

SD1（第 82 ～ 84 図）

B3 区から C4 区にかけて、調査区を北西―南東方向に走行する溝状遺構である。SC115、SB1、SX2 に切られ、SC152 を切る。溝幅は 0.5 ～ 0.7 m で、検出面からの深さは 75 ～ 90cm 程である。地点による底面のレベル差はほとんどみられない。このことから、主に水路の役目を果たしていたとは考えにくい。今回の調査で検出された遺構群は、近世以降のものにほぼ限定されることもあり、江戸時代初期からの町屋地割を反映するような整然とした主軸方向をもつものばかりである。その中にあって、SD1 は大まかには北西―南西方向という走行方向ではあるものの、他遺構との主軸方向にずれをみせる。そのため、居住範囲を区画するような区画溝としての役割も見出しがたい。よって、その用途は不明といわざるを



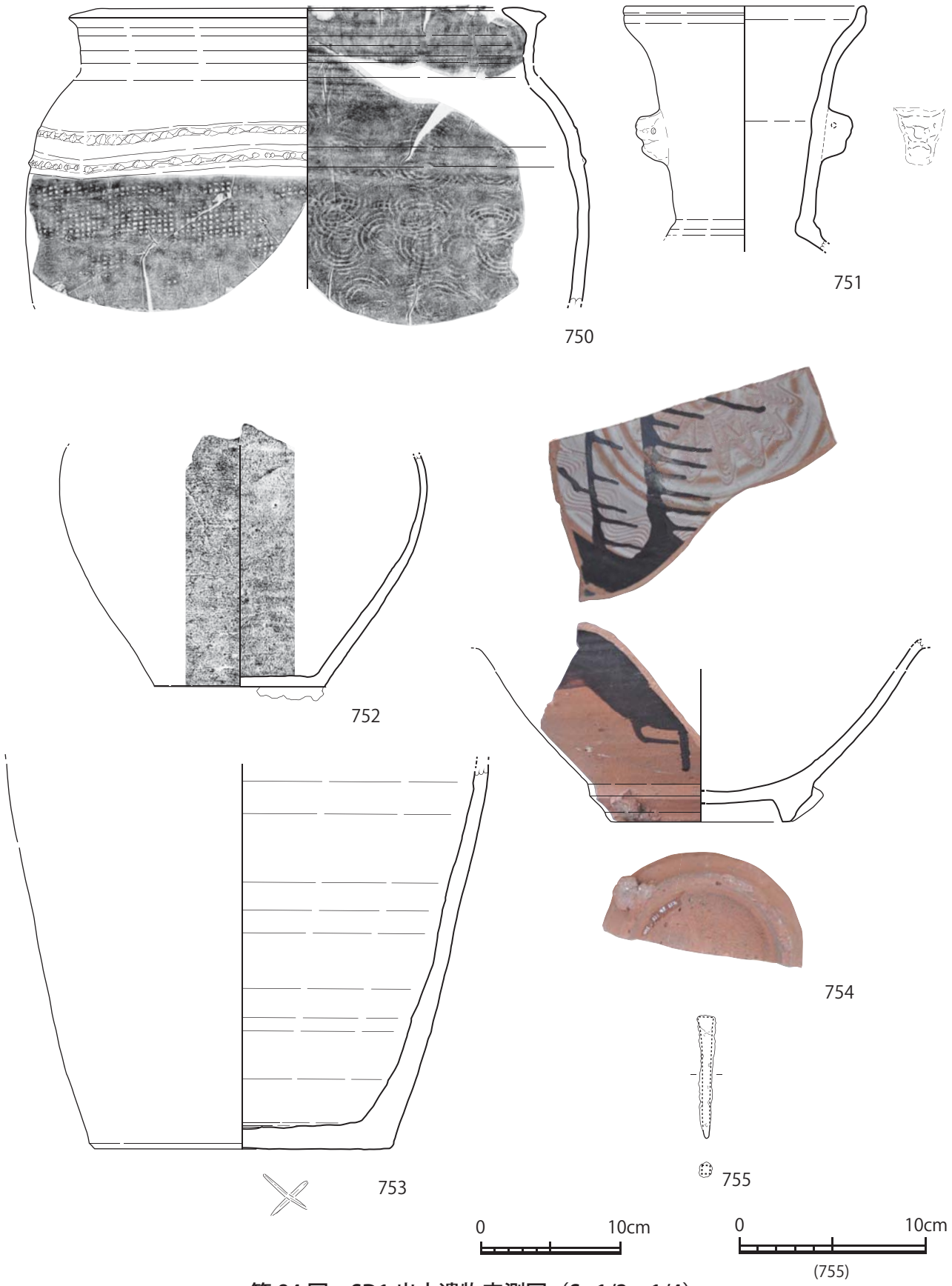
第 82 図　SD1 実測図（S=1/40・1/100）



第 83 図　SD1 出土遺物実測図①（S=1/3）

得ない。

遺物は多く出土している。730 ～ 755 が出土遺物である。730 ～ 732 は肥前系の染付碗で、形態・法量共に近似する。梅文があしらわれ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。18 世紀後半の所産。733 は肥前系の青磁染付の筒形碗である。18 世紀後半。734 は肥前系の染付小杯。735



第 84 図　SD1 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

は薩摩磁器の可能性がある白磁小杯。19 世紀代か。736 は肥前系染付小杯で、寿文がみえる。17 世紀前半の所産。737 は肥前系染付の蓋物。18 世紀後半の所産といえる。738 は肥前系染付の大皿で、高台内には「年」の銘のみが残る。18 世紀前半の所産。739 は肥前系染付の蓋物蓋で、19 世紀代。740 は肥前系の白磁瓶である。

741・742 は薩摩焼加治木・姶良系の碗で、見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。742 の蛇ノ目釉剥ぎ部には別個体の高台の一部が貼り付く。18 世紀後半の所産。743 も加治木・姶良系の皿である。見込みと底部にはゴマ目が残る。744 は壺で苗代川系であろうか。近代。745・746 はいずれも苗代川系の土瓶蓋で、重ね焼きの跡が残る。747 は産地不明の陶器で、蓋物蓋。748 は加治木・姶良系の小型酒器である。749 は備前焼の餌擂鉢。750 は肥前系陶器の甕で、外面には 2 条の刻目のある突帯と格子タタキ、内面に同心円当て具痕が認められる。17 世紀代の所産といえる。751 は陶器の仏花瓶で、薩摩焼竪野系であろうか。全体的に鉄分が付着する。752 は薩摩焼苗代川系の壺で、内面には当て具痕が残る。また、底部には鉄板が付着する。17 世紀後半～ 18 世紀前半の所産。753 は沖縄産の陶器甕で、底部には「×」状の線刻がみられる。754 は肥前系陶器の大鉢で、白土を刷毛目塗りし、鉄釉を掛ける。高台には胎土目が残る。18 世紀前半の所産。755 は鉄釘と考えられる資料である。

以上、出土遺物の様相をみると、古手のものは 17 世紀前半代の資料がみえるが、中には 19 世紀代あるいは近代の可能性がある資料も出土している。かなりの時間幅が認められるが、主体となるのは 18 世紀後半代であろう。他遺構との切り合い関係をみると、18 世紀後半～ 19 世紀代を主体とする SC115 に切られ、18 世紀代と考えられる SC152 を切っている。これらのことから、遺構の廃絶時期は 18 世紀後半頃と推測される。ただし、溝状遺構という遺構の性格や、SX2 と切り合い関係にあることなどから、後世の遺物が混入しているものと考えられる。

4　井戸跡（SE）

ここでは、検出時より井戸枠の存在を確認しており、確実に井戸跡と断定できる土坑を報告する。このような井戸跡は 2 基検出しており、いずれも加治木石と呼ばれる凝灰岩を井戸枠として使用している。

SE1（第 85 図）

C3 区で検出しており、SB2 の軽石基礎を破壊して構築される。長軸 1.88 m、短軸 1.58 mの不整楕円形を呈している。深さ 1.1 mのところまで掘り下げているが、堆積する埋土がルーズで、石の井戸枠が崩落してきたため、安全面を考慮して完掘はしていない。

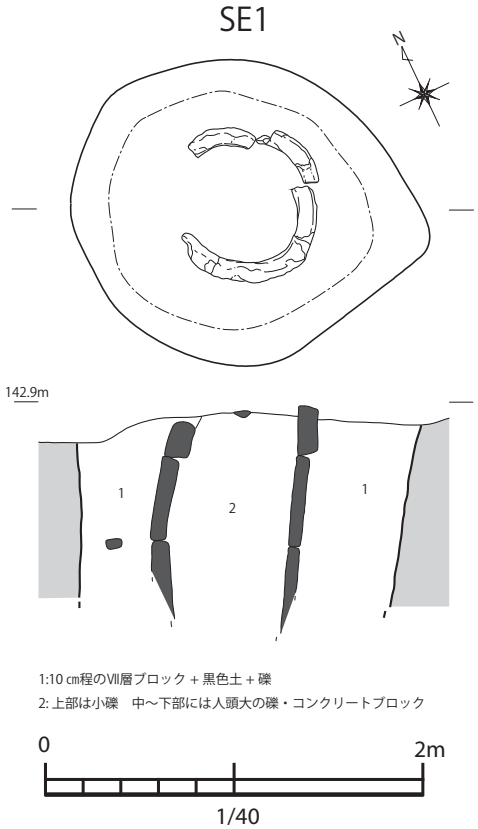
裏込め土には御池軽石（基本土層Ⅶ層）のブロックや礫を充填しており、井戸枠内部には人頭大の礫やコンクリートブロックが投げ込まれていた。時期が判別できるような遺物は出土していないが、コンクリートブロックが投げ込まれていることから、現代に廃棄された井戸である可能性が高い。

SE2（第 64 図）

C1・2 区で検出した SC108 の内部で確認している。SC108 の項でも報告したように、SC108 自体がこの SE2 を撤去するために重機で掘られた現代の土坑である可能性が高い。井戸が検出された地点には基礎の残骸と思われるコンクリート塊が投げ込まれている。

井戸枠については、SE1 と同様のいわゆる加治木石とよばれる凝灰岩が使用されている。しかし、かなり深い地点で検出されており、湧水もあることから十分に精査はできていない。井戸の掘り形は長軸 2 m、短軸 1.6 m 程の楕円形を呈するようである。

井戸から遺物が出土していないため、帰属時期は判然としないが、その形態からは SE1 と同時期で、現代に廃棄されたものと考える。



第 85 図　SE1 実測図（S=1/40）

5　特殊土坑（SH）

先に報告してきた土坑（SC）とは平面形態や規模等の特徴は大きく変わることはないが、検出時にほぼ砂といえるような埋土が確認されており、掘り形の外周に沿って鉄の塊が検出されたため、鍛冶関連遺構の可能性を考えて調査したものである。通常の土坑と区別して、特殊土坑（SH）とした。結果として、鍛冶関連遺構ではなかったが、出土遺物も遺構名をSHとして取り上げているため、ここでも調査時の名称から変更せず、特殊土坑（SH）として報告する。

SH1（第32・86・87図）

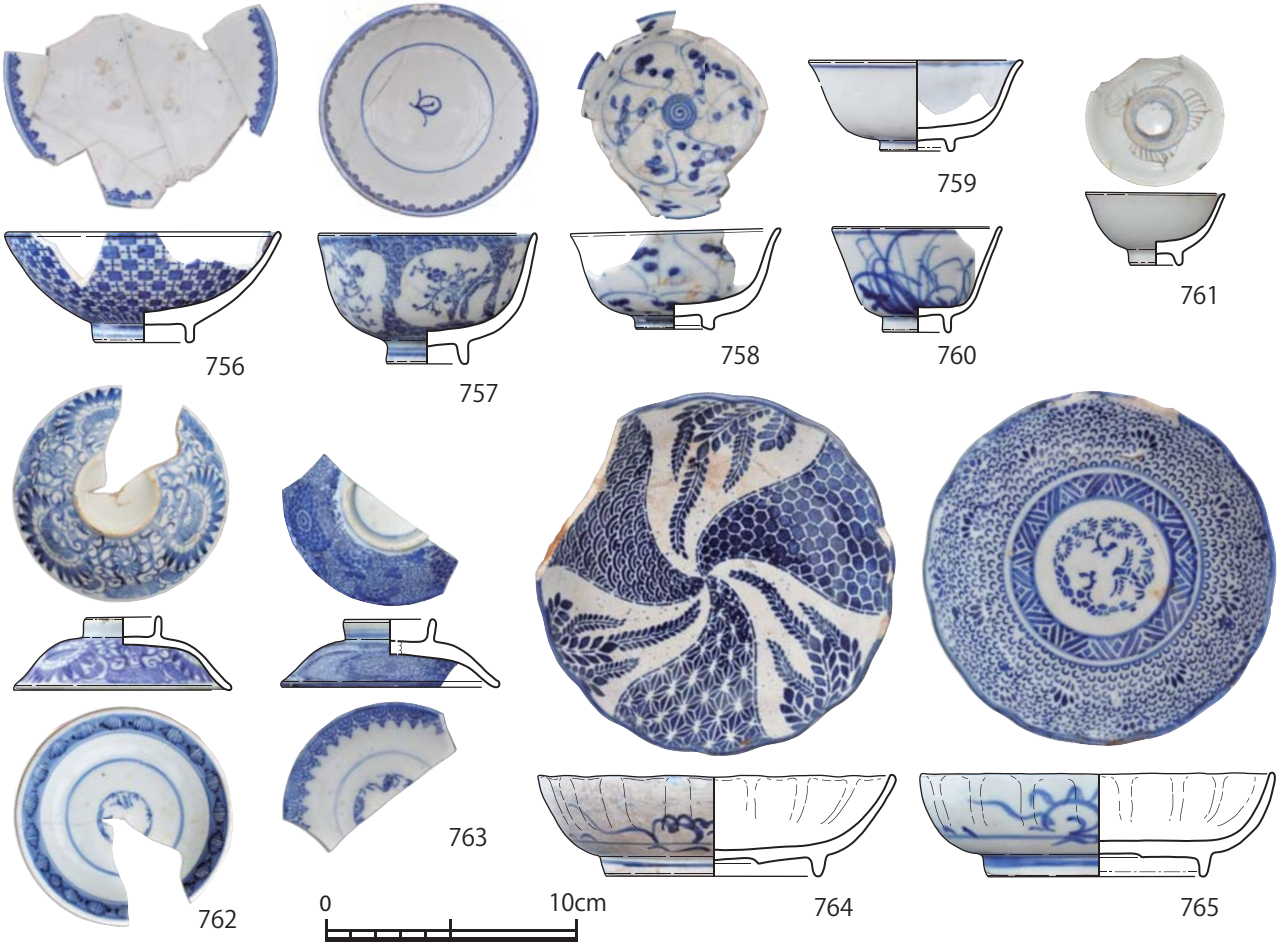
D2区で検出しており、SC10・22を切る。既に述べたように、検出時には鍛冶関連遺構の可能性を考えていたが、それを裏付けるような構造や遺物は認められなかった。平面形態は径1.7 m程の円形を呈する。検出面からの深さは最深で83cmを測る。鉄板の束を充填したSC10を切っているためか、埋土の一部には同様の鉄板束が入っている。隣接するSC10の避雷針と考えられる鉄板に接続された銅線が底面に突き刺さっている。

756～780が出土遺物である。756～759は碗で、756・757は型紙摺によるものである。758は捩花状の仙芝祝寿文があしらわれる。759も染付碗である。いずれも明治以降、近代の所産。760は染付小杯。761は白磁酒杯で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ上絵付けされる。762・763は染付端反碗蓋である。762は濃みを用いない素描きの資料で、763は型紙摺によるものである。明治以降、近代の所産。764～766は型紙摺の輪花皿である。蛇ノ目凹形高台を呈する。明治期の所産であろう。767は鮮やかなコバルトを用いた染付急須である。近代の所産。768は白磁製の馬の鞦。薩摩磁器であろう。

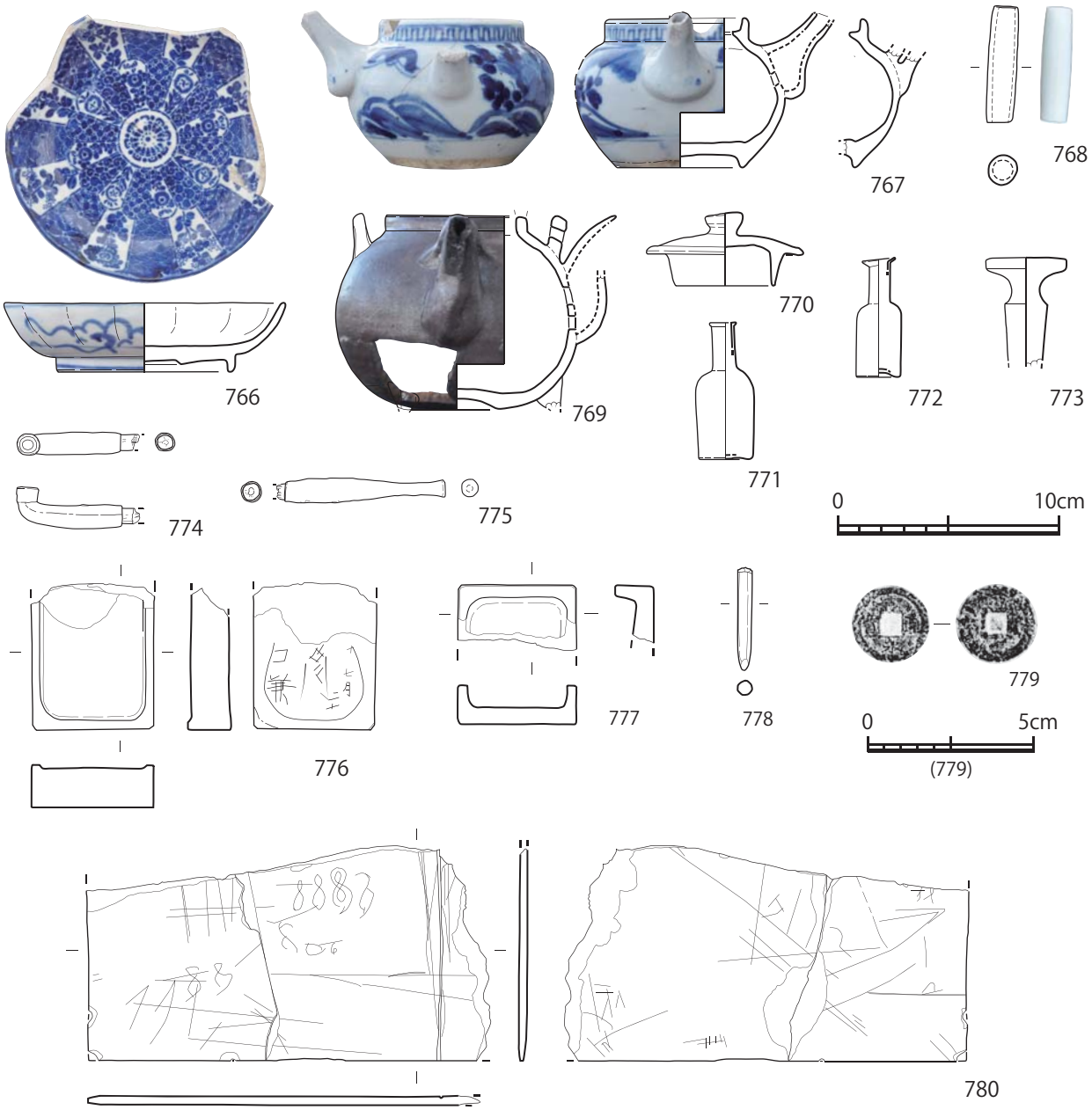
769は薩摩焼苗代川系の土瓶である。770は同じく苗代川系の土瓶蓋。

771～773はガラス瓶で、771・772は無色透明の薬瓶。773は栓であろう。774は煙管雁首、775は煙管吸い口で、いずれも羅宇が残る。776・777は赤間石製の硯で、776の背部には線刻がみられ、「…七月二十…」「関」「コ兼」と読める。778は滑石製の石墨である。779は寛永通寶である。錆膨れし、劣化するが新寛永と思われる。780は頁岩製の石板で、「8」などの数字がいくつも線刻される。778の石墨と対になり、現在のノートと鉛筆の代わりに使用されていたものと考えられる。

出土遺物からは明治期以降、近代の所産と考えられる。



第86図　SH1出土遺物実測図①（S=1/2・1/3）



第 87 図　SH1 出土遺物実測図②（S=1/2・1/3）

6　ピット（P）

今回の調査では、掘立柱建物跡として認識できたSB4・5 以外にも、本来は建物跡の柱穴を構成していたと推測される柱穴を検出している。基本的には 1 m前後の土坑と区別し、径が 0.5 m以下の円形を基調とする遺構を、柱穴である可能性が高いピットとして調査している。ただし、先に土坑として報告した遺構の中にも埋土に柱痕跡と考えられる立ち上がりが認められたり、柱根と考えられる木材が出土しているものもあることから、土坑として報告したものの中にも柱穴が存在していた可能性は高い。

以下、ピットとして調査した遺構を報告する。

P1（第 88 図）

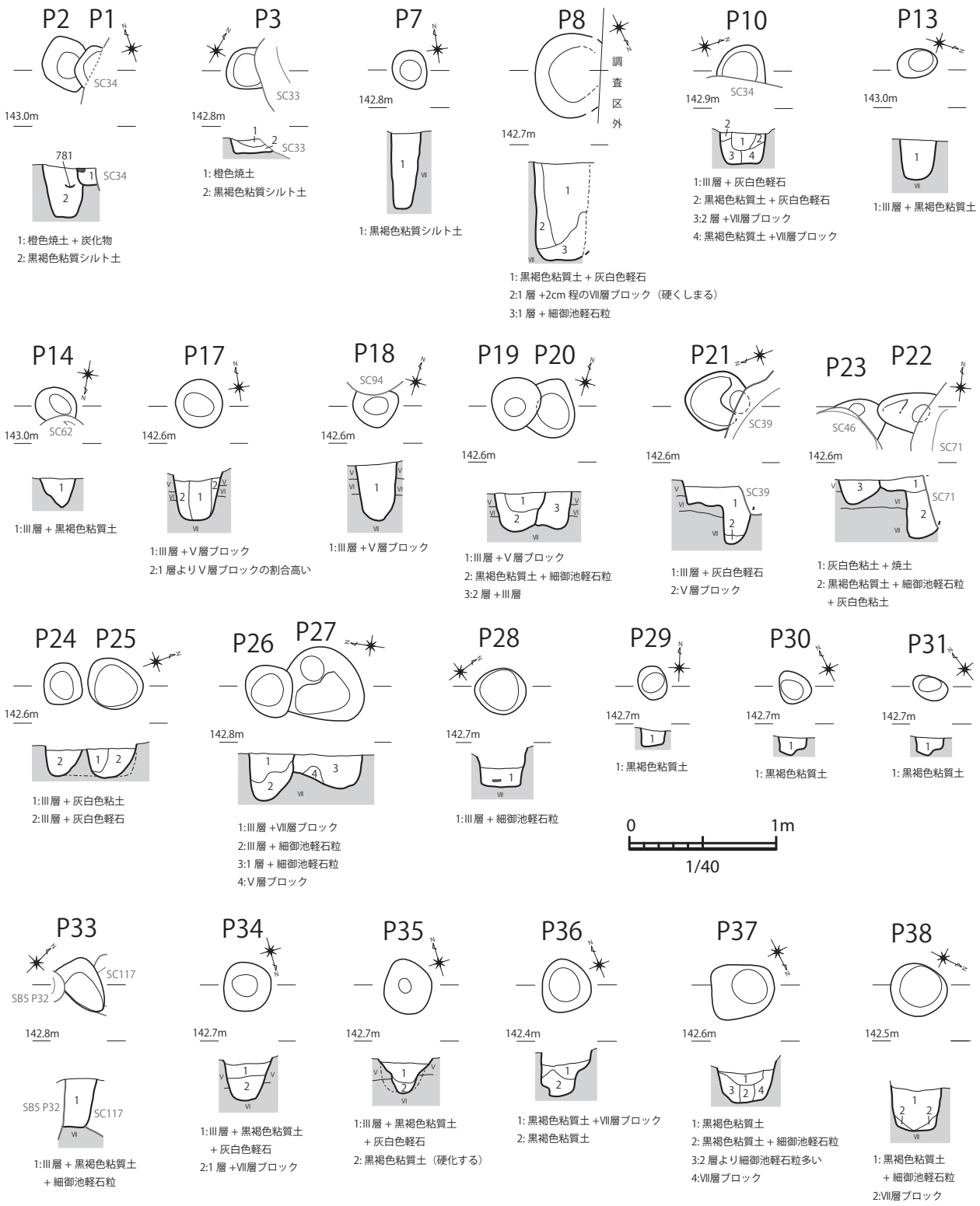
C1 区で検出しており、SC34 に切られ、P2 を切る。大部分が SC34 によって破壊されており、形態等全体像は判然としない。遺構の深さは最深部でも 12cm を測るのみである。

遺物は出土していない。

P2（第 88・90）

C1 区で検出しており、上述の P1 に切られる。径約 0.3 m程の円形を呈するものと思われ、検出面からの深さは 34cm を測る。

781 と 782 が埋土内より出土している。781 は漳州窯系の青花碗である。16 世紀後半～ 17 世紀前半の所産で



第 88 図　ピット（P）実測図①（S=1/40）

ある。782 は 1368 年初鋳とされる洪武通寶である。

P3（第 88 図）

C1 区で検出しており、SC33 に切られる。径約 0.3 m 程の円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは浅く、最深でも 9cm を測るのみである。

遺物は出土していない。

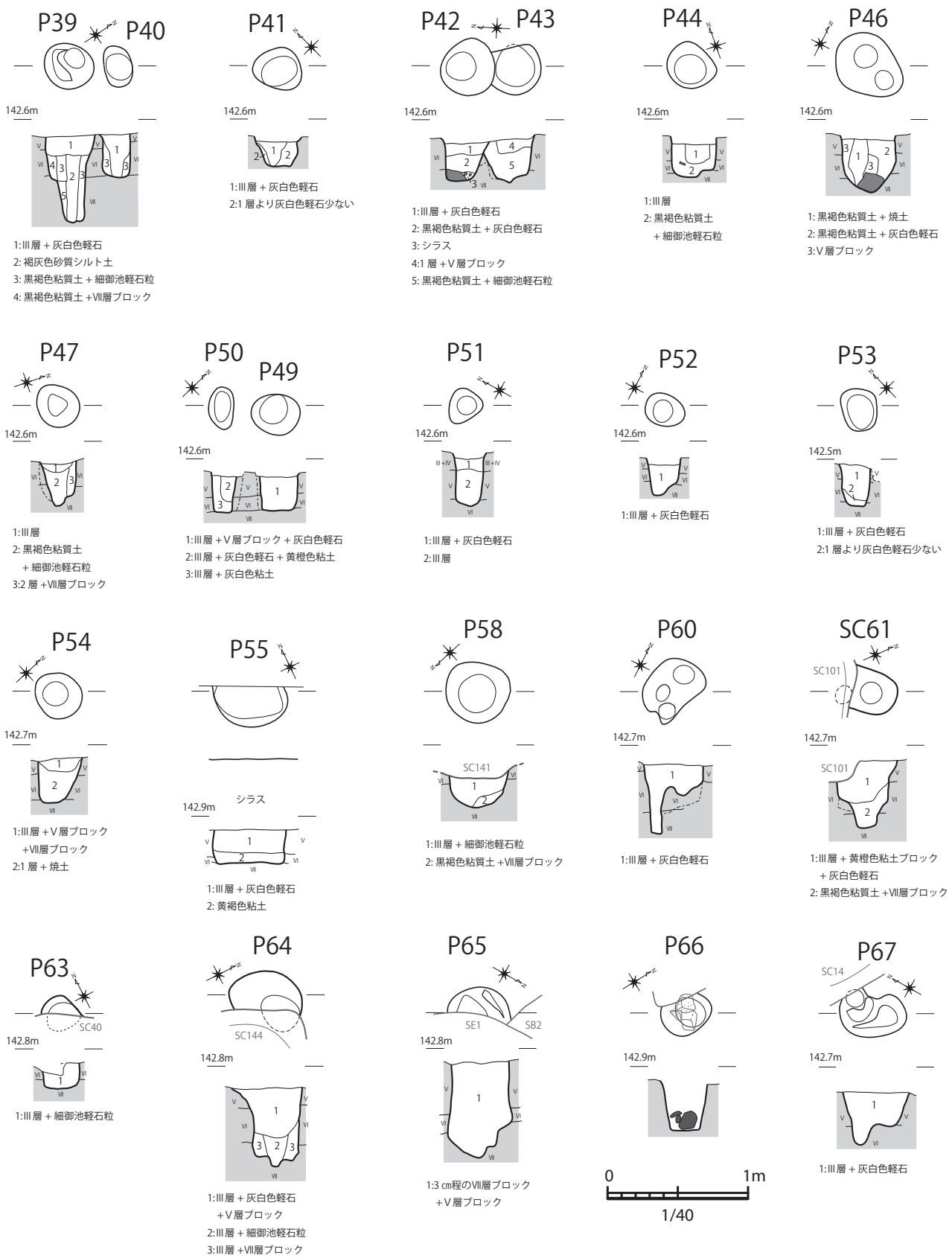
P7（第 88 図）

C1 区で検出しており、径 0.25 m程の円形を呈する。検出面からの深さは 52cm を測る。埋土には黒褐色粘質土が堆積する。

遺物は出土していない。

P8（第 88 図）

C1 区で検出しており、遺構の西側は調査区外に延びる。径 0.55 m程の円形を呈するものと思われる。検出面か



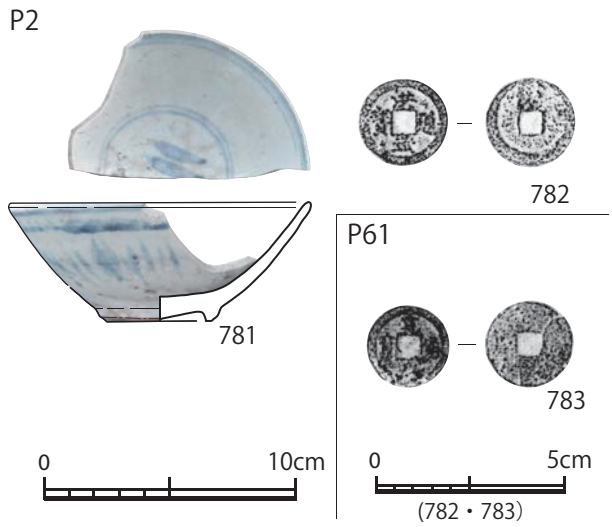
第 89 図　ピット（P）実測図②（S=1/40）

らの深さは最深部で 66cm を測る。

埋土からは染付磁器の小片が出土しているが、図化し得なかった。

P10（第 88 図）

C1 区で検出しており、SC34 に切られる。径 0.3 m程の円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最



第 90 図　P2・61 出土遺物実測図
（S=1/2・1/3）

深で 22cm を測る。

遺物は出土していない。

P12（第 40 図）

B2 区で検出しており、SC80 に切られる。そのため平面形態等の詳細は不明である。おそらく径 0.4 m程の円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深で 38cm を測る。

遺物は出土していない。

P13（第 88 図）

B2 区で検出しており、長軸 0.27 m、短軸 0.2m の楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 27cm を測る。

遺物は出土していない。

P14（第 88 図）

B2 区で検出しており、SC62 に切られる。径 0.28 m程の円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは 20cm 程となる。

遺物は出土していない。

P16（第 37 図）

B2 区で検出しており、SC26 に切られるため、全体の形態や規模は不明である。検出面からの深さは最深で 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P17（第 88 図）

D1 区で SC20 を完掘した後にその底面で検出している。径 0.32 mの円形を呈し、検出面からの深さは最深部で 34cm を測る。断面観察からは、柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりが認められる。

遺物は出土していない。

P18（第 88 図）

D1 区で SC20 を完掘した後にその底面で検出している。SC94 に切られる。検出面からの深さは最深で 39cm を測る。

遺物は出土していない。

P19（第 88 図）

D1 区、やはり SC20 を完掘した後に底面で検出している。P20 を切る。径 0.36 mの円形を呈し、深さは 26cm 程となる。

遺物は出土していない。

P20（第 88 図）

D1 区で P19 に隣接して検出している。P19 に切られる。径 0.4 mの円形を呈し、検出面からの深さは最深部で 22cm を測る。

遺物は出土していない。

P21（第 88 図）

D1 区で検出しており、SC39 に切られる。径 0.42 m の円形を呈するものと推測される。遺構の北側にテラスが付き、南側は一段深くなる。検出面からの深さは最深部で 42cm を測る。

埋土内から染付片が出土しているが、小片のため図化し得なかった。

P22（第 88 図）

D1 区で検出しており、SC71 に切られ、P23 を切る。全体の規模や形態は不明である。遺構の西側にテラスが付き、東側が一段深くなる。検出面からの深さは最深で 42cm を測る。

遺物は出土していない。

P23（第 88 図）

D1 区で検出しており、SC46 と P22 に切られる。そのため、規模や形態は判然としない。検出面からの深さは 16cm を測る。

遺物は出土していない。

P24（第 88 図）

D1 区で検出しており、径 0.3 mの円形を呈する。検出面からの深さは 20cm 程となる。

遺物は出土していない。

P25（第 88 図）

D1 区で P24 に隣接して検出されているが、切り合い関係はない。径 0.4m の円形を呈し、検出面からの深さは 24cm を測る。

P26（第 88 図）

B2 区で検出しており、P27 を切る。径 0.38 mの円形を呈し、検出面からの深さは 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P27（第 88 図）

B2 区で検出しており、P26 に切られる。径 0.58 m程の不整円形を呈し、遺構の北西側は一段深くなる。検出面からの深さは最深で 22cm 程を測る。

遺物は出土していない。

P28（第 88 図）

B・C2 区で検出しており、径 0.34 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 26cm を測る。

埋土からは染付皿の破片が出土しているが、図化し得なかった。

P29（第 88 図）

B2 区で検出しており、径 0.22 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深部でも 14cm を測るのみである。

遺物は出土していない。

P30（第 88 図）

B2 区で検出しており、径 0.22m の不整円形を呈する。検出面からの深さは 12cm を測るのみである。

遺物は出土していない。

P31（第 88 図）

C2 区で検出しており、長軸 0.24 m、短軸 0.16 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは 12cm を測るのみである。

遺物は出土していない。

P33（第 88 図）

C1 区で検出しており、SB5P32 に切られ、SC117 を切る。長軸 0.4 m、短軸 0.24 mの楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深部で 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P34（第 88 図）

C1・2 区で検出しており、径 0.34 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深で 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P35（第 88 図）

C1 区で検出しており、径 0.32 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深 24cm を測る。

P36（第 88 図）

C1 区で SC85 を完掘した後にその底面で検出している。径 0.34 mの円形を呈し、検出面からの深さは 30cm 程を測る。

遺物は出土していない。

P37（第 88 図）

P36 と同様に、C1 区において SC85 を完掘した後に底面で検出している。長軸 0.44 m、短軸 0.26 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 30cm 程となる。

遺物は出土していない。

P38（第 88 図）

D1 区において SC42 を完掘した後にその底面で検出している。径 0.4 mの円形を呈しており、検出面からの深さは最深で 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P39（第 89 図）

D1 区において検出しており、径 0.36 mの円形を呈する。遺構の南側にはテラスが付き、北側が一段深くなる。検出面からの深さは最深部で 62cm を測る。土層断面を観察すると、柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりが認められる。

遺物は出土していない。

P40（第 89 図）

D1 区において P39 に隣接して検出している。長軸 0.3 m、短軸 0.2 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 22cm を測る。

遺物は出土していない。

P41（第 89 図）

D2 区において検出しており、径 0.34 mの不整円形を呈する。検出面からの深さは最深で 22cm となる。

遺物は出土していない。

P42（第 89 図）

D2 区で検出しており、P43 を切る。平面形態は径 0.4 mの円形を呈し、深さは最深部で 34cm を測る。

遺物は出土していない。

P43（第 89 図）

D2 区において検出しており､P42 に切られる。径 0.38 mの円形を呈し、検出面からの深さは 36cm を測る。

遺物は出土していない。

P44（第 89 図）

D2 区において P42 と 43 に隣接して検出している。径 0.34 mの円形を呈し、深さは 30cm 程を測る。

図化できるような遺物は出土していない。

P45（第 71 図）

D2 区で検出しており、SC128 に切られる。長軸 0.4 m以上、短軸 0.26 mの楕円形を呈するものと思われる。遺構の南側にはテラスが付き、北側が一段深くなる。検出面からの深さは最深で 34cm を測る。

遺物は出土していない。

P46（第 89 図）

D2 区で検出しており、長軸 0.52 m、短軸 0.42 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 44cm を測る。ピットの底付近には砂岩礫がみられた。

遺物は出土していない。

P47（第 89 図）

D2 区で検出しており、径 0.34 mの円形を呈する。検出面からの深さは最深で 34cm を測る。

遺物は出土していない。

P49（第 89 図）

D2 区で検出しており、長軸 0.34 m、短軸 0.28 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは 26cm となる。埋土は単一層である。

遺物は出土していない。

P50（第 89 図）

D2 区においてP49に隣接して検出している。長軸0.32 m、短軸 0.18 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P51（第 89 図）

D2 区において検出しており、径 0.25 m程の不整円形を呈する。検出面からの深さは最深で 38cm を測る。

遺物は出土していない。

P52（第 89 図）

D2 区で検出しており、長軸 0.3 m、短軸 0.22 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深部で 27cm を測る。

遺物は出土していない。

P53（第 89 図）

D1 区で検出しており、径 0.3 m程の楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 30cm を測る。

遺物は出土していない。

P54（第 89 図）

D2 区において SB5P15 に隣接して検出している。径 0.36 mの円形を呈し、検出面からの深さは 32cm を測る。

遺物は出土していない。

P55（第 89 図）

B2 区で検出しており、遺構の北側は調査区外に延びる。おそらく長軸 0.52 m程の楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは 24cm を測る。

埋土内からは陶器片が出土しているが、図化し得なかった。

P58（第 89 図）

B3 区において SC141 を完掘した後に底面で検出している。径 0.46 mの円形を呈しており、検出面からの深さは最深部で 28cm を測る。

遺物は出土していない。

P60（第 89 図）

D2 区で検出しており、長軸 0.48 m、短軸 0.34 mの不整楕円形を呈する。遺構の底面はフラットでなく、西側は最も深くなる。検出面からの深さは 52cm を測る。

遺物は出土していない。

P61（第 89・90 図）

D2 区で検出しており、SC101 に切られる。長軸 0.44 m、短軸 0.3 mの楕円形を呈するものと思われる。検出面からの深さは最深部で 48cm を測る。

埋土からは 783 の寛永通寶が出土している。

P63（第 89 図）

B2 区で検出しており、SC40 に切られる。そのため規模・形態等は判然としない。検出面からの深さは最深で 18cm を測る。

遺物は出土していない。

P64（第 89 図）

D2 区で検出しており、SC144 に切られる。平面プランは径 0.52 mの円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは最深で 56cm を測る。土層断面をみると、埋土の下部には柱痕跡の可能性がある垂直方向の立ち上がりがみられる。

遺物は出土していない。

P65（第 89 図）

C3 区で検出しており、SB2 の軽石基礎と SE1 に切られる。そのため、全体的な規模や・形態は判然としないが、おそらく径 0.5 m程の円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは最深で 68cm を測る。

遺物は出土していない。

P66（第 89 図）

C4 区で検出しており、SB3 の軽石範囲と重複する。径約 0.4 m程の円形を呈し、検出面からの深さは 36cm を測る。遺構の下部から底面にかけては軽石が充填されていた。

遺物は出土していない。

P67（第 89 図）

D3 区で検出しており、SC14 に切られる。長軸 0.5 m以上、短軸 0.3 m程の不整形を呈する。遺構の北側は一段深くなり、その深度は検出面より 38cm を測る。

遺物は出土していない。

P68（第 26 図）

D2 区で SC14 を完掘した後にその底面で検出している。長軸 0.54 m、短軸 0.34 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 24cm を測る。

遺物は出土していない。

P69（第 14 図）

C3 区で検出しており、SC3 を完掘した後に底面にて検出している。長軸 0.5 m、短軸 0.4 m程の楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 60cm 程となる。

遺物は出土していない。

7　埋甕（SR）

SR1（第 91・92 図）

D2 区で検出した埋甕と考えられる遺構である。既に甕の上部は削平され破壊されていたが、本来は口縁部までの完全な形で地中に埋設されていたものと考えられる。784 が埋設されていた薩摩焼甕で、歪みがあり底部の座りが悪い。内面には排泄物と考えられる厚さ 1 ～ 2mm の白色の固形物が付着している。そのため、本遺構は厠跡（トイレ状遺構）と考えられる。

さらにこの甕を取り上げると、下位からは木製桶がやはり埋設された状態で検出された。そしてこの桶内の埋土からは腐食してボロボロになった銅製の半銭が出土している。半銭自体は取り上げたものの、破損がひどく図化できていない。

断面を観察すると、下位の埋桶についてはほぼ桶の大きさと同じ掘り形中に埋設されているものと判断される。また、この桶内の堆積土内からは、密度は低いが寄生虫卵が検出されている（第 4 章第 3 節参照）。よって、埋甕のみでなく下位に埋設される埋桶についても厠跡（トイレ状遺構）であったものと考えられる。

このように、半銭が出土したことから下位の埋桶については明治前半期の所産である可能性が高い。また、上位の薩摩焼甕についても苗代川系であると考えられ、近代の所産といえる。よって本遺構自体は明治以降、近代の所産と考えられる。埋桶を利用した厠跡から、薩摩焼甕を埋設した厠跡に作り変えられたものと推測される。

8　不明遺構（SX）

これまで報告してきた土坑やピットの中にも用途が特定できないものは多く存在するが、その中でも特に平面・断面形態あるいは規模などの特徴が、他の遺構分類のいずれにも属さないものを不明遺構として以下に報告する。

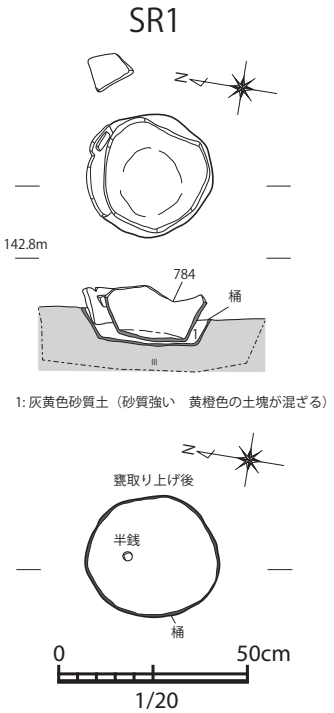
SX1（第 93・94 図）

B・C3 区で検出されており、SB1 や SX2 などの遺構を切ることから、周辺の遺構群の中でも最も新しい時期の遺構の一つといえる。遺構の南西側は既に攪乱を受け破壊されているが、検出された範囲の規模は長さ 6.6 m、幅 1.12 mを測る。遺構の主軸は SB1 とほぼ同一である。検出面からの深さは最深でも 7cm 程と浅い。埋土はⅢ層をベースとし、そこに御池軽石粒が含まれる。

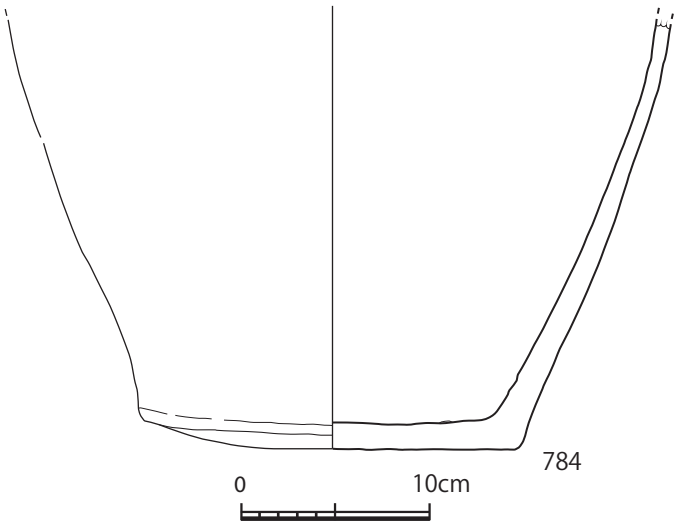
785 が出土遺物である。染付の鉢で、外面と内面見込みには牡丹唐草文があしらわれる。近代の所産であろうか。出土遺物が少なく遺構の詳細な時期を判断することは難しい。

SX2（第 93 ～ 95 図）

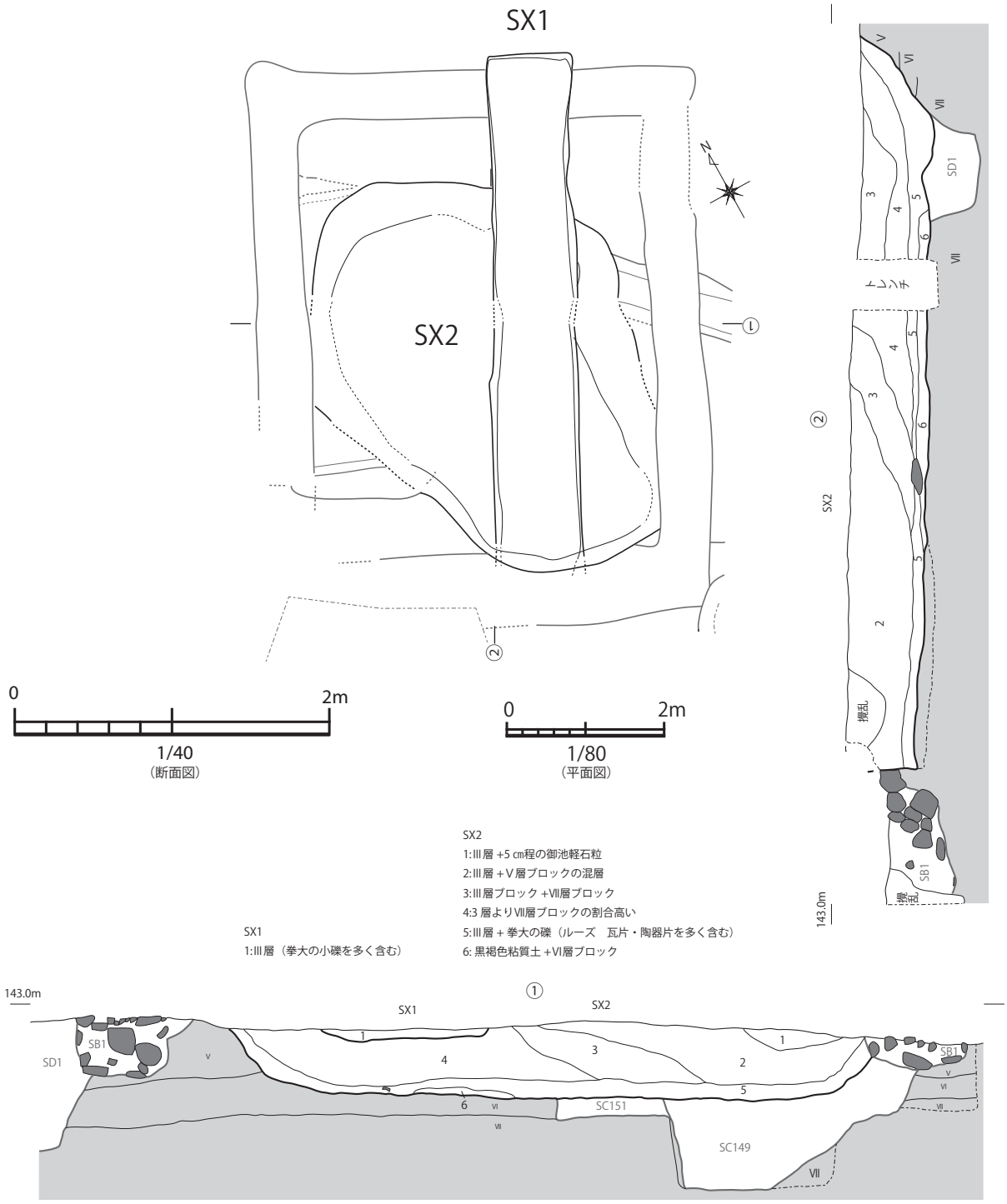
B・C1 区で検出しており、一部 SB1 に切られ、一部は逆に SB1 を切る。平面形態は長軸 5.52 m、短軸 4.16 mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは最深で 50cm 程を測る。埋土はブロック状の堆積が目立つことから、短期間に埋めもどされた遺構である可能性がある。また、埋土の最下層には瓦片や陶器片、こぶし大の礫などが混ぜられた厚さ 10cm 程の層が確認できた。埋土の



第 91 図　SR1 実測図（S=1/20）



第 92 図　SR1 出土遺物実測図（S=1/4）



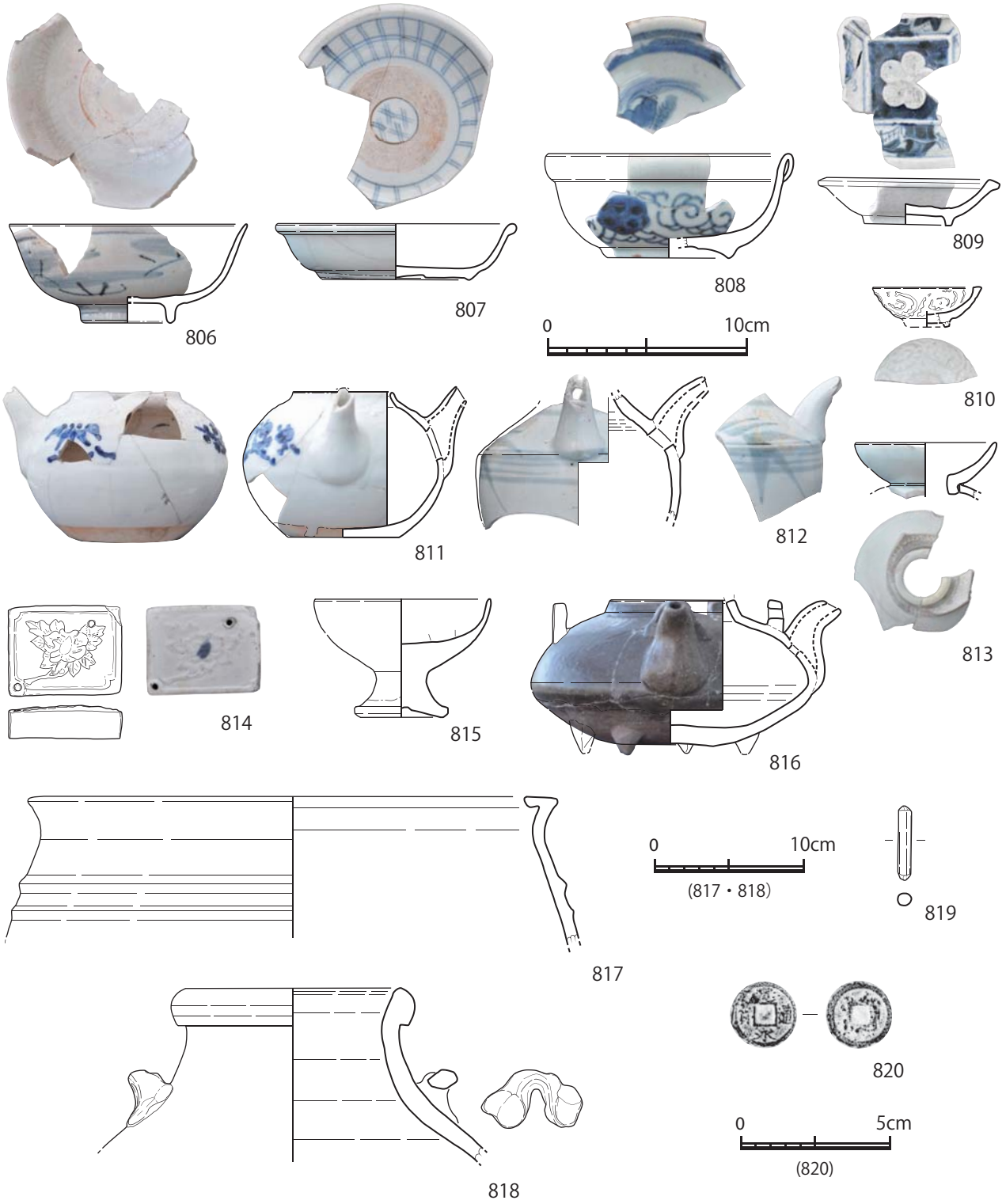
第 93 図　SX1・２実測図（S=1/40・1/80）

再上層、すなわち検出面では遺構の表面が硬化面のように硬く締まっている状況が確認できた。おそらく SB1 を構築する際に先だって、何らかの理由で建物内部の土層を改良したものと推測される。そのため、SB1 を構築する際に新たに溝を掘って軽石を充填した範囲では SB1 が SX2 を切り、既に構築されていた SB2 の一辺を再利用した範囲では SX2 が SB1 を切っているものと考えられる。よって SX2 は SB1 に伴う土層改良の痕跡であるものと推測される。

遺物は埋土内より大量に出土している（786 ～ 820）。しかし、既にみたように切り合い関係にある SC149 や 151、SD1 の遺物も混入している可能性が高い。786 ～ 789 は染付の端反碗である。788 は肥前系、789 は薩摩磁器と考えられ、いずれも 19 世紀中頃～幕末の所産といえる。790 は小杯で瀬戸・美濃系。幕末～明治期の所産。791 は同じく瀬戸・美濃系の碗でコバルトにより蝙蝠文があしらわれる。幕末～明治期。792・793 は染付端反碗蓋で、法量も文様についても近似する資料である。19

第 94 図　SX1・2①出土遺物実測図（S=1/3）

世紀中頃～幕末の所産。794・795 は白磁酒杯。両者共に見込みには文字が書かれる。794 は幕末～明治、795 は 19 世紀の所産と考えられる。796 ～ 798 は近代の小杯である。799・800 は白磁の猪口。801 は初期伊万里皿である。1630 ～ 1640 年代の所産。802 も初期伊万里の皿で、17 世紀前半の所産であろう。803 は染付輪花皿で、蛇ノ目凹形高台を呈す。近代の所産。804 も輪花皿で、薩摩磁器であろうか。805 は瀬戸・美濃系の皿で、見込みには獅子文と銘款がスタンプされる。806 は染付磁器碗。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされる。807 は肥前系染付磁器皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、口縁部外面は玉縁状に肥厚する。19 世紀の所産。808 は近代の染付磁器皿。809 は型押しの角皿で、薩摩磁器であろうか。幕末の所産。810 は白磁の紅皿で、蛸唐草文が配される。幕末。811 は近代の染付急須である。812 は薩摩磁器の酒器（からから）である。幕末の所産であろう。813 は



第 95 図　SX2 出土遺物実測図②（S=1/2・1/3・1/4）

白磁の唾壺である。薩摩磁器の可能性がある。異なる二点の磁器が頸部で釉薬によって接着されている。19 世紀代の所産であろう。814 は肥前系染付の水滴である。

815 は薩摩焼加治木・姶良系の仏飯器である。18 世紀前半の所産。816 は薩摩焼苗代川系の土瓶で、18 世紀後半以降の資料と考えられる。817 は苗代川系の甕である。口縁端部が内面に折り返される。19 世紀の所産。818 は沖縄産陶器の壺である。三耳壺であろうか。近代の所産。

819 は滑石製の石墨。820 は寛永通寶である。新寛永。

以上の出土遺物をみてみると、初期伊万里など近世の遺物も出土しているが、先にも触れたように、これらの近世の資料については、より下位に位置し、本遺構と切り合い関係にある SC149 や 151、SD1 といった遺構のものが混入している可能性が高い。多くが幕末～明治以降、近代の資料であることや関連する SB1 との関係からも、19 世紀後半頃の遺構である可能性が高いと考える。

9　包含層出土遺物

本遺跡においては、現代の建物解体に伴う基礎撤去作業により、近世～近代のいわゆる遺物包含層と呼べる土層の大部分が攪乱を受けていた。そのため、調査区南東隅のみで攪乱を受けていない本来の堆積状況が確認できている。言い換えれば、それ以外の調査区ほぼ全域で少なからず攪乱・削平を受けていた。

よって、ここでは包含層出土の遺物として項を設けて報告するが、実際には現代の造成土、すなわち基本土層のⅠ層より出土した資料も多く含まれている。厳密には自然堆積による遺物包含層出土ではないが、プライマリーな包含層堆積が確認できた範囲が限定的であることから、以下に包含層出土の遺物として一括して報告する。

①磁器（第 96 ～ 100 図）

821 ～ 883・885 ～ 899 は染付、色絵、白磁の磁器類である。この中では染付磁器が最も多く出土している。821 ～ 837 は各種碗である。821 は鮮やかなコバルトを用いた近代の端反碗。822・824 ～ 829 は薩摩磁器あるいはその可能性がある端反碗である。いずれも 19 世紀中頃～幕末の所産。830 は波佐見産の染付碗で、見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、アルミナが塗布される。831 は肥前系の染付碗。832 も波佐見産の染付け碗で、18 世紀後半の資料。833 は染付端反碗で、薩摩磁器。19 世紀中頃～幕末の所産。834 は肥前系染付の筒形碗で、雪持笹文があしらわれる。835 ～ 837 は薩摩磁器の染付広東碗。835 は二重格子文と草花文、836 は葡萄文、837 は菊散らし文がそれぞれあしらわれる。いずれも 19 世紀中頃～幕末の所産。838 は肥前系の染付小杯。17 世紀末～18 世紀前半の所産。839 は色絵の端反碗である。薩摩磁器であろうか。

840 ～ 861 は各種皿類である。840 は中国青花皿で、見込みには宝文と二重圏線がみえる。18 世紀末～ 19 世紀代の清朝磁器である。841 も中国青花皿であるが、16 世紀代の所産といえる。842 は中国漳州窯系の青花皿で、16 世紀後半～ 17 世紀前半の所産。843 ～ 847 はいずれも初期伊万里皿で、17 世紀前半代の所産である。848 は薩摩磁器の染付皿で、蛇ノ目凹形高台を呈する。18 世紀末頃の所産。849 は肥前系染付皿で、見込みにコンニャク印判による五弁花がみえる。18 世紀後半の所産。850 は薩摩磁器の可能性がある染付皿。蛇ノ目凹形高台を呈すようだが、高台内が凸レンズ状に外に突出するため、座りが悪い。19 世紀代。851 は肥前系の染付皿で、見込みには手描きの五弁花がみられる。852 は染付皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、蛇ノ目凹形高台を呈する。近代の資料であろうか。853 は薩摩磁器の染付皿で、19 世紀中頃～幕末の所産。854 ～ 856 は輪花皿で、蛇ノ目凹形高台を呈している。854・856 の見込みには楼閣山水文があしらわれている。855 は肥前系で 19 世紀代、856 は薩摩磁器の可能性があり、19 世紀中頃～幕末の所産と考えられる。857 は薩摩磁器で白磁の菊花皿である。19 世紀代の所産である。858 は瀬戸・美濃系の輪花皿で、見込みには海老文がスタンプされる。幕末～明治期の所産であろう。859 は肥前系の色絵磁器皿で、高台が二重になる。近代の所産。860・861 はいずれも型紙摺の染付大皿である。明治期の所産。

862 ～ 867 は染付碗蓋である。862 は蛸唐草文をあしらった肥前系の染付碗蓋で、19 世紀前半。863 は端反碗蓋で、肥前系であろうか。864・865 は肥前系の端反碗蓋で、19 世紀中頃～幕末の所産。866・867 も端反碗蓋であるが、薩摩磁器と考えられる。やはり 19 世紀中頃～幕末の所産。

868 は肥前系の染付そば猪口で、18 世紀後半の所産。869・870 は白磁の猪口であるが、870 は薩摩磁器の可能性がある。19 世紀代。871 は肥前系白磁のミニチュア猪口。上絵がみられ、消費地で絵付けした可能性が考えられる。872 は色絵の仏飯器である。近代の所産であろう。873 ～ 875 は酒杯である。874 には「…歩六四…」の文字がみえる。1908 年（明治 41 年）に設置された歩兵 64 連隊のことであろうか。876・877 は白磁の紅皿である。

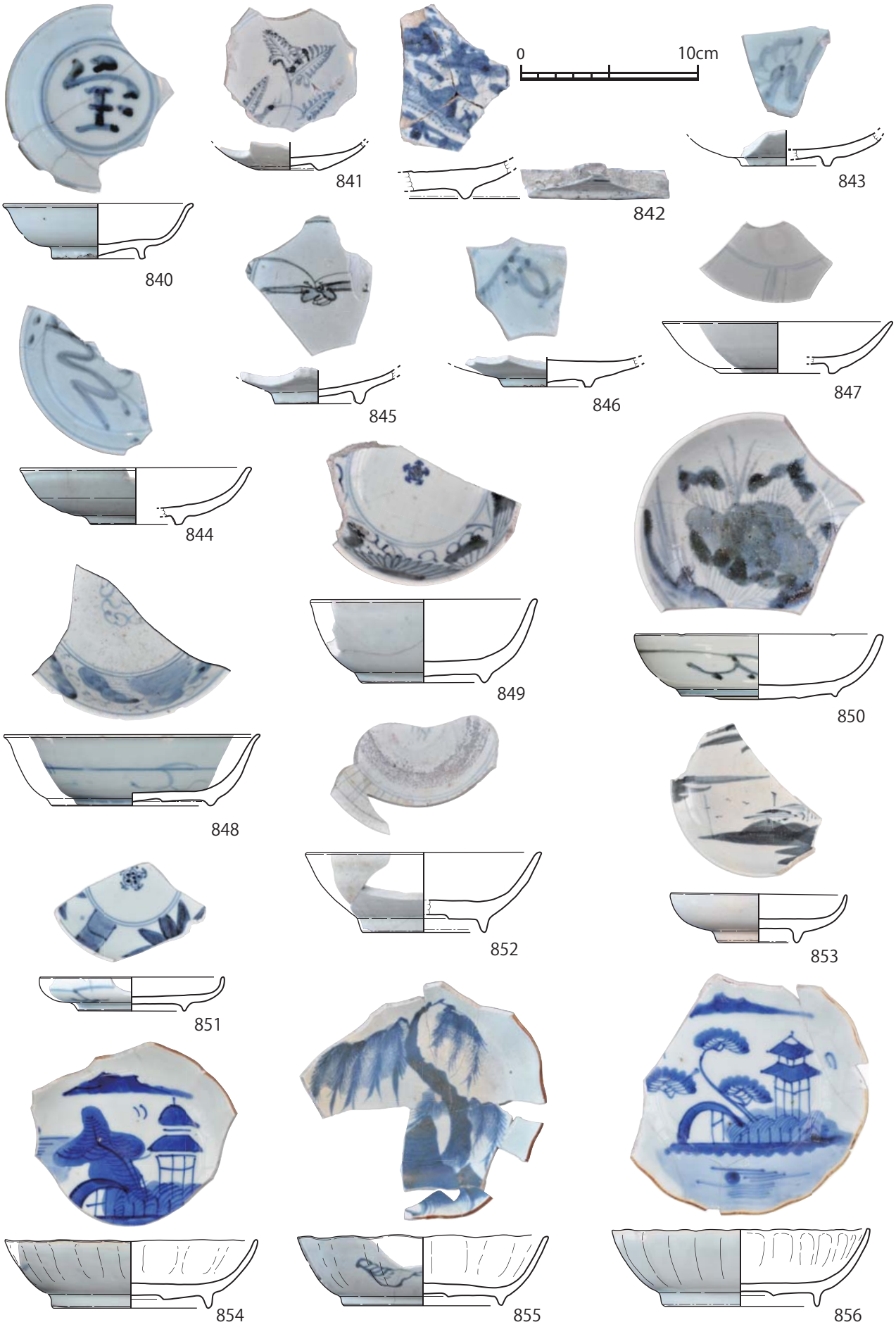
878 ～ 880 は各種香炉である。878 は色絵磁器、879 は肥前系染付、880 は肥前系青磁である。880 は近世の所産であろう。

881 は肥前系の染付鉢であろうか。見込みが蛇ノ目釉

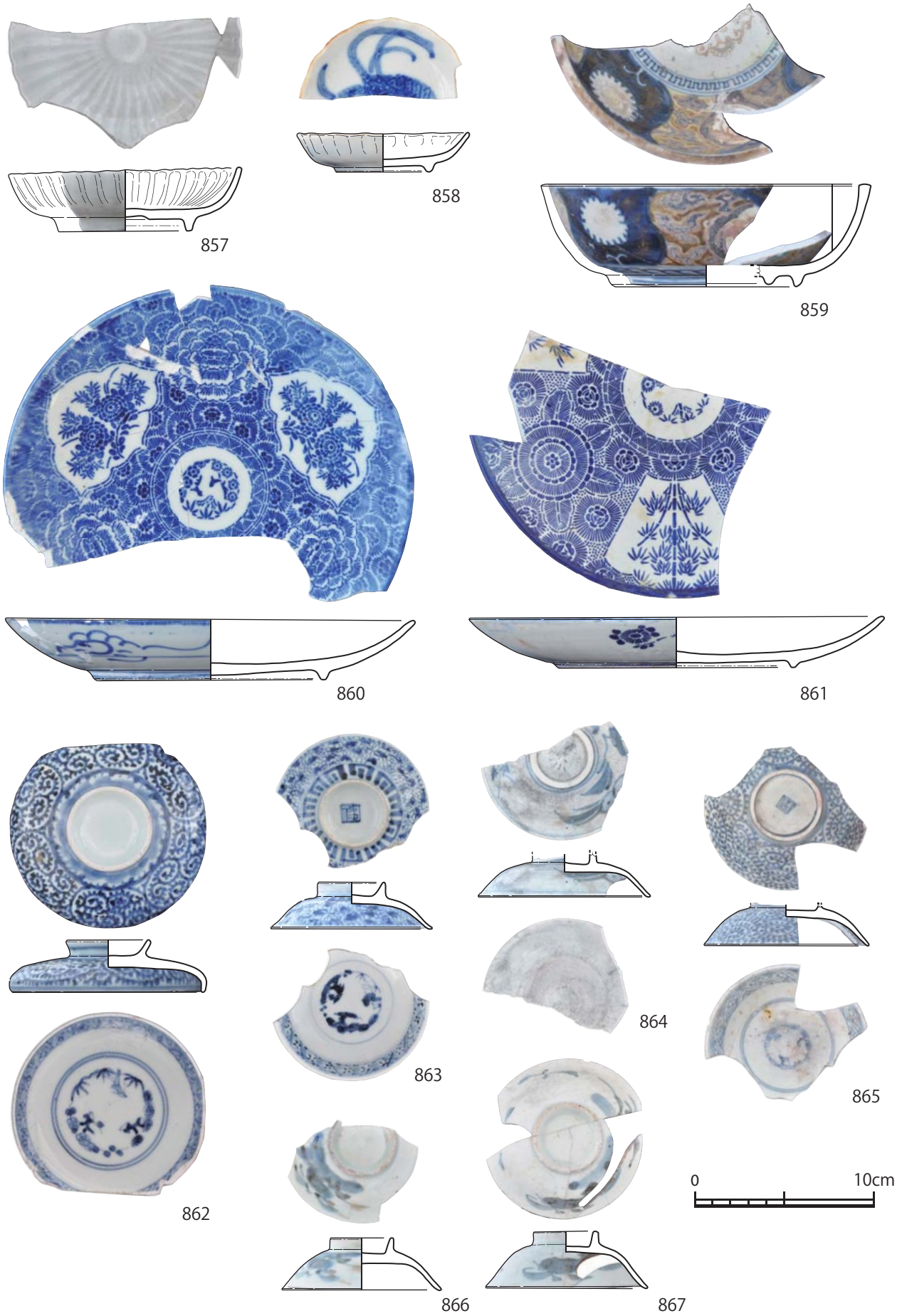
剥ぎされ、コンニャク印判による五弁花がみえる。18世紀後半の所産である。

882～884は酒器ないしは急須である。882は近代の染付酒器。883は釉下彩磁器で、近代の所産。884は陶

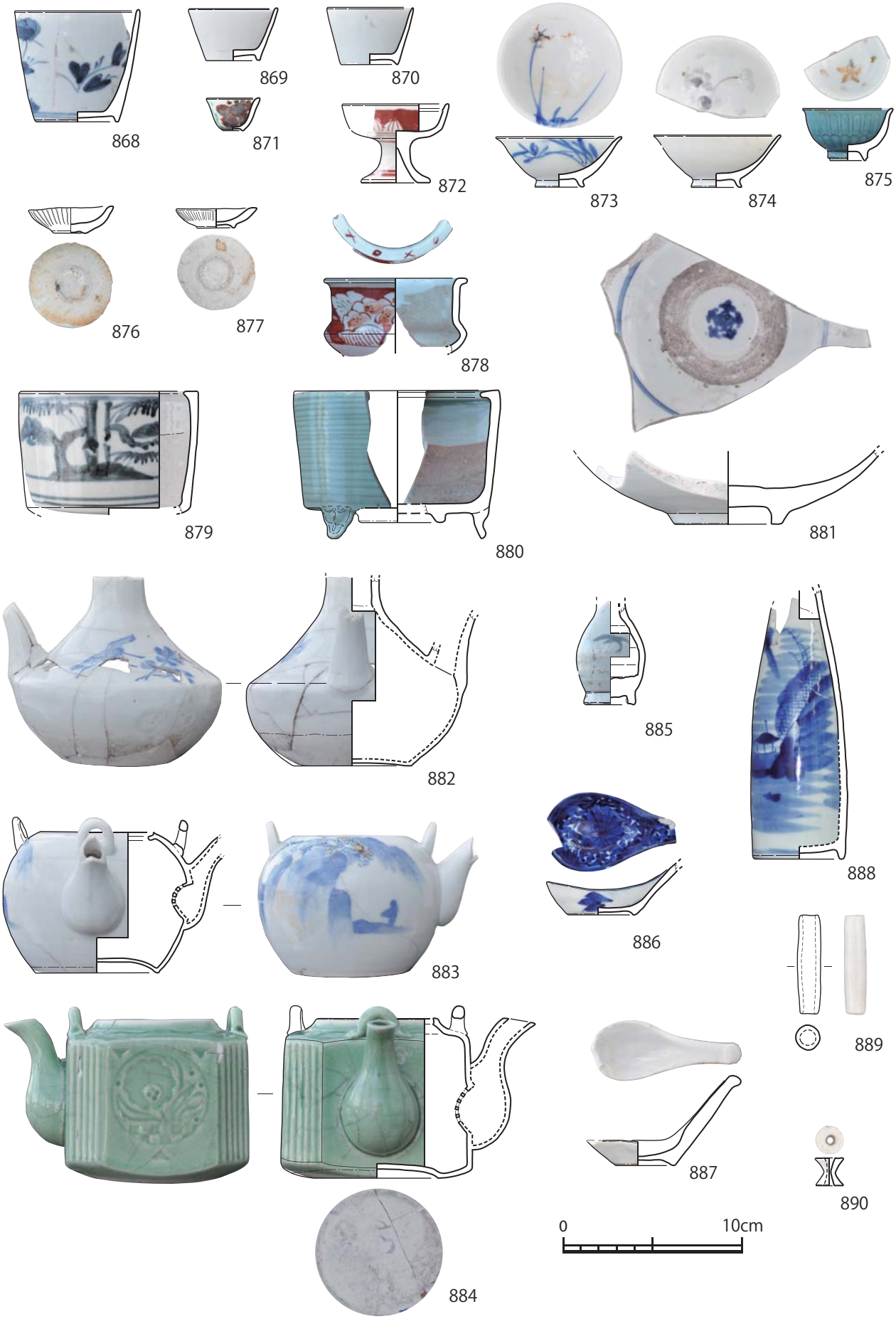
第96図　包含層出土遺物実測図①（S=1/3）



第 97 図　包含層出土遺物実測図②（S=1/3）



第 98 図　包含層出土遺物実測図③（S=1/3）



第 99 図　包含層出土遺物実測図④（S=1/3）

器で、クロム釉の掛かる資料である。底部外面には墨書が認められる。

885 は肥前系の御神酒徳利で、18 世紀末～ 19 世紀の所産。

886・887 は蓮華である。886 は鮮やかなコバルトを用いたもので、近代の所産であろう。887 は白磁である。

888 は鮮やかなコバルトを用いた染付徳利である。近代の所産。

889 は白磁の馬の鞦で、近代の所産といえる。890 は白磁の糸巻形製品。

891 ～ 895 は白磁の戸車である。いずれも側面のみ施釉される。891 は被熱したためか、表面が煤ける。

896 は白磁製の碍子であろう。897 は白磁で、把手が付くが、器種は不明である。いずれも近代の所産であろう。

898 は色絵磁器と考えられ、耳部に一箇所小穴がみられるため、水滴ないしは空気穴を持つ人形であろうか。中国産の可能性がある。

899 は白磁の通い徳利で、「…商店」「…一号」の文字がみえる。近代の所産。

②陶器（第 100・101 図）

900 ～ 915 は陶器である。900 は肥前系の皿で、かなり歪みがみられる。見込みには鉄絵が施され、外面高台付近には胎土目が残る。

901 は薩摩焼加治木・姶良系の仏飯器である。皿部の見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。高台は露胎となる。18 世紀後半の資料。902 は薩摩焼竪野系、いわゆる白薩摩の仏飯器である。

903 は薩摩焼のミニチュア陶器である。加治木・姶良系であろうか。

904・905 は薩摩焼苗代川系の土瓶で、18 世紀後半以降の資料である。906 も苗代川系の土瓶であるが、注口部は欠く。907・908 も苗代川系の土瓶蓋である。

909 は薩摩焼苗代川系の擂鉢で、口縁部が逆 L 字状に外へ延びる。底部外面にはコマ目が残る。18 世紀後半以降の所産である。

910 は沖縄産陶器の土瓶である。白土と明緑色の釉が掛かり、細かな沈線が数条一単で施される。近世の所産と考えられる。

911 は茶入れと考えられる資料である。底部のみが遺存する。近世の所産であろう。

912 は天目茶碗の底部片を再加工し、メンコとして使用したものであろうか。近世の所産。

913・915 は足付ハマである。913 は三足、915 は一足のみ遺存する。914 はハマないしはメンコであろうか。

③その他の遺物（第 101・102 図）

916 は土師質焙烙の把手である。この他にも同様の焙烙と考えられる資料が遺構内、包含層からも出土しているが、小破片の資料が多く図化できるものは限られている。

917 は窯道具である大型のトチンである。大皿用であろうか。天井部には胎土目が残る。

918 ～ 927 は銭貨である。918 ～ 925 はいずれも寛永通寶である。新寛永が大部分だが、918 だけはいわゆる「ス貝寶」の古寛永である。926 は五銭銅貨で、「明治二十六…」の文字がみえる。1893 年（明治 26 年）製のものであろう。927 は一銭銅貨で、「大正二年」の文字がみえる。1913 年製。

928 は亀形土製品で、首・右前足・右肩部を欠損する。親亀の甲羅には子亀が乗っているが、これも首部など一部欠損する。裏面には棒を差し込む小穴が開いている。

929 は煙管の雁首である。ほぼ完全に遺存しており、火皿径は 1.6cm を測る。

930 ～ 932 は硯である。930 は海部のみが残る。931 は完形品であるが、かなり小型である。縁部には「×」印が多数線刻される。932 は海部先端を欠く。硯背は覆手となり、そこに「赤間関」と線刻される。930 と 932 は赤間石製、931 は頁岩製である。

933・935・936 は頁岩製の石板である。いずれも細かな線刻がみられる。936 は文字らしきものもみえるが、判読できない。

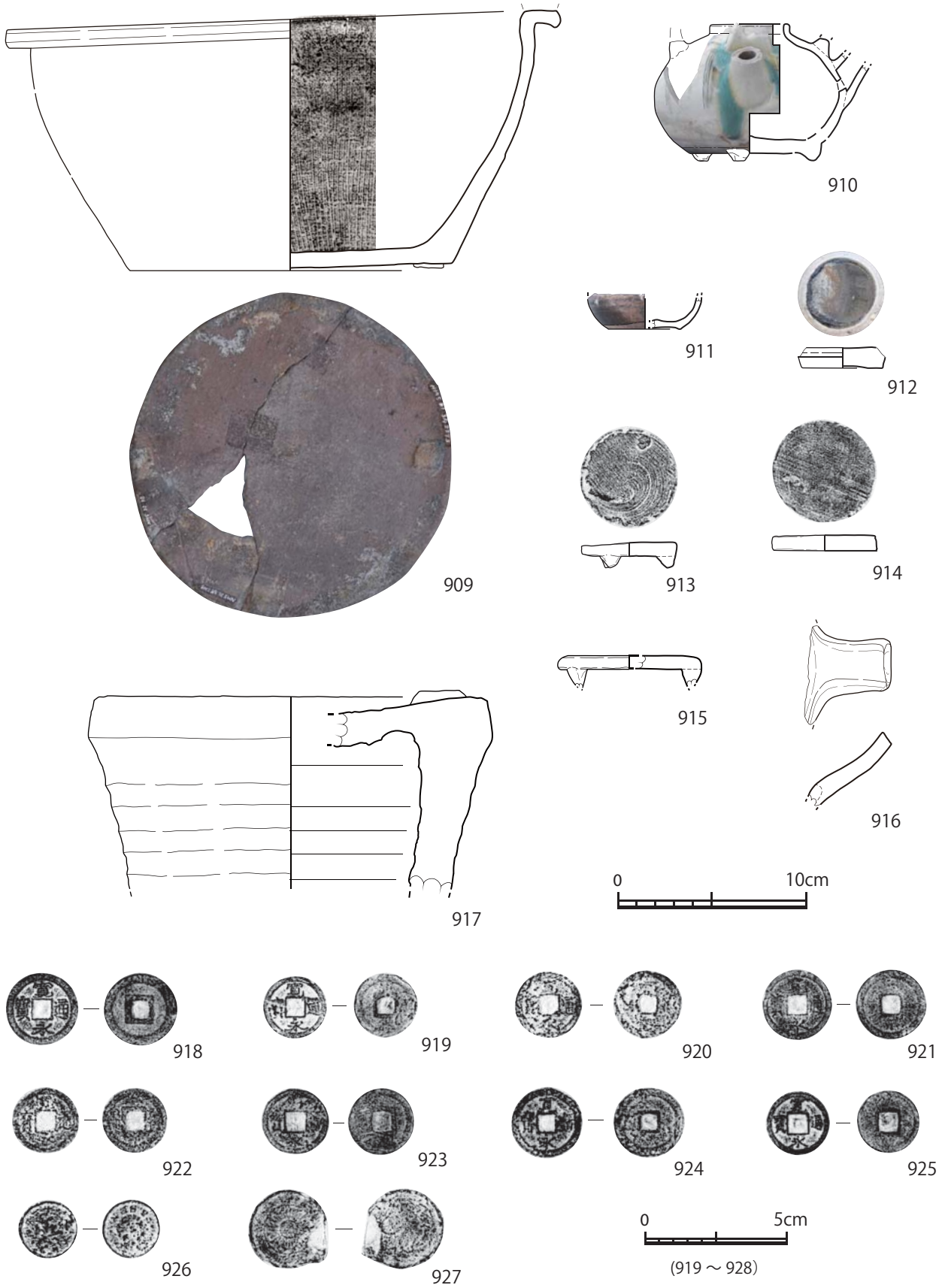
934 は滑石製の石墨である。937 は頁岩製の砥石である。表面のみに磨痕が残る。上端部は欠損する。

938 は「都…」の刻印がみえる煉瓦である。都城…と続くのであろうか。このような文字が刻まれた煉瓦は本資料 1 点のみの出土である。

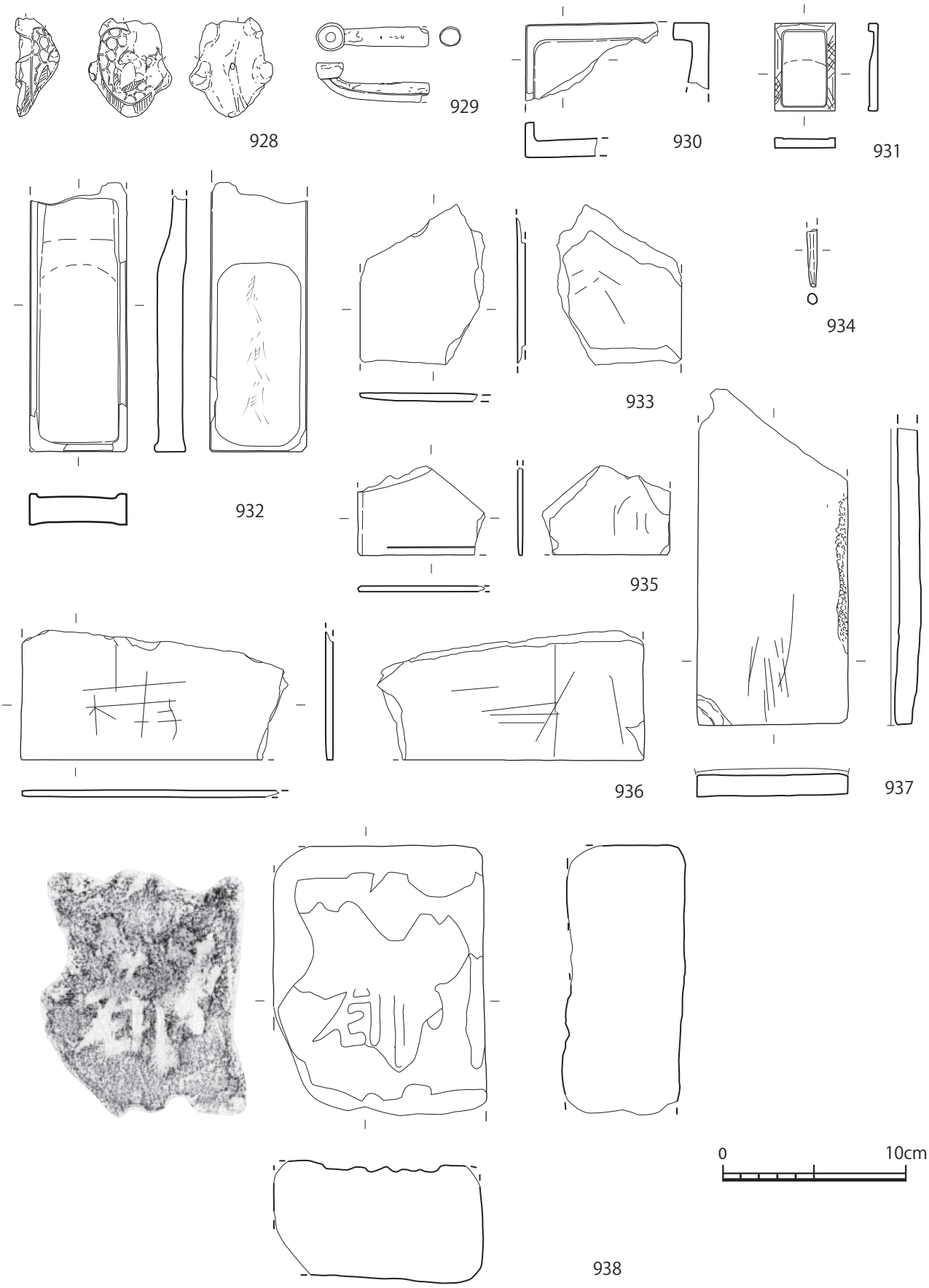
以上、現代の造成土からの資料も含め、遺構内出土資料以外を「包含層出土遺物」として報告してきた。これ以外にも膨大な量の陶磁器類を初めとする遺物が出土しているが、主に時期の分かるものや特徴的なもの、遺存状態が良好なものを選別して図化・報告した。そのため、かなりの量の遺物が報告からは漏れていることになる。特に帰属年代が不明確な鉄製品や銅製品など金属製品、貝・動物骨・サンゴなどについては、ほとんど図化・報告できていないことを明記しておきたい。

報告した遺物の種別については、上述のように若干の偏りがあるが、陶磁器を中心とする遺物の帰属年代、相対的な出土量については、ある程度反映できていると考える。しかし、これも全ての遺物の出土量を数値化した訳ではなく、客観的な傾向とは言い切れない。

第 100 図　包含層出土遺物実測図⑤（S=1/3）



第 101 図　包含層出土遺物実測図⑥（S=1/2・1/3）



第 102 図　包含層出土遺物実測図⑦（S=1/3）

遺物観察表①

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
1	白磁	碗	D3　4 層	—	—	—	中国	11c 後半～ 12c 前半	白磁碗Ⅳ類
2	白磁	碗	E2　5 層	—	—	—	中国	11c 後半～ 12c 前半	白磁碗Ⅴ類
3	白磁	獣足	E2　5 層	—	—	—		中世か	
4	青磁	碗	D2　5 層	—	—	—	中国	14c 初～	龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
5	青磁	碗	E2　5 層	—	—	—	中国	14c 初～	龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
6	青磁	盤	B3　1 層	—	—	—	中国	中世	龍泉窯系青磁
7	染付磁器	端反碗	SB1　上層	(10.6)	4.0	5.3		近代	
8	染付磁器	皿	SB1　下層	(13.6)	7.0	4.8	波佐見	18c 後半	
9	色絵磁器	碗	SB1　下層	(10.7)	—	—	薩摩か		
10	色絵磁器	小杯	SB1　上層・一括	6.5	2.4	4.0 ～ 4.2	薩摩か		
11	白磁	猪口	SB1　下層	(4.1)	1.8	2.7	薩摩	19c ～幕末	
12	白磁	糸巻形製品	SB1　上層	1.6	1.6	1.3			孔径 5.5mm
13	色絵磁器	蓋物蓋	SB1　上層	8.2	—	3.3		近代	
14	染付磁器	皿	SB1　下層	—	(6.3)	—	肥前	19c	反転復元
15	中国青花	皿	SB1　下層	(11.9)	(7.0)	2.3	中国	明末～清初	反転復元
16	陶器	擂鉢	SB1　上層 /C3　3 層	(12.6)	(4.8)	6.4	薩摩（苗代川）	近代	反転復元
17	陶器	鉢	SB1　上層・中層 /SC149　一括 /SD1　上層 /C2・3　1 層	(29.8)	(18.8)	12.5	薩摩（苗代川）	近代	反転復元　口唇部胎土目
18	陶器	小碗	SB1　上層	(7.2)	(3.5)	3.7	薩摩（龍門司）	18c 後半	反転復元
19	陶器	壺	SB1　上層	(19.8)	—	—	薩摩（苗代川）	19c ～	反転復元
20	陶器	片口鉢	SB1　中層 /SD1　中層 /E2　5 層	—	(11.5)	—	薩摩（苗代川）	18c 前半	反転復元　底部貝目
21	陶器	鉢	SB2　上層 /D2　1 層	(26.0)	(17.4)	8.5	薩摩（苗代川）	19c ～	反転復元
22	染付磁器	筒形碗	SB3P1　下層	(7.0)	—	—	肥前	18c 末～ 19c 初	反転復元
23	染付磁器	端反碗	SB3P2　下層	—	3.6	—	薩摩	19c 代	
24	染付磁器	大皿	SB3　上層	—	(15.0)	—	肥前	18c	反転復元
25	染付磁器	碗	SB4 SC70　Y 層	(11.0)	—	—	肥前		反転復元
26	染付磁器	碗	SB4 SC70　下層	(7.8)	3.4	5.3	肥前	近世	
27	染付磁器	碗	SB4 SC88　上層	—	(4.0)	—	肥前		反転復元
28	染付磁器	皿	SB4 SC88　中層	(14.0)	(5.1)	3.3	肥前	17c 前半	反転復元
29	染付磁器	皿	SB4 SC126　中層	(13.8)	—	—	肥前	17c	反転復元
30	染付磁器	皿	SB4 SC126　下層	—	(3.8)	—	肥前		反転復元
31	中国青花	皿	SB4 P6　上層・中層	—	(6.8)	—	中国	明末～清初	反転復元
32	色絵磁器	皿	SC1　中層	(10.8)	(6.0)	2.1			反転復元
33	染付磁器	碗蓋	SC1　上層	9.2	3.8	2.75		近代	銅版転写
34	染付磁器	小杯	SC1　上層	(6.7)	(3.4)	5.0		近代	銅版転写
35	染付磁器	碗	SC2　上層	(9.7)	3.4	4.6		明治	型紙摺
36	染付磁器	小杯	SC2　一括 /SC10　上層	7.8	3.9	4.2		近代	
37	染付磁器	小杯	SC2　上層	(6.9)	(3.7)	4.5		近代	銅版転写　反転復元
38	染付磁器	小杯	SC2　上層	(6.0)	(2.8)	4.4		近代	反転復元
39	染付磁器	湯飲み碗	SC2　上層	(6.0)	(4.2)	6.9		近代	銅版転写　反転復元
40	染付磁器	小杯	SC2　上層	(5.1)	2.0	2.5		近代	
41	白磁	猪口	SC2　中層	(3.9)	1.8	3.15		近代	
42	染付磁器	皿	SC2　上層	10.5	6.4	2.1		近代	型紙摺
43	釉下彩磁器	皿	SC2　上層 /SH1　下層	10.6	6.3	1.9 ～ 2.1	瀬戸・美濃	明治	クロム釉　型紙摺
44	白磁	紅皿	SC2　上層	6.1	1.9	1.4	肥前	19c 後半	
48	染付磁器	碗	SC3　上層・一括	(10.0)	3.8	6.1		明治	型紙摺
49	染付磁器	碗	SC3　下層	—	3.4	—	肥前		
50	染付磁器	碗	SC3　下層	—	3.6	—	肥前	19c ～	
51	染付磁器	小杯	SC3　下層	—	3.0	—	肥前	19c ～	
52	染付磁器	湯飲み碗	SC3　下層	—	(4.6)	—		近代	反転復元
53	染付磁器	皿	SC3　上層	(13.7)	(8.6)	3.8		明治	反転復元
54	染付磁器	皿	SC3　中層・下層	12.7	7.9	3.5		明治	型紙摺
55	陶器	硫酸瓶蓋	SC3　上層・中層・一括	11.9	4.8	6.2		近代	
56	陶器	硫酸瓶	SC3　上層・中層・一括	11.7	17.5	51.2		近代	底部砂目
57	ガラス	?	SC3　上層	3.0	3.4	7.6		近代	無色透明
60	釉下彩磁器	碗	SC4　上層	11.1	5.0	6.0		近代	同様の資料複数有
61	釉下彩磁器	碗	SC4　下層・一括	11.2	3.5	6.3		近代	

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
62	釉下彩時期	碗	SC4　上層	11.7	4.9	5.0		近代	
63	染付磁器	碗	SC4　中層 /SC133　上層	9.6	3.5	5.2 ～ 5.4		近代	型紙摺
64	釉下彩磁器	碗	SC4　中層	10.6	3.8	5.8		近代	
65	磁器	碗	SC4　中層	8.9	3.1	4.4		近代	上絵プリント
66	磁器	碗	SC4　下層・一括	10.1	3.8	5.3		近代	上絵プリント
67	染付磁器	碗	SC4　中層	(10.8)	3.7	4.5		近代	型紙摺
68	染付磁器	碗	SC4　下層	8.2	2.8	4.8		近代	スタンプ印判
69	染付磁器	小碗	SC4　中層	7.6	2.7	4.5		近代	スタンプ印判
70	染付磁器	小杯	SC4　中層 /SC133　上層・一括	7.0	2.6	4.3 ～ 4.5		近代	型紙摺
71	染付磁器	小杯	SC4　中層 /SC133　一括	6.7	3.2	4.2		近代	銅版転写
72	染付磁器	小杯	SC4　中層 /SC133　中層	8.6	3.0	3.7		近代	
73	染付磁器	碗蓋	SC4　中層	9.4	3.4	2.5		近代	型紙摺
74	磁器	皿	SC4　中層	12.8	7.3	2.0 ～ 2.3		近代	上絵
75	釉下彩時期	皿	SC4　中層	11.0	6.2	2.5		近代	上絵
76	染付磁器	皿	SC4　下層 /E3　3 層	(10.9)	6.1	2.2		近代	型紙摺
77	磁器	皿	SC4　下層	10.9	6.1	2.0		近代	上絵
78	染付磁器	皿	SC4　中層・一括	11.1	6.3	2.5		近代	銅版転写　歪み大
79	磁器	皿	SC4　上層	15.2	7.6	3.8		近代	上絵
80	染付磁器	大皿	SC4　一括 /SC133　上層 /E3　3 層	(22.0)	(11.6)	3.7		明治	型紙摺
81	釉下彩磁器	花刺し or 線香立	SC4　下層 /SC133　上層	6.4	6.4	11.0		近代	銅版転写
82	磁器	香炉	SC4　中層	8.0	—	6.0		昭和初期	緑釉 + 上絵
83	中国青花	香炉 or 鉢	SC4　一括 /E3　3 層・一括	—	—	—	中国	中世か	
84	陶器	植木鉢	SC4　中層	18.4	10.1	14.2	薩摩（苗代川）	近代	
85	陶器	植木鉢	SC4　中層・下層	19.0	11.2	17.2		近代	
86	陶器	?	SC4　上層・中層	12.5	12.3	10.6		近代	
87	土器	五徳	SC4　上層 /D3　3 層一括	27.4	23.3	6.9		近代	
88	土器	鍋物煖炉	SC4　下層・一括	23.3	22.3	21.5 ～ 21.8	三河	近代	「三河陶器特産連合組合員高橋○○」
89	ガラス	乳製品瓶	SC4　上層	2.3	3.6	12.7		近代	無色透明　「都城牛乳株式会社」
90	ガラス	乳製品瓶	SC4　上層	—	3.8	13.7		近代	無色透明　「高温殺菌　全乳　90cc
91	ガラス	薬瓶	SC4　下層	2.3	3.8	11.9		近代	茶系半透明　「わかもと」
92	ガラス	薬瓶か	SC4　中層	—	4.2	11.6		近代	茶系半透明
93	ガラス	薬瓶	SC4　下層	1.4	2.7	7.4		近代	コバルト系半透明　「黄金水　愛生堂」
94	ガラス	薬瓶	SC4　中層	1.6	3.3	7.7		近代	無色透明
95	ガラス	薬瓶	SC4　中層	2.0	3.7	8.2		近代	無色透明
96	ガラス	薬瓶	SC4　中層	1.5	2.3	5.3		近代	無色透明
97	ガラス	薬瓶	SC4　一括	1.3	2.1	5.7		近代	無色透明
98	ガラス	薬瓶	SC4　中層	1.7	6.0	14.6		近代	無色透明　「柏村小児成人内科」
99	ガラス	薬瓶	SC4　下層	1.5	5.0	12.5 ～ 12.6		近代	無色透明　「小牧胃腸病療院」
100	ガラス	薬瓶	SC4　一括	2.0	(7.0)	16.3		近代	無色透明
101	ガラス	薬瓶	SC4　中層	2.0	7.0	16.2		近代	無色透明
102	ガラス	化粧瓶か	SC4　中層	5.2	6.4	5.0		近代	白色不透明
103	ガラス	化粧瓶か	SC4　中層	(6.0)	6.4	5.0		近代	白色不透明
104	ガラス	化粧瓶	SC4　中層	4.6	5.2	5.1		近代	白色不透明　「メヌマポマ―ド」
105	ガラス	化粧瓶	SC4　中層	4.6	5.4	5.1		近代	白色無透明　「メヌマポマ―ド」
106	ガラス	化粧瓶	SC4　下層	4.6	5.4	5.0		近代	白色無透明　「メヌマポマ―ド」
107	ガラス	化粧瓶	SC4　下層	2.2	1.8	2.6		近代	乳白色不透明
108	ガラス	化粧瓶か	SC4　中層	2.7	2.7	1.1		近代	白色不透明
109	ガラス	化粧瓶か	SC4　下層	—	3.3	—		近代	無色透明
110	ガラス	文具瓶	SC4　中層	6.3	6.7	5.6		近代	青色半透明　「キエフ糊」
111	ガラス	文具瓶	SC4　上層	2.1	4.4	5.6		近代	無色透明
112	ガラス	栓	SC4　中層	4.4	1.6	5.7		近代	無色透明
113	ガラス	薬瓶	SC4　中層	1.9	5.8	17.3		近代	青色半透明　「ライジングサン石油株式会社精製品」
114	ガラス	薬瓶	SC4　中層	3.4	5.6	23.9		近代	茶系半透明　「ハイカチ―ル」
115	ガラス	薬瓶	SC4　中層	2.8	7.2	18.8		近代	青色半透明
116	ガラス	薬瓶	SC4　中層	2.1	5.2	23.4		近代	青色半透明　「フマキラ―」
117	ガラス	薬瓶か	SC4　中層	2.5	6.8	18.5		近代	緑色半透明

遺物観察表③

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
120	染付磁器	碗	SC5　上層	10.0	3.7	5.6		近代	
121	釉下彩磁器	碗	SC5　上層	10.7	4.0	5.8		近代	
122	釉下彩磁器	碗	SC5　上層	11.4	4.5	5.5		近代	
123	染付磁器	小碗	SC5　上層	7.7	2.8	5.1		近代	
124	染付磁器	小碗	SC5　中層・下層	8.1	2.7	4.9		近代	
125	染付磁器	小碗	SC5　上層	8.1	3.1	4.8		近代	銅版転写
126	釉下彩磁器	小碗	SC5　上層 /E3　3 層	(6.6)	2.9	5.4		近代	
127	染付磁器	皿	SC5　中層・下層	12.7	7.4	2.6		近代	銅版転写
128	染付磁器	皿	SC5　上層 /E3　3 層	11.5	6.5	2.4		近代	銅版転写
129	釉下彩磁器	菱形皿	SC5　上層	(16.8)	6.9	3.6 ～ 3.9		近代	上絵
130	磁器	皿	SC5　上層・中層	12.7	7.3	2.2 ～ 2.4		近代	上絵
131	染付磁器	皿	SC5　上層	11.2	6.6	2.4		近代	スタンプ印判
132	磁器	皿	SC5　上層	(18.2)	9.0	5.1		近代	
133	磁器	蓋物蓋	SC5　上層	10.4	—	3.1		近代	
134	釉下彩磁器	蓋物蓋	SC5　上層 /SC133　中層	8.0	—	2.6		近代	
135	染付磁器	鉢	SC5　上層・下層	18.2	7.8	7.2 ～ 7.4		近代	
136	染付磁器	瓶	SC5　上層・一括	—	8.8	—		近代	
137	磁器	酒杯	SC5　上層	(5.4)	2.0	2.9		近代	祝都城飛行場竣工記念
138	染付磁器	徳利	SC5　上層・中層・一括	(2.4)	(4.0)	(13.2)		近代	反転復元
139	白磁	フック	SC5　上層	—	—	—		近代	
140	釉下彩磁器	急須	SC5　上層・中層・一括	(6.4)	6.4	7.4		近代	
141	陶器	擂鉢	SC5　上層	32.6	16.7	12.1		近代	
142	陶器	瓶	SC5　上層	3.0	7.4	19.7	薩摩（龍門司）	近代	龍門司三彩
143	陶器	大鉢	SC5　中層	36.4	17.1	14.9		近代	底部印刻有
144	土器	鍋物焜炉	SC5　中層・下層・一括	(20.7)	11.1	13.1 ～ 13.6	三河	近代	焜炉内側
145	ガラス	薬瓶	SC5　上層	1.6	0.5	7.5		近代	コバルト系半透明　「EYE WATER ROHTO」
146	ガラス	薬瓶	SC5　上層	2.6	4.3	11.8		近代	茶色半透明　「わかもと」
147	ガラス	薬瓶	SC5　上層	2.4	4.4	11.7		近代	茶色半透明　「わかもと」
148	ガラス	薬瓶か	SC5　上層	—	4.2	—		近代	茶色半透明　「オラボカ」
149	ガラス	薬瓶	SC5　中層	4.1	3.9	5.2		近代	白色不透明
150	ガラス	薬瓶	SC5　上層	1.9	3.4	8.1		近代	無色透明
151	ガラス	化粧瓶	SC5　中層	—	(4.0)	—		近代	反転復元　緑色半透明
152	ガラス	化粧瓶	SC5　上層	5.1	4.7	4.8		近代	白色無透明
153	ガラス	化粧瓶か	SC5　上層	2.0	4.1	12.1		近代	無色透明
154	ガラス	文具瓶	SC5　中層	2.1	5.1	6.3		近代	無色透明
155	ガラス	?	SC5　上層	5.0	3.6	9.3		近代	青色半透明
156	ガラス	サイダ―瓶	SC5　上層	—	6.1	—		近代	緑色半透明　「大日本麦酒株式会社製造」
157	ガラス	ビ―ル瓶	SC5　上層	—	6.9	—		近代	茶色半透明　「登録商標 KB」
158	ガラス	?	SC5　上層	3.0	6.4	22.7		近代	無色透明
159	ガラス	ワイン瓶	SC5　中層	2.5	6.0	28.8		近代	茶色半透明　「KOZAN　WINE　BEE　BRAND」
160	ガラス	?	SC5　上層	1.8	5.0	17.4		近代	緑色半透明
167	染付磁器	碗	SC6　上層	11.3	3.8	4.4		明治	型紙摺
168	染付磁器	碗	SC6　中層	—	4.0	—		明治	
169	染付磁器	湯飲み碗	SC6　上層	(5.8)	(3.8)	6.9		近代	反転復元
170	染付磁器	小杯	SC6　上層	6.6	3.0	4.6		近代	
171	白磁	酒杯	SC6　上層	6.4	2.8	2.7		近代	
172	染付磁器	小皿	SC6　下層	7.7	2.5	2.4		近代	
173	釉下彩磁器	蓋	SC6　上層	5.6	—	—		近代	上絵
174	染付磁器	小皿	SC6　下層	8.1 ～ 8.6	5.5	2.3 ～ 2.5	肥前	17c 末～ 18c 前半	スタンプ印判
175	染付磁器	皿	SC6　下層	10.4	5.7	2.2		近代	
176	染付磁器	水注	SC6　上層・中層・下層	3.0	4.2	9.9		近代	
179	陶器	擂鉢	SC6　上層	(30.2)	(17.0)	12.4	薩摩（苗代川）	近代	
180	ガラス	ラムネ瓶	SC11　中層	2.0	5.2	20.8		近代	緑色半透明
181	陶器	擂鉢	SC11　下層	(33.4)	—	—		近代	反転復元
182	染付磁器	皿	SC12　一括	—	(4.3)	—	肥前	17c 前半	反転復元
183	中国青花	香炉 or 鉢	SC14　上層	—	—	—	中国	中世か	

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
184	染付磁器	碗	SC7　上層	10.1	4.0	5.5	薩摩	幕末～	
185	ガラス	化粧瓶か	SC7　一括	3.2	4.7	7.2		近代	無色透明 「cLUB」
186	ガラス	乳製品瓶	SC7　一括	(2.8)	4.4	16.8		近代	無色透明 「蒸気消毒　全乳」
187	染付磁器	端反碗	SC8　中層	(10.1)	4.0	6.1	肥前	明治～	
188	染付磁器	小杯	SC8　上層・中層	(8.3)	—	—	瀬戸・美濃	幕末～明治	
189	染付磁器	酒杯	SC8　下層	(6.2)	1.9	2.5		近代	
190	染付磁器	端反碗蓋	SC8　上層・下層	(8.5)	(3.2)	2.8		近代	反転復元
191	染付磁器	蓋物蓋	SC8　上層	8.1	—	3.1		近代	
192	中国青花	碗	SC9　上層	(12.0)	4.6	5.8	中国漳州窯系	16c 後半～ 17c 前半	
193	白磁	端反碗	SC9　一括	(8.6)	3.7	5.1	薩摩	19c ～幕末	平佐窯
194	陶胎染付	香炉	SC9　上層	(12.0)	—	—	肥前	18c 前半	
195	染付磁器	皿	SC9　上層・一括	9.5	3.9	2.6	肥前	18c 末～ 19c	内面針支え 3 ヶ所有
196	陶器	碗	SC9　上層	(12.5)	5.0	5.1	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
197	陶器	碗	SC9　一括	11.8	5.4	4.9	薩摩（加治木･姶良）	18 c後半	
198	染付磁器	端反碗	SC21　上層	(9.6)	3.5	6.0		明治	型紙摺
199	染付磁器	小杯	SC21　中層	(8.4)	3.0	4.2	瀬戸・美濃	幕末～明治	
200	染付磁器	小杯	SC21　上層	(6.4)	(2.9)	4.1		明治	反転復元　型紙摺
201	染付磁器	小杯	SC21　中層・下層	7.0	2.9	4.2 ～ 4.4		近代	
202	染付磁器	小杯	SC21　下層	6.5	3.0	3.7		明治	型紙摺
203	白磁	酒杯	SC21　上層	5.2	1.8	2.4		近世か	上絵
204	白磁	猪口	SC21　中層	(4.1)	2.8	3.1			
205	染付磁器	皿	SC21　一括 /SH1　一括 /D2　3 層	13.3	6.0	4.8		明治～	
206	染付磁器	皿	SC21　上層	10.0	(5.9)	2.4		近代	スタンプ印判
207	染付磁器	角皿	SC21　中層・下層	9.0	4.1	2.5			型押
208	染付磁器	端反碗蓋	SC21　上層	(9.0)	4.0	2.7		明治	型紙摺
209	釉下彩磁器	蓋	SC21　上層	5.9	—	2.5		近代	
210	釉下彩磁器	蓋	SC21　上層	5.2	—	2.6		近代	
211	染付磁器	蓮華	SC21　上層	—	3.8	—		近代	
214	陶器	土瓶	SC21　上層	6.3	—	8.7	薩摩（苗代川）	19c ～	
215	陶器	土瓶	SC21　下層	(9.8)	3.5	9.4	薩摩（苗代川）	19c ～	反転復元
216	陶器	土瓶蓋	SC21　下層	5.0	—	3.4	薩摩（苗代川）		
217	陶器	土瓶蓋	SC21　下層	(4.6)	—	3.4	薩摩（苗代川）		
218	染付磁器	鉢	SC49　下層	—	(7.8)	—	薩摩か	18c 末	反転復元
219	染付磁器	広東碗	SC50　中層	—	(5.6)	—	肥前	18c 末～ 19c 初	
220	染付磁器	碗	SC50　一括 /D2　一括	(9.5)	(3.0)	5.8		明治	反転復元
221	染付磁器	碗	SC58　上層	(10.8)	—	—	薩摩	幕末	反転復元
222	染付磁器	碗	SC58　上層	(9.6)	(3.5)	5.1	肥前		反転復元　輪花有
223	染付磁器	皿	SC58　上層	12.8	7.2	3.9	薩摩か	幕末	
224	陶器	大甕	SC58　上層	(30.0)	—	—		近代	反転復元　破片大量に有
225	陶器	大甕	SC58　上層	—	18.0	—		近代	反転復元　破片大量に有
226	釉下彩磁器	碗	SC10　上層	11.3	3.6	4.8		近代	銅版転写
227	染付磁器	碗	SC10　上層	9.3	3.3	5.4		明治	型紙摺
228	染付磁器	碗	SC10　上層	9.8	3.4	5.6		明治	型紙摺
229	染付磁器	小杯	SC10　上層	(7.0)	3.0	4.2		明治	型紙摺
230	染付磁器	小杯	SC10　上層	(7.2)	2.8	4.4		明治	型紙摺
231	染付磁器	小杯	SC10　中層	(7.2)	(3.4)	3.6		近代	銅版転写
232	染付磁器	小杯	SC10　上層	(6.5 ～ 7.2)	3.0 ～ 3.3	2.3 ～ 2.6		近代	歪み大
233	染付磁器	皿	SC10　上層	(12.9)	(8.0)	3.0		明治	反転復元　型紙摺
234	染付磁器	蓋物蓋	SC10　上層	8.9	—	3.2		近代	型紙摺
235	釉下彩磁器	蓋	SC10　上層	(5.9)	—	2.6		近代	クロム釉
236	磁器	糸巻形製品	SC10　中層	1.7	1.7	1.2			孔径 4.5mm
237	染付磁器	急須	SC10　上層	(4.2)	(5.2)	7.4			
238	陶器	行平鍋	SC10　中層	(14.0)	(7.0)	7.3	関西系	近世	反転復元
243	染付磁器	碗	SC15　上層	(11.4)	3.6	4.7		明治	型紙摺
244	染付磁器	碗	SC15　上層	10.0	(3.3)	4.2		明治	型紙摺
245	染付磁器	碗	SC15　上層	9.5	3.5	5.4		明治	型紙摺

遺物観察表⑤

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
246	染付磁器	碗	SC15　上層	(9.8)	3.8	5.3		近代	
247	中国青花か	碗	SC15　下層	(10.0)	(4.3)	5.7	肥前	近代	反転復元
248	染付磁器	碗	SC15　上層	(8.9)	2.9	4.0		近代	
249	釉下彩磁器	小杯	SC15　上層	(6.6)	3.0	4.3		近代	クロム釉
250	染付磁器	鉢	SC15　上層 /SH1　下層	(12.8)	6.8	5.2		明治	型紙摺
251	染付磁器	碗蓋	SC15　上層	8.8	3.5	2.7		明治	型紙摺
252	染付磁器	大皿	SC15　上層・下層 /SH1　中層・下層・一括	20.4	12.4	3.2	肥前	明治	
253	染付磁器	皿	SC15　上層	14.6 ～ 14.9	8.7	3.9 ～ 4.2		明治	型紙摺
254	染付磁器	皿	SC15　上層	13.0	8.0	2.9		近代	
255	陶器	皿	SC15　下層 /E3　5 層	(12.7)	4.5	4.8	肥前	1590 ～ 1610	胎土目
256	青磁	碗	SC15　下層	—	—	—	中国	13c 前半	青磁碗Ⅱ類
260	釉下彩磁器	碗蓋	SC16　下層	(10.0)	(4.0)	3.2		近代	反転復元　吹き墨
261	染付磁器	碗	SC17　中層	—	4.5	—	肥前	19c 頃	
262	染付磁器	小杯	SC17　下層	8.2	3.0	3.9 ～ 4.2	瀬戸・美濃	幕末～明治	
263	染付磁器	皿	SC17　中層 /SC21　下層	10.0	6.0	2.2		明治	スタンプ印判
264	染付磁器	急須蓋（ミニチュア）	SC17　一括	2.6	—	—		近世～	
265	染付磁器	端反碗蓋	SC17　下層	8.9	3.4	3.0		近代	
266	陶器	香炉	SC17　中層 /D2　3 層	9.5	4.4	5.2	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半～	
267	陶器	三足ハマ	SC17　中層	6.7	—	1.8			磁器用か
268	染付磁器	皿か	SC18　上層	—	4.9	—	肥前	19c ～幕末	
269	釉下彩磁器	碗蓋	SC18　上層	10.0	3.8	2.9		近代	
270	染付磁器	小杯	SC20　床面・一括	(8.3)	3.2	4.4	瀬戸・美濃	幕末～明治	被熱
271	染付磁器	端反碗	SC20　下層・一括	(9.9)	(4.0)	5.0		近代	反転復元
272	染付磁器	八角鉢	SC20　床面・一括	(19.3)	(10.2)	10.5	肥前	19c 頃か	反転復元 被熱する
273	染付磁器	湯飲み碗	SC20　床面・一括	7.0	2.9	5.4	肥前	19c 中～幕末	被熱する
275	染付磁器	筒形碗	SC25　上層・中層	7.9	—	—	肥前	18c 末～ 19c 初	
276	染付磁器	丸碗	SC25　上層	(9.1)	4.3	4.9	肥前	近世	
277	青磁	香炉	SC25　上層	(11.6)	—	—			
278	陶器	秉燭	SC25　上層	(4.4)	3.5	5.5	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半～	
279	陶器	皿	SC25　上層	13.7	4.6	4.2	薩摩（龍門司）	18c 後半	
280	陶器	皿	SC25　中層	14.1	4.9	4.3	薩摩（龍門司）	18c 後半	
284	染付磁器	小杯	SC27　上層・重機一括	6.9	2.8	4.5		近代	
285	白磁	碗	SC27　一括	(9.0)	4.0	4.8	薩摩	幕末	
286	染付磁器	碗	SC27　一括	8.8	2.8	3.5		近代	
288	染付磁器	皿	SC28　中層	10.1	5.7	2.6		近代	
289	染付磁器	小杯	SC28　上層 /SC100　一括	(7.0)	(2.8)	3.2	瀬戸・美濃	幕末～明治	反転復元
290	陶器	鉢	SC28　上層 /SC135　上層・中層 /c3　3 層 /E3　3 層	24.1	16.8	6.8	薩摩（苗代川）か		底面貝目か
291	青磁染付	筒形碗	SC29　上層	(6.8)	—	—	肥前	18c 後半	反転復元
292	染付磁器	香炉	SC29　上層	(5.8)	—	—	肥前	近世	反転復元
293	青磁染付	碗蓋	SC29　一括 /SC35　下層・一括	(9.8)	3.8	3.3	肥前	18c 後半	
294	染付磁器	碗	SC33　上層・一括	(8.1)	—	—		近代	銅版転写
295	染付磁器	湯飲み碗	SC33　一括	7.4	3.9	6.4		明治	
296	染付磁器	皿	SC33　上層・中層	(11.7)	(6.6)	2.1		近代	銅版転写
297	色絵磁器	皿	SC33　一括 /SB4P6　1 層	—	—	—	肥前	近代	
298	陶器	甕	SC33　上層・中層・下層 /SC34　一括 /SC108　上層	28.0	18.5	34.8	薩摩（苗代川）	近代	
299	陶器	甕	SC33　上層	36.2	20.5	39.2	薩摩（苗代川）	近代	
300	陶器	植木鉢	SC33　上層・中層・下層	(20.4)	13.2	18.6	薩摩（苗代川）	明治～	
301	陶器	植木鉢	SC33　上層・中層	20.6	12.3	17.3	薩摩（苗代川）	明治～	
302	染付磁器	碗	SC34　上層	11.6	4.1	4.9	薩摩	19c	
303	陶器	碗	SC34　上層	—	(3.1)	—	京・信楽系	19c	
304	染付磁器	筒形碗	SC34　上層	—	—	—	薩摩	18c 末～ 19c 初	
305	染付磁器	碗	SC30　上層	(10.8)	(4.3)	6.0		近代	反転復元
306	白磁	碗	SC30　上層	(10.0)	(3.5)	5.4			反転復元
307	青磁染付	碗	SC30　上層	(11.0)	—	—	肥前	18 c 後半	反転復元
308	白磁	碗	SC30　中層	—	(5.0)	—			反転復元

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
309	陶器	ぐい飲み	SC30　中層	5.7	2.7	5.2	薩摩（竪野）	近代か	白薩摩
311	陶器	鉢	SC30　中層	（22.8）	（17.2）	8.1	薩摩（苗代川）	18c	反転復元
312	陶器	擂鉢	SC30　上層・中層・一括	（22.3）	9.3	10.1	薩摩（苗代川）	18c	
313	染付磁器	端反碗	SC35　上層・中層	（8.9）	（3.2）	5.5	肥前	幕末	反転復元
314	磁器染付	端反碗	SC35　上層・中層・下層	9.3	3.4	5.3 ～ 5.4	薩摩か	19c 中～幕末	
315	染付磁器	碗	SC35　下層	—	4.3	—	肥前	19c	
316	磁器染付	小碗	SC35　中層	6.3	3.2	6.3		近代	
317	染付磁器	小杯	SC35　上層	（8.4）	（2.4）	4.2	瀬戸・美濃	幕末～近代	反転復元
318	染付磁器	小杯	SC35　中層・一括	6.1	2.4	5.0		近代	
319	上絵磁器	酒杯	SC35　中層	6.1	2.6	3.0		近代	内面「都大佛」
320	白磁	そば猪口	SC35　下層・一括	7.4	4.8	6.1	肥前		
321	白磁	猪口	SC35　上層	4.1	2.0	2.8			
322	白磁	猪口	SC35　上層	4.0	1.7	2.6			
323	白磁	猪口	SC35　中層	6.3	3.2	6.3			内面紅？付着
324	染付磁器	皿	SC35　中層	（12.8）	7.6	3.0		近代	
325	染付磁器	皿	SC35　上層	（9.6）	（4.7）	1.8	瀬戸・美濃	幕末～明治	反転復元
326	染付磁器	皿	SC35　下層	（16.8）	（9.2）	2.7	肥前	18c 後半	反転復元
327	染付磁器	大皿	SC35　下層	（29.6）	（19.4）	5.0	肥前	19c	反転復元
328	染付磁器	端反碗蓋	SC35　中層	8.2	3.2	2.5 ～ 2.6	薩摩	19c 中～幕末	
329	磁器染付	徳利	SC35　上層・中層	（3.0）	5.9	18.0	肥前か	19c 頃	
330	染付磁器	壺	SC35　下層	（6.2）	—	—	肥前	近世	反転復元
331	染付磁器	香炉	SC35　下層	（6.7）	—	—	肥前	18c 後半～ 19c	反転復元
332	染付磁器	蓮華	SC35　中層	—	3.3	—		近代	
333	白磁	仏花瓶	SC35　上層	8.6	—	—			
334	陶器	皿	SC35　下層	（11.1）	（4.7）	2.7	薩摩（加治木･姶良）	18c ～	反転復元　内面ゴマ目
335	陶器	皿	SC35　下層	（12.4）	（4.5）	3.7	薩摩（龍門司）	18c 後半	反転復元
336	陶器	土瓶蓋	SC35　中層	9.4	—	4.0	薩摩（苗代川）	18c 後半	外面重ね焼痕有
337	陶器	灯明皿台	SC35　中層・下層	6.5	5.6	5.4	薩摩（加治木･姶良）	18c	
338	陶器	酒器	SC35　中層	—	3.7	—	薩摩（加治木･姶良）	近世後半	
339	陶器	鉢	SC35　下層	29.2	20.8	9.6	薩摩（苗代川）	19c ～	
340	陶器	片口鉢	SC35　中層	14.1	5.2	7.5 ～ 7.9	薩摩（苗代川）	19c ～	
341	陶器	片口鉢	SC35　上層・中層・下層	14.0	5.3	7.4	薩摩（苗代川）	19c ～	
342	陶器	鉢	SC35　中層・下層	（16.9）	7.2	7.8	福岡（小石原）		
343	陶器	灯火具	SC35　中層	4.5	3.4	4.0	関西系	近世	
344	陶器	瓶	SC35　下層	—	（11.0）	—	薩摩（龍門司）か	18c ～	底部墨書有
345	磁器	青磁	SC69　中層	—	—	—	中国	中世か	獣足
346	白磁	紅皿	SC89　中層	4.7	1.3	1.1 ～ 1.3	肥前	19c	
347	染付磁器	蓋物蓋	SC38　上層	（15.1）	4.6	—	肥前		
348	染付磁器	碗	SC38　下層	（11.0）	（4.6）	6.0	肥前	17c 中頃	反転復元
349	陶器	土瓶	SC38　床面 /SC115　上層・下層	（8.6）	—	8.8 ～ 9.2	薩摩（苗代川）		反転復元
350	染付磁器	広東碗蓋	SC39　上層	（9.3）	（4.8）	3.0	肥前	18c 末～ 19c 初頭	反転復元
351	白磁	紅皿	SC39　上層	4.8	0.9	1.4	肥前	19c	
352	染付磁器	碗	SC40　下層	7.7	3.0	4.1 ～ 4.3	肥前	18c 後半～ 19c	
353	染付磁器	碗	SC40　下層	7.6	3.0	3.8 ～ 3.9	肥前	18c 後半～ 19c	
354	白磁	猪口	SC40　上層	4.7	2.6	3.2	薩摩か		
355	白磁	猪口	SC40　中層	4.9	3.0	2.9	肥前		
356	青磁染付	碗	SC40　下層	—	—	—	肥前	18c 後半	
357	白磁	香炉	SC40　下層 /SC115　下層	（10.0）	—	—			反転復元
358	染付磁器	そば猪口	SC40　下層 /SC97　中層・一括	（6.8）	4.7	6.2	肥前	19c	
359	色絵磁器	そば猪口	SC40　上層	（7.3）	（5.4）	6.4	肥前	19c	反転復元
360	陶器	蓋物	SC40　中層・下層	10.2	5.0	5.5 ～ 5.8	薩摩（竪野）		白薩摩
361	陶器	腰折碗	SC40　上層・下層	9.3	3.4	5.3	関西系	18c 前～中	
362	陶器	鳥の餌入	SC40　上層	—	—	—	薩摩（竪野）か	近世後期	
363	陶器	植木鉢	SC40　上層・下層 /SC92　上層・中層	30.2	16.6	29.7 ～ 30.1	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	
364	染付磁器	端反碗	SC41　上層	10.4	3.4	5.8 ～ 6.1	肥前	19c 中～幕末	

遺物観察表⑦

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
365	染付磁器	皿	SC42　上層	(14.7)	—	—		近代	反転復元
366	陶器	小杯	SC51　上層	4.4	1.9	3.6	備前		外面型押？有
367	白磁	碗	SC53　下層	(10.5)	(3.9)	5.8	薩摩	18c 末～幕末	反転復元
368	染付磁器	碗	SC55　下層	—	(3.5)	—		明治	型紙摺
369	釉下彩磁器	端反碗	SC56　下層	11.8	—	—		近代	墨弾き
370	釉下彩磁器	小碗	SC56　上層	7.9	3.5	4.6		近代	銅版転写
371	ガラス	ワイン瓶	SC56　中層	2.0	6.5	28.1		近代	茶色半透明
372	ガラス	ワイン瓶	SC56　中層	2.2	7.1	29.1		近代	茶色半透明
373	ガラス	清酒瓶か	SC56　中層	2.2	6.6	27.1		近代	青色半透明
374	ガラス	清酒瓶か	SC56　中層	(2.3)	5.7	23.5		近代	青色半透明
375	ガラス	飲料瓶か	SC56　上層	2.1	5.9	23.2		近代	緑色半透明
376	ガラス	薬瓶か	SC56　下層	1.9	7.3	19.4		近代	青色半透明
377	ガラス	薬瓶か	SC56　上層	1.6	6.3	18.6		近代	青色半透明
378	ガラス	薬瓶か	SC56　上層	1.9	4.6	12.5		近代	茶色半透明
379	ガラス	薬瓶か	SC56　中層	(3.0)	6.7	10.1		近代	無色透明
380	ガラス	？	SC56　下層	1.4	5.5	7.9		近代	無色透明
381	染付磁器	碗	SC59　下層	(8.8)	(3.6)	5.1	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
382	白磁	碗	SC59　下層	—	3.6	—	薩摩か		
383	染付磁器	鉢	SC59　下層・一括	—	9.4	—	肥前	18c 後半	
384	ガラス	？	SC59　下層	2.3	2.6	5.3 ～ 5.4		近代	無色透明
385	ガラス	栓か	SC59　下層	3.4	—	—		近代	無色透明
386	染付磁器	皿	SC60　下層	(9.4)	4.8	2.0	肥前	17c 末～ 18c 前半	コンニャク印判
387	染付磁器	碗	SC60　上層	(8.6)	3.4	4.7	肥前	18c 前半	
388	色絵磁器	皿	SC60　下層	(16.4)	(9.7)	2.7	肥前	18c	反転復元
389	染付磁器	蓋物蓋	SC60　上層	(14.2)	—	—	肥前		反転復元
390	磁器	湯飲み碗	SC63　上層	(6.2)	(4.0)	6.9		近代	上絵
391	白磁	蓋	SC63　上層	—	—	—		近代	
392	白磁	歯磨き粉入れ蓋	SC63　中層	5.0 ～ 6.5	—	2.2		明治後半	
393	白磁	酒杯	SC63　中層	(7.3)	3.0	3.2		近代	内面文字・絵有
394	白磁	酒杯	SC63　中層	(7.5)	3.0	3.0		近代	反転復元　内面文字・絵有
395	白磁	酒杯	SC63　中層	7.0	2.4	2.8		近代	
396	ガラス	薬瓶か	SC63　上層	1.6	6.0	18.4		近代	青色半透明
397	ガラス	薬瓶か	SC63　上層	2.3	6.0	17.4		近代	青色半透明
398	ガラス	薬瓶	SC63　中層	1.6	2.7	6.0		近代	無色透明 「大學目薬　参天堂薬房」
399	ガラス	薬瓶	SC63　中層	1.4	2.0	6.5		近代	コバルト色半透明 「神薬　資生堂製」
400	ガラス	薬瓶か	SC63　中層	1.9	3.2	5.5		近代	無色透明
401	ガラス	薬瓶	SC63　中層	1.2	2.0	5.4		近代	無色透明
402	ガラス	薬瓶	SC63　中層	—	—	—		近代	無色透明
403	ガラス	？	SC63　下層	4.1	5.9	6.3		近代	緑色半透明
404	ガラス	？	SC63　上層	—	4.3	—		近代	無色透明
405	ガラス	ビール瓶	SC63　上層	2.3	7.0	29.5		近代	茶色半透明 「KABUTO　BEER」
406	ガラス	ビール瓶	SC63　上層	2.4	7.1	29.5		近代	茶色半透明 「キリンビール」
407	ガラス	飲料瓶か	SC63　上層	1.7	5.8	23.5		近代	緑色半透明
408	ガラス	ワイン瓶	SC63　上層	1.9	8.2	30.5		近代	緑色半透明
409	ガラス	飲料瓶か	SC63　下層	—	5.9	—		近代	緑色半透明
410	ガラス	文具瓶	SC63　上層	2.0	5.5	5.3		近代	無色透明
411	ガラス	文具瓶	SC63　中層	2.2	4.5	3.9		近代	無色透明
412	ガラス	文具瓶	SC63　中層	2.3	4.4	3.8		近代	無色透明
414	染付磁器	鉢	SC65　中層	—	—	—		明治	型紙摺
415	白磁	酒杯	SC65　中層	(6.6)	—	—		近代	反転復元　内面「傘履物類其外諸・・・」
417	ガラス	薬瓶	SC65　上層	1.8	4.2	10.4		近代	無色透明
419	陶器	土瓶	SC75　上層	(6.4)	—	9.0	薩摩（苗代川）	18c 後半～	
421	白磁	碗	SC77　下層	—	(5.0)	—			
422	白磁	端反碗	SC77　上層	(8.8)	3.5	4.6	薩摩か	19c 中～幕末	

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
423	白磁	猪口	SC77　下層	（4.6）	3.1	3.8			
424	陶器	土瓶蓋	SC77　中層	4.8	—	3.0	薩摩（苗代川）	18c 後半～	
425	陶器	植木鉢	SC77　中層・下層 /SC115　中層・下層	—	（16.8）	—	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	反転復元　底部内外貝目
426	—	坩堝	SC77　上層	（5.6）	—	—			反転復元
427	陶器	擂鉢	SC77　上層 /SC115　下層 /B3　3 層	31.8	14.0	14.3	薩摩（苗代川）	18c	内面貝目・裏面コマ目
428	染付磁器	皿	SC78　中層	—	（3.8）	—	肥前		反転復元
429	染付磁器	天目形碗	SC81　中層	—	—	—	肥前	17c 前半	
430	白磁	酒杯	SC81　一括	（4.4）	1.7	2.8			
431	染付磁器	碗	SC115　上層	（9.2）	（3.8）	5.0	波佐見	18c 後半	反転復元
432	染付磁器	筒形碗	SC115　下層	（7.7）	（3.5）	6.6	肥前	18c 末～ 19c 初	反転復元
433	染付磁器	筒形碗	SC115　上層	（7.8）	（4.0）	6.7	肥前	18c 後半	反転復元
434	染付磁器	碗	SC115　中層	10.9	4.1	5.1	肥前	18c 後半	
435	染付磁器	碗	SC115　上層	（8.0）	（3.1）	5.0			反転復元
436	染付磁器	小碗	SC115　中層	（8.1）	3.0	4.1			
437	青磁染付	碗	SC115　中層	—	（4.8）	—	肥前	18c 後半	反転復元
438	白磁	碗蓋	SC115　上層・一括	9.8	3.9	3.3	薩摩	18c 末～ 19c	
439	白磁	皿	SC115　中層	11.7	7.7	2.4		近代～	
440	染付磁器	皿	SC115　中層	（12.0）	（4.4）	3.4	肥前	18c 後半	反転復元
441	染付磁器	皿	SC115　中層	—	（6.2）	—	肥前	17c 前半	反転復元
442	染付磁器	皿	SC115　上層	（12.8）	—	—	肥前	近世	反転復元　輪花有
443	染付磁器	皿	SC115　上層	13.8	8.2	3.2	肥前	18c 後半	
444	染付磁器	皿	SC115　上層	13.0	6.6	3.2	肥前	18c 後半	
445	染付磁器	皿	SC115　中層・下層	（13.6）	（8.1）	3.0	肥前	18c 後半	反転復元
446	染付磁器	皿	SC115　上層	13.9	9.3	4.2	肥前	18c 後半	
447	染付磁器	うがい碗	SC115　上層	（14.2）	—	—	肥前		反転復元
448	染付磁器	そば猪口	SC115　中層	（7.4）	5.9	6.2	肥前	18c 後半	
449	染付磁器	そば猪口	SC115　中層	（6.8）	4.8	6.2	肥前	18c 後半	
450	白磁	そば猪口	SC115　中層・下層	6.8	4.9	5.9	肥前	18c 後半～ 19c	
451	白磁	そば猪口	SC115　上層	（7.5）	（4.8）	5.9	肥前	18c 後半～ 19c	反転復元
452	白磁	そば猪口	SC115　上層	—	4.8	—	肥前	18c 後半～ 19c	
453	白磁	猪口	SC115　上層	5.8	3.0	3.4	肥前	18c 後半～ 19c	
454	白磁	猪口	SC115　中層	4.9	2.9	2.8	肥前	18c 後半～ 19c	
455	白磁	猪口	SC115　上層	4.2	2.6	3.2	肥前	18c 後半～ 19c	
456	染付磁器	鉢	SC115　上層	16.1	8.0	6.1 ～ 6.2	肥前	18c 後半～ 19c	
457	染付磁器	鉢	SC115　中層	15.3	9.1	6.3	肥前	18c 末～ 19c 前半	
458	染付磁器	鉢	SC115　上層	（14.2）	（7.8）	5.0	肥前	18c	反転復元
459	染付磁器	鉢	SC115　中層	（15.2）	—	—	肥前		反転復元　輪花有
460	染付磁器	鉢	SC115　下層	（15.3）	9.0	6.2	肥前	18c 末～ 19c 前半	
461	染付磁器	蓋物蓋	SC115　上層	（15.0）	（3.4）	5.9	肥前		反転復元
462	色絵磁器	小杯	SC115　下層	（9.6）	（3.1）	6.8	肥前		反転復元　上手
463	色絵磁器	蓋物蓋	SC115　中層	（7.6）	—	—	肥前		反転復元　上手
464	白磁	香炉	SC115　上層	（7.8）	—	—			反転復元
465	白磁	仏飯器	SC115　中層	（8.0）	4.0	（4.9 ～ 5.3）	肥前		
466	磁器	?	SC115　上層	（7.8）	—	—		近代か	反転復元
467	白磁	瓶	SC115　下層	3.6	—	—	肥前		
468	白磁	瓶	SC115　上層・下層	—	5.3	—	肥前		
469	染付磁器	水滴	SC115　下層	5.9	4.8	2.2	肥前	19c	
470	染付磁器	水滴	SC115　一括	—	—	—	肥前		
471	陶器	碗	SC115　上層	11.7	4.3	6.2	薩摩（龍門司）	18c 後半	
472	陶器	碗	SC115　下層	（11.0）	4.2	5.8	薩摩（龍門司）	18c 後半	
473	陶器	碗	SC115　中層	11.6	4.3	5.7 ～ 5.9	薩摩（龍門司）	18c 後半	輪花有
474	陶器	碗	SC115　上層・一括	（11.3）	4.9	6.9	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
475	陶器	碗	SC115　上層・一括	10.5	4.1	5.2	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
476	陶器	碗	SC115　下層	12.1	4.4	6.4 ～ 6.7	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
477	陶器	碗	SC115　下層	（11.1）	4.1	5.3	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	

遺物観察表⑨

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
478	陶器	碗	SC115　下層	11.0	4.2	5.6	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
479	陶器	碗	SC115　上層	（12.4）	4.9	6.9	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
480	陶器	碗	SC115　中層	（11.8）	4.5	7.1	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
481	陶器	碗	SC115　中層	（11.1）	4.3	5.5	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
482	陶器	仏飯具	SC115　一括	（9.9）	3.9	4.2	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
483	陶器	仏飯具	SC115　上層	（8.7）	4.1	5.7	薩摩（加治木･姶良）		
484	陶器	灯明皿台	SC115　下層	8.2	5.0	6.2 ～ 6.3	薩摩（加治木･姶良）	18c	
485	陶器	小碗	SC115　一括	6.1	3.4	3.9	薩摩（龍門司）	18c 後半	
486	陶器	文房具か	SC115　一括	2.8	—	1.1	薩摩（竪野）		白薩摩
487	陶器	灯火具	SC115　下層	4.2	5.4	11.7	薩摩（元立院か）	18c ～	
488	陶器	腰折碗	SC115　中層	（9.3）	4.0	5.0	薩摩（龍門司）	18 世紀後半	
489	陶器	皿	SC115　上層	（22.1）	（11.7）	5.3	薩摩（苗代川）		反転復元　内面コマ目
490	陶器	土瓶	SC115　下層	（11.3）	—	—	薩摩（苗代川）		反転復元
491	陶器	水滴	SC115　中層	—	4.3	2.5	薩摩（龍門司）か	近世後期	
492	陶器	猪口	SC115　上層	4.8	2.0	3.6	備前		
493	陶器	鬢盥	SC115　下層	11.6 ～ 12.8	12.5 ～ 13.8	3.6 ～ 3.7	瀬戸・美濃		型紙
494	陶器	植木鉢	SC115　上層・一括 /SD1　中層	28.5	15.7	24.8 ～ 25.6	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	底部焼成後に打ち欠き
495	陶器	植木鉢	SC115　中層	（31.8）	—	—	薩摩（苗代川）	18c 後半～	反転復元　口唇部胎土目
496	陶器	鉢	SC115　上層・中層	（30.2）	（20.2）	10.4	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	反転復元　内面貝目
497	陶器	大鉢	SC115　上層	—	（14.3）	—	肥前		
498	陶器	台付鉢か	SC115　下層	—	（13.6）	—	薩摩（苗代川）か		
499	陶器	擂鉢	SC115　上層	（32.4）	（13.8）	14.9 ～ 15.2	薩摩（苗代川）	18c 後半か	反転復元
500	陶器	甕	SC115　一括	（28.2）	—	—	薩摩（苗代川）	19c	反転復元　口唇部胎土目
501	陶器	壺	SC115　上層	—	—	—	沖縄		
502	土器	焙烙	SC115　上層	（18.0）	（13.4）	3.3		近世	反転復元
505	染付磁器	蓋物蓋	SC84　下層 /D2　1 層一括	（9.8）	—	—	肥前	19c か	反転復元
506	染付磁器	端反碗	SC85　下層・一括	9.6	（2.8）	5.6 ～ 5.8		近代	
507	染付磁器	端反碗蓋	SC85　下層	8.3	—	—		近代	
508	染付磁器	端反碗蓋	SC85　下層・一括	8.3	—	—		近代	
509	染付磁器	端反碗蓋	SC85　下層・一括	8.6	—	—		近代	
510	染付磁器	小杯	SC85　下層・一括	5.8	2.8	4.6 ～ 4.7		近代	
511	染付磁器	小杯蓋	SC85　下層	（5.1）	—	2.2		近代	
512	染付磁器	皿	SC85　上層・下層	（12.8）	（8.0）	3.1	薩摩か	19c ～	反転復元
513	染付磁器	皿	SC85　下層	（9.8）	（5.3）	2.0	瀬戸・美濃	19c 後半	反転復元
514	染付磁器	鉢	SC85　上層・下層・一括 /C1・D1　1 層一括 / 壁一括	（22.4）	（13.1）	8.4		近代～	
515	染付磁器	長皿	SC85　下層 /B3　1 層一括	—	—	—	肥前か	19c 中～幕末	
516	染付磁器	広東碗	SC90　下層	（11.0）	（5.4）	6.1	薩摩	18c 末～ 19c	反転復元
518	染付磁器	碗	SC92　上層	—	（3.8）	—	波佐見	18c 後半	反転復元
519	染付磁器	筒形碗	SC92　下層	—	3.4	—	肥前	18c 末～ 19c 初	
520	染付磁器	筒形碗	SC92　上層	—	4.1	—	肥前	18c 末～ 19c 初	
521	染付磁器	香炉	SC92　上層	（9.1）	7.0	7.6	肥前		
522	染付磁器	碗	SC100　上層 /SC104　一括	（9.5）	—	—	肥前	18c	反転復元
523	青磁染付	筒形碗	SC100　上層・一括	（7.9）	—	—	肥前	18c 後半	
524	色絵磁器	蓋物	SC100　下層	（7.4）	3.6	3.8	肥前		金彩有
525	白磁	猪口	SC100　中層 /SC104　上層	（7.8）	—	—	肥前		反転復元　色絵素地か　上手
526	白磁か	碗蓋	SC100　下層	9.4	3.7	2.9	薩摩	18c 末～ 19 初	
527	染付磁器	そば猪口	SC100　下層	（8.0）	（5.4）	6.4	薩摩か		反転復元
528	青磁染付	碗	SC100　中層	—	4.4	—	肥前	18c 後半	
529	白磁	仏花器	SC100　上層 /SC104　下層・一括	（10.1）	6.4	17.7	肥前		
530	染付磁器	碗	SD1　中層 /SC104　一括	8.5	3.3	5.0	肥前		
531	釉下彩磁器	碗	SC104　中層	10.8	3.4	4.8 ～ 4.9		近代	銅版転写
532	染付磁器	碗	SC104　中層 /SC115　下層	（7.8）	3.0	4.1	波佐見	18c ～ 19c	
533	釉下彩磁器	碗	SC104　中層	（7.7）	（3.6）	4.7		近代	反転復元　銅版転写
534	染付磁器	小杯	SC104　上層	（8.3）	3.6	5.4	肥前		
535	染付磁器	皿	SC104　中層	10.0	5.6	2.6	薩摩	幕末～明治	

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
536	染付磁器	皿	SC104　中層	(9.2)	5.2	2.0	瀬戸・美濃	明治	
537	白磁	酒杯	SC104　下層	(7.1)	2.8	3.0		近代	内外面「・・祝賀・・」「H」
538	白磁	碍子	SC104　一括	—	—	—			内面白磁釉
539	陶器	碗	SC104　下層 /SC115　中層	(12.5)	4.0	5.4 ～ 5.7	肥前（内野山）	17c 後半～	
540	陶器	仏飯器	SC104　上層	8.8	4.7	5.5	薩摩（加治木･姶良）	18c ～	
541	染付磁器	瓶	SC104　下層	—	(8.9)	—	肥前		反転復元
542	染付磁器	皿	SC96　下層	(12.8)	(6.7)	3.1	肥前	17c 前半	反転復元
543	白磁	碗蓋	SC96　上層	(8.5)	(4.0)	3.1	肥前		
544	陶器	鉢	SC96　上層 /SC124　中層 /C2　1 層	24.1	15.8	7.8	薩摩（苗代川）	19c	
546	染付磁器	皿	SC97　一括 /SC115　中層	(19.7)	—	—			反転復元
547	陶器	碗	SC97　中層	(12.6)	5.1	6.9	薩摩（龍門司）	18c 後半	
548	染付磁器	端反碗	SC99　上層	(9.1)	—	—	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
549	染付磁器	碗	SC99　上層	—	3.8	—	薩摩	19c 中～幕末	
550	磁器	香炉	SC99　上層	(11.4)	(8.1)	8.1		近代	反転復元
551	染付磁器	端反碗蓋	SC99　上層	8.7	3.4	2.4	肥前	～明治	
552	染付磁器	碗	SC105　上層	10.2	3.9	5.7 ～ 5.9		明治	
553	染付磁器	碗	SC105　上層	9.9	4.1	6.0 ～ 6.2		近代	
554	染付磁器	皿	SC105　上層 /SC106 上層	(14.4)	(8.4)	4.3	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
555	青磁	香炉	SC105　上層	(10.7)	—	—	肥前		反転復元
556	陶器	香炉	SC105　上層	10.6	10.4	7.7	瀬戸・美濃		
557	陶器	鉢	SC105　上層 /SC106　上層 /SC113　一括 SX2　下層 /C2　1 層	28.5	16.5	10.8 ～ 11.2	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	
558	染付磁器	碗	SC106　上層	(11.1)	—	—	肥前	19c	反転復元
559	染付磁器	蓋物	SC106　下層	(14.5)	—	—	薩摩		反転復元
560	染付磁器	皿	SC106　上層	10.1	5.5	2.4	薩摩か	19c 中～幕末	
561	陶器	碗	SC106　下層	(8.7)	3.7	4.5	薩摩（龍門司）	18c 後半	
562	染付磁器	湯飲み碗	SC108　上層	(6.5)	—	—		明治	反転復元　型紙摺
563	染付磁器	碗蓋	SC108　上層	(8.6)	(3.4)	2.4		近代	反転復元
564	ガラス	薬瓶	SC108　上層	—	3.5	7.6		近代	無色透明
565	染付磁器	碗	SC114　上層・下層	(11.0)	(4.8)	7.0	肥前	17c 前半	反転復元
566	青磁	碗	SC114　下層	(11.8)	—	—	肥前か		反転復元
567	染付磁器	碗	SC114　下層	(9.5)	3.9	5.2	肥前か		
568	染付磁器	碗	SC114　下層	—	—	—	肥前		
569	磁器	碗（掛け分け）	SC114　下層	—	4.2	—	肥前	17c 中頃	高台無釉
570	中国青花か	碗	SC114　一括	—	—	—	中国漳州窯か		
571	磁器	碗（掛け分け）	SC114　中層	—	(3.1)	—	肥前	17c 中頃	反転復元　外面鉄釉
572	染付磁器	鉢か	SC114　中層	—	—	—	肥前		
573	中国青花	鉢か	SC114　下層	—	(5.8)	—	中国漳州窯	明末～清初	反転復元
574	中国青花	皿	SC114　下層	—	—	—	中国		
575	中国青花	皿	SC114　下層	—	(6.2)	—	中国	16c 後半～ 17c 前半	反転復元
576	染付磁器	皿	SC114　下層	(13.8)	(4.9)	3.8	肥前	17c 前半	反転復元
577	中国青花か	碗	SC114　上層	—	(4.5)	—	中国か		
578	白磁	小杯	SC114　中層	—	(2.4)	—	肥前	17c 中頃	反転復元
579	染付磁器	瓶	SC114　下層	(6.4)	—	—	肥前	17c 前半	
580	陶器	皿	SC114　下層	—	—	—	肥前	17c 前半	三彩唐津
581	陶器	皿	SC114　上層	—	(11.0)	—	肥前	17c 前半	反転復元　三彩唐津　内面砂目
582	陶器	皿	SC114　下層	—	7.6	—	肥前	16c 末～ 17c 初	歪み大　内面鉄絵
583	陶器	擂鉢	SC114　下層	—	(9.5)	—	肥前	17c	反転復元
584	陶器	甕	SC114　下層	(26.4)	—	—	薩摩（苗代川）	17c 第 2 四半期	反転復元　口唇部貝目
585	陶器	甕	SC114　中層・下層	37.0 ～ 37.7	—	—	薩摩（苗代川）	17c 第 2 四半期	
586	陶器	甕	SC114　中層・下層	—	—	—	薩摩（苗代川）	17c 第 2 四半期	
587	土器	鉢	SC114　下層・一括	28.0	14.4	12.2			胎土は練土状
606	染付磁器	小杯	SC124　下層	(6.6)	2.6	4.7		近代	
607	染付磁器	碗	SC131　中層	9.5	3.5	5.5 ～ 5.8		明治	型紙摺
608	染付磁器	碗	SC131　中層	9.9	3.7	5.0		明治	型紙摺
609	染付磁器	碗	SC131　中層	(9.9)	(3.4)	5.7		明治	型紙摺

遺物観察表⑪

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
610	染付磁器	碗	SC131　上層 / 重機　一括	9.1	3.5	4.7		近代	型紙摺
611	染付磁器	小杯	SC131　下層	8.4	2.9	3.7 ～ 3.8		明治	型紙摺
612	染付磁器	小杯	SC131　上層	(8.4)	2.9	4.0		近代	
613	染付磁器	小杯	SC131　下層	7.8	4.1	4.0 ～ 4.1		近代	銅版転写
614	陶器	土管	SC132　上層・一括	22.1	—	—	薩摩（苗代川）か	近代	
615	ガラス	?	SC132　上層	3.5	4.5	4.4		近代	無色透明
616	染付磁器	碗	SC133　上層 /E3　3 層	9.5	3.5	5.4		明治	型紙摺
617	染付磁器	碗	SC133　上層 /E3　3 層	9.4	3.5	5.1		明治	型紙摺
618	染付磁器	碗	SC133　上層	8.4	3.2	4.7		明治	型紙摺
619	染付磁器	碗	SC133　上層 /E3　3 層	10.8	3.8	4.3		明治	型紙摺　内面ハリ支え痕有
620	染付磁器	碗	SC133　中層 /E3　3 層	11.2	4.1	4.2		明治	型紙摺
621	染付磁器	碗	SC133　下層	10.3	3.9	4.3		明治	型紙摺　内面ハリ支え痕有
622	染付磁器	碗	SC133　上層 /E3　3 層	(9.4)	3.8	4.7		近代	銅版転写
623	釉下彩磁器	碗	SC133　中層	8.4	3.2	4.7		近代	銅版転写
624	染付磁器	碗	SC133　中層	8.3	3.0	4.6		近代	スタンプ印判
625	釉下彩磁器	小碗	SC133　中層	7.5	2.8	4.5		近代	スタンプ印判
626	染付磁器	小碗	SC133　中層	7.1	2.9	4.1		近代	型紙摺
627	染付磁器	小碗	SC133　上層	6.7	2.6	5.2		近代	
628	釉下彩磁器	小碗	SC133　上層	7.4	2.8	5.2		近代	銅版転写
629	釉下彩磁器	小碗	SC133　中層	6.8	3.1	5.4		大正～	外面文字有
630	釉下彩磁器	湯飲み碗	SC133　上層	6.3	3.8	6.6		昭和初期	外面「特別大演習　中町青年団」
631	染付磁器	碗	SC133　上層	8.4	3.2	3.7		近代	
632	染付磁器	小杯	SC133　上層	7.0	2.8	46		近代	銅版転写
633	染付磁器	小杯	SC133　上層・中層	6.8	3.0	5.3		近代	銅版転写
634	染付磁器	小杯	SC133　上層	6.7	3.3	4.5		近代	銅版転写
635	染付磁器	小杯	SC133　上層	6.7	3.2	4.5		近代	銅版転写
636	染付磁器	小杯	SC133　下層	6.9	3.4	4.6		近代	銅版転写
637	釉下彩磁器	猪口	SC133　中層	3.8	2.3	3.8		近代	吹き墨
638	白磁	皿	SC133　上層	18.6	10.1	3.5 ～ 4.3			
639	染付磁器	碗蓋	SC133　上層	10.0	4.1	2.6		明治	型紙摺
640	染付磁器	碗蓋	SC133　下層	8.6	3.4	2.6		明治	型紙摺
641	染付磁器	皿	SC133　上層	11.2	6.4	2.3		近代	銅版転写
642	染付磁器	皿	SC133　上層 /E3　3 層	10.9	6.2	2.0		近代	銅版転写
643	釉下彩磁器	皿	SC133　上層	(11.0)	(6.6)	1.7 ～ 1.8	瀬戸・美濃	明治	クロム釉　型紙摺
644	染付磁器	皿	SC133 上層 /E3　3 層	12.1	5.9	4.1		明治	型紙摺　内面ハリ支え痕有　外面「大△乙」
645	染付磁器	皿	SC133　上層 /E3　3 層	12.5	9.0	2.9		明治	型紙摺
646	染付磁器	皿	SC133　下層	12.8	7.8	2.7		明治	型紙摺
647	染付磁器	皿	SC133　下層	(12.7)	7.4	3.3		近代	
648	白磁	皿	SC133　下層	12.7	7.0	3.6	薩摩	19c	内面ハリ支え痕有
649	釉下彩磁器	水注	SC133　中層	3.1	4.9	9.0		近代	吹き墨
650	染付磁器	急須	SC133　上層・中層	6.4	6.8	6.6		近代	
651	釉下彩磁器	鉢	SC133　中層・下層	22.4	10.6	6.7	中国	近代	内面上絵
652	染付磁器	鉢	SC133　上層 /E3　3 層	24.5	10.8	9.2 ～ 9.4		近代	
653	陶器	擂鉢	SC133　上層・中層・下層 /E3　3 層	29.0	16.4	12.9	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	
654	陶器	鉢	SC133　上層・中層 /E3　3 層	28.3	17.5	12.8	薩摩（苗代川）	18c 後半～ 19c	
655	陶器	鬢盥	SC133　上層	(9.4)	(9.4)	3.0		明治～	反転復元
656	陶器	土瓶	SC133　下層	6.0	3.8	7.7	薩摩（苗代川））	18c 後半～ 19c	重ね焼きの跡有
657	ガラス	薬瓶	SC133　上層	—	2.1	—		近代	無色透明　「目薬　上池液」
658	ガラス	薬瓶	SC133　上層	—	2.0	—		近代	無色透明
659	染付磁器	端反碗	SC134　上層	(8.9)	(3.4)	5.1	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
660	染付磁器	鉢	SC134　下層	(15.0)	—	—	肥前		反転復元
661	染付磁器	香炉	SC134　上層	(11.4)	—	—	薩摩	19c	反転復元
662	青磁	小杯	SC134　上層	(4.9)	1.8	3.0			
663	染付磁器	皿	SC134　下層	(12.7)	(6.2)	2.6			反転復元
664	染付磁器	皿	SC134　中層	(9.6)	(5.8)	2.0	瀬戸・美濃	明治	反転復元

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
665	陶器	小皿	SC134　下層	5.8	4.0	3.0	薩摩（加治木･姶良）		
666	陶器	土瓶蓋	SC134　下層	3.6	—	3.9	薩摩（龍門司）	18c 後半～	
667	染付磁器	碗	SC135　下層	（10.3）	3.8	5.9		明治	型紙摺
668	染付磁器	碗	SC135　下層	（9.8）	—	—	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
669	染付磁器	小碗	SC135　中層	7.8	3.0	3.8	肥前	18c 後半～ 19c	
670	染付磁器	小杯	SC135　中層	（8.1）	（2.9）	4.0		近代	反転復元
671	染付磁器	小杯	SC135　下層	（7.0）	（3.2）	4.5		近代	反転復元
672	染付磁器	小杯	SC135　下層	6.1 ～ 6.4	2.8	4.4		近代	
673	染付磁器	小杯	SC135　中層	6.5	2.7	4.4 ～ 4.5		近代	
674	染付磁器	小杯	SC135　中層	5.1	2.2	2.9 ～ 3.0	薩摩	19c	
675	染付磁器	皿	SC135　上層	9.8	5.1	2.2	瀬戸・美濃	幕末～明治	
676	染付磁器	脚付小杯	SC135　下層	—	2.4	—			
677	陶器	急須	SC135　下層	3.1	3.4	4.5	薩摩（龍門司）		
678	陶器	香炉	SC136　上層 /B3　3 層 / 重機　一括	11.2	4.8	5.3	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半～	
679	白磁	猪口	SC143　下層	3.7	1.7	2.5			
680	染付磁器	碗	SC142　一括	—	（4.7）	—	薩摩か	19c 前半	反転復元
681	染付磁器	碗	SC142　一括	（9.0）	（3.7）	5.1	薩摩	18c 末	
682	染付磁器	筒形碗	SC142　一括	—	3.9	—	薩摩	18c 末～ 19 初	
683	染付磁器	皿	SC142　中層	（10.0）	（5.1）	2.6		明治～	反転復元
684	染付磁器	端反碗蓋	SC142　一括	8.9	3.4	2.9	薩摩	19c 中～幕末	
685	陶器	壺	SC142　上層・中層・一括	（13.9）	—	—	沖縄		反転復元
686	陶器	壺	SC142　中層・一括	—	17.6	—	沖縄		
687	染付磁器	碗	SC144　中層	（11.3）	3.9	4.8		近代	
688	釉下彩磁器	碗	SC144　上層	—	3.5	—		近代	銅版転写　高台内面「大日本沢田製」
689	染付磁器	急須	SC144　上層	（6.2）	5.8	（7.5）		近代	
690	ガラス	化粧瓶	SC144　下層	2.0	3.1	10.7		近代	無色透明　「清顔水」
691	ガラス	化粧瓶か	SC144　上層	2.2	4.3	11.5		近代	無色透明
692	白磁	酒杯	SC147　中層	（5.8）	2.2	2.7		近代	内面文字・絵有
693	ガラス	薬瓶	SC147　上層	1.3	1.4	4.5		近代	無色透明
694	染付磁器	碗	SC149　中層	（9.1）	（3.8）	5.6	肥前	17c 末～ 18c	外面染付 + コンニャク印判
695	中国青花か	碗	SC149　下層	—	（4.5）	—	中国か		
696	染付磁器	小杯	SC149　中層	（7.3）	3.6	5.1	肥前		
697	白磁	小杯	SC149　中層	（8.0）	—	—			反転復元
698	染付磁器	皿	SC149　中層	—	（6.0）	—	肥前	17c 前半	反転復元
699	白磁	皿	SC149　中層	（10.4）	（6.4）	2.6	肥前か		反転復元
700	中国青花	皿	SC149　中層	—	（6.3）	—	中国		反転復元
701	染付磁器	大皿	SC149　中層	—	（12.3）	—	肥前	17c 後半	高台内面ハリ支え有
702	磁器	溝縁皿	SC149　下層	（14.0）	—	—	肥前	1610 ～ 1630	反転復元
703	染付磁器	皿	SC149　下層	（14.2）	（9.0）	2.7	肥前	17c 末～ 18c 前半	反転復元　上手
704	中国青花	皿	SC149　中層	（14.2）	（7.4）	4.6	中国		反転復元
705	色絵磁器	蓋物蓋	SC149　中層	（13.0）	—	—	肥前		反転復元
706	染付磁器	大皿か	SC149　中層	—	（8.0）	—			反転復元
707	白磁	小杯	SC149　中層	—	3.0	—			
708	青磁	小杯	SC149　中層	—	（2.5）	—			
709	白磁	蓋付容器か	SC149　下層	（3.8）	—	—			反転復元
710	染付磁器	仏飯器	SC149　中層	（8.3）	4.5	6.8	肥前		
711	染付磁器	仏飯器	SC149　中層	（7.8）	4.2	6.7	肥前		
712	陶器	碗	SC149　中層	（12.0）	（5.2）	7.4	薩摩（加治木山元窯）	17c 第 3 四半期	反転復元　内面・高台砂目有
713	陶器	碗	SC149　上層	（12.3）	（5.0）	7.4	薩摩（加治木･姶良）	18c 前半	反転復元
714	陶器	碗	SC149　中層	（9.1）	（4.0）	4.4	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	反転復元
715	陶器	碗	SC149　上層	11.8	4.6	4.4	肥前	17c 後半～ 18c 前半	京焼風陶器
716	陶器	甕	SC149　中層	（30.0）	—	—	薩摩（苗代川）	17c 後半～ 18c 前半	反転復元　口唇部貝目有
717	陶器	壺	SC149　下層	（14.6）	—	—	薩摩（苗代川）	17c 後半～ 18c 前半	反転復元　口唇部貝目有
718	陶器	獣足香炉	SC149　中層	12.0	4.2	7.8 ～ 8.1	薩摩（竪野）	18c 代か	
720	白磁	碗	SC151　上層	—	（4.7）	—	肥前		反転復元

遺物観察表⑬

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
721	染付磁器	天目形碗	SC152　下層	—	—	—	肥前	17c 前半	
722	染付磁器	碗	SC152　一括	(10.1)	—	—	肥前		
723	染付磁器	碗	SC152　一括	(10.3)	—	—	肥前		
724	染付磁器	碗	SC152　一括	—	—	—	肥前		
725	染付磁器	碗	SC152　下層	—	(4.8)	—	波佐見	18c 代	反転復元
726	染付磁器	皿	SC152　一括	(13.2)	(5.4)	3.8	肥前	17c 前半	反転復元
727	陶器	大鉢	SC152　中層	—	(12.0)	—	肥前	17c 前半	反転復元　三彩唐津　砂目
728	陶器	擂鉢	SC152　下層	(35.4)	—	—	薩摩（苗代川）	17c 中頃	反転復元　口唇部貝目
729	陶器	擂鉢か	SC152　一括	(27.4)	—	—	備前		反転復元　口唇部目跡有
730	染付磁器	碗	SD1　下層 /c3　1 層	(11.6)	4.3	5.2	肥前	18c 後半	
731	染付磁器	碗	SD1　中層	(10.8)	4.2	53	肥前	18c 後半	
732	染付磁器	碗	SD1　中層	(11.2)	4.3	5.1	肥前	18c 後半	
733	青磁染付	筒形碗	SD1　中層	(7.1)	3.9	6.1	肥前	18c 後半	
734	染付磁器	小杯	SD1　中層	(7.8)	—	—	肥前		反転復元
735	白磁	小杯	SD1　中層	(7.1)	(3.3)	3.2	薩摩か	19c	反転復元
736	染付磁器	小杯	SD1　一括	(5.8)	—	—	肥前	17c 前半	反転復元
737	染付磁器	蓋物	SD1　中層	9.2	4.3	4.9	肥前	18c 後半	
738	染付磁器	大皿	SD1　中層	—	(12.6)	—	肥前	18c 前半	反転復元
739	染付磁器	蓋物蓋	SD1　上層・下層	6.4	—	—	肥前	19c 代	
740	白磁	瓶	SD1　上層・下層	—	5.7	—	肥前		
741	陶器	碗	SD1　下層・一括	12.4	4.8	7.5	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
742	陶器	碗	SD1　中層	(11.6)	(4.6)	6.2	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	反転復元　高台砂目　内面重ね焼き跡有
743	陶器	皿	SD1　中層	10.4	4.6	2.4	薩摩（加治木･姶良）		内面ゴマ目
744	陶器	壺	SD1　中層	(8.5)	7.6	13.4	薩摩（苗代川）か	近代	
745	陶器	土瓶蓋	SD1　下層	6.4	—	3.2	薩摩（苗代川）		外面重ね焼き跡有
746	陶器	土瓶蓋	SD1　下層	6.8	—	3.1	薩摩（苗代川）		外面重ね焼き跡有
747	陶器	蓋物蓋	SD1　下層	5.3	—	2.9			
748	陶器	酒器	SD1　一括 /SXC2　下層・一括	1.8	3.5	6.1	薩摩（加治木･姶良）		
749	陶器	餌擂鉢	SD1　中層	5.4	1.6	2.7	備前		
750	陶器	甕	SD1　中層・一括	(34.0)	—	—	肥前	17c 代	反転復元
751	陶器	仏花瓶	SD1　中層	17.0	—	—	薩摩（竪野）か		全体的に鉄分付着
752	陶器	壺	SD1　中層	—	12.2	—	薩摩（苗代川）	17c 後半～ 18c 前半	内面当具痕
753	陶器	甕	SD1　中層	—	21.0	—	沖縄		底部「×」有
754	陶器	大鉢	SD1　中層	—	(12.8)	—	肥前	18c 前半	
756	染付磁器	碗	SH1　上層	10.8	3.9	4.3 ～ 4.4		明治	型紙摺　内面ハリ支え
757	染付磁器	碗	SH1　下層・一括 /D2　1 層	8.6	3.2	5.2		明治	型紙摺
758	染付磁器	碗	SH1　下層	8.3	3.0	3.8 ～ 4.0		近代	
759	染付磁器	碗	SH1　中層 /D2　3 層	(8.4)	2.8	3.6		近代	
760	染付磁器	小杯	SH1　中層	(6.7)	2.6	4.2		近代	
761	白磁	酒杯	SH1　下層	5.9	2.0	2.9			後絵
762	染付磁器	端反碗蓋	SH1　上層	8.6	3.0	2.9		近代	素描き
763	染付磁器	端反碗蓋	SH1　下層	(8.6)	(3.6)	27		明治	反転復元　型紙摺
764	染付磁器	皿	SH1　上層	14.0	8.4	4.0		明治	型紙摺
765	染付磁器	皿	SH1　上層	13.9	8.6	4.1		明治	型紙摺
766	染付磁器	皿	SH1　下層	12.6	7.8	3.1		明治	型紙摺
767	染付磁器	急須	SH1　下層	6.1	5.6	6.7		近代	
768	白磁	馬の鞦	SH1　一括	1.3（外径）	0.9（内径）	—	薩摩		
769	陶器	土瓶	SH1　中層・下層	6.3	3.7	8.7	薩摩（苗代川）		
770	陶器	土瓶蓋	SH1　下層	4.4	—	3.3	薩摩（苗代川）		
771	ガラス	薬瓶	SH1　下層	0.8	2.1	6.2		近代	無色透明
772	ガラス	薬瓶	SH1　下層	1.4	2.0	5.2 ～ 5.4		近代	無色透明
773	ガラス	栓	SH1　下層	3.6	—	—		近代	無色透明
781	中国青花	碗	P2　上層	(11.8)	4.1	4.7	中国福建	16c 後半～ 17c 前半	
784	陶器	甕	SR1	—	20.0	—	薩摩（苗代川）か	近代	内面胎土目　白色固形物付着
785	染付磁器	鉢	SX1　上層 /C3　1 層 /D3　1 層	14.9	6.9	7.2 ～ 7.3		近代か	

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
786	染付磁器	端反碗	SX2　下層・一括	10.0	3.6	5.7 ～ 5.8		近代	
787	染付磁器	端反碗	SX2　下層	9.6	3.6	5.3 ～ 5.4		明治頃	
788	染付磁器	端反碗	SX2　中層	(10.9)	(4.0)	6.1	肥前	19c 中～幕末	反転復元
789	染付磁器	端反碗	SX2　下層	(10.8)	(4.0)	6.0	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
790	染付磁器	小杯	SX2　下層	8.6	2.7	3.9 ～ 4.0	瀬戸・美濃	幕末～明治	
791	染付磁器	碗	SX2　上層	(8.6)	(3.6)	4.5	瀬戸・美濃	幕末～明治	反転復元
792	染付磁器	端反碗蓋	SX2　下層	7.7	3.1	2.5 ～ 2.6	肥前	19c 中～幕末	
793	染付磁器	端反碗蓋	SX2　下層・一括	8.1	3.1	3.0	肥前	19c 中～幕末	
794	白磁	酒杯	SX2　中層	5.9	2.5	3.1		幕末～明治	内面「枕弥」
795	白磁	酒杯	SX2　上層	(5.9)	2.2	3.7		19c	内面文字有
796	染付磁器	小杯	SX2　上層・下層	(5.6)	3.2	5.1		近代	
797	染付磁器	小杯	SX2　中層・下層・一括	(5.8)	2.3	4.2		近代	
798	染付磁器	小杯	SX2　上層・下層	(6.5)	2.7	4.6		近代	
799	白磁	猪口	SX2　下層	3.7	1.8	3.1 ～ 3.2			
800	白磁	猪口	SX2　下層	(3.0)	1.7	2.9			
801	染付磁器	皿	SX2　下層・一括	(20.8)	6.7	5.1	肥前	1630 ～ 1640	反転復元
802	染付磁器	皿	SX2　下層	—	(4.9)	—	肥前	17c 前半	反転復元
803	染付磁器	皿	SX2　下層	(13.1)	(8.0)	3.2		近代	反転復元
804	染付磁器	皿	SX2　下層	(9.8)	(5.5)	2.3	薩摩か		反転復元
805	染付磁器	皿	SX2　中層	9.6	5.7	1.9 ～ 2.0	瀬戸・美濃	幕末～明治	
806	染付磁器	碗	SX2　下層	(12.0)	(4.2)	4.9			反転復元
807	染付磁器	皿	SX2　下層・一括	(11.8)	7.4	2.8	肥前	19c	
808	染付磁器	皿	SX2　中層・下層	(12.1)	(6.1)	5.2		近代	反転復元
809	染付磁器	角皿	SX2　下層	(8.2)	4.3	2.3 ～ 2.4	薩摩か	幕末	
810	白磁	紅皿	SX2　上層	(5.4)	—	—	肥前	幕末	反転復元
811	染付磁器	急須	SX2　下層	5.0	5.6	7.5		近代	
812	染付磁器	酒器	SX2　中層	—	—	—	薩摩	幕末	
813	白磁	唾壺	SX2　下層 /c1　1 層	(7.0)	—	—	薩摩か	19c 代	
814	染付磁器	水滴	SX2　下層	4.5	5.7	1.6	肥前		
815	陶器	仏飯器	SX2　下層	(8.8)	4.1	5.9	薩摩（加治木･姶良）	18c 前半	
816	陶器	土瓶	SX2　上層	6.2	4.6	7.7	薩摩（苗代川）	18c 後半～	
817	陶器	甕	SX2　上層 /B3　1 層	(35.4)	—	—	薩摩（苗代川）	19c	反転復元
818	陶器	壺	SX2　下層	14.4	—	—	沖縄		三耳壺か
821	染付磁器	端反碗	C3　1 層	(9.7)	3.8	5.9		近代	
822	染付磁器	端反碗	壁一括	(10.1)	4.0	5.9	薩摩	19c 中～幕末	平佐窯か
823	染付磁器	端反碗	重機一括	10.5	4.3	4.7 ～ 4.9		近代	
824	染付磁器	端反碗	重機一括	(10.6)	4.0	5.4	薩摩	19c 中～幕末	
825	染付磁器	端反碗	C3　1 層	(10.6)	4.0	5.5	薩摩	19c 中～幕末	
826	染付磁器	端反碗	D1　3 層一括	10.0	—	—	薩摩か	19c 中～幕末	
827	染付磁器	端反碗	D2　3 層	(10.4)	(4.6)	5.6	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
828	染付磁器	端反碗	E3　3 層	(11.0)	(3.8)	4.5	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
829	染付磁器	端反碗	D2　一括	(10.4)	(3.7)	5.4	薩摩か	19c 中～幕末	反転復元
830	染付磁器	碗	重機一括	(11.7)	4.3	4.7	波佐見	18c 後半	
831	染付磁器	碗	C3　3 層	—	(4.0)	—	肥前		反転復元
832	染付磁器	碗	D2　3 層	—	(4.8)	—	波佐見	18c 後半	反転復元
833	染付磁器	端反碗	E2　3 層	(8.2)	3.8	4.4	薩摩	19c 中～幕末	
834	染付磁器	筒形碗	C3　3 層	7.4	4.1	6.7	肥前か		
835	染付磁器	広東碗	1 層一括	(11.2)	(6.2)	6.2	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
836	染付磁器	広東碗	重機一括	(10.8)	(5.8)	5.8	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
837	染付磁器	広東碗	重機一括	(10.1)	(5.1)	5.7	薩摩	19c 中～幕末	
838	染付磁器	小杯	C3　3 層	(7.2)	3.6	5.2	肥前	17c 末～ 18c 前半	
839	色絵磁器	端反碗	E3　3 層	(9.0)	3.0	3.7	薩摩か		
840	中国青花	皿	E3　3 層	(10.2)	5.2	3.1	中国	18c 末～ 19c	清朝磁器
841	中国青花	皿	D3　3 層	—	3.4	—	中国	16c 代	
842	中国青花	大皿	D2　3 層 /E3　3 層一括	—	—	—	中国漳州窯	16c 後半～ 17c 前半	

遺物観察表⑮

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
843	染付磁器	皿	E3　3 層一括	—	(5.0)	—	肥前	17c 前半	反転復元
844	染付磁器	皿	1 層一括	(13.0)	(5.1)	3.2	肥前	17c 前半	反転復元
845	染付磁器	皿	1 層一括	—	(4.8)	—	肥前	17c 前半	反転復元
846	染付磁器	皿	E3　3 層一括	—	(5.0)	—	肥前	17c 前半	反転復元
847	染付磁器	皿	E3　3 層	(13.0)	(6.4)	2.9	肥前	17c 前半	
848	染付磁器	皿	D2　3 層一括	(14.4)	(9.0)	4.0	薩摩	18c 末	弥勒窯
849	染付磁器	皿	B1　1 層	(12.7)	(7.0)	4.7	肥前	18c 後半	
850	染付磁器	皿	C3　3 層	(13.8)	8.8	3.7	薩摩か	19c 代	
851	染付磁器	皿	重機一括	(10.4)	(6.0)	1.9	肥前	18c	反転復元
852	染付磁器	皿	3 層一括	(13.2)	6.9	4.5		近代か	反転復元
853	染付磁器	皿	1 層一括	(9.9)	(4.4)	2.8	薩摩	19c 中～幕末	反転復元
854	染付磁器	皿	D2　一括	(14.2)	8.4	3.8			
855	染付磁器	皿	C2　3 層一括	(14.1)	9.0	4.0	肥前	19c	
856	染付磁器	皿	C2　1 層	14.6	8.2	4.3	薩摩か	19c 中～幕末	
857	白磁	皿	C2　1 層・4 層	12.8	7.4	3.2 ～ 3.5	薩摩	19c	
858	染付磁器	皿	C4　1 層	(9.5)	(5.2)	2.2	瀬戸・美濃	幕末～明治	反転復元
859	色絵磁器	皿	C2　1 層一括	(18.2)	(10.0)	5.7	肥前	近代	反転復元
860	染付磁器	大皿	重機一括	(22.7)	(12.6)	3.4		明治	型紙摺
861	染付磁器	大皿	重機一括	(23.0)	(13.2)	2.8		明治	反転復元　型紙摺
862	染付磁器	蓋	B3　1 層	(10.6)	4.6	2.9	肥前	19c 前半	
863	染付磁器	端反碗蓋	E3　3 層	(9.0)	3.7	2.6	肥前か		
864	染付磁器	端反碗蓋	3 層一括	(9.5)	—	—	肥前	19c 中～幕末	
865	染付磁器	端反碗蓋	3 層一括	(9.0)	—	—	肥前	19c 中～幕末	反転復元
866	染付磁器	端反碗蓋	3 層一括	(8.8)	3.5	2.9	薩摩	19c 中～幕末	
867	染付磁器	端反碗蓋	3 層一括	8.8	3.5	3.0 ～ 3.2	薩摩	19c 中～幕末	
868	染付磁器	そば猪口	C3　1 層	(7.0)	(4.6)	6.2	肥前	18c 後半	反転復元
869	白磁	猪口	C1・D1　1 層一括	5.0	3.0	2.9			
870	白磁	猪口	C1　1 層一括	4.8	3.2	3.2	薩摩か	19c	
871	白磁	猪口（ミニチュア）	3 層一括	2.8	1.1	1.8	肥前	19c	消費地で絵付か
872	色絵磁器	仏飯器	D1　3 層一括	(5.9)	3.8	4.4		近代	
873	染付磁器	酒杯	D3　1 層一括	7.0	2.7	2.8		近代	
874	白磁	酒杯	D3　1 層一括	(7.0)	2.8	2.9		明治	内面「歩六四」
875	釉下彩磁器	酒杯	E3　3 層	(5.0)	2.0	2.9		近代	内面上絵・文字有
876	白磁	紅皿	E2　3 層	4.7	1.8	1.5			
877	白磁	紅皿	C5　3 層	4.6	2.0	1.1			
878	色絵磁器	香炉	C4　1 層	(7.8)	—	—	肥前か		
879	染付磁器	香炉	3 層一括	(9.8)	—	—	肥前		反転復元
880	青磁	香炉	D1　3 層一括	(11.4)	(4.5)	8.2	肥前	近世	反転復元
881	染付磁器	鉢か	C3　1 層	—	(5.8)	—	肥前	18c 後半	
882	染付磁器	酒器	C2　1 層	—	6.6	—		近代	銅版転写
883	釉下彩磁器	急須	E3　3 層	6.4	6.9	8.7		近代	
884	陶器	急須	E3　3 層	6.1	6.9	9.7			クロム釉　底面墨書有
885	染付磁器	御神酒徳利	D2　一括	—	2.7	—	肥前	18c 末～ 19c	
886	染付磁器	蓮華	1 層一括	—	3.8	—		近代	
887	白磁	蓮華	C3　1 層	—	3.3	5.0			
888	染付磁器	徳利	表採	—	5.0	—		近代	
889	白磁	馬の鞦	C2　1 層	5,5（長さ）	1.3（幅）	—		近代	
890	白磁	糸巻形製品	c1　1 層一括	1.6	1.5	1.6			径 6mm
891	白磁	戸車	D3　1 層一括	7.6（外径）	2.1（内径）	1.5			
892	白磁	戸車	C2　1 層	4.8（外径）	1.3（内径）	1.2			
893	白磁	戸車	3 層一括	—	—	1.3			
894	白磁	戸車	3 層一括	—	—	0.9			
895	白磁	戸車	D2　3 層一括	—	—	1.0			
896	白磁	碍子	C3・4　1 層一括	2.8	2.8	4.4		近代	
897	白磁	?	重機一括	—	5.5	5.1		近代	
898	色絵磁器か	水滴 or 人形	D2　3 層	—	—	—	中国か		

遺物観察表⑯

遺物番号	種別	器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）			産地	時期	備考
				口径	底径	器高			
899	磁器	徳利	E3　3 層	—	9.6	—		近代	
900	陶器	皿	D3　3 層 /E2　5 層 /E3　3	(13.5 ～ 13.8)	4.3	4.6	肥前	16c 末～ 17c 初	内面鉄絵　歪み大　外面胎土目
901	陶器	仏飯具	C2　3 層	9.4	(3.9)	3.6	薩摩（加治木･姶良）	18c 後半	
902	陶器	仏飯器	C3　1 層	6.4	4.8	6.0	薩摩（竪野）		白薩摩
903	陶器	ミニチュア	表採	2.3	1.5	2.1	薩摩（加治木・姶良）か		
904	陶器	土瓶	C3　1 層	6.6	5.3	10.1	薩摩（苗代川）	18c 後半～	
905	陶器	土瓶	E1　3 層	6.1	8.0	9.5	薩摩（苗代川）	18c 後半～	
906	陶器	土瓶	E3　3 層	(8.3)	9.0	11.5	薩摩（苗代川）		
907	陶器	土瓶蓋	E1　3 層	4.8	—	3.4	薩摩（苗代川）		
908	陶器	土瓶蓋	C3　1 層	(4.8)	—	—	薩摩（苗代川）		
909	陶器	擂鉢	D1　3 層 /D2　3 層一括	29.3	17.0	12.8 ～ 13.7	薩摩（苗代川）	18c 後半～	底部コマ目
910	陶器	土瓶	C4　1 層	(3.8)	(6.2)	(7.3)	沖縄	近世	反転復元
911	陶器	茶入れか	C3　3 層	—	(3.9)	—		近世	反転復元
912	陶器	メンコ	D2　3 層	—	4.2	1.1		近世	天目碗の転用品
913	陶器	三足ハマ	C4　3 層	5.0	—	1.3			糸切り離し
914	陶器	メンコか	C4　1 層	5.5	—	0.8			糸切り離し→板状圧痕
915	陶器	足付ハマ	D3　3 層	(7.6)	—	(1.7)			反転復元
916	土器	焙烙	C3　3 層	—	—	—		近世	
917	陶器	トチン	D2　3 層	(20.8)	—	—			反転復元　大皿用か　胎土目

遺物観察表⑰

遺物番号	種別・器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）				材質・石材	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
45	煙管雁首	SC2　上層	9.8	径 1.0	火皿径 1.0	19.5	銅	ラウ残存
46	煙管吸口	SC2　上層	10.4	径 0.9	—	18.5	銅	
47	硯	SC2　上層	14.7	5.4	1.7	(278)	赤間石	
58	石墨	SC3　下層	(3.8)	0.5	—	(2.3)	滑石	
59	軒丸瓦	SC3　上層	(11.0)	14.3	2.5		—	ラウ残存　裏面「保険」
118	櫛	SC4　上層	(3.3)	(5.4)	0.5	(4.3)	セルロイド	
119	石板	SC4　上層	(5.1)	(9.1)	(0.35)	(26.6)	頁岩	
161	骨製歯ブラシ	SC5　上層・中層	(14.0)	1.2	0.65	(7.5)	骨	
162	煙管雁首	SC5　上層	5.3	径 1.3	火皿径 1.1	12.7	銅	裏面「髙野」
163	煙管吸口	SC5　上層	8.7	径 1.2	—	14.3	銅	ラウ残存　裏面「保険」
164	銭貨	SC5　上層・中層	2.4	—	0.15	2.6	銅	「寛永通寶」
165	軒丸瓦	SC5　中層	(8.2)	13.4	2.1		—	
166	軒平瓦	SC5　中層	(19.6)	(26.5)	1.8		—	
177	石墨	SC6　一括	(2.9)	(0.7)	—	(2.2)	滑石	
178	石墨	SC6　一括	(3.4)	(0.7)	—	(2.9)	滑石	
212	銭貨	SC21　上層	2.3	—	0.1	1.6	銅	「寛永通寶」
213	砥石	SC21　上層	(5.2)	5.8	5.8	(292.0)	天草陶石	
239	硯	SC10　上層	(12.0)	5.1	1.6	(183.7)	赤間石	
240	硯	SC10　中層	(10.2)	5.5	1.8	(224.0)	赤間石	
241	硯	SC10　上層	—	—	(1.2)	(37.5)	赤間石	
242	土製品	SC24　下層	7.4	4.5	4.5	69.2	—	
257	硯	SC15　上層	(12.9)	7.1	2.0	(300.0)	赤間石	
258	硯	SC15　上層	(6.6)	(3.9)	2.1	(66.3)	赤間石	
259	石板	SC15　上層	(4.2)	(6.6)	0.3	(13.8)	頁岩	
274	銭貨	SC23　下層	2.25	—	0.15	3.7	黄銅	「五円」
281	銭貨	SC25　上層	2.5	—	0.15	3.0	銅	「寛永通寶」
282	銭貨	SC25　上層	2.3	—	0.1	2.2	銅	「寛永通寶」
283	碁石	SC26　一括	2.2	2.3	0.5	3.3	砂岩	
287	碁石	SC27　一括	2.1	2.2	0.8	3.5	磁器か	
310	銭貨	SC30　上層	2.2	—	0.1	1.4	銅	「寛永通寶」
413	硯	SC63　下層	8.0	4.5	1.3	(89.3)	頁岩	
416	印鑑	SC65　上層	2.4	2.1	2.5	4.9	木製	「局行」 炭化する
418	弾丸	SC68　中層	3.3	径 0.65	—	5.0	鉛	

遺物観察表⑱

遺物番号	種別・器種	出土遺構・地点・層位	法量（cm）				材質・石材	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
420	銭貨	SC75　上層	2.6	—	0.1	2.4	銅	「文久永寶」か
503	煙管雁首	SC115　一括	(6.1)	径（1.0）	火皿径 1.6	(7.3)	銅	
504	煙管雁首	SC115　一括	(6.1)	径（1.1）	火皿径 1.8	(9.2)	銅	ラウ残存
517	銭貨	SC90　上層	2.45	—	0.1	1.8	銅	「寛永通寶」
545	弾丸	SC96　一括	3.3	径 0.65	—	10.2	鉛	
588	煙管吸口	SC114　中層	(4.3)	径 1.0	—	(2.9)	銅	
589	丸瓦	SC114　下層	(11.8)	(7.3)	(2.4)	(340.0)	—	
590	下駄	SC114　下層	21.6	7.2	4.0	77.1	木製	
591	下駄	SC114　下層	20.9	7.0	4.2	69.5	木製	
592	折敷	SC114　一括	30.3	(8.0)	0.5	(35.8)	木製	
593	折敷	SC114　一括	30.3	(7.6)	0.5	(32.3)	木製	
594	丸板	SC114　下層	16.7	(9.8)	1.1	(42.3)	木製	桶底か
595	丸板	SC114　下層	(31.1)	(8.2)	(1.5)	(76.8)	木製	桶底か
596	丸板	SC114　下層	(42.0)	(10.3)	1.7	(149.5)	木製	桶底か
597	加工木材	SC114　下層	27.3	3.0	1.4	35.6	木製	組物部品か
598	杭か	SC114　下層	29.3	(4.7)	2.1	(42.7)	木製	
599	桶	SC114　下層	—	—	高さ 10.5	(45.6)	木製	内外面に漆？付着
600	人形か	SC114　下層	19.1	4.1	0.5	16.3	木製	
601	加工木材	SC114　下層	9.9	3.6	1.5	16.3	木製	組物連結部か
602	箸	SC114　下層	29.4	0.9	0.7	4.4	木製	
603	箸	SC114　下層	29.2	0.8	0.7	3.4	木製	
604	ヘラか	SC114　下層	57.6	10.5	1.1	151.9	木製	
605	土製品	SC120　下層	6.4	4.8	1.5	23.3	—	天神？狛犬
719	鉄滓	SC149　中層	6.8	8.5	2.7	220.0	—	
755	鉄釘	SD1　一括	(6.6)	(1.0)	(1.0)	(6.2)	鉄	
774	煙管雁首	SH1　中層	4.7	径 1.0	火皿径 1.0	(10.8)	銅	ラウ残存
775	煙管吸口	SH1　中層	7.2	径 1.1	—	12.6	銅	ラウ残存
776	硯	SH1　上層	(6.6)	5.5	1.9	(154.5)	赤間石	裏面に「…関、…コ兼、…七月二十…」
777	硯	SH1　上層	(3.0)	5.3	1.8	(40.7)	赤間石	
778	石墨	SH1　下層	(4.6)	0.6	—	(3.5)	滑石	
779	銭貨	SH1　中層	2.3	—	0.1	1.9	銅	「寛永通寶」
780	石板	SH1　上層	(9.7)	(18.2)	0.4	(146.6)	頁岩	
782	銭貨	P2　中層	2.4	—	0.2	2.9	銅	「洪武通寶」
783	銭貨	P61　一括	2.3	—	0.1	1.3	銅	「寛永通寶」
819	石墨	SX2　下層	3.7	0.6	—	2.8	滑石	
820	銭貨	SX2　下層	2.3	—	0.1	1.2	銅	「寛永通寶」
918	銭貨	B2　3 層	2.6	—	0.15	3.3	銅	「寛永通寶」
919	銭貨	B2　1 層	2.3	—	0.15	1.9	銅	「寛永通寶」
920	銭貨	C1　1 層	2.4	—	0.2	5.4	銅	「寛永通寶」
921	銭貨	C3　1 層	2.5	—	0.1	2.0	銅	「寛永通寶」
922	銭貨	D1　3 層	2.3	—	0.1	1.8	銅	「寛永通寶」
923	銭貨	D1　3 層	2.35	—	0.1	1.2	銅	「寛永通寶」
924	銭貨	D2　1 層	2.5	—	0.2	3.0	銅	「寛永通寶」
925	銭貨	E3　3 層	2.2	—	0.1	1.6	銅	「寛永通寶」
926	銭貨	C1　1 層	2.1	—	0.2	4.2	銅	「五銭」「明治二十六…」
927	銭貨	C2　3 層	2.85	—	0.2	5.8	銅	「一銭」「大正二年」
928	土製品	C4　3 層	(5.4)	4.5	2.4	26.5	—	亀
929	煙管雁首	B3　1 層	6.1	径 1.1	火皿径 1.6	(11.4)	銅	
930	硯	E3　3 層	(4.2)	(7.2)	(1.9)	(52.5)	赤間石	
931	硯	E3　3 層	4.8	3.3	0.5	(18.5)	頁岩	
932	硯	E3　3 層	(14.7)	5.3	1.7	(258.0)	赤間石	裏面に「赤間関」
933	石板	E3　3 層	(8.7)	(6.8)	(0.45)	(37.6)	頁岩	
934	石墨	C3　1 層	(3.2)	0.5	—	(1.5)	滑石	
935	石板	E3　3 層	(4.9)	(6.9)	0.3	(16.3)	頁岩	
936	石板	E3　3 層	(7.1)	(14.6)	0.4	(82.0)	頁岩	
937	砥石	D2　3 層	(18.4)	8.2	1.2	(322.0)	頁岩	
938	煉瓦	C3　1 層	(14.7)	11.6	6.4	1,100	—	表面「都…」

第４章　自然科学分析

株式会社　古環境研究所

第１節　中町遺跡における放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}Ｃ）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である（中村 ,2003）。

２．試料と方法

次表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

試料名	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
№.１	SC114，下層，№.5587	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
№.２	P32，下層，№.4272	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
№.３	SC114，中層，№.4424-①	動物骨	コラーゲン抽出，アルカリ洗浄	AMS
№.４	SC114，中層，№.4424-②	動物歯	コラーゲン抽出，アルカリ洗浄	AMS

３．測定結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}Ｃ）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示す。

試料名	測定№.（Beta-）	未補正^{14}C 年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	^{14}C 年代（年BP）	暦年代（較正年代）２σ:95%確率
№.１	447729	230±30	-24.4	240±30	Cal AD 1640-1670，1780-1800，1940-
№.２	447730	720±30	-25.6	710±30	Cal AD 1265-1295，1370-1380
№.３	447731	100±30	-20.7	170±30	Cal AD 1660-1695，1725-1815，1835-1880，1915-
№.４	447732	330±30	-20.7	400±30	Cal AD 1440-1520，1595-1620

Beta：米国 Beta Analytic Inc の測定番号，BP：Before Physics，Cal：Calibrated，AD：西暦

（１）未補正^{14}Ｃ年代

試料の^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は 5,730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いている。

（２）デルタδ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ^{13}Ｃ値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

（３）^{14}Ｃ年代

δ^{13}Ｃ測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

（４）暦年代（Calendar Years）

^{14}C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C濃度の変動、および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C測定値、サンゴのU/Th年代と^{14}C年代の比較、および湖の縞状堆積物などの検討により作成された較正曲線（IntCal 13）を使用した。暦年代は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し、ここでは信頼限界２シグマσ（95％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

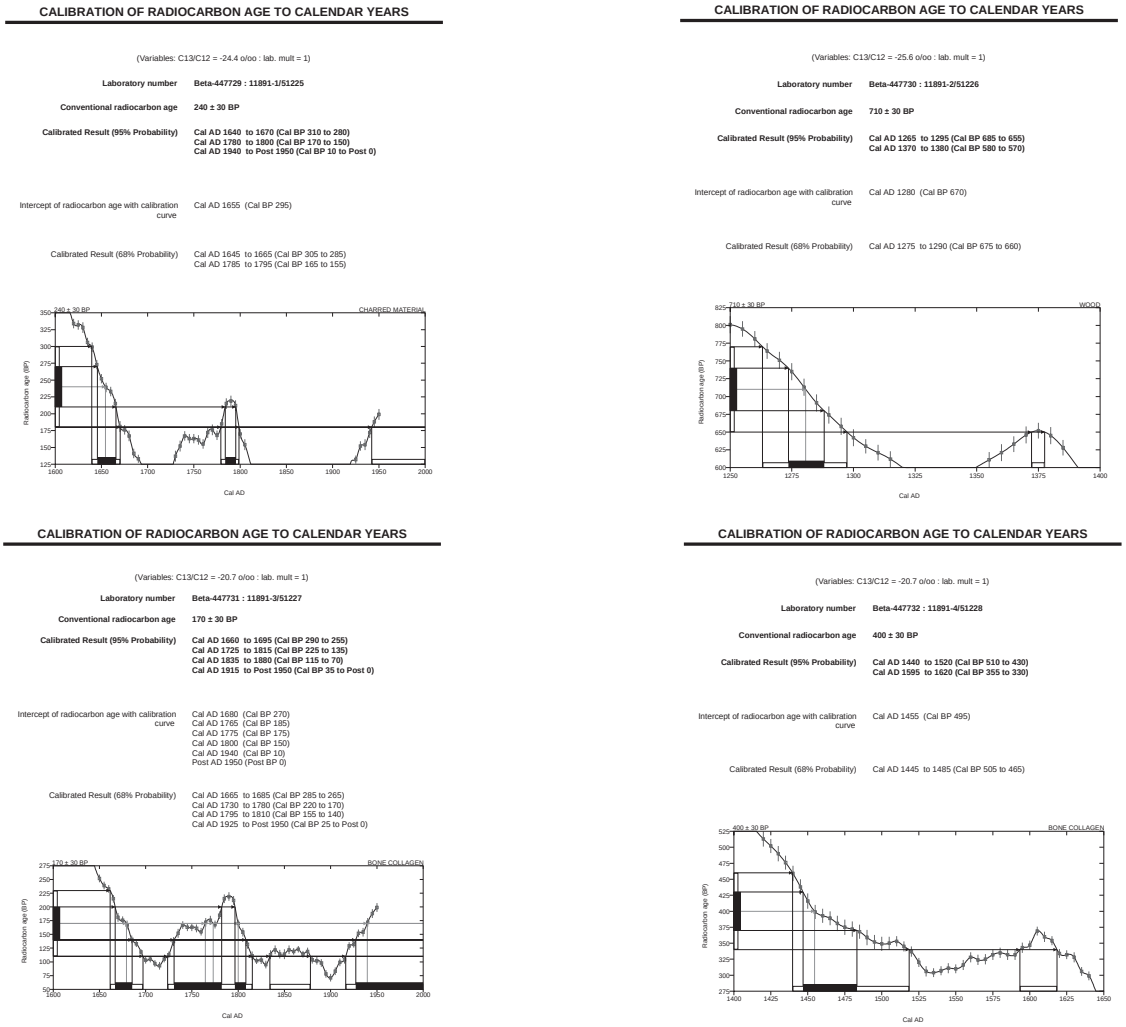
４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№１では240 ± 30年BP（２σの暦年代でAD 1640 ～ 1670, 1780 ～ 1800, 1940年～）、№２では710 ± 30年BP（AD 1265 ～ 1295, 1370 ～ 1380年）、№３では170 ± 30年BP（AD 1660 ～ 1695, 1725 ～ 1815, 1835 ～ 1880, 1915年～）、№４では400 ± 30年BP（AD 1440 ～ 1520, 1595 ～ 1620年）の年代値が得られた。このうち、№１と№３では暦年代の年代幅がかなり広くなっているが、これは該当時期の較正曲線が不安定なためである。

文献

Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301-322.



第103図　暦年較正結果

第２節　中町遺跡における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000，2009）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試料

分析試料は、E3 区においてⅢ層（近世～近代）とⅣ＋Ⅴ層（桜島文明軽石混）から採取された５点、および D3 区においてⅤ層（中世）から採取された４点の計９点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）
２）試料約 1 g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
５）沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 1 表および第 104・105 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

マンサク科（イスノキ属）、その他

５．考察

（１）稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が 3,000 個 /g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個 /g として検討を行った。

１）E3 区

Ⅲ層（試料１～３）とⅣ＋Ⅴ層（試料４、５）について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、Ⅲ層（試料１～３）では密度が 11,100 ～ 14,400 個 /g とかなり高い値であり、Ⅳ＋Ⅴ層の上部（試料４）でも 3,100 個 /g と比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

Ⅳ＋Ⅴ層の下部（試料５）では、密度が 1,300 個 /g と比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

２）D3 区

Ⅴ層（試料１～４）について分析を行った。その結果、同層上部（試料１、２）でイネが検出された。密度は 700 個 /g と低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

（２）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は、E3 区のⅢ層（試料１、２）から検出された。密度は 700 個 /g と低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

（３）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。D3 区のⅤ層下部では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａが比較的多く検出され、キビ族型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。同層上部ではネザサ節型が増加し、ヨシ属は減少している。また、樹木（照葉樹）のマンサク科（イスノキ属）が出現している。E3 区のⅣ＋Ⅴ層でも、おおむね同様の結果であり、同層上部ではシバ属型、マダケ属型が出現している。Ⅲ層では、前述のようにイネが増加し、ネザサ節型やススキ属型は減少している。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅴ層下部ではヨシ属とススキ属型、Ⅴ層上部およびⅣ＋Ⅴ層ではススキ属型とネザサ節型が優勢であり、Ⅲ層ではイネが卓越している。

以上の結果から、Ⅴ層下部の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（ネザサ節）などが生育し、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。Ⅴ層上部の時期には、周辺でメダケ属（ネザサ節）が増加し、堆積環境の乾燥化など何らかの原因でヨシ属は減少したと考えられる。Ⅳ＋Ⅴ層でも、おおむね同様の状況であり、同層上部では周辺でシバ属やマ

ダケ属も見られるようになったと推定される。マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。Ⅲ層の時期には、継続的に水田稲作が行われていたと考えられ、部分的にムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

６．まとめ

植物珪酸体分析の結果、E3 区のⅢ層（近世～近代）およびⅣ＋Ⅴ層（桜島文明軽石混）の上部ではイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、D3 区のⅤ層（中世）上部でも、少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、E3 区のⅢ層（近世～近代）ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

Ⅴ層下部の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（ネザサ節）などが生育し、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。Ⅴ層上部およびⅣ＋Ⅴ層の時期には、湿潤なところを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと考えられ、Ⅲ層では継続的に水田稲作が行われていたと推定される。

文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

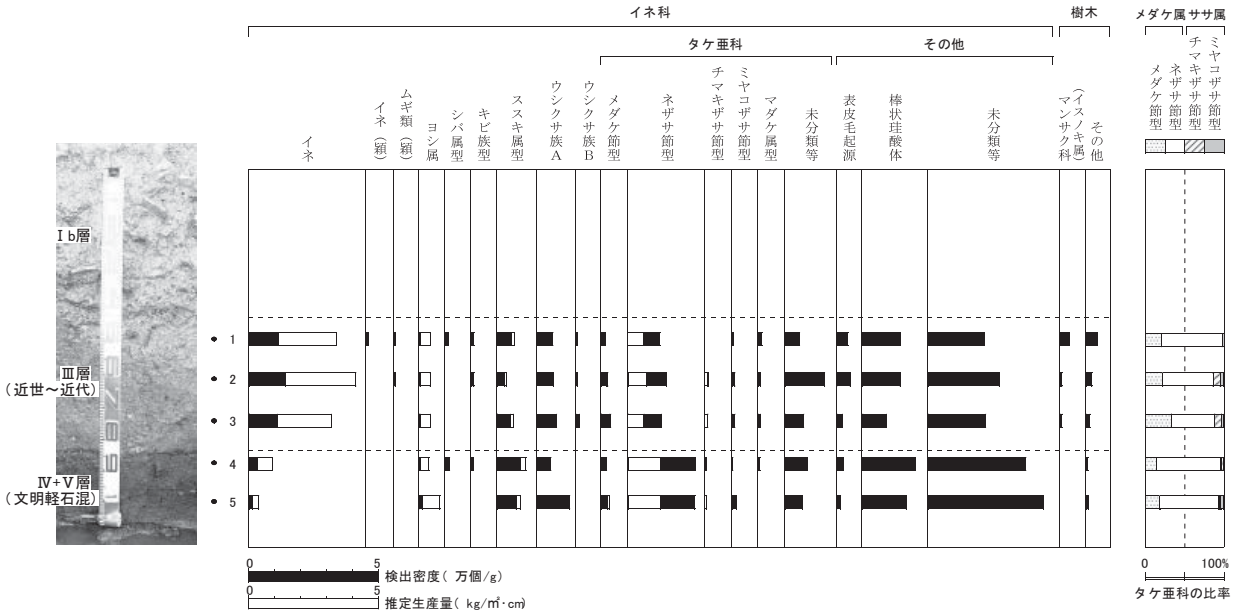
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

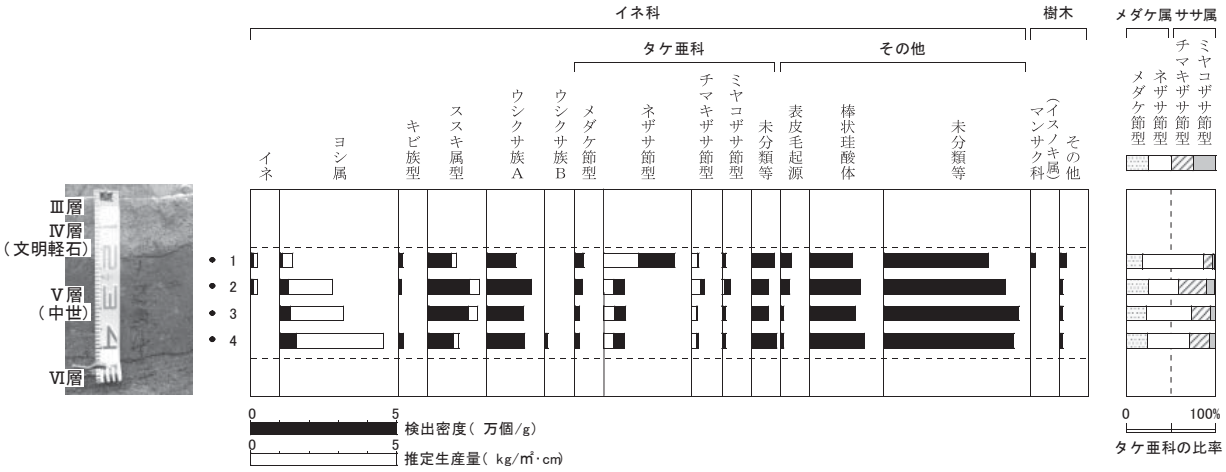
杉山真二（2009）植物珪酸体と古生態．人と植物の関わりあい④．大地と森の中で－縄文時代の古生態系－．縄文の考古学Ⅲ．小杉康ほか編．同成社，p.105-114.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.



第 104 図　E3 区における植物珪酸体分析結果



第 105 図　D3 区における植物珪酸体分析結果

第 1 表　中町遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	E-3区 1	E-3区 2	E-3区 3	E-3区 4	E-3区 5	D-3区 1	D-3区 2	D-3区 3	D-3区 4
イネ科	Gramineae										
イネ	*Oryza sativa*		118	144	111	31	13	7	7		
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)		7								
ムギ類(穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)		7	7							
ヨシ属	*Phragmites*		7	7	7	6	13	7	29	35	57
シバ属型	*Zoysia* type		14			18					
キビ族型	Paniceae type		7	7		6		13	7		14
ススキ属型	*Miscanthus* type		56	29	52	92	74	79	144	140	86
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		63	65	78	55	128	99	151	126	129
ウシクサ族B	Andropogoneae B type		7	7	13						7
タケ亜科	Bambusoideae										
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		14	22	33	18	27	26	22	14	14
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa		125	151	130	265	263	250	72	77	72
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.			14	13	6	7	26	43	21	22
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		7	14	13	6	20	13	29	14	14
マダケ属型	*Phyllostachys*		14	7	7	6					
未分類等	Others		56	151	72	86	67	79	57	56	86
その他のイネ科	Others										
表皮毛起源	Husk hair origin		42	50	20	25	13	33	29	7	7
棒状珪酸体	Rodshaped		146	144	91	203	168	145	172	154	187
未分類等	Others		215	273	221	376	445	356	417	462	445
樹木起源	Arboreal										
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*		35	7	7			13			
その他	Others		42	22	13	6	7	20	7	7	7
植物珪酸体総数	Total		979	1120	878	1208	1247	1167	1186	1114	1148

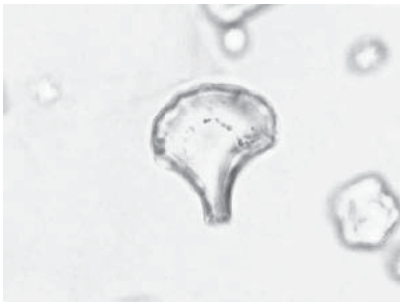
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	3.47	4.22	3.25	0.91	0.40	0.19	0.21		
ヨシ属	*Phragmites*	0.44	0.45	0.41	0.39	0.85	0.42	1.81	2.21	3.62
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.69	0.36	0.65	1.15	0.92	0.98	1.78	1.74	1.07
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.16	0.25	0.38	0.21	0.31	0.31	0.25	0.16	0.17
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.60	0.72	0.62	1.27	1.26	1.20	0.34	0.37	0.34
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		0.11	0.10	0.05	0.05	0.20	0.32	0.16	0.16
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02	0.04	0.04	0.02	0.06	0.04	0.09	0.04	0.04

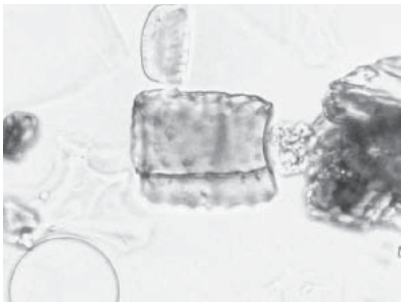
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	21	22	33	14	19	18	25	22	23
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	77	64	55	82	75	69	34	51	48
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.		10	9	3	3	11	32	22	23
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	3	4	3	1	4	2	9	6	6
メダケ率	Medake ratio	97	87	88	96	93	86	59	73	71

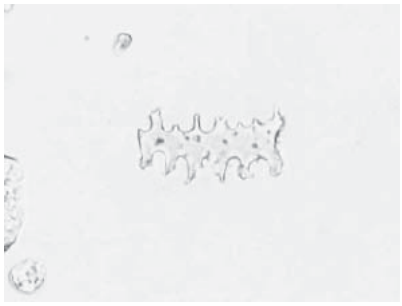
中町遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



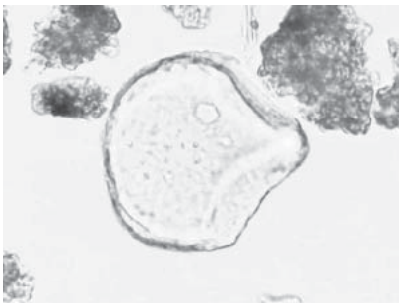
イネ
E-3区　1



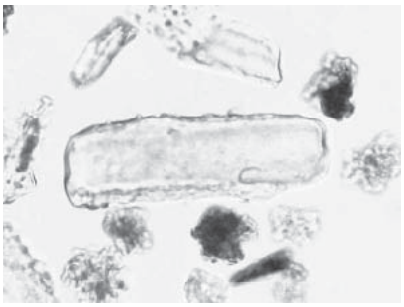
イネ（側面）
E-3区　2



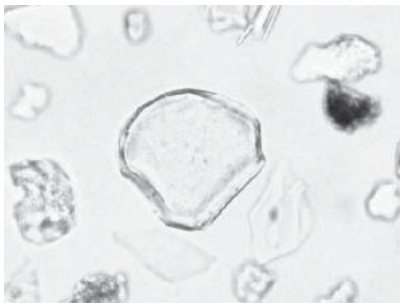
ムギ類（穎の表皮細胞）
E-3区　1



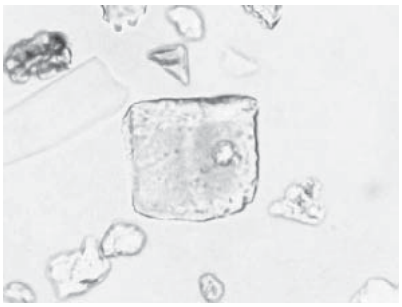
ヨシ属
D-3区　3



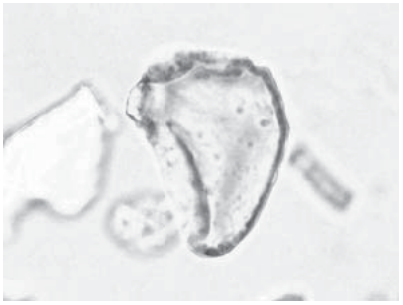
キビ族型
D-3区　1



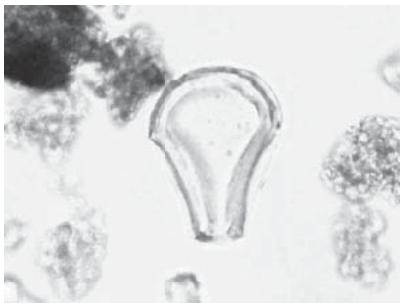
ススキ属型
E-3区　2



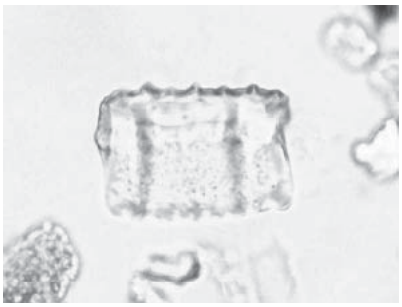
ウシクサ族Ａ
E-3区　1



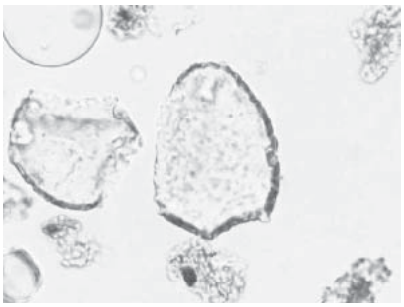
ウシクサ族Ｂ
E-3区　1



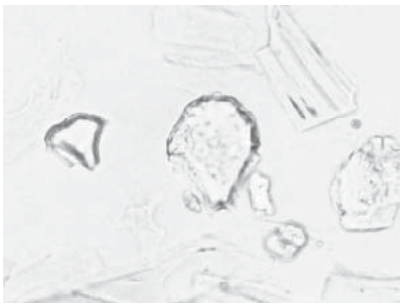
メダケ節型
D-3区　1



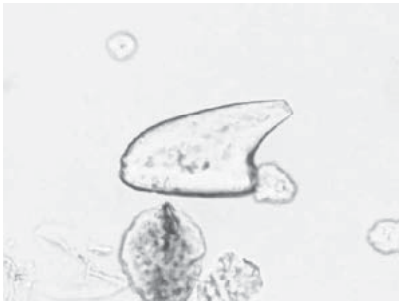
ネザサ節型
E-3区　1



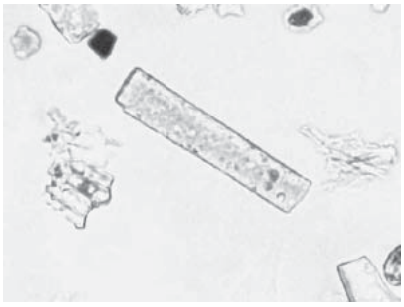
チマキザサ節型
D-3区　1



マダケ属型
E-3区　2



表皮毛起源
E-3区　1



棒状珪酸体
E-3区　1

マンサク科（イスノキ属）
E-3区　1

50μm

第３節　中町遺跡における花粉・寄生虫卵分析

１．はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて、トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である（金原, 2004）。

２．試料

分析試料は、SR 1（近代の埋甕）の①層から採取された１点である。

３．方法

花粉および寄生虫卵の分離抽出は、微化石分析法を基本にして、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^3を採量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
３）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
４）25％フッ化水素酸を加え 30 分静置（２～３度混和）
５）遠心分離（1500rpm、２分間）による水洗の後にサンプルを２分割
６）片方にアセトリシス処理を施す
７）両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入てプレパラート作成
８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉６、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉 12、シダ植物胞子２形態の計 19 である。また、寄生虫卵１分類群が認められた。分析結果を表２に示し、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハシバミ属、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ネギ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵

（２）花粉・寄生虫卵群集の特徴（第 106 図）

SR 1 の①層では、寄生虫卵の回虫卵が検出された。密度は 270 個 /cm^3 とやや低い値である。検出された回虫卵は、表面のタンパク膜が薄くなったものがほとんどであり、分解の影響を受けている。

花粉分析では、花粉密度が比較的低く、草本花粉の占める割合が 69％と高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、アブラナ科も比較的多く、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、ソバ属、ネギ属などが伴われる。樹木花粉では、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属などが認められた。

５．考察

糞便の堆積物には、一般的に寄生虫卵が 1,000 個 /cm^3 以上含まれている（金原ほか, 1992, 金原, 1999）。SR 1（近代の埋甕）の①層では、寄生虫卵の回虫卵が検出されたが、密度は 270 個 /cm^3 とやや低い値である。なお、回虫卵のほとんどが分解の影響を受けていることや、花粉の密度も比較的低いことから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下でこれらの有機物遺体が分解された可能性も考えられる。

これらの結果から、SR 1 内には何らかの形で糞便が存在していた可能性が示唆される。回虫はヒト特有の寄生虫であり、中間宿主を必要とせず糞便とともに排泄された寄生虫卵が付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。なお、寄生虫卵については排卵のタイミングにより糞便中に含まれない場合があり、また寄生虫卵の分布は層位的に大きく偏る傾向があることから、遺構底部を中心により多くの試料について検討を行うことが望まれる。

花粉分析では、イネ属型の花粉が多く検出され、アブラナ科（アブラナ、ダイコン、ハクサイなどが含まれる）も比較的多く検出された。これらの花粉については、摂食された米（籾内に多量の花粉が残存している）やアブラナ科（花芽を含む）に由来する可能性が考えられる。また、ソバ属、ネギ属の花粉についても同様の可能性が考えられる。

文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学．新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.9-55.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－．奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学．考古学と自然科学，2，同成社，p.151-158.

金原正明（2004）寄生虫卵分析．環境考古学ハンドブック，朝倉書店，p.419-429.

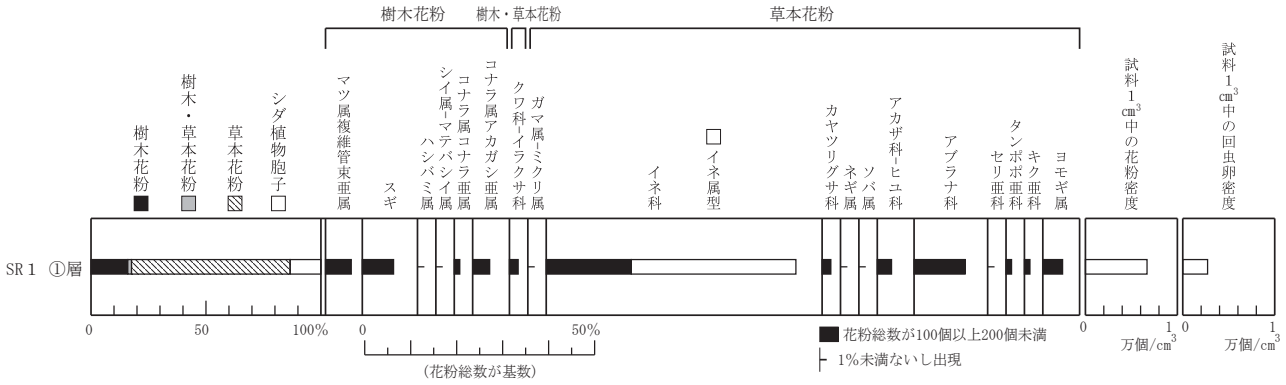
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として . 第四紀研究 ,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

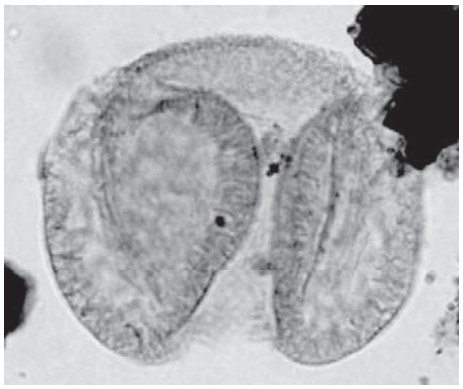


第 106 図　中町遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果

第２表　中町遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果

分類群		SR1
学名	和名	①層
Arboreal pollen	樹木花粉	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	9
Cryptomeria japonica	スギ	11
Corylus	ハシバミ属	1
Castanopsis-Pasania	シイ属−マテバシイ属	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	2
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	6
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Typha-Sparganium	ガマ属−ミクリ属	1
Gramineae	イネ科	30
Oryza type	イネ属型	58
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3
Allium	ネギ属	1
Fagopyrum	ソバ属	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科	5
Cruciferae	アブラナ科	18
Apioideae	セリ亜科	1
Lactucoideae	タンポポ亜科	2
Asteroideae	キク亜科	2
Artemisia	ヨモギ属	7
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	7
Trilate type spore	三条溝胞子	18
Arboreal pollen	樹木花粉	30
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	129
Total pollen	花粉総数	162
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	6.7 ×10^2
Unknown pollen	未同定花粉	5
Fern spore	シダ植物胞子	25
Helminth eggs	寄生虫卵	
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵	67
Total	計	67
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	2.7 ×10^2
Stone cell	石細胞	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)
微細植物遺体(Charcoal ・woods fragments)	[5])	
未分解遺体片		0.0
分解質遺体片		18.8
炭化遺体片（微粒炭）		0.8

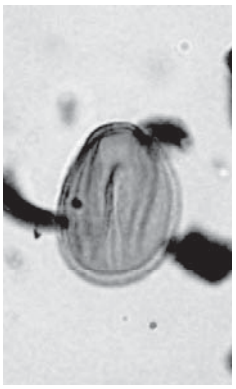
中町遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵



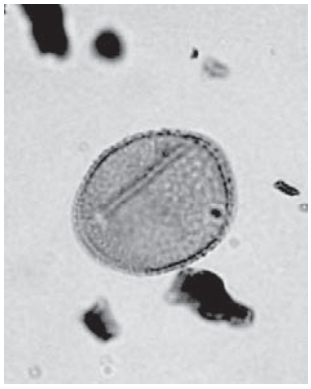
1　マツ属複維管束亜属（SR1①層）

2　スギ（SR1①層）

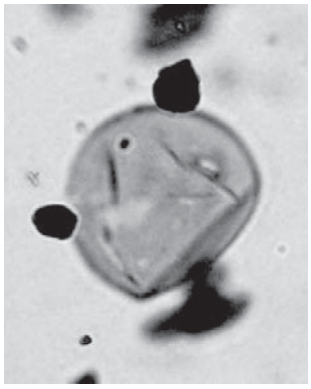
3　コナラ属コナラ亜属（SR1①層）



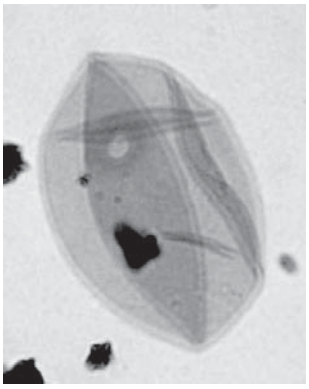
4　コナラ属アカガシ亜属（SR1①層）



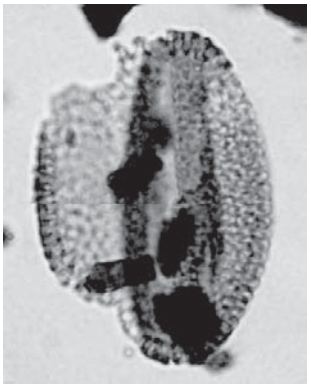
5　ガマ属－ミクリ属（SR1①層）



6　イネ科（SR1①層）



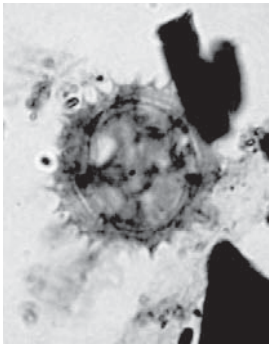
7　イネ属型（SR1①層）



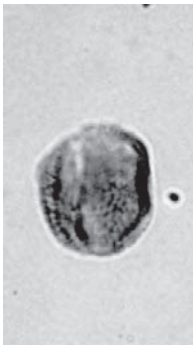
8　ソバ属（SR1①層）

9　アカザ科－ヒユ科（SR1①層）

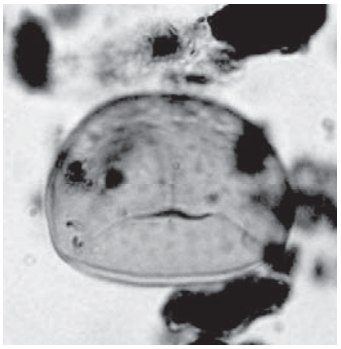
10　アブラナ科（SR1①層）



11　タンポポ亜科（SR1①層）

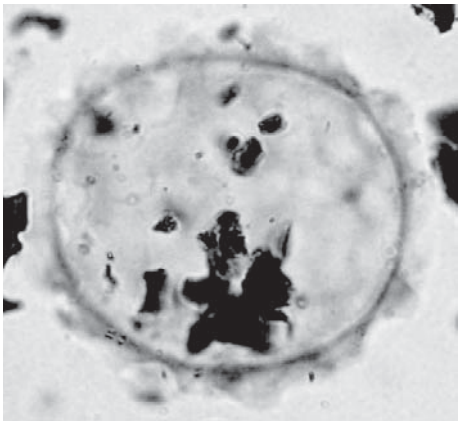


12　ヨモギ属（SR1①層）

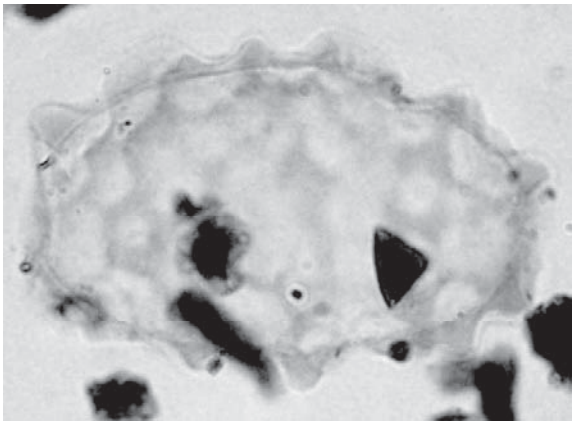


13　シダ植物三条溝胞子（SR1①層）

14　シダ植物単条溝胞子（SR1①層）



15　回虫卵（受精卵？）（SR1①層）



16　回虫卵（不受精卵？）（SR1①層）

10 μm

第５章　調査のまとめ

第１節　中世について

今回の中町遺跡第５次調査では、中世の遺構・遺物の検出は極めて限定的であった。既に報告したように、この時期の遺構としては、桜島文明軽石（基本土層Ⅳ層）より下位で検出した溝状遺構（SD2）と土坑状の不明遺構（SX3）のみである。しかし、これらの遺構からは遺物が出土しておらず、中世の中でもどの段階の所産であるかは判然としない。

一方、桜島文明軽石が比較的良好に遺存していた調査区南東端の D3 と E3 区において実施した植物珪酸体（プラント・オパール）分析によれば、両地点共に文明軽石降下前後の中世期には周辺で稲作が行われていた可能性が高いとされる（第４章第２節参照）。

江戸後期に編纂された『庄内地理志巻十四』に「唐人町・本町屋敷図」がみえる（第 107 図左上）。その中で今回の調査区周辺には、高岡筋往還に沿って商家の家並みが描かれ、本通りから入った場所には武士とみられる人物の名が記載された屋敷と共に、水田の存在も記されている。この水田は今回の調査区の東側に位置している。上述の植物珪酸体分析からは、近世以前の中世段階から既に、周辺は水田の広がる地域であったことが分かる。

この時期の遺構・遺物がほとんど検出されていないことからも、中世段階では今回の調査区を含めた高岡筋往還沿いの地区については、居住域などの本格的な土地利用は極めて限定的であった可能性が考えられる。

これに対して、中央東部地区遺跡群の中でも高岡筋往還から東に入った天神遺跡と柳川原遺跡では、古代～中世にかけての遺構が多くみつかっている。これまでの中町遺跡での調査は調査区が狭小なものが多いため断言はできないが、中世期の中央東部遺跡群では地点により土地利用に大きな差があったものと推測される。

第２節　近世について

今回の調査において、その成果を最も期待されていたのが近世の唐人町における町屋の調査である。これまで高岡筋往還沿いの町屋区域の調査は、調査区が狭小なものが多く、その様相については断片的で不明瞭な部分が多かった。今回の調査区はまさに町屋区域の中心ともいえる地点であり、これまで不鮮明であった唐人町の町屋の様相が明らかになるのではとの期待が大きかった。

結果としては、より新しい時期、すなわち近代から現代にかけての人々の生活の痕跡により、近世の遺構は破壊されている範囲が多かった。しかし、全体的な遺構の中で近世の所産と考えられる遺構は少なかったものの、多くの重要な知見を得られたと考える。

まず、近世の所産と考えられる掘立柱建物跡が検出できたことは大きな成果といえる。しかも、SB4 については出土した遺物からは 17 世紀代の所産である可能性が高い。もう１棟の掘立柱建物跡である SB5 については遺物が出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。これらの建物跡を含め、近世の所産と考えられる土坑についても地割の軸に沿ってその主軸が東に 28°前後振れるものか、西に 63°前後振れるものかの二者に限定される。これは近代に入っても受け継がれる傾向であり、現代の建物も基本的にこの短冊状地割の影響を受けている。

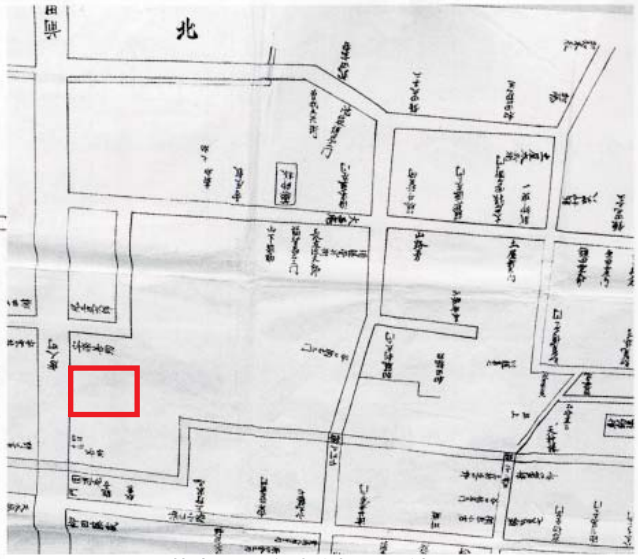
17 世紀代の遺構としては、SB4 以外にも井戸跡と考えられる SC114 が検出されている。この井戸跡は上述の掘立柱建物跡よりも東側の、地形的に低い場所に位置していた。ほぼ正円といえるきれいな円形を呈しており、壁も掘削時の工具痕等残すことなる平滑に仕上げられている。さらに、この井戸内からは多くの陶磁器や木製品が出土している。これらの遺物は碗・皿類に加え、鉢や甕、木製箸・折敷などの生活道具がセットとして出土していることが重要であろう。さらに１点のみであるが瓦が出土しており、この時期に周辺で瓦葺きの建物跡が存在していたことを示す貴重な資料といえる。時期的にも 17 世紀でも中頃までの資料が大部分を占めることから、少なくとも 17 世紀の前半段階には構築されていた遺構である可能性が高い。そうだとすれば、元和元年（1615 年）の新地移りに大きく遅れることのない段階の人々の生活の痕跡が得られたことになり、従来言われていたような唐人町の形成を具体的に示すものと評価できよう。

この他にも 18 世紀代の地下室であった可能性が高い SC149 や 152、やはり近世の地下室の可能性がる SC30 など、近世期の遺構が存在する。廃棄土坑と考えられる SC115 からは大量の遺物が出土しているが、その中には組物や深めの鉢など宴席で使用するような遺物が含まれている。このことは白薩摩の出土とも併せて、社会的に上位階層の人々の存在を示唆するといえる。

さらに遺跡全体を通しての出土遺物に目を移すと、獣足香炉をはじめとする一定量の白薩摩が出土していること、やはり宴席で使用するような大皿が複数出土していること、磁器の中でも上手のものが存在することなど、総合的にみても居住者の上位性が指摘できる。出土遺物からは、裕福な商家の人々の生活が想像できよう。

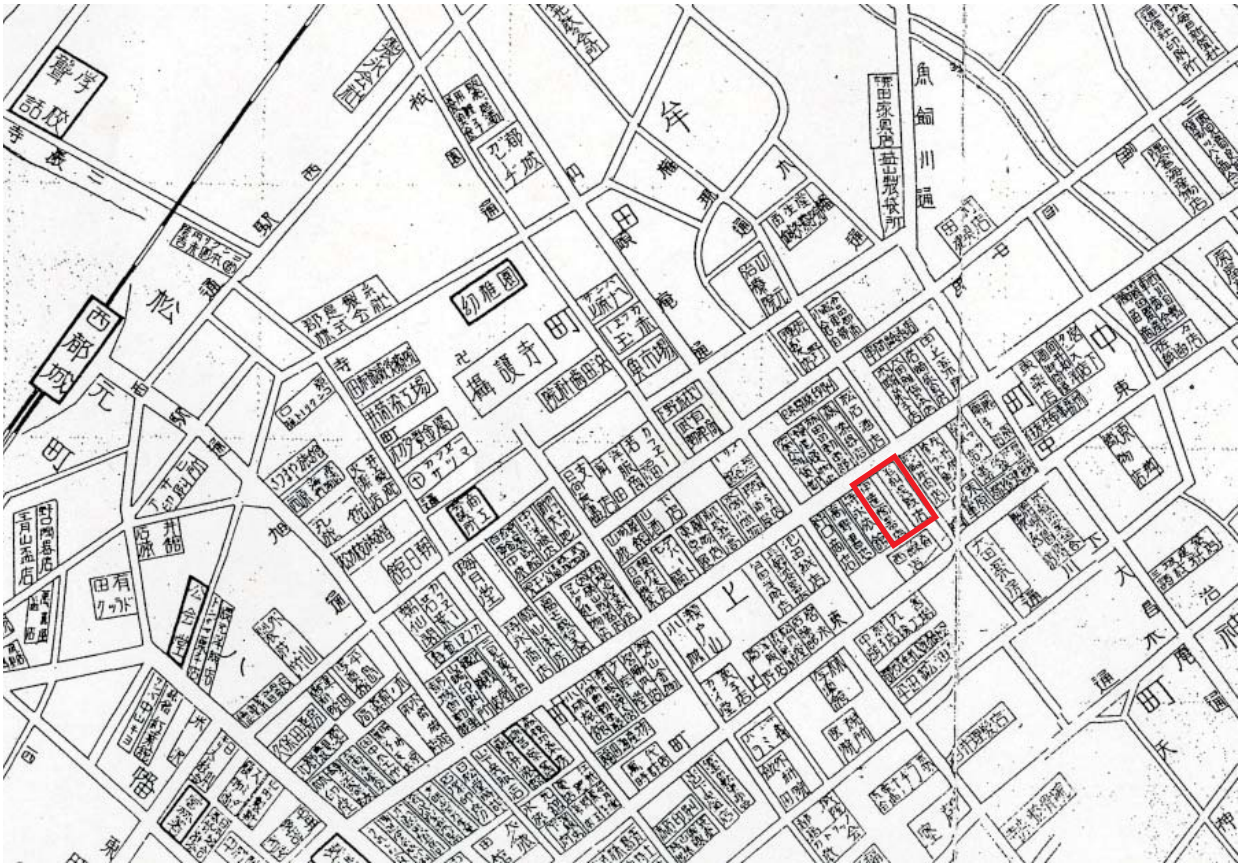
出土遺物の帰属時期に目を移してみると、初期伊万里の皿を中心とする 17 世紀前半代の資料は一定量の出土

唐人町・本町屋敷図（『庄内地理志巻十四』より）



幕末～明治時代初期の絵図写
（都城市立図書館蔵）

※各絵図中で赤く囲った範囲は中町遺跡
第 5 次調査の調査区のおおまかな位置を示す



『大日本職業別明細図　第 322 号　宮崎県』にみる大正～昭和初期頃の都城中心部（都城市立図書館蔵）

第 107 図　中町遺跡第 5 次調査に関連する古絵図

をみているものの、17 世紀後半～ 18 世紀前半の資料はそれ程多くない。資料が増加するのは 18 世紀後半以降といえる。ただし、全ての資料を数的にカウントした結果導き出した傾向ではないため、あくまで大まかな傾向として提示しておきたい。

最後に近世の遺構分布について再度確認しておこう。繰り返し述べてきたように、近世の所産である遺構については、井戸跡である SC114 や調査区を東西に横断する SD1、地下室の可能性がある SC152 以外のものについては、調査区北西部の地形的に高いところに分布する傾向にある。SB4 や SB5 が検出された範囲には、柱穴と考えられる小穴が密に分布しており、今回認識できた以外にも掘立柱建物跡が存在していた可能性は高い。

このような地形環境からは、調査区からさらに高岡筋往還（現在の国道 10 号線）に向かい緩やかに高くなっていくものと推測される。高岡筋往還の幅員に関しては、『庄内地理志巻十四』の絵図には「七間」とあり、歩道も含めると 20 m以上の幅がある現道に比べるとかなり狭いものであったことが分かる。すなわち、高岡筋往還の通りに面して軒を連ねていたと考えられる町屋建物は、現道の下に位置する可能性が考えられる。そうすると、今回の調査区は町屋建物群の縁辺部で、調査区東側で検出された井戸跡 SC114 は、町屋の裏手にあたるものと推測される。

今回の調査では、近世に帰属すると考えられる遺構は全体的な遺構数の割に多くはなかったものの、17 世紀代の所産と考えられる建物跡や井戸跡を検出できたことは大きな成果と考える。これによって、これまで考古学的には不明瞭であった新地移り後の唐人町における町屋形成の過程について、その一端を垣間見ることができたといえる。今後、周辺の調査事例の蓄積と共に、土地利用の様相を含めたより具体的な町屋の形成およびその発展過程について、明らかにしていく必要があろう。

第 3 節　近現代について

今回の調査で最も多く検出されたのは近現代の遺構・遺物である。特に幕末～昭和初期の近代の所産と考えられるものが大多数を占める。

まず検出された遺構群をみてみると、石蔵ないしは土蔵の基礎跡と考えられるものが 2 棟検出されている。これらの建物跡は近世の建物跡と同様の主軸をもち、短冊状地割の影響をみることができる。町屋建物の主屋がより西側の高岡筋往還の通りに面していたとすれば、これらの土蔵や石蔵は敷地の奥に置かれたものといえる。

さらに、近代の遺構として最も多く検出されたのが廃棄土坑（ゴミ穴）や井戸跡と考えられる土坑である。ゴミ穴と考えられる土坑からは大量の遺物が出土している。日常雑器である陶磁器製の碗・皿、甕・壺類に加え、大量のガラス瓶類も出土している。このようなガラス瓶の中には大衆的な飲み物であったラムネ瓶に加え、当時は高級な飲み物とされたサイダーの瓶も出土している。陶磁器類も近世の資料と同様に、大皿や組物と考えられる資料が大量に出土している。このような出土遺物の質・量からはやはり裕福な商家の生活が想像される。

幕末～明治初期の絵図（第 107 図右上）からは、残念ながら居住者を特定できないが、近隣には「安楽善助」などの個人名がみえる。また、昭和 8 年に刊行された都城中心部の職業別明細図（第 107 図下半）には、調査区周辺の商家として「毛利呉服店」「伊達陶器店」「持永旅館」「高野書店」「野口商店」などの名がみえる。ゴミ穴内から出土した文章類の燃え残りの中には、明治後半期の大量の領収書と考えられるものもあり、このような遺物は商家の敷地内特有の資料ともいえよう。大正から昭和初期にかけてのゴミ穴と考えられる SC5 からは、「高野」と線刻された煙管雁首が出土している。「高野書店」に関連する遺物なのかもしれない。

また、燃え残った文章類には尋常小学校で使用された教科書やノートと考えられるものが存在したり、多くの石板や石墨が出土していることからは、学校に通う児童の存在もみえてくる。このような廃棄土坑（ゴミ穴）から出土した遺物をみてみると、ここに居住した人々の生活が鮮明に蘇ってくる。近現代の遺跡はよほど良好な資料や、地域的にみて重要なものでなければ調査が及ばないケースがほとんどであろう。しかし、文章など文字資料として多くの情報が残っているごく最近の近現代の歴史・生活についても、考古学的な遺跡の調査によってのみその実態が明らかにされる事象も少なくない。特にそこに居住した個人の生活は、遺跡の発掘によってより具体性を帯びて明らかになるといえる。

現地での発掘調査が終了した際に、一般の方々を対象とした現地説明会を実施した。近世の唐人町の調査成果を期待してか、県内外から約 270 名もの方々の参加を得た。唐人町のあった近世の成果はもちろん、商業地として発展していた近代の調査成果についても多くの方々に興味をもって頂いたものと考える。発掘調査によって地域の歴史と文化に関する新たな知見が得られるが、その裏には破壊される遺跡の存在があることを忘れてはならない。今後も遺跡が提供してくれる多くの情報は、地域の方々に還元できるよう心掛けていきたい。

【本文中での引用・参考文献】

（論文等）

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No. 2

九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念』

桜井準也　2006『ガラス瓶の考古学』六一書房

佐々木綱洋　2009『都城唐人町　海に開く南九州－ 16 ～ 17 世紀日中交流の一断面』宮崎文庫 60　鉱脈社

渡辺芳郎　2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室

渡辺芳郎他　2016「肥前磁器の流通について－ 17 世紀前半の出土資料を中心に－」『平成 28 年度　第 44 回東洋陶磁学会有田大会　発表資料』東洋陶磁学会

（発掘調査報告書等）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）

鹿児島市教育委員会　2006『地頭仮屋跡』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書（44）

太宰府市教育委亥会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集

都城市　2001『都城市史』資料編　近世Ⅰ

都城市　2005『都城市史』通史編　中世・近世

都城市　2006a『都城市史』通史編　近現代

都城市　2006b『都城市史』資料編　考古

都城市教育委員会　1994『ニタ元遺跡』都城市文化財調査報告書第 29 集

都城市教育委員会　1997『都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書』都城市文化財調査報告書第 41 集

都城市教育委員会　1998『中央東部地区遺跡群　柳川原遺跡（第 1 ～ 3 次調査）　中町遺跡（第 1・2 次調査）』都城市文化財調査報告書第 43 集

都城市教育委員会　2001『天神遺跡第 2 次調査・中町遺跡第 3 次調査　中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』都城市文化財調査報告書第 54 集

都城市教育委員会　2004『都城島津家領の唐人町周辺の遺跡　柳川原遺跡（第 4･5 次調査）　中町遺跡（第 4 次調査）天神遺跡（第 1・3・4・5 次調査）』都城市埋蔵文化財調査報告書第 65 集

都城市教育委員会　2010『庄内小学校遺跡』都城市文化財調査報告書第 100 集

都城市教育委員会　2012『都城の歴史と人物【増補改訂版】』

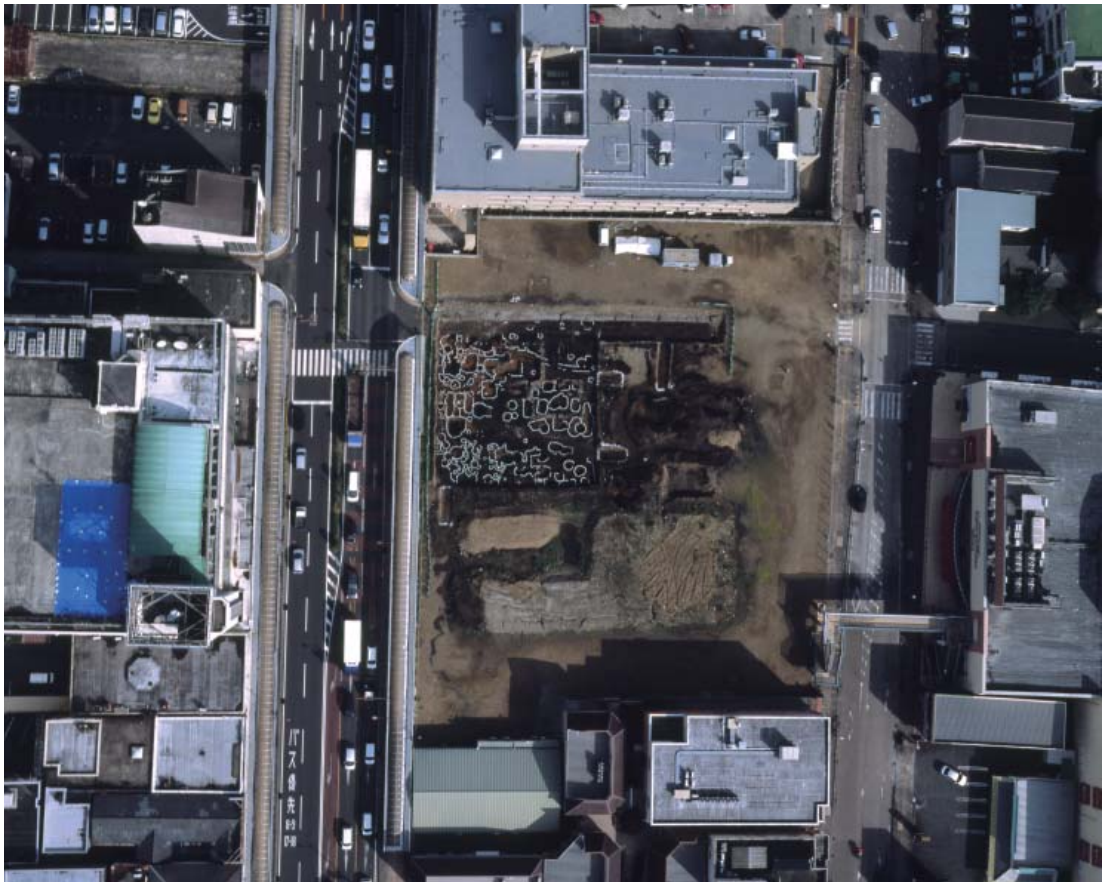
宮崎県埋蔵文化財センター　『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 70 集

宮崎県埋蔵文化財センター　2012『飫肥城下町遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書第 220 集

宮崎市教育委員会　2016『佐土原城跡第 6 次調査』宮崎市文化財調査報告書第 109 集

図版１　中町遺跡の調査

中町遺跡遠景（南西上空より霧島・大淀川を望む）



中町遺跡調査区全景

遺構検出状況（北東から）

遺構検出状況（南西から）

図版 3　近世～近現代の調査②

遺構完掘状況（北東から）

遺構完掘状況（南西から）

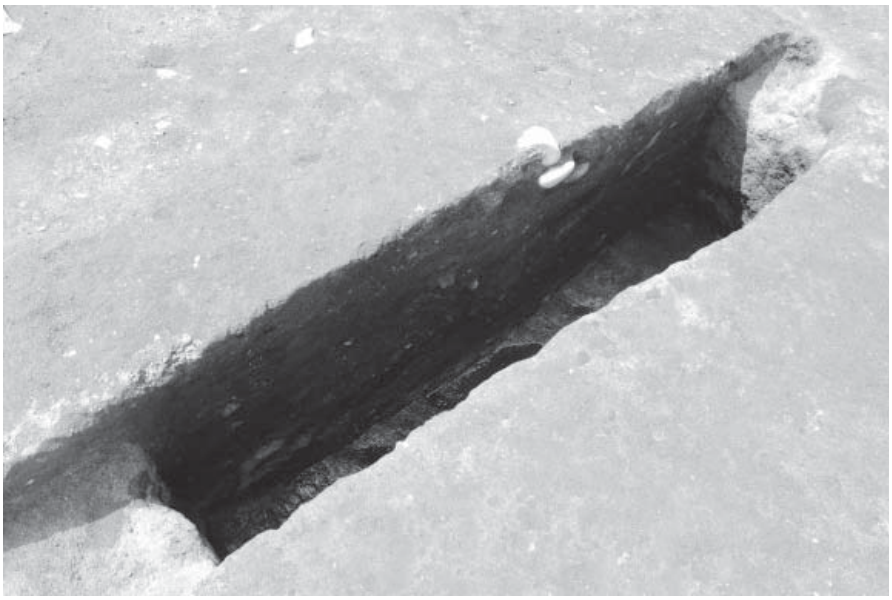
瓦礫除去作業風景

遺構掘り下げ作業風景

梅雨時期の長雨による調査区の水没

図版 5　近世の調査①

E3 区土層堆積状況（西から）



SC30 土層断面（北東から）

SC30 完掘状況（北西から）

SC114 土層断面（北西から）

SC114 下層木製品出土状況
（北西から）

SC114 完掘状況（北西から）

図版 7　近世の調査③

SC100 土層断面（北から）

SC100 土層崩落状況（北から）

SC149 土層断面（東から）

SC149 遺物出土状況（東から）

SC149 完掘状況（北東から）

SC152・SD1 土層断面（北西から）

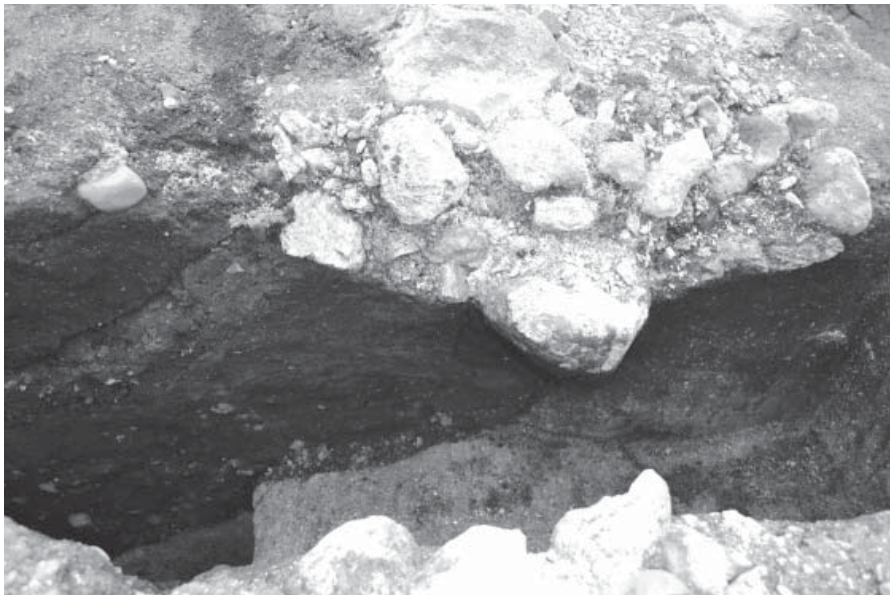
図版 9　近世の調査⑤

SD1 土層断面（南東から）

SD1 完掘状況（南東から）

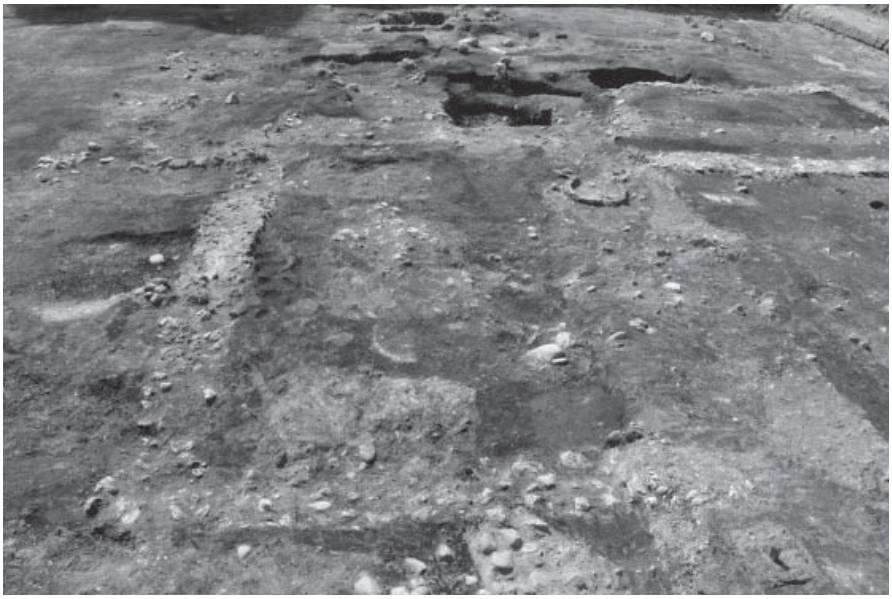
SB1 検出状況（北東から）

SB1 土層断面（北東から）

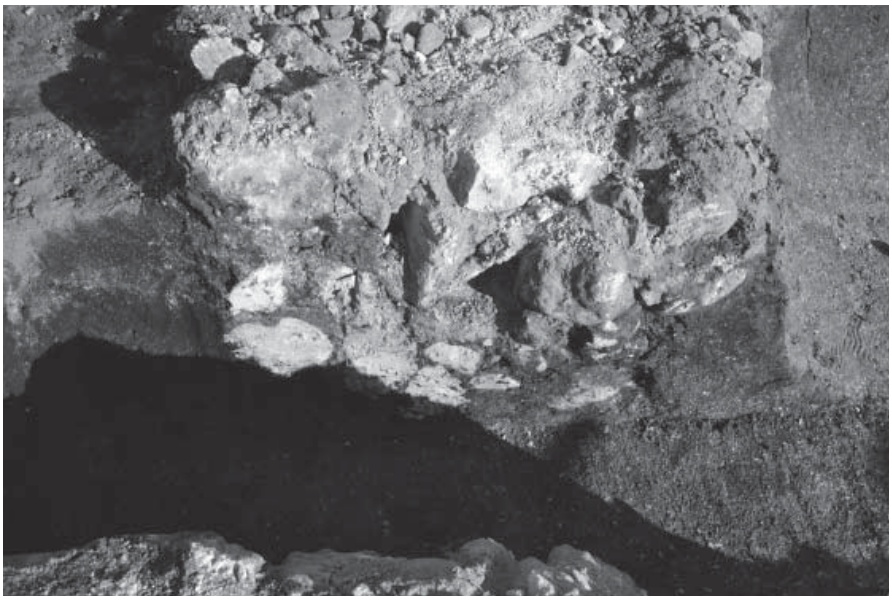


SB1 土層断面（北東から）

図版 11　近現代の調査②



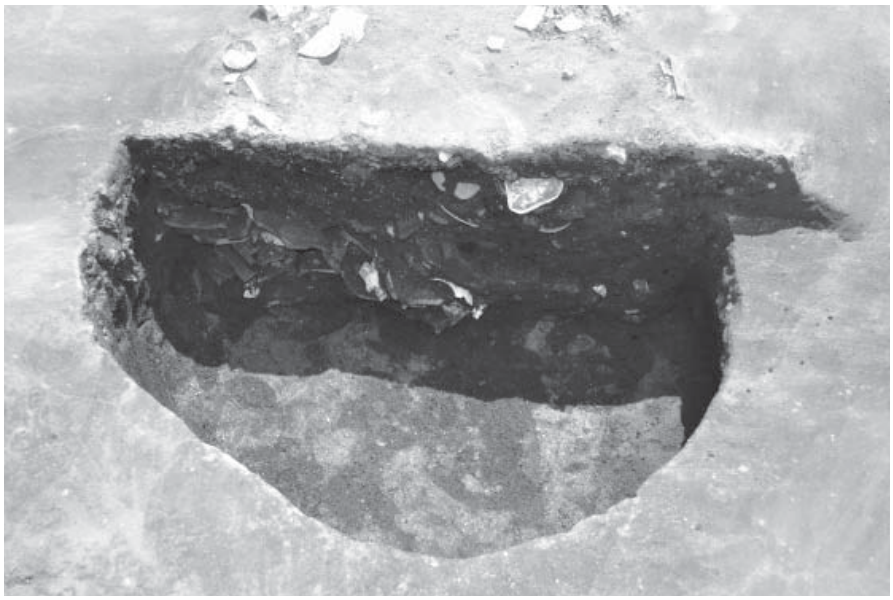
SB2 検出状況（南東から）



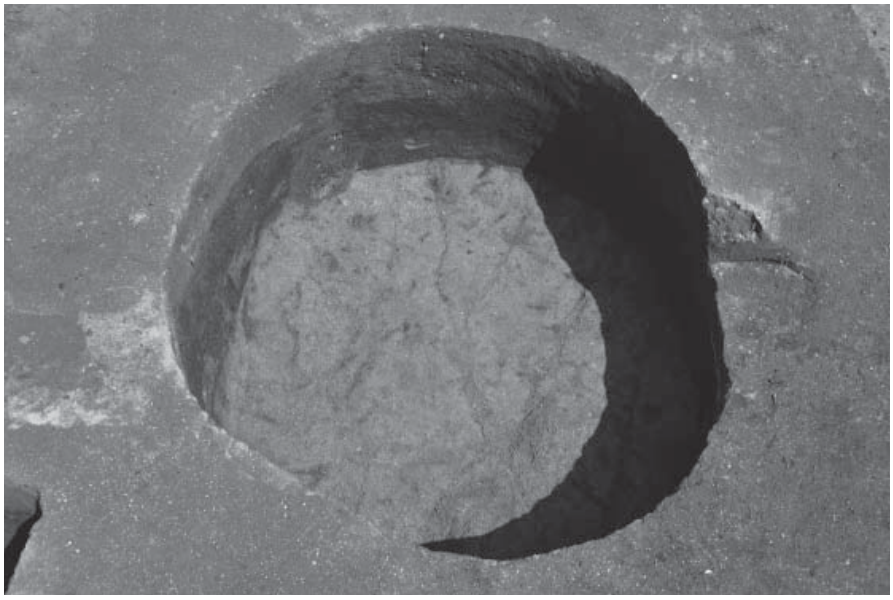
SB2 土層断面（北西から）

SC4 土層断面（北西から）

SC4 遺物出土状況（北西から）

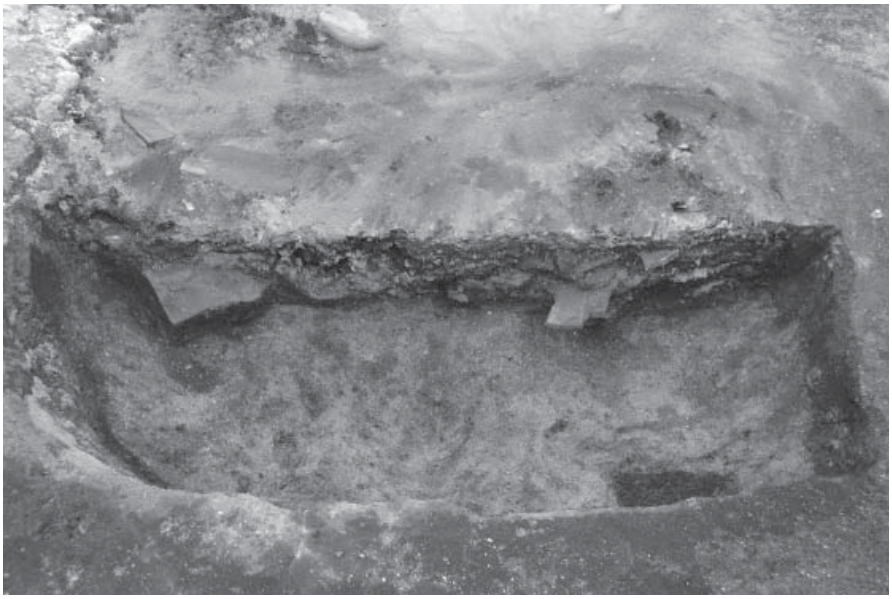


SC5 土層断面（北西から）



SC5 完掘状況（北西から）

図版 13　近現代の調査④・現地説明会



SC55 土層断面（北西から）

SC132 土管検出状況（北西から）

平成 27 年 11 月 28 日の
現地説明会の様子

SC114 出土の薩摩焼甕

SC114 出土の木製品

SC115 出土の薩摩焼

図版 15　近代の遺物

SC4・5 出土の鍋物焜炉

SC4 出土のガラス瓶

SC63 出土のガラス瓶

SR1 の埋設された薩摩焼甕

報告書抄録

ふりがな	なかまちいせき（だいごじちょうさ）
書名	中町遺跡（第５次調査）
副書名	中心市街地中核施設整備支援事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第129集
編著者名	山下大輔
編集機関	都城市教育委員会
所在地	〒885-0034　宮崎県都城市菖蒲原町19－1　TEL　0986-23-9547　FAX　0986-23-9549
発行年月日	2017年3月27日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかまち 中町遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 なかまち 中町 117ほか	45202	M3009	31° 43′ 44″ 付近	131° 03′ 44″ 付近	2015.5.11 ～ 2015.12.2	920㎡	行政施設・ 民間商業施設建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中町遺跡	散布地	中世	溝状遺構・水田跡	貿易陶磁器	
	集落跡	近世	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 井戸跡	国産陶磁器 輸入磁器 銭貨 木製品	唐人町の町屋に関連すると考えられる建物跡・井戸跡などの遺構を検出。
		近現代	建物基礎跡 土坑 井戸跡 埋甕	国産陶磁器 ガラス瓶 石製品 鉄製品	廃棄土坑（ゴミ穴）より大量の遺物が出土。

都城市文化財調査報告書　第 129 集

中町遺跡（第 5 次調査）

－中心市街地中核施設整備支援事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2017 年 3 月 27 日

編　集　　宮崎県都城市教育委員会
発　行　　〒 885-0034　宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL（0986）23-9547　　FAX（0986）23-9549
印　刷　　株式会社　文昌堂
〒 885-0004　宮崎県都城市都北町 7166 番地
TEL（0986）36-6600　　FAX（0986）36-4660